
屍人が目覚める世界で（転生オリ主）学園黙示録

カニ侍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

屍人が目覚める世界で（転生オリ主）学園黙示録

【Nコード】

N6059N

【作者名】

カニ侍

【あらすじ】

紫藤浩一の弟に生まれた主人公が周りの人間に少し影響を与えながら生き抜くお話・・・でいいのだろうか？

ブローグ・・・になるのか？

『はよ船に乗り込みい！！こんまま死んだら魂ごと消えてまうで！！クルーは出港準備！！はよせえ！！結界ブチ抜かれたら沈むぞ！！』

島に響くのは爆撃音と逃げまどう人々の悲鳴

そしてスピーカー越しの男の怒鳴り声がそれに負けじと響く

それを運良く聞きつけることが出来た人々は逃げるのを止め群がるように港に浮かぶ数隻の軍艦へと駆けだしてくる。

「クソツ！！何で今日に限ってこないに死者が多いねん！！現世で何があつたゆるんや！！」

マイクを乱暴に切り大声で現状に対する不満をブチ撒けながら部下の報告待つ。

ふと窓から外をみればその眼下には争いあつて船に乗り込む人々の姿が目映った

「まるで地獄であつた蜘蛛の糸の事変やなここはまだ入り口にすぎん三途の川やゆるんに・・・。

イスラムやかキリストやか知らんが好き勝手やってくれよるのお・・・

」

怒りで殺気が肉付きの良い体からこぼれでる。

それは艦橋の温度が少し下がった気さえする程だった。

「艦長！！出港準備整いました！！」

窓から目を放し声が出た方を見ると鬼火がゆらゆらと揺らめいている。

「ご苦労さん、すぐに出港する。結界破れる前に離脱すんで、対岸にもこの騒ぎは伝わっとるから、もうちょいしたら援軍がくるはずや。」

「まだ乗り込んでいない者達はいかがするのですか？艦長！！」

「捨て置く、結界強度が7割切った、このままここに停泊しとつたら撃沈すんのが関の山や、なら三途の川の渡し守としての任務を果たすのが最上や。あと艦長言つな渡し守さん言え。」

「了解いたしました。ハッチを閉じます。出港準備完了、ご命令を渡し守殿。」

「出港！！全速でここを離れる！！」

巨大な船がゆっくりと動きだす。その周りにいた人々が口々に助けを求めるが無情にもその願いは叶わず船は止まらずに港を離れていった。

「明日の目覚めはわりいな・・・こりや。で、本部からの通信はあったか？」

「強力なジャミングがこの島の付近一帯に掛けられております。しばらく通信は不能かと・・・む？内部に侵入者です。数は・・・30、姿からして恐らくキリスト過激派の工作員かと・・・。」

「ちい！！確実に沈めに掛かってきとるな、まあ、この船、迷宮みたいになつとるから迷ってくれるやろ。ナビゲートと操作宜しく船魂さん。舐めた真似晒してくれたやつらに鬼の怖ろしさ、味わって貰おうやないの。」

腰に掛かっている日本刀をポンポンと叩き船橋を後にする。

『敵勢力、5グループに分かれて散開……。！！？馬鹿な！？渡し守殿急いでください！！奴らこの船の重要地点に真っ直ぐ向かって来ます！！』

頭に直接響くように先ほどの鬼火の音が聞えてくる。

「場所は！？」

『動力部、船橋、船倉、防護結界発生装置、火薬庫。の五つの地点です。』

「こつちに來とる奴ら瞬殺してすぐに向かう！」
敵を殲滅すべく神速をもって駆け出す。

『対ショック態勢！！ミサイル着弾まで後3、2、1、今！！』

外でミサイル数発が防護結界に着弾して爆発する。その余波を受けて船体がグラリと揺れ動く。

「この程度の揺れなんぞ屁でもないわ！！奴らの場所は！？」

『現在停止中、目標、突き当たりのドアの向こうです。』

「一、二、三で開けるよ！！」

そうやって男はドアから少し離れたところで止まり鞘からいつでも日本刀を抜けるように構える。

『敵勢力行動を再開。』

足に力を入れいつでも駆け出せるように準備する。

「一、二、三……」

合図と共にドアが豪快に開かれその向こうにいる一見ただの一般人に見える集団へと一足で間合いを詰める。

「撃……て？」

各自着ているスーツやコートの下から銃火器を出して構えるがそこにはすでにターゲットは居なかった。

「遅すぎやな、あくびが出るわ、ほな急いでるんでさいなら。」

「……!?」「……」

後ろから聞えてきたその場に似合わない間延びした声に驚愕して身体を反転させて銃を構えようとするが……、動いたのは上半身だけで下半身はピクリとも思った通りに動くことはなく、膝を折って下半身だけが倒れていった。

「そこで死んどき。」

男は日本刀を血振るいして鞘に収め、その場を後にし次の場所へと向かう。

「此方……A班、作戦……失敗、これより……自爆する。」

「了解、神のご加護が有らん事を。」

閃光が通路を染めた。

爆音が鳴り響き船が悲鳴を上げるように軋む。

『グアッ!!!』

「何があつた!?!」

『先ほど切つた者達が突如として爆発……船橋へ向かう一本道で火災が発生しております……ッグア』

「止め刺しときゃよかつた、クソ!!すまん、ワイの手落ちや。」

『謝る暇があるのでしたら……、私を壊す輩を殺してください……、私の渡し守さん……。』

「ッ!!りよゝかい!!」

口端を吊り上げ獰猛な笑いを浮かべて獲物の元へと駆ける。
狩りが始まつた。

「コイツで最後か……、よお、手間掛けさせてくれたやないの、ん?」

そう言つて倒れ伏している作業員のわき腹を蹴り上げて起こし頭を掴んで持ち上げる。

「ぐうあああああ!!」

万力のごとく締め上げられる頭に奔る激痛に悲鳴を上げる作業員。

「ほれ?なんでワイの船沈めに来たんか吐けや、結局殺した奴は全員爆発しよつたからの、ウチんとこの姫さんが怒り心頭になつとんねんよ。ちなみに生かさず殺さず苦しめるんはウチんところが一番つ

て知ってるやんな、このまま地獄に連れてかれんのと、ここでゲロツて楽になるか・・・どっちか選べや。」

「くっ、化け物めぐあああああああー!!」

「ほれほれ、その気になりやあお前の頭なんぞ卵割るより簡単に割れるんやから、無駄口叩かんとさっさと吐く吐く。」

足をじたばたさせて腹を蹴るが男はそれに全く堪えた様子もなくヘラヘラと笑いながら徐々に手に力を込めていく。

「ぐう・・・」

痛みに抗いきれずについて作業員は抵抗を止めて大人しくなる。

「お？なんや？よくやくゲロるつもりになったんか？」

「まさか、・・・タイムリミットだ。クタバレ化け物。」

その言葉の直後に作業員の身体が爆発しその爆発に男も巻き込まれる。

「結構・・・やる・・・やん、利き腕一本持つてかれたわ。」

爆発地点にど真ん中にいた男は流石に無傷とはいかず、右腕が肘から先が失われていた。

『「無事・・・ではない様ですね。」』

「ああ、この程度じゃワイは死なんよ、安心し。」

『・・・どつやら奴らは本気であなたの首が欲しいようですよ？最強の鬼の酒呑童子さん』

「その名前は棄てたんや、呼ばんといて、ワイはただの三途の川の渡し守さんや。で？なんでそないなことがわかんのか？」

『私も年貢の納め時みたいですね、外に奴らの爆撃機、戦闘機が多数・・・すでにロックされてます。』

「一難去ってまた一難、しかも今度は回避不能ってか？こんな三途の川のと真ん中でやってられんわ。」

男は諦めたようにどっかりと壁を背にしてズルズルと通路へ座り込む。

爆撃が始まったのか外では爆音が鳴り止むことが無く、船が爆発で乱れた波により大きく揺れる。

「なあ、姫さん、お前とはホンマ短いようで長い付き合いやったわ。楽しかったで。」

『あなたとは私が目覚めてからの付き合いですが、悪くなかったですよ。』

爆発音に混じって外で何かが罅割れるような音が聞えた気がした。

「なあ、知つとる？船に運ばれてる途中で三途の川に落ちたら生まれ変わるっていう話、まあ記憶無くなってさらに感情のどっかが壊れるらしいけど。まあワイが生まれ変わったらそいつ苦労するやろなあ、かなり好戦的な性格なんで、ワイも昔それで失敗したからなあ。っと生まれ変わるんやったらコイツも持ってかんと。」

ベルトと半分焦げた制服で自分の手に自分の愛刀を縛り付ける死んでも放さないようにと。

『そうですね、暴れるだけ暴れて退治されたらしいですねあなた、でも本当だったらいいですねその話、そして現世で人に生まれ変わってあなたと・・・』

外で何かが砕け散った音がハッキリと聞え、爆撃の音が止んだ。

「ハハッ！そりゃいいな、じゃあ、もし生まれ変われることがあるんやったら。」

『生まれ変わったのならば・・・』

(親愛なる私の相方)

「『また会いましょう、Dear My Partner』」

直後、爆炎に吞まれどちらの意識も途絶えた。

ブローグ・・・になるのか？（後書き）

感想で突っ込まれてようやくコレが無いと転生オリ主の意味がわからなくなる事に気がついたうっかり者の力ニ侍です。
注意してくれた方、本当にありがとうございます。

過去編 1話

「秀治、早く起きないと学校に遅刻しますよ。」

「あゝい、今起きるさ。」

口ではそう言いつつさらに布団に潜りこんでスヤスヤと寝息を立て始める愚弟にため息をついてベッドへと近づいていく。

「昨日もそう言って寝てたでしょうに、毎朝あなたを起こしに来る私の苦勞もわかりなさい。」

そう言って一気に布団を捲り上げようとするが・・・

「やめゝい、意地でも放さんぞ。」

中からガツシリと布団を掴んで放さない愚弟に阻止された。

「早く起きなさい！！遅刻しますよ！！私も仕事があるんですから
！！！！」

「ZZZZ」

こちらの言葉を一向に無視して眠り続ける愚弟対して軽く殺意が沸き思わずベットから蹴り落としてしまった。

「ぐぶう!! いったつが、顔面が・・・朝から何すんのじゃモヤシ兄!!」

どうやら盛大に床とお目覚めのキスを交わしてしまった愚弟が布団を蹴り飛ばして起き上がり文句を言う。

「モヤシと言うな愚弟!! あなたもこの家の一員ならそれなりの品位と誇りを持っててですね・・・。」

「ハッ!! この家に対してカケラも誇り持って無いくせによお言うわ、ま、ワイも持ってないがな、あんなクソ親父に対して敬意もクソもあらへんわ、
そゝやるコー兄。」

「ふう・・・、まあそれには同意しますよ・・・、秀治、早く学校に行つて来なさい、でないと本当に遅刻しますよ、朝ごはんはリビングに置いてますからね。あともみ消すのが大変なのでくれぐれも厄介ことは起こさないように。それでは行つてきます。」

そう言つてスーツ姿のコー兄こと浩一は少し疲れたようなため息を

吐きながら部屋を出て行った。

「おう、いつてら、ワイも早いとこ準備せなな、どせ学校でやることなんざないがな……。フツ!!」

顔を床にぶつけたとはいえ未だに重いまぶたを擦りつつ大きく伸びをする

「くあゝねむ!! あゝあなんや面ろいことはないやろかね。そういや本戦が近かったか? 早いとこ開催せゝへんかな。剣道大会本戦……。予選にや雑魚しかおらんかったからのお。」

独り言をブツブツと呟きながらクローゼットから適当に服を取り出して着ていく。

「そゝいや今何時や……。ろ?」

机の上に置いてあった携帯を開いて時刻を確認してピシりと石のように全身が固まって動かなくなった。

「え? うそお、7時……。半? ヤッベ!! マジ遅刻する!! はよ飯食って行かな!!」

携帯をGパンのポケットに滑り込ませて昨日の夜準備しておいた学

校の用意を手に取りドアの前に立てかけてあったMy竹刀を入れた袋を背負ってリビングにダッシュで入り用意されていた朝食を掻き込むように腹に入れる。

「ヤバイってマジで！！ワイの中1から築いてきた無遅刻無欠勤の伝説が崩れてまう！！くっそ！！あのモヤシめ！！もし遅れたらアイツのせいや！！」
自分が悪いと思いつつも八つ当たりせずにはいられない。

この中学生生活の目標の一つには3年連続皆勤賞を貰うというささやかな夢があるのだ、昨日の夜モンハンやって寝坊したなどというくだらない理由でふいにすることなど許されることではない。

玄関を出て鍵を閉めたことを確認して自分の愛車（自転車）にまたがり母校である床主私立中学校へと全速力で突っ走る。

「うおおおおおお！！ワイは限界を超えるんやああ！！天・限・突・破ああああ！！」

後に自分の姿を見たら身悶えしそうなことを口走りつつ道路を突っ走る。

ご近所の奥さん方がそれを微笑ましそうな顔で見送っていたのことを秀治は知らない。

床主私立中学 駐輪場

「ぜ〜・・・ぜ〜・・・ゴホッ！！ゲホッ！！ン”ッ” -！！力
ーッペ！！よ・・・よし、後5分、駐輪場から教室まで3分やから、
イケル！！イケルで！！」

全力で漕ぐこと25分、途中で2〜3個信号を無視したが学校に遅
れなければ問題はナツシングだ。

学校入り口へと飛び込み自分の靴箱でさっさと靴を履き替えて3階
にある教室へと駆け上がる。

もはや心臓はありえない速度でビートを刻んでいる、朝礼が始まる
頃には真っ白に燃え尽きた彼の姿が拝めるだろうことは想像に難く
ない。

「ふおおおおおおお！！ネエヴァーグイブワァー！ーッ！」

もはや息も絶え絶えになって教室の戸を空けようと手を伸ばす・・・
が届く直前に中から開き中から出てきた人が秀治に気付き驚いて身
を竦ませる。

「うおおお！！ビックリしたあ〜。よお紫藤、今日は遅かったな。」
出てきた人はそう言って肩を軽く叩いてトイレの方へ向かっていっ
た。

「フ・・・、ワイに不可能なことなどあらへんのや・・・。」

ふらりふらりとしながらようやく自分の席にたどり着き死んだように突っ伏す。

まるでタイミングを見計らっていたかのごとく授業開始の鐘が鳴り担任教師が入ってきて点呼をとり始める。

そうしていつもとなんら変わらない平凡な日常が過ぎていく・・・と帰りまでそう思っていた。

学校も部活動も終わりすっかりと日が暮れて暗くなった夜道を愛車でノロノロと走る。その運転者の顔はこの世の不条理を嘆くがごとくくたびれている。

「あ・・・やっぱりあかんわ、部活の奴ら弱すぎやっつて・・・、相手にもならんわ、これやったら一年の頃にやった他校の不良グループ潰しのほうが遥かに有意義やったかもな、あれで腕怪我して去年の大会出られへんかったけど・・・、あっちの方が燃えたわ、竹刀やったから遠慮なく打ち込めたしな。」

当時のことを思い出して口端がグッと吊り上る、

一見すると弱そうに見える秀治は不良に絡まれることが多々あったそれを全て手加減無しで返り討ちにするのが一年前の日課である。

ある日油断してナイフを投げられて腕に怪我を負ったのはご愛嬌だ。無論投げた相手は全治数ヶ月の重傷を負わされていた。父と兄がその事件のもみ消しに走っていたのもご愛嬌だ。

そのせいかな今はもう秀治の本性は近辺の学校の不良にことごとく広まっているので絡んでくる奴がいなくなった。残念なことである。

そんな栄光の日々に思いを馳せているとふと視界の端になにやらもめている二人が映った。

「ん？、おお！無理やりに路地に連れ込まれる女子とゴミニ男）発見！！いや〜今日はついとるわ〜。」

先ほどの腑抜けた顔とは打って変わりもはや歌い出しそうなほどの上機嫌な顔をして自転車を女の連れ込まれた路地の脇へと止めて、竹刀袋からMY竹刀を取り出す。

そしていざ不良狩りへ！！
と生きこんで路地に入ろうとすると。

「ぐがあー!!」

と悲鳴と共にぐしゃアと嫌な音が路地に響き渡った。

「何ごとや!?!」

驚いて路地に飛びいるとそこには肩を抑えて蹲る男と、さらに木刀を振り下ろそうとしている女がいた。

「ちい!!」

女を止めるべく一足飛びで間合いを詰めて男に止めを刺すべく振り下ろされた木刀を竹刀で受ける。

(お・・・重ッ!!)

叩きつけられた木刀の予想外の重さで竹刀が軋む。
それを何とか捌ききって斜め下へと受け流す。

「!?!」

いきなりの乱入者に木刀を持った女は驚いて後ろへと跳び間合いをとる。

「流石に殺しはあかんで嬢ちゃん、今のご時世、半殺しじゃなけりや色々とうるさいからのお。」

竹刀を下ろして友好的に相手に話しかける・・・が

「その男の仲間か？フ・・・、ちょうどいいお前も切り伏せてやるう。」

そう言つて愉悦に満ちた顔で木刀をかまえる女

「うゝわ・・・、人の話、全く聞いとらんし、まあ、この状況じゃ勘違いしてもしゃくはないわな、まあええやろ、初めて強そう、いや強いと思つた相手が目の前におんねやし、一戦やれへんかつたら損つちゅうもんやな」

頬が吊り上るのが止まらない、きっと自分も目の前の女と同じほど愉悦に満ちた顔をしていることだろう。

此方も竹刀を構えなおして相手の出方を伺う。

少し思惑のすれ違いそれでいて噛みあっている決闘が夜の人気のない夜道で始まるうとしていた。

2話

暗い夜道で向かい合う男と女、そう言えば誰もがラブロマンスを思い浮かべるだろう。しかし今現在それはあてはならない。

なぜなら、かたや手に竹刀、かたや手に木刀を構え双方とも相手の隙を窺っているからだ。

お互いが間合いをギリギリと詰めてゆく。少しの動作も見逃すまいと目は双方共に相手をひたと見据え猛禽の如く鋭くなっている。

その場の空気が重く、限界まで伸ばされた糸の如くピンと張り詰め、まるで肌が痛いかなのような錯覚さえおこる。

全身からジワリと汗が滲み出る、額から流れる汗が煩わしい・・・、しかしそれを拭おうと隙を見せた瞬間、先ほどから肩を押さえ呻いている男と同じ末路を辿るだろう。

考えなくともそれが解る、自分が今、死合っている相手がそれを躊躇なく実行するであろう事も理解していた。

しかしそれだからこそ、どうしても口端が吊り上ってしまうのが抑えられない。

今まで自分と肩を並べられるほど強い奴がいなかった。どんな相手が突っかかってこようととも楽にそれを叩き潰すことができた。

しかし今自分の目の前にいるこいつはそんな次元の存在ではない。

自分に近い、それが互角程度の腕前を持った剣士だ。油断などできない、できる訳が無い。

しかし自分以上の腕前と考えないのは慢心ではなくこれまでの経験と実力に裏打ちされた自信である。

同年代の人間には負けたことが無かった。目の前に立ちふさがるのなら目上の屈強な人間さえ叩き潰してきたのだ。

相手は服装と身長から見ると中学2年〜高校1年それも女である。

自分の身体能力は周りの人間と比べずば抜けて高い、

身体のスペックで勝ち、経験で勝っている

技量は相手に負けているかもしれないが自分の技量が低いという話では無い、むしろ我流故自分の太刀筋は読みづらいであろう、

相手を上回る点がこれほどあるのだ一体どこに負ける要素があるのか？

未だ負けを知らぬ秀治がそう考えるのも無理の無い話であった。

しかしそれは慢心ではない、純然たる事実である。

「フッ!!」

その睨み合いに痺れを切らし先に攻勢に出たのは木刀を構えた女であった。

一気に間合いを詰め苛烈なほどの功撃を目の前の男にくわえ始める。

唐竹の一撃を受けられ竹刀と木刀が打ち合わされ乾いた音が夜道に鳴り響く、力を込めて押し切ろうとするが相手がスツと力を抜いて女の体勢を崩すそしてそこを修治が女の後頭部を狙い竹刀を横になぎ払うような一撃を見舞うが女は自分からさらに体勢を崩し地面に伏せることでそれを回避し、そこから相手に足払いをかけ修治の体勢を崩す。

「うおおー!!」

足払いが見事に決まり修治が地面に倒れこむ、そこに止めと言わんが如く木刀が振り下ろされるがそれを身体を捻り腕のみで体重を支えて足で相手の腹を蹴る事によりなんとか斬撃の軌道を逸らす。

「グウ!!」

腹を抑えて堪らず女は間合いをとる。その間に修治も体勢を立て直し竹刀を構えなおす。一瞬の攻防であったにも関わらず、どちらも共にすでに息が切れかけている。

「危なッ!! 今のはやられるかと思たわ。」

身体中に冷や汗をかき、切れた息を整え荒々しく波打っている心臓の鼓動を治めつつ此方の一挙一動を見張る女に対して軽口を吐く。

「今のは確実に殺ったと思っただがな・・・、動きが奇妙すぎて読めん、軽業師か何かか貴様は。」

意外なことに女もその軽口に乗ってくる、しかし相手には隙の一分すら見せない。

「ハッ！ 軽業師か、言ってくれるな、こりゃ我流剣術や、にしても強いなお前、俺とここまでやれる奴は初めてやで。名前は？」

乗ってきた事に対して驚きつつも相手の隙を誘き出すためにさらに話を続ける。

「か弱い少女に対して力づくで言うことを聞かせようとするような輩に対して名前を名乗ると思うか？」

ニヤリと笑いを浮かべながら女はそう言い返してきた。

「ハッ！ それもそうやな、ならワイが勝ったら名乗るってことでどうや？」

「？、待て、私の身体が目的じゃ無いのか？」

男の提案が予想外だったのか女は訝しそくに眉根にシワを寄せそう問いかけてくる
それと同時に木刀が少し下がる

「いや〜、後ろで蹲つとるオッサンとは見ず知らずの赤の他人やわ〜、ただワイは嬢ちゃんか明らかやり過ぎやったから止めに入っただけやで〜。」

下がった木刀に一瞬目をやりそれを相手に悟られる前に視線を戻しニカツつと笑い女の質問に答える。

「そ、そうだったのか・・・すまないっ、勘違いで襲い掛かってしまった。」

秀治の言葉に嘘が無いことを感じたのかさらに木刀の切っ先下げた女。先ほどまでであった愉悦に満ちた顔は消えてなくなり、少し焦った顔をしている。

「いやいや、まだこっちも怪我も何もしてないし、気にしてないで〜。」

相手の警戒心を完全に剥ぎ取り完全なる隙を作るためにあたかも自分は無害と主張するように砕けた口調で話しかけながら竹刀で自分の肩をトントンと叩く。

「そ、そうか、それはよかった。」

その様子を見てもはや完全にこちらに対しての疑心は解けたのか女は木刀をダラリと下げる。それを見て薄く笑い、言う。

「でも・・・な。」

だんだん口端が吊り上っていき、それは止まらないし止めようとも思わない

「でも？・・・とは一体？」

女は不思議そうに小首をかしげ続きを促そうとするがその言葉は途中で遮られた

「勝負はまだ終わつとらんじゃあ！！！」

顔に獰猛な笑いを張り付かせたまま一足、まさに刹那の速さで間合いを詰めて竹刀を振りかざす、女は完全に気を抜いていたのか呆気にとられた顔で一瞬で目と鼻の先に来た秀治の顔を見ている、が事態を把握した瞬間ギョッと目を瞑って来るべき衝撃に備える・・・が。

「え？・・・きゃー！！！」

来るはずの衝撃が来ないことを不思議に思い恐る恐る目を開けると、
ほぼ自分の頭に当たる直前で止められた竹刀をみて驚きの声を上げる。

「ワイの勝ちや。残念やったな嬢ちゃん。」

悪戯が成功した時の悪ガキのような笑みを浮かべて竹刀を引き話しかける。

「な！？、い、今は卑怯だ！！いや、そうじゃない、もう私たちには戦う理由がないだろう！！。」

女はこちらの言葉が理解できたのか慌てて言い返してくる。

「甘い！！甘いで嬢ちゃん！！その考え方はシュークリームよりも甘い！！もしワイが後ろのオッサンとツルんどつたらそのまま陵辱ルート直行やで！！こういうのは自分が勝って、決着つけてから聞かなあかん！！それにこれは試合やないんや、ルールも何もあらへんのや！！止め刺したもんが勝ちなんや！！。」

先ほどから会話していて思った事を一気に叩きつける。相手もそれに一理あると思っっているのか悔しげな顔をして俯いている。

「あ、ところで名前教えてくれへん？」

「む？何故だ？」

「いや、ワイ勝ったし・・・、それにいつまでも嬢ちゃんじゃ話しくいからな。」

タハハと竹刀を持っていないほうの手で頭をかく。

「クツ、本当に変わった奴だな君は・・・。」

先ほどまで夜道に漂っていた殺伐とした空気は綺麗に消えうせ、代わりに一組の男女が笑いあうほのぼのとした空気が流れていた。

「で、名前は？」

「ああ、すまない、私の名前は毒島冴子という、冴子と呼んでくれ。」

「うんうん毒島冴子はんね・・・、毒島？もつかしてあの有名な？」

「どの毒島かは知らないが、剣術家としての毒島ならそうだな。」

「ほお、道理で強い訳や、娘さんやったんか。」

一人で納得したようにウンウンと頷く。

「貴方の名前は何と言った？私も名乗ったんだ、まさか貴方は名乗らないということはあるまい。」

「おお！！忘れとったわ、ワイの名前は秀治、紫藤秀治や。」

そう言って修治は顎に手を当ててポーズをとり胸を張って自分の名前を名乗った。

3話

「いや、マジで助かった！口添えしてくれてホンマに助かった！恩にきるわありがと。」

自転車を引きつつ助かった、助かったと隣に歩く先ほどもでたく友人となった毒島冴子さん（なんと同い年であった）、通称、冴子はん（毒島はんと呼んだら冴子と呼んでくれと言われてこれに落ち着いた）にお礼を言う、なぜお礼を言っているのか？

それには天保山より低く、プールより浅い理由があった。それは・

（いや、まさかワイらより早くに警察呼んだ人が居るとは思わなかったな、普通やつたら近所に住んでる人GJ！っていうのに今回に限ったらワイまで冴子はん襲った男の一人として補導されるところやったからなあ。いや、やばかったやばかった、冴子はんが誤解とけへんかったらワイも警察署にGOやったわ。）

今でこそ余裕が感じられるが間違っつて補導されかけた時には秀治も冴子も驚愕して秀治は警官相手に「ワイは何もやつたらんわボケエ！」と暴れ、冴子は事情を必死になって説明しようとして四苦八苦しちよつとしたカオスがその場に形成されたのだ。

ちなみに暴れた事により公務執行妨害で補導されかかったのはご愛嬌である。

冴子の嘘泣きが無ければ本当にアウトであった。しばらく秀治は冴子に対して頭が上がらないだろう。

「そんなに感謝されるようなことでもないだろう、私は当然のことをしたまでだ。」

「いや、それでもやで、実はワイ警察から少し目えつけられとつての。」

カラカラと笑いながら言われた内容の重さに冴子は僅かに瞠目する。

「・・・何か目をつけられるようなことをしたのか？」

訝しげな顔をして声のトーンを低くしてそう聞いてくる。

「あー！、その顔はワイのこと疑っとる顔やなー！、いやいや違うんやて、まあ、そう思われてもしゃないけどワイは何も悪ないて。」

直感でこれはマズイと感じ慌てて秀治は弁解を始める

「では何故警察に目をつけられているのだ？」

「あゝ、いや、これはそのやで、うん……どうしても聞きたい？
たいした事でもないんやけど……」

内心は誇れるような事ではないので聞いてくれるなと思いつつダメ
もとで足掻いてみる。

せつかく知り合った自分並に強くて美人な同い年の女性に出会って
一時間弱で軽蔑されたくないというのが主な理由である。

何せやっていたことは不良の返り討ちだが実質弱いものイジメと変
わりないのだ。

「大したことではないのだったらいいだろつ。」

冴子は顔にニヤリと笑いを浮かべてこちらに身体ごと近づけ問い詰
めてくる。

秀治はその事に気付く事無く、自分が逃げ道を用意したと思っただも
のが実は墓穴だったと気付き片手を顔に当てて小声でアチャーと言
っている

「いや、マジで大したことやないんやけどな、うん、まあ、冴子はんにやったら・・・、いやいや冴子はんやからこそ言うわけには・・・。」

片手で口を抑え俯いて独り言をブツブツと呟く様は八日目からみてかなり怪しい。

そんな秀治の姿を見て冴子は秀治に気付かれないようにこっそりとクスクス笑っている。

何気にこれからの関係が見える気がする一瞬であった。

未だにうんうんと唸っている秀治に悟られないようにこっそりと近づいて後ろから抱き付いて耳元で囁くように

「いいじゃないか、大した事ではないのならば。」

と言う、それに対して慌てたのは秀治である、いや慌てすぎてまるでゴルゴンに魅入られたかのように
体が石のようにピシリと固まり動かなくなった。

それでも首をギギギギと音が鳴りそうなほどゆっくりと振り向いて

後ろから抱き付いている冴子に話しかける。

「え・・・あ、な・・・、何事ですかのん？いや・・・、そうやなくてな、うん、冴子はん一体、どういうつもりなん？」

思考が上手く回らない状況にて必死でその言葉を紡ぎだす。ハッキリ言っただけで背中色々と当たっているのだから性欲がスパークキングしそうなのをダンボール並の硬さを誇る理性で必死になって押し止めているのだ。

「先ほど剣を交えて紫藤が悪人ではない事は知っている。それに信頼も置けると私は思った。私は評価できる男には絶対の信頼を置く主義でな。」

そう言われて急速に決壊しそうになっていた性欲が萎んでいった。

「なるほどな、ここで手を出したら冴子はんからの信頼を失ってまうわけか、いやいや、役得と思たらええんか生殺しやと思たらええんかようわからんわ。」

空に向かって息を長々と吐き出して心を落ち着かせる。ここは役得だと思っただけで色々とこれから得するだろう、そう頭で考えながら。

「ほう、正直者でもあるみたいだな、それにこうするのも理由があるのだ。」

「・・・例えば？」

あまりに真剣な声であったため思わず喉をゴクリと鳴らして続きを促す。すると・・・

「紫藤君、君はからかうと反応が面白いのだよ。」

「なるほど！！そりゃあ、しかたない・・・わきゃあるかああああ！！！」

がおーと叫んで色々と勿体ない気もするが、いや勿体ない気しかないが抱きつかれているのを振りほどいて相手の頭にビシッと軽いチヨップを入れる。

冴子はコロコロと本当に楽しそうに笑っている、それを見て毒気を抜かれてハア・・・とため息をつく、決してやっぱり勿体なかったなあとは思ってはいない、いないったらいいのである。

「ホンマに男相手にするには少し無防備すぎひんか？」

「いったらどう？評価できる男には絶対の信頼を置くと、裏を返せばできない男には決してこのような真似はしないさ。それにさっきの勝負に負けた趣向返しもあるのだ。慌てたらどう？」

先ほど自分が彼女にしたように悪戯が成功した悪ガキのような顔で此方を見つめてくる。

片手を上げて参ったとジェスチャーを返す。

しばらくどちらとも無言ですっかり暗くなった星空を見上げながら進んでいると

「では私は家が此方にあるのでここでお別れだ、色々と楽しかったぞ。」

と言って此方に片手を上げて去っていかうとしたが。

「おお！！ちよつと待った！！、なあ冴子はん、あんたケータイもつとる？」

ポケットをゴソゴソと探りながらこちらに追いついてきた秀治に呼び止められた。

「ああ、持つてはいるが・・・、なるほど番号の交換か。」

「そう！！それや、ここでもう会う事もないってのは寂しいからの。」

双方同時にポケットから出したケータイ同士で赤外線通信でアドレスの交換をする。

「ほな、気いつけてな！！また悪い男に襲われんようにな！！」

「なに、大丈夫だ。そちらも車には気をつけてな。」

「ハハ！！あなたはワイのおかんか！！それじゃ、また何時か会おうや。その時はもうちょいムードがあつたらええな。」

そう言つて秀治は自転車を反転させ行き過ぎた道を走つて戻っていく

「フ・・・確かに、それではまた会おう。ではな」

「じゃあな〜……………」

「フウ……………」

秀治が角を曲がり見えなくなったことを確認すると冴子は顔を何かを後悔するように歪め、憂鬱そうにため息をついた。

4話

「ふうふう」・・・」

精神統一をするために大きく息を吐く。

面越しに相手の拳動の全てを凧いだ目で見つめる。

いつでも打ちかけられるようにと柄をしつかりと握り締める。

足は適度に開き力を込めていつでも相手の間合いに踏み込めるようにする。

油断はもうしない、目の前に立っている相手はこれまで一瞬で相手の間合いに踏み込み反応すらさせることもなく切捨てここまで勝ち抜いてきたのだ、そして先ほど自分から一本奪っていったのだから。

しかし、それ故に男が考えた攻略法は単純にして明快、踏み込まれる前に踏み込み手数にて封殺することだった。

敗北していった者たちもそれをしなかったわけではない、しかしそれ以外攻略法が見出せないのだ。

すでに一本は取られている、フェイントで相手を釣ろうとして生み出した故意的な隙、そこに跳んで来るものならカウンターを入れようと考えていた。

十分に間合いを取っていたはずであった、一歩でも踏み込んでくれれば切る、その気概で挑んだはずであった。

しかし気がつけば相手は自分の間合いの内、逆に言えばは相手の間合いに入れられていた、その事実には驚愕しつつ竹刀を振り下ろした時にはすでに手遅れであり、見事としかいいようのないほど素早く胴を決められていた。

予想以上、いや、この場合相手が異常なのだ、自分の虚に影のようにスルリと入り込み行動の起こりすら見せずに神速の速さで踏み込み切り捨てる。

この目の前に立つ相手は本当に自分と同じ中学生なのだろうか？
通っている道場の師範にですらここまで畏怖の感情を感じたことはなかった。

有り得ない、そんな言葉が脳裏をよぎる、きっと今までに敗北してきた者達も同じ事を考えたに違いない。

映像で見ている時では確かに速いが反応できない程ではない、そう思っていた、しかし実物を目の前にした今ではそう考えていた自分を殴りたくなる。

動きの無駄が無い訳ではない、ただ自分と同年代、いや一つ下にし
ては無駄が少なすぎるのだ。

受けに回ると負ける、実際に相対し一本獲られた今ならその事は
つきりと理解できる。

攻められたら負けるのであれば攻めるしかないでは無いか。

きつと目の前の相手も自分が攻めてくると思って待っているのだろ
う、試合が始まってたった10秒、
しかも受けに回って一合も打ち合わせられずに負けたのだ。

待っているとしか思えない、そうでなければすでに自分は2本獲ら
れているだろう。つまり目の前の男は待っているのだ自分が打ちか
かってくるのを、今度はお前の番だと言わんが如く。

舐められている、そう感じて思わず歯噛みする。

先ほどからさっきの趣向返しなのだろうかチラチラと隙を見せてくる。

いつ攻めてこようともお前など相手にならない、口にこそ出してこないがそう言っているのが露骨に聞えてくるようだ。

頭に渦巻く雑念を追い出すように軽く頭を振り萎縮してしまった精神に気合を入れ直す、勝てないだろう、それだけはハッキリと解る、ならばもうやることは一つ、相手の望む通りに全力で打ち込むだけである。

こちらの心境の変化を感じ取ったのか相手の故意的に見せていた隙がスッと消えて無くなる。

精神の統一も終わった、ならば後は攻めるだけである。

「フツ!!」

相手の間合いに一気に踏み込み面打ち、胴打ち、小手打ちと多種多様に攻め立てるがその全てが華麗に捌かれる。しかし打ち込みを止めることはしない、自分の息が続くまで、体力の限界がくるまで打ち込み続ける。

それでも光明は見えることもなく、疲れて攻撃が乱雑にそして単調になっていく前に面越しに此方に振り下ろされた竹刀を見た。

「面あり！！一本！！」

負けたか・・・、ここまで綺麗にまけたら悔しいとも思わずに逆に清清しく感じる。そして俺は相手に礼をして背を向けて去っていった。

「うーん、アレやなやっぱり、言っちゃ悪いが弱いな。そっちはどうやった？相手なるやつおらんかったやろ？」

見事に全国中学校剣道大会男子個人戦にて優勝を果たし家に帰る途中の車の中で吐いた台詞である。

その手には携帯を持ち誰かと話をしていることがわかる。

「あん？思ってもそついうことは口に出したらあかん？まあ、悪いとは思っけどさ、お前よりかなり弱いやつしかおらんかったしな」。

「お前も女子の部で優勝してたな、会場でも言ったけどおめでとさ
ん、そしてお疲れ様やな。」

「あれやな、大会とかそんなとこ行くよりお前とずっと試合してた
ほうが有意義かもしれんな。ん？今
度は負けん？ハッ！案外お前やったらできるかもな？ワイの不敗
伝説を終わらせんの。」

「それよりさ、あれや今度の休みに二人でどっか遊びに行けへん？
優勝祝いつてことでさ、費用は奢るで？ん？OK！？でも奢らんで
いい？まあまあ、男の甲斐性つてやつや、奢られてくれ。予定はこ
っちで決めてええか？うむ、暇にはさせへんことを誓うわ。うん。」

「ん、じゃまた明日、帰り道であおぐや、じゃな。」

Piと携帯の電源を押してポケットにしまいこむ。

「誰と話してたんですか？秀治、女性の方のようですが。」
「コ一兄が車を運転しつつこちらをチラリと見て聞いてくる。」

「ん、こないだ知り合った毒島冴子って子やで、女やのにワイ

並みに強いつていうすごい奴や。」

座席を後ろに倒して腕を目に当てて横になる。

「ほう、あの毒島家の御息女ですか。」

「ん？何でコー兄が知つとるん？」

顔から腕をどけて片目だけ開けてコー兄の顔を見る。

「父の仕事を軽く手伝っているときにちょっと小耳に挟みましてね。」

「あのクソ親父の仕事手伝うんも軽めにしとき、せやないと後戻りできんようなるで。」

スツと身に纏っていた雰囲気が変わり口調が真剣になる

「わかってますよ、父に逆らいこそ出来ませんがあんな男の為に悪事に手を染めるなんてバカらしいですからね。ちゃんと引き際は心得ていますとも。」

コー兄はそれに軽く笑って返した。

「ああ、それはそうと、毒島家の御息女と付き合うのはいいですがそれを父に知られないように、無いとは思いますが、アレコレ命令されるかもしれせんから。」

「わくつとるわ、そんなくらい、ま、アイツはほとんど東京にすんでこっちに帰ってけへんからバレルこともないやろ。」
手をヒラヒラと振りながら返答する。

「それよりもホンマに気くつけない、気がついたらやばい事させられてるかもしれんからな。」

「私はそんなへまはしませんよ、それより貴方も頑張りなさい。」
ニヤニヤと笑いながらそう言い返してくる。

「何がや?」

心底不思議そうな反応を返すと軽くため息を吐かれ

「まあ、色々ですよ。解っていないならあえて言いませんが・・・」
と呆れたように返された上さらにため息を吐かれた。一体何なんだ?

おまけ ケータイでの会話 冴子Ver

「秀治君、思っけても口にしていいことと悪い事がある、確かに相手になる者がいなかったのは事実だとしてもだ。」

「私達の強さが異常なのだと思うぞ？これでも私は君に負けるまで
同年代で負けたことはなかったんだ。」

「ああ、有難う、君もおめでとうそしてお疲れ様。」

「クツ、意外とその通りかもしれないな、だが剣道の試合という形
なら私は負けんぞ。今度こそは勝つ。」

クツクツと可笑しそうに笑いながら答える。

「ほう？ならいつかその期待に答えるでしょう。・・・む？次の休
みに遊びに行こうだと？」

少し考えて次の休みに予定が入っていたかどうかを思い出す。

「ふむ、無いな・・・、いいだろう、その話に乗るよ、ああ、別に
奢らなくてもいいぞ、・・・む？男の甲斐性？むう・・・仕方ない、
大人しく奢られておくよ。ああ、予定は君が好きに決めて構わない
さ、でも暇な一日にさせてくれるなよ？期待しているからな。」

「ああ、それではまた明日、ではな。」

ブツリと向こうのケータイが切られた音を聞いて携帯をカバンに入れる。

「さて、何を着ていこうか？」

家に帰った後、母親にどんな服を着ていけばいいのか聞いたところ、毒島流服飾なるものを教わり、休みの日待ち合わせ場所に行った時待っていた秀治の度肝を抜くことになるのだがそれはまた別の話。

お父さんがそれに聞き耳を立てて秀治なる人物に色んな意味で興味を持つのはもっと違う話

5話

「とうとうとうとうとうとうとうとう」

アイポッドでお気に入りの曲を流しイヤホンを片耳だけつけて聞きながらそれを口ずさみつつケータイのゲームアプリ「ぽよぽよ」で遊んでいる。

これだけなら自室でやることだがここはショッピングモール「タイエー床主」の前である。

そう、今日は日曜日、冴子と優勝祝いという名の初デートをする日なのだ。

それなのに何故遊んでいるのか？

それは秀治が気合を入れすぎて集合の一时间も前についてしまったことが原因である。流石に何もせず待つには長いから遊んで時間を潰している何とも解りやすい理由である。

もちろん姿もいつもとは違いよれた学生服ではなく私服である。髪型もいつもの適当に伸ばして下ろしているだけのものではなくオー

ルバックで纏められている。
極めつけには兄から借りてきたサングラスを掛けている。

ハッキリ言って格好つけまくっている、しかし素が良いから似合っている。文句はつけられない。

いつも纏っているどこか気だるげな雰囲気も消し飛んでいる。

何気にクラスメイトが見ても「誰だテメエ」と言われるレベルで別人である。

紫藤秀治、馬子にも衣装を地で体現する男であった。

「よっしゃ!!!6連鎖キタコレ!!!」

その当人はよほど「ぽよぽよ」に熱中しているのか周りの人間がザワザワとし始めた事に一向に気付く様子がない。

「おい、あの子みるよ、スゲエぞ」 「何々?何かの罰ゲームかな?」

「ウハWWWマジでWWWパネエなあの子WWW」 「ナニアレ?マジ有り得ないんですけどWWW」

あまりに周りがつるさくなってきたのでぼよぼよを止めてイヤホンを外し騒ぎの元は何だと周囲を見回して……

「ぶっふお！！？」

何も口に含んでいなかったのに噴いた、それはもう盛大に噴いた。それほどまで視線の先に映ったモノのインパクトが大きすぎた。過去これほど驚いたことがあっただろうか？いや無い！！

頭の中では「ナンダアレハ！！」という文字が列を成してパソコンのエラーの如くズラリと並んでひしめく。

目を点にし顎が外れんばかりに口を大きく開け広げる、しかしその視界に映るモノから目を離すことはしない。ケータイが手からスルリと抜け落ちて地面に落ちるが本人は全く気付いていない。

それほどまで秀治をして驚かせるモノとは一体何なのか？

一言で言えばそれは毒島冴子である。しかしただの毒島冴子と思う事なかれ。

髪を下ろしてただのストレートにしているのはいつものポニーテール

ルとはまた違った魅力を感じとてもGoodだ。

母親に手伝ってもらったのであろうか？素を活かすように仕上げられた申し訳程度の化粧もその美貌を引き立てる一端を担っている。

しかし！！そこが問題なわけではない！！

何があってもあまり動じないことに定評がある秀治をもってこころで驚愕させたのはその衣装である！！

(十二あの服？スゲエ・・・)

単純な感想だと言う事無かれ、秀治の頭は現在進行形で処理落ちでパニックだ。

その問題となっている毒島冴子当人は人が多い「タイエー床主」前でいつもの見慣れた顔の秀治を探してキョロキョロと少し困ったように周りを見渡している。

そして周りから注がれている視線にうつすらとほほを染めているその姿をみているとあ”あ”あ” あああああ！！くあ W s d r f t g y ぶじじ・・・

コホン、話を戻すが問題なのは冴子の服装なのである。

かなり短めのスカートでありながら存在する深く、それでいてギリギリのラインまではいっているスリット！！そしてそのスカートから艶かしい太ももに伸びるガーターベルト！！、そして服の上からでもわかるその存在を慎ましながらも主張し始めているふつくらとした双丘、ヘソや二の腕を丸出しにし、背中が大きく開いている魅力的であり扇情的なその姿は若干14歳とは思えない程の色香を振りまいていた。

そして極め付きには歩くたびにそのギリギリまで入ったスリットから見える生足と見えそうで見えない絶対領域ががががが。

そんな刺激的なものを見ていつものギャップの差で頭がビジーでフリーズな状態になった秀治は一分ほど何をするわけでもなく立ちほうけていた。

「ねえねえ、おにいちゃん、これおにいちゃんのこと？」

ズボンをクイクイ引っ張られる感覚にハッと我に振り返り視線を下げる
と小さな女の子（六歳くらいだろう）

か？）が自分がいつの間にか落としたケータイを首を少し傾げながらこちらに差し出していた。

「あ、・・・ああ、ありがとなお嬢ちゃん、助かったわ。」

しゃがんで目線を合わせて頭をくしゃくしゃと撫でながらケータイを受け取る。

「えへへへへ ありすいい子だもん バイバイおにいちゃん。」

顔に無邪気な笑いを浮かべて元気よく両親のいる元へと走っていった。

そんな小さな子供特有の無邪気さに心が癒された気がした。

「うし!!とりあえずあれ、なんとかせんとな。」

(口調も声音も変えて話しかけてみよ)

ちょっとした出来心でそんなことを思いつく。

果たしてそれで自分と気付くかどうか少し楽しみにしながらついに顔が険しくなり始めた彼女の方へと歩いて向かっていく。

冴子サイド

約束の五分前になってもまだ秀治の姿が見当たらない。

その事に対して私は少し憤っていた。

(全く、自分から誘っておいて私より来るのが遅くてどうする。)

母から毒島流服飾術を教わりその中で自分の最も気に入った服を選び母に化粧まで手伝ってもらって来たのだ。

そこまで念を入れて来たというのに相手がまだ来ていないとなると多少の不快感も感じるというものである。

見慣れた顔を捜してキョロキョロろ周りを見渡すがそれで見えるのは此方を見つめる目、目、目、目、そのあまりの視線の多さに少し赤面する。

(う……、そんなに可笑しな格好なのか？私は気に入っているんだが……)

そう思いながら改めて自分の着ている服を見下ろす。

仮に人に「私の服は変か」と聞けば、10人中10人がいい笑顔をして「Yes!」と答えるだろうそれもサムズアップ付きで。

今、自分の姿を改めて見下ろしている彼女も自分の格好が可笑しい事に気がつくであろう。

(ふむ、いざという時に動きやすいスカートに通気性が抜群に良い上着・・・、確かに多少は目立つが何ら可笑しくは無いと思うのだが・・・)

訂正、どうやら彼女はナカナカにぶっ飛んだ感性をしているようだ。

(それにしても後一分もないというのにまだ来ないとは彼は何をやっているんだ)

約束をすっぱかすような人物ではない、というよりこの話を持ちかけたのは彼である。遅れるにしても連絡の一つでもあるはずなのだ。

遅れたらどうしてやるのか・・・、と少し苛立ちながら考えている

と。

「こんにちわ今日は冴子さん目立つ格好をしていますね。」

後ろからどこかで聞いたことのあるような声が聞えたのでサッと振り向くとそこには

「誰だ貴方は？」

知らない男がそこにいた。身長から察するに自分と同年代であろう。

そう言うとショックを受けたように2、3歩よろめいきながら後ろに退がり大げさに嘆き始めた。

まるでマンガの茶番を見ているようだ。

「そっそんな!!?私の顔を忘れるなんて・・・、いくらなんでもそれは余りに酷いですよ冴子さん。」

聞き覚えがあるような声しかせへ、そしてこのオーバーリアクション。

そこまで見てようやく冴子の頭に閃くものがあったが違いが少々ありすぎる。

「もしかすると・・・、秀治君・・・なのか？」

間違っていたら恥ずかしいのでおずおずと尋ねると、目の前の男は先ほどまでしていた泣き崩れる真似を止め

「ハッハッハ！！ようやく気付いたか！！ちょっと時間かかったの？」

と言ってニヤリと笑いかけてきた。

その顔に少し腹が立って腹に一発いいのを入ってしまったがそれは詮無きことである。

「いや、確かにからかったんは悪いとは思っけど出会い頭にボデイブローってのはやりすぎや思っで?」

殴られた腹(鳩尾)をさすりつつ笑顔で言っがその目はあまり笑っていない、真面目に吐きかけたのだから仕方が無い。

「わ、わざと遅れた上に私をからかった君も悪いだろう!!」
流石に強く殴りすぎたと思っているのかちょっと声がどもっている。殴ったら咳き込みまくって地面に蹲って苦しみ始めたのを自分で介抱しなければならなかったのだ、それは反省もするだろう。

「いや、痛かったなあ、ホンマに朝食ったもんがりバースしてまうとこやったで。ボクシングやったら?その右手が世界を掴むかもよ?」

軽くジョークを含ませながらジトジトとした目でじつと顔を見つめる。

「うう・・・す、すまなかった。流石に私もやりすぎた。」

「なら良し!!、こっちもちよつとフザケが過ぎたわ、ゴメンなあ、それと、理由は色々あるけどまずは服買いに行こか。」

「何故だ？」

「何故もなんも、お前その格好でウロウロする気か？」

「何か可笑しいところがあるか？由緒正しき毒島流服飾術だ。」

ちよつと膨らみかけの胸をエツヘンとでも言いたげに張る。顔が自慢気であることから微塵も自分の格好が可笑しいとは思っていないのだらう。

「なんというか、毒島家恐るべし！！やな、いや〜時と場合が揃ったらその服も全く可笑しく無いとは思うで？でも日中の町ろつくにはちよつと合わへんのとちゃうかな？」

「む？君までそう思っていたのかね。」

いきなり顎に手を当て思案顔になる。もしかや自覚があったのか？

「ん？もつかして自分でもちよつと可笑しいとも思ってた？」

「いや、私はそう思ってないのだが、こう視線が、なんというか、私に注がれているのを感じたらちよつと、な。」

その姿でほほを赤らめて少し上目遣い（身長の関係上嫌でもそうなる紫藤家男子はひよろくて長いのだ・・・父以外）をしてこちらを見る様はそれだけでも今日誘ってよかったという気分になるが視線の話となると自分もあまり笑えない。

なぜなら冴子に注がれている視線に匹敵するほど多くの視線に秀治もさらされているからだ。

しかも好奇の視線が多分を占める冴子とは違いこちらはかなりたちが悪い。

もてない男から注がれるSHITの視線、その意識は「なぜ彼女にこんな格好をさせて連れまわるような男にこんな美少女が！！」

彼女連れの男から注がれる、賞賛とSHITの視線、いわく「こいつ・・・、勇者だ！！それにしても俺の方がいい男なのになんてあんな可愛い娘が！！」

当然なことに男がいれば女もいる。さつきから一番きついのがこの視線だ。ゴミを見るような目で秀治のことを見ている。いわく・・・
「この変態が！！」

そんな視線に曝されている秀治は叫び出したかった。「ワイが言つてやらせたわけやない！！こいつが天然なだけや！」と、しかしそれをやったところで突然叫び出したおかしな人である。よつてただただこの針のムシロのような視線に耐えるしかないのだ。なんともお気の毒な話である。

「いや、それは確かにこんなとこで着るような服やないつてのもあるけど、それ以上に・・・あれや、うん、お前が可愛いつてのが大きいと思うで？その服もめっちゃ似合つとるし。」

ちよつと恥ずかしいと思いつつ賞賛の言葉を口にする。小学生の頃はとある理由で人間不信に陥り、中学一年は暴れまわつて「狂犬」のあだ名を頂いた秀治である。まず女性の知り合いが全くいない、いるにはいるがその人は自分に付けられた「狂犬」のあだ名を知らない。（実際には自分の行っている学校の連中とここら一帯の不良たちにしかそのあだ名は使われていない）

「そうか、それは良かった。」

自分の気に入っている服が似合つていると言われて嬉しいのか顔を綻ばせてうんうんと頷いている。そしてその仕草で周りからの視線が増した。

「あゝ、そこでワイの提案なわけや、お前は可愛い、それは自分でもわかつてな？そんな可愛い子がこんな目立つ服着て歩いとつた

らそりゃ視線も集まるモンや。だから服かってそれに着替えよ〜や。服はプレゼントさせてもらっつで。」

「似合っている服を着ているのが悪いことなのか？」

それを言う顔はとても不思議そうにしている、おそらくその裏に秘められている男の浅くて複雑な心にも何にも気付いていないのだろう。

「ぐ・・・、そう言ってるんじゃないんや。ただな、似合すぎとるつていうか、その服は刺激が強すぎんねん、ワイにも、そこら辺におる有象無象の男どもにも・・・な。だからな、買いに行こうや服、この中で女性用の服売つてるところあつたはずやし。」

手を繋いで引つ張るように「タイエー床主」へと連れて行く。手を繋いだときにSHITの視線の濃さが増大したが気にしたら負けだ。いちいち気にしていたら胃に穴が開いてしまう。

「それは・・・仕方ないことなのか？」

「それにや、ワイがお前のそんな格好を他の男どもに見せたくないつていう理由もあるからな。」

グイグイ手を引かれながら未だ思案顔で悩んでいるとスツと近寄り
れて耳元で囁かれた言葉に硬直して手の引かれるまま店の中へと連
れ込まれる。

店に入ったところで我に返ってグイグイ引かれている手を離そうと
するがその前に手を引いている男を見ると。耳が真っ赤である、こ
れでもかというほど真っ赤である、おそらく顔もそれに負けず劣ら
ず真っ赤であろう。気をつけなければ気付けなかったが自分を引
張っている手も微かに震えている。

自分で先ほど言った言葉がよほど恥ずかしかったようである。こう
やってグイグイと強引に引っ張っているのはその恥ずかしさをこま
かすのと顔を見られないようにするためであろう。

その事に気付いた冴子はクスリと笑ってその手を引かれるままにし
ておく。

男にあれほどのことを言わせたのだから今は秀治の顔を立てるのも
いいだろうと考えて。

「よーし、こーや、早いとこ服選んで映画でも見に行こうぜ。」

「秀治君、それは無茶というものだよ。女性の買い物は長くかかる
のを覚えておくといい。だが、まあ今日は早めに済ませるとしよう。」

「

そう言っつて適当にそれでいてめぼしかった服を2〜3着取っつて店の試着室へと向かつていった。

「アウト」

「む、これもダメか。」

「いや、なんで持つてくる服が全部へビィでメタイねん。」

先ほどから何度このやり取りを繰り返したたろうか？すでに1時間以上は経過している。冴子は困惑顔で秀治はすでに疲れきつた顔をしている。

「あれやな、ちよつと店員さんに頼んで選んでもらおうや、本音を言えばワイが選びたいんやけど、ワイも服飾のセンスが無くての、持つてる服はお下がりが兄がコーディネートしたもんそして店頭にならんでる奴そんままとかいこのばっかやからな。」

「人に言う割りに自分もセンスが無いのではないか。」

「いや、お前は服飾のセンスはあると思うよ？さつきから似合ってる服ばっか持ってきてるし、ただそれが日常で着る服やないだけだな。」

はあく、と心底疲れたようにため息を吐き出す、何故デートの前からこうも疲れなければならぬのか？いや、これもデートに入るのか？

どちらにせよ女の買い物物は時間がかかり疲れるものだという大事な教訓を得た秀治であった。

結局昼まで服選びに時間を費やしやっとなんは落ち着いた雰囲気服になった。

この際ミニスカートなのは見逃そう。そうしなければやってられない。

何気に支払いの時に持ってきたヘビィでメタイ服が何着か混じっていたが見なかつたことにしよう、男の甲斐性つてのはそんなもんだと自分に言い聞かせながら馬鹿にできない額になった代金を震える手で財布から取り出す秀治であった。

「ま、気を取り直して映画でも見に行くとしよ〜や。」

「うむ、そつだな。」

ちよつと元気が無くなっている秀治と対照的に冴子は気に入った服が手に入つてご満悦であった。満面の笑みだ、これだけでも払った価値はあると考えてしまふのは男の悲しい性だろう。

「で、何見よか？」

「何が上映されているのだ？」

「確か朝調べたところによると、バイオハザード3、崖の上のポチヨ、アーマードコア4有澤の野望の3つやったけかな？」

「バイオハザード3でいいんじゃないか？」

「ワイとしては有澤の野望も棄てがたいけど、まあ冴子はん知らんやろつし、バイハ3見に行こか。その後ちよいとゲーセン行って飯食つて帰ろや。」

「ああ、そうじゃ。」「

そうして二人は町へとようやく繰り出して行った。長い前座である。

「いや、結構面白かったな。」「

「そうだな。」「

談笑しながら歩いている二人は現在、近場にあるゲームセンターへと足を運んでいる。荷物を持っているのはもちろん秀治だ。

「なあなあ、もし世界がバイハみたいにゾンビだらけとかなったらどうするよ?」「

「それは、生き残れるだけ生き残るしかないだろう。まあ、私はゾンビになるぐらいなら自決するだろうな。」

「噛まれたり引掻かれただけでアウトってのはちょいと厳しいよな、一対一やったらどんだけ来てもやれる自信はあるけど流石に一対五超えて来たらワイらのエモノやったら厳しいモンがあるな日本刀やったら一対七、八はいける自信はあるで。でも走ってくるゾンビは無理やな、やれたとしても2匹が限度ってとこやろ。弱い方でも囲まれとつたら一対三ぐらいやろうな。」

有り得ないことを想像を膨らましてそれについて話す。

「基本この手の映画のゾンビは数で押し寄せてくるからな、しかし慢心している者ほど始まってすぐに噛まれるというのはよくあることだからな、気をつけるよ秀治君。」

冴子がニヤニヤと笑いながらこちらを見てくる。

「それはあれか？ワイが慢心してやられる言いたいんか？いや、流石に歩き程度の速さしか出されへん奴らに負けるこたあ無いで。数で潰されんかぎり。」

「フッフ、どうだか。」

身振りを交えてそれを否定する秀治を冴子は微笑ましいものを見る

よじな目で見る。

「っとと、そうじつしてる間にゲーセンついたわ。」

「ここがが。」

冴子は興味深そうにその建物全体を見上げてマジマジと見ている。

「おお？もっかしてゲーセンとか来るん初めてか？」

「ああ、私にはあまり関わりあいのない場所だからな。話には聞いたことはあるが行ったことはないよ。」

「ほう！！なら楽しんだらええ、さっき映画見たところやしゲーム版のバイハやるうぜ。」

手をクイッと引っ張って先導する。

そうして二人は手を繋ぎながらゲームセンターの中へと入っていった。

「そっちの奴ら頼んだ!!」

「まかせろ!!」

画面に群がるように現れるゾンビ共に鉛玉をプレゼントする。後少
しでラスボスの所までワンコインで辿りつけるあたりかなり上手い
だろう。
有象無象を蹴散らしついに最終ステージの際奥、ラスボスの間に突
入する。

「こいつがラスボスか。」

「フン、醜いな。」

相方に何かスイッチでも入ったのかかなりいい笑顔でそんな事をお
っしやってくれる。なにやらゾクツと来るものがあったが今はラス
ボスを倒すことに集中する。

「あともうちよい!!これだ!!」

「終わりだな。」

後一発で倒せるといふときに弾切れになり画面外へと銃を向けて再装填している間に冴子に止めを搔っ攫われた。

「いやすごいやん!!初めてであんなにできるやつおらんで。」

「コッさえ掴めばあとは簡単だったな。」

持ち前の運動神経と動体視力で出てくるゾンビに銃を向けて撃つ、これだけだった。

「次は何しよか〜UFOキャッチャーでもする?」

「あれのことか?別に欲しいぬいぐるみは無いぞ。」

ゲームセンターの顔の一つなのだがにべもなく切り捨てられる。

「む〜、初心者じゃむずいけど、AC鳥達の狩場でもやる?」

「あれのことか?」

そう言って球体型の乗り込み式のゲームを指差す。

「そうあれ！！フロムが持ち前のCG技術をフルに使ってできた傑作品や。」

「具体的にはどんなゲームなんだ？」

「ロボットに乗り込んだ感覚で操縦して対戦相手を倒すゲームや、ミッション選んで出撃、相手のランクによって報酬が変わる。んで報酬が溜まったら好きなパーツと交換できるっちゅうわけや。いっぺんやってみ？操作も簡単やからおもしろいで。データカードは貸したるわ。」

「ならやってみるか。」

財布から取り出されたデータカードをしげしげと見つめて球体に乗り込んでいく。

「流石にアレは慣れなければ無理だ。」

相手に一方的に蹂躪されて負けたからか少しむくれた顔をしている。

「一方的に蹂躪できるようになったら面白いねんけどなアレ。」

まあ健闘したほつだと言うように肩をポンポンと叩く。

「で、時間もええ具合やけど飯どうする？」

「ふむ、どうするか、む？ちょっと待て電話が・・・」

そう言っつてポケットからケータイを取り出して誰かと話し込む。

「え！？本気ですか？はい、解りました、彼にもそう伝えます。」

冴子はケータイを切っつてポケットに入れた後に何を考えているんだと言いたげにフウ、とため息を吐き出す。

「なんやったんや？」

「あゝ、秀治君、落ち着いて聞いて欲しい。」

「なんやなんや?」

「どうも私の両親が君と会いたがっているようだ、夕飯に誘いなさいと言われてしまった。受けるか断るかは君次第だが、行っておいの方がいいだろうな……」

「うっそ、マジで?お前の父親ってあの毒島さんやったよな?」

「ああ、そうだな。」

目を瞑り腕を組みながら冴子は首肯する。

「ワイ今日が命日やったんやろか?」

「まあ、頑張るんだな、私からも取り成してやるからマジイことにはならないだろう。」

「そんなの無いわ〜」とでも言いたげに頭を抱える秀治を慰めるよ

6話

「・・・なあ、お前の両親って厳しいんか？」

「・・・甘いと思うか？」

「・・・いや、全く。」

無いだろうなあ、と思いつつもダメ元で聞いてはみたもののその可能性はほぼゼロだと遠まわしに言われたのでズーンと音が聞こえてきそうなほど肩を落とし顔を俯け、まるでこの世の終わりだと言わんがごとくの長く憂鬱そうなため息を吐く。

「それほど気を落とすこともないだろう、確かに厳しい人ではあるが理性的な人だよ、私の父は。だが甘いという訳ではないから注意するんだな。」

その様子を苦笑しながら眺めてちよつとしたアドバイスを送る・・・
が

「くう！！これがお嬢さんをお嫁にください！！って相手の親に言いにいく男の気持ちなんか！？くそっバッドなエンドしか見えへん！！！！」

「フッフ、まあ頑張ることだ、母もおっとりしているように見えて一癖ある人だから気をつけるんだな、気がつけば墓穴を掘らされていたということになりかねんぞ?」

自分の両の手のひらを顔の前に並べてワナワナさせている秀治にちよっとした嗜虐心が疼きつい追い討ちの言葉を放ってしまう。

「な、なん・・・だと?」

呆然とした表情で此方を見つめてくる秀治にたまらず吹き出してしまふ、それを見て先ほどまでの狼狽ぶりはどこへ行ったかニカッとでも擬音が聞こえてきそうなほどの笑みをつかべる。

「なんだ、意外と余裕そうじゃないか。」

「じょーだん、これでもワイ緊張のしすぎで体震えとんねんで? ホンマ、ボケてなかったらやってられんわ。」

手をヒラヒラと振ってその言葉を否定する

「そんなに怖いのか・・・」

やれやれと首を軽く振りながら秀治の肩に手を置いてみると、なるほど確かに微かだが震えている、今の振る舞いも空元気の種類か虚勢なのだろう。

「雲行きが怪しくなれば私からもできるだけ取り成してやるからそうオドオドするな、いつもの君らしくしていればいい。そんな態度では逆効果だぞ。」

肩に置いた手でそのまま背中をポンポンと叩いて元気付ける。

「ん！！、確かにそうやな、いつまでもウジウジしとつても何も始まらないか。よし！！やったるわ！！つーか、やるしかない！！」

深呼吸をし、顔を両手でパーンと勢い良く叩いて気合を入れなおして心を落ち着かせる。

「ああ、その意気だ、ここだ、覚悟はできたか？」

「おー！！」

握り締めた右手を空に向かって突き出し胸を張って冴子の後ろに並ぶ。

ギィと音をたてて冴子が門を開き此方を向いて笑みをうかべながら

「ようこそ、毒島家へ、私は君を歓迎するよ。」

と言って手を差し出した。秀治は少しの間呆気にとられていたが何をされたか理解するとニヤリと笑い返してその手をしっかりと握り

「ありがとな、それじゃお邪魔させてもらっわ。」

と言った。

毒島家は予想通りとでも言うのだろうか？伝統を感じさせる大きな古い武家屋敷であった。

そしてその家の玄関をくぐる前に二人同時に

「ただ今帰りました。」 「お邪魔いたします。」

と言って家の中に入っていった。

「あらあら、いらっしやい、今日は冴子がお世話になったようで・・・。」

家の奥から出てきて秀治達を迎えたのは冴子に良く似た和服を着た美人さんであった。

「いえ、こちらこそいつも冴子さんにはお世話になっております、ところで冴子さんの御姉妹の方でしょうか？」

目上の人に関西弁で話すと気分を悪くしてしまう恐れがあるので秀治は兄から徹底的に叩きこまれた対外用の言葉遣いを駆使する。横で冴子が奇妙な物を見るような目で此方を見ているがそれはそれだ。

「あらあらお上手、私は冴子の母の毒島美雲と申します。」

「私は紫藤一郎が息子、紫藤秀治と申します、冴子さんのお母様でしたか、いえすいませんあまりに若く見えてしまったものでつい御姉妹の方かと・・・。」

間違ったことは少し気恥ずかしく感じるがその間違いを利用して全力でよいしょする、女の方は若く見えると言えば喜ぶものだと言っていた兄に感謝するとしよつ、そういえば何故兄に彼女はいないのだろうか？フツとそんな疑

問が思い浮かぶが今は関係ないことだと一瞬で頭の中から掻き消す。

「あらまあ！？あの紫藤議員の・・・」

驚いたようにこちらを見つめてくる毒島母娘

「ん？なんでお前も一緒に驚いているんだ？もしかして言ってなかったか？」

一緒に驚いてこちらを見つめてくる冴子に不思議そうに尋ねる。

「ああ、君はあまり家のことを話してくれなかったからな、聞くことがあっても君の兄の話だったよ。それにしてもあの紫藤だったのか・・・意外だ。」

心底驚いているのかまだ顔がすこし呆然としている。

それにしてもやはり父の名はこんな時に役に立つ、さすが総理も夢ではなかった衆議院議員、ネームバリューが伊達じゃない、あまり使いたくは無い手ではあるが・・・、外からいくら偉い人だと思われていても自分達兄弟の認識はただの腐った豚なのだ、誰が並べて見られたがるだろうか？

「やっと帰ってきたのか、君が・・・秀治君かい？話は冴子からよく聞いているよ、私の名前は毒島隼人、現毒島家当主だ、よろしく頼む。」

「初めまして、紫藤秀治と申します、こちらこそよろしくお願います。」

スツと気配を感じさせずに現れたのは黒い着流しを着、背丈の高く筋肉質な体を持った顔の厳つい人だった。気配を感じなかったことに驚くがそれを悟られまいと笑顔で受け答えをする。

「隼人さん聞きました！？この子あの紫藤議員のご子息だそうですよ。」

多少興奮気味に美雲が夫である隼人に話しかける、どうやら思った以上に豚のネームバリューの効果は高かったらしい。

「ほう、あの紫藤議員の・・・」

隼人の秀治を見る目が少し変わったように思える、少し目を見張りこちらをマジマジと観察するように見てくる、その視線に多少の居心地の悪さを感じるがここは我慢するしかない。

「おつとすまない、ここで話をするのもなんだ、上がりなさい。夕飯も出来ている。」

「此度は夕飯にお招き頂き有難うございます、それでは改めてお邪魔いたします。」

頭を深々と下げ感謝の意を表して靴を脱いでちゃんと並べてから隼人の背中について行く。紫藤家は礼儀作法の教育は徹底しているのだ。親が自分の顔を潰されたくないが故に……。

「つとと、その前にこれを渡しておくよ、危うく持ったまま行くところだった。」

慌てて冴子に向かい買った服、そして着てきた服の入った袋を差し出す。

「ああ、有難う、今日は中々に楽しい一日だったよ、次も楽しみにしている。」

袋を受け取り嬉しそうにそう言って隼人が行った所とは別の場所に向かつて歩いていく、おそらく自室に行くのであるう、つい覗いてみたくなつたがそれをすればもれなくジ・エンドであるので自重する。

「どうした秀治君？来ないのかい？」

奥から隼人の声が聞こえてくる。

「あつ、すみません今行きます。」

慌てて、それでいて走ることなく隼人が向かった方へと急いでいく。

毒島家の両親による娘についた悪い虫かどうかの判別は未だ始まったばかりである。

「ねえ、冴子、その服は一体どうしたの？」

朝着て行った服とは違うことに小首を傾げながら娘に問いかける。

「これですか？、これは秀治君が買ってくれたものですよ。あの服

では自分にも他の男共にも刺激が強すぎるとか言つて、そう言えば他の男に私のそのような格好は見せたくないともいつてましたね。もう顔を真っ赤にして、あの時の秀治君は少し可愛かったですね。」

冴子はその時のことを思い出してクスクスと笑い始める。

「女の子をあゝの格好のまま連れまわすような人間ではない・・・と。」

それ故にボソリと呟かれたその言葉を聞き逃してしまったのは必然であつた。

「今何か言いましたか？」

「あら？今私何か言つたかしら？」

全くの自然体で本当に不思議そうに小首を傾げて問い返してくる。

「そう・・・ですか。空耳か？それではまた後で。」

そう言つて自分の部屋へと入つていった。

「第一試験は合格かしら？あの買って貰った服の量からして秀治君は女の子に尽くすタイプかしらね。礼儀作法も合格、家柄も合格、後は隼人さんが人となりを見極めるだけかしら？悪い子には見えなかったからそれも合格かしら？それにしてもあの子、本当にあの服が可笑しく無いと思ってるのかしら？私の娘ながら服の趣味がわからないわ。」

ふう、と困ったように頭を抑えてため息をつきながら家の奥へと歩いて行った。おっとりしているようで見るところはキツチリ見ている一癖あるというより一筋縄ではいかない人であった。

ちなみに毒島流服飾術とはどうやら相手の男がどんな反応を返すかを試すために作られたものであったらしい、（冴子はそれを知らず本気で信じている）知らないところですでにテストされていた秀治に幸あれ。

夕飯食べて談笑してたらいきなり試合うつことになっていた、何を言っているのか（ry

「全力で来なさい。」

そう言つて目の前で竹刀を構えるのは毒島家現当主毒島隼人その人だ。

面越してもその目が猛禽のように鋭くなりこちらの動きを完全に捉えているであろうことがわかる。

こちらがどう動いても勝てるビジョンが浮かばない、一合すら剣を合わせなくとも理解できるものはある。

つまり・・・、今の自分とは格が違うのだ。それも次元のレベルで、

これが本物の達人というものと頭で感じずともすでに本能が察知している。

肌があわ立ち全身が微かに震えていることを今更ながら自覚する。

それは圧倒的強者を目の前にした怯えがそうさせているのか？はたまた自分よりも明らかに格上の者と戦えることに対しての武者震いか・・・。

それは今自分の顔に浮かんでいるであろう、歪んだ笑いと極上の機会を前にしてキラついた瞳を見れば明らかだろう。

今の段階では自分では勝つことができない、それは竹刀を目の前に構えられた時に悟った。

ルール無用の世界での勝負ならば万に一つでも勝ちを拾える可能性もあつたであろう。

なぜなら自分の振るう剣は邪道、正道に慣れた者ほど不意をつける剣だ、尤もここまで実力差があるのであればその利点は潰れるのだが……。

以前、冴子が自分のことを軽業師と言っていたがあながち外れていくわけでもない。正等な剣士であつたならばあの動きは出来なかつたであろう。

なぜならそんな動きは想定されていないからだ、どこに腕だけで体重支えて相手に蹴りを入れる事を教える所があるのか？ルールに反している事はまず教えられないことはない。

正統派の坊ちゃん剣術ではなく不良相手とはいえ実戦で鍛え上げてきたのだ、手加減や油断をすればどうなるかわからない世界で……。

そんな中でルールだ何だと言えるだろうか？いや、言えない、言つたとしても聞き入れられることはあるまい。ルールに反した動きであるうとそれを取り入れて自分のものにしなければやられる世界。

それが今まで自分こと紫藤秀治が身を置いてきた世界なのだ。

故に振るう剣も正道ではなくどこか盗賊めいた土臭い匂いを感じさせる剣を身に着けるのも必然であったといえるだろう。秀治本人から言えば「自然と身についていた動き」というだけであろう。

初めて不良に襲われ実戦を経験した時には不完全ながらもすでにこの動きの雛形はあったのだ、それをさらに研磨した剣が今自分の振るう剣である。

しかしその動きは剣道の試合という形では全く機能することはない、理由は多々あるが代表的なものは「その動きをすれば反則をとられる」からだ。

自分からすればこれほど窮屈なものはない、自分の思うようにさえ動けないのだ窮屈と言わずしてなにかあるうか？

別に試合だから特別弱くなるわけではないそれは大会で優勝した実

歴が語っている、多少実力を抑えられるだけなのだ。だからこそ剣道大会での「弱い」という言葉にも繋がる。

本気を出すことさえ出来ない自分に手も足も出ないとは何事か、そんな意味を含めて吐いた台詞なのだ。

正式な試合という形でぶつかり会えば秀治は冴子といい勝負はするが勝てる割合は低いであろう。

今まで強者に導かれて強くなってきた者と日々喧嘩三昧で叩きあげで強くなったもの、その両者の差でもっとも顕著なものは技量の差である。

経験を積み、自分の体が元から知っていたかのような動きをなぞる秀治には剣の騙す技術がない、見破る技術はあれどもそれだけは試す相手がいなかったのだどうしようもない。

その差を埋めて余りあるのが自分の動きである、騙す技術が無いのであれば元から動きを悟らせず動けば騙す技術も必要が無い。それで今までやってきたのだ。自分の18番は別として試合で自分から動いて攻め立てないという理由もそこにある、相手を騙せないならばあえてこちらから動く必要もないのだ。

その動きが封じられた試合での勝負で冴子よりそして自分よりも明

らかに強い隼人に勝てるという道理がどこにあるのか？

しかし・・・、だからといって初めから勝負を諦めるほど殊勝な心がけもしてはいない、そうしようとも思わない。

どれだけ不利な状況であれ一欠けら程度の勝機はどこかに転がっているのだ。たとえ無かったとしてもそれを探すのを諦めればそこで終わる。たとえ諦めるとしてもそれはのど元に刃を突きつけられてからだ。

溺れる者は藁をも掴むと言う、人からすればそれは無様だと言う人もいるだろう。しかし藁すら掴まない者はただそのまま沈んでいくだけなのだ、ならば足掻くことなど恥にはならない。

そうして思いついたかろうじて一矢報えそうな手段は一つ大会でも使っていた18番である。

大抵の人物ならば初見殺しになりうるこの技であればあわよくば一本奪えるかもしれない、最低でも相手を驚かせることはできるだろう。

そう考えて腰を軽く落とし、足に力を込め相手が自分の間合いに入るのを待つ。

その姿を見て隼人がピクリと眉を動かしたが面越しであるためにそれに秀治が気づくことは無かった。

ジリ・・・ジリ・・・ジリ・・・

ジワジワと両者の間合いが詰められていく、そしてある程度狭まった時、

弾丸のように秀治が相手に向かい真っ直ぐに飛び込み同時に竹刀を振るう。

「なっ!?!」

読んでいたのか秀治が飛び込むと同時に隼人が後ろに跳び自分の竹刀が届かないギリギリのラインまで下がる。そしてそこは自分が届かないが隼人なら届く間合いの中。

飛び出したものは止められない、必中を胸に振るった竹刀もそのまま止まらずに振り切られるだろう。

つまり、今この瞬間に置いて秀治は相手の攻撃を避ける、又は受けることが出来ない状態それを狙われるのは必然であった。

「面ッ！！」

烈風もかくやというほどの勢いと気迫を持って竹刀が秀治に振り下ろされた。

バアアーン！！

何かが弾けたような音が道場の内外に響きわたる。そしてその音の残滓が消えると同時に糸の切れた操り人形が如くグラリと体を傾かせ秀治が床へと沈み込んだ。

「め、面有り！！一本！！しゅ、秀治君！？」

審判を勤めていた冴子が倒れた秀治に駆け寄り介抱を始める。

「流石にやり過ぎじゃあないかしら？」

邪魔にならないように道場の入り口で観戦していた美雲が心配気に気絶した秀治を見やりながら少し咎めるように言う。

「やはりか、なるほど大会では誰も反応できないわけだ……。」

隼人が面を外しながらボソリと言う、どうやら美雲の言葉は聞こえていないらしい。

「どづいつことかしら?」

その言葉の意味を凶りかねて、何かを考えこんでいる顔をした隼人に問い返す。

「なに、面白いと感じただけだ、冴子の話では彼は我流、のはずなのだが……、ハツキリとした武の気配がある。それも長年研磨したかのような……な。」

「結局一合も剣を交わしてもいないのによくわかりますね。」

「あの飛び込みと太刀の速さを見ればわかる、あれはまだ未熟ながらも恐らく縮地とそして居合いだ、縮地からの居合いなるほどそれならば大会で反応できる者がいなかったのも頷ける。全く、あの若さで縮地の真似事とは恐れ入る。」

そう言つて娘に上体を抱き起こされ気付けに顔をペシペシ叩かれている少年を面白気に見やる。

「それに見たところ動きの無駄が少ないし普段の移動時でも重心が安定している。やはり師となる人物が居るのだろうか？いや、あの子が嘘を言う必要も無い、となれば自力でか……ふむ、欲しい……な。」

「はい？」

「師も持たずしてあの強さ……うむやはり欲しいな、弟子に育ててみれば面白そうだ。どんな成長をみせるのか楽しみでならん。」

クツクツと笑いながら介抱されている少年を見やるその目はもはや獲物を見るような目であった。

「え、いや、あの隼人さん？」

話に置いて行かれた美雲が困惑気に楽しそうな隼人の顔をみやる。

「心根は曲がつてはいないと見た、剣に血の匂いがするのが気に入らんがまだ若い、矯正も効くだろう。それと、あれはそろそろ止め

「の方がいいかな？」

すこし額に汗を浮かべてもはやペシペシではなくバシバシといった勢いで顔を叩かれている少年を見る、娘のどこか楽しそうな顔は見なかったことにしよう。そう言ってみていると少年が目を覚ました。

「痛って！！オラァ！！いきなり何すんじゃコラァ！！」

「何って、気付けた、分かるだろう？」

「分かるかあ！！強く叩きすぎなんじゃ！！顔ジンジンするやんけお前どんだけ叩いとったんじゃ！！」

「君が気絶してから気づくまでずっと。」

喧嘩しているようでどちらともあれでなかなか楽しんでいるらしいギスギスとした雰囲気が無い。あるとすればコメディな雰囲気だろうか？

「さて、何から話そうか……。」

「ここは毒島隼人の私室、その後「個人的な話がある」と言われ連れてこられた場所である。」

「先ほどの道場とは違い今この場にいるのは隼人と秀治の二人だけである。」

「君には師が居ないそうだが、それは本当の事かな？」

「真剣な顔をしてそう聞いてくる。」

「確かに、私には師に当たる人物は存在しておりませんが、しかし何故それを？言った覚えはありませんが……。」

「なに、冴子から聞いたただだよ、君の事を我流剣術という名の曲芸のような動きを見せる軽業師のような面白い奴だと言っていたよ。ふむ……、君が嘘を吐いているようには見えない……となると本当に師がいないのか、これは驚きだな。」

「え……と、何か御座いましたでしょうか？」

途中からボソボソと呟くように言われたので聞きとれることができず自分が何かしでかしたのかと多少不安になってつい居住まいを正してそう聞いてしまう。

「ああ、こちらの話だ気にしなくていいよ、おっとそうだ、少し気になったことがあるんだがいいかな？それと、口調、元に戻しても構わないよ。冴子と喧嘩していたときの君の素だろう？」

「あ、そんならお言葉に甘えて、ワイが言えることやったら何でも聞いてやって下さい。」

あまり好きではない外用の口調から解放されて肩の荷が降りたと言うように長く息を吐きながらそう言う。

「君の剣から感じる血の匂い……、あれは何だ？」

ヒュツと息を呑む音がやたらと大きく聞こえた、その言葉を放った本人は先ほどと変わらない表情をしているようで少し細められた目がこちらを探っている、目を合わせていると自分の全てが見透かされてしまいそんな気さえする。しかし目を逸らすことは礼儀に反するので出来るはずがない。

手が汗で湿ってしかたがない……

「いつ……、それに気付きましたか？」

口調が緊張により対外用に戻る。

「君が剣を構えた時だ。人を切った事のある気配、そして血の匂いを感じた、それが気に入らなかつたからつい本気で打ってしまった。その件についてはすまなかつた。謝るよ。」

そう言つて隼人は頭をこちらに下げてくる。

「頭なんて下げんといて下さい、ワイにもええ経験になりましたから。それと、血の匂いの理由ですか……、やっぱり言わなあきませんか？」

慌てて頭を上げるように言う、しかしそれで多少緊張が紛れてほんの少し、猫の額程度の余裕は持つ事ができて口調を元に戻すことに成功する。

「是非とも教えて貰いたい。娘と一緒にいる人間の人間性くらいは把握しておきたいと思うのが親の心と思わないかな？」

「確かに・・・、その通りですね。解りました、洗いざらい話します。それでも絶対に言われへんことは言えません。」

「君が自分で言える範囲で構わないよ、私もこれ以上無理やりにも聞きだそうとは思ってはいないからね。」

安心さえるようにこちらに笑顔を見せてはいるが、目が全く笑っていない。本人が言っているように深いところまで聞いてくるつもりはないようだが、これはかなり深いところまで踏み込んで話す覚悟を決めなくてはならないだろう。それならばと思つて口を開く。

「血の匂いがすんのは・・・多分ワイが修羅道みたいな道歩いてるからやと思います。」

小さくともハッキリと聞こえる程度の声の大きさの声が思ったよりも大きく聞こえるような気がして少し驚く。

「ほう？修羅道かね。近年そんな道を歩けるような世の中では無いと思つていたのだが・・・どうやって歩いてきた？」

多少興味を持ったように少しだけ眉を動かしたがそれだけだ、鋭くなつた目はまだこちらを捉えて離そうとはしていなかった。

「始まりは、武術を始めた切欠は小3の時です。その時にワイのそれからの人生を一変させる事件が起きた・・・、そしてワイはもうそんな目に合うことのないように強くなるうと誓った・・・誰よりも、何よりも・・・ワイから何も奪わせも尊厳を踏みじめるような真似もさせへんと誓ったんや・・・。」

その当事を思い出してどうしても目が濁り、鬼気を纏い少し殺気立ってしまふ。

「君が小学三年というと5年前か・・・、もしかしてあの事件かい？紫藤議員の御息が攫われて身代金請求をされたっていう・・・。」

そんな自分を痛ましいものでも見るかのような目で見てくる、恐らく何がその事件であったかも覚えていたのだらう。自分としてはあまり歓迎できることではないがそれならば話は早いなにより自分で言わずにすんだのだ良しとするべきであらう。

「ええ、その通り、その事件で相違ありませんよ。それが起こってから人間不信になりながらも必死で強くなる術を求めて色んな武術に手を出しました。そんな中でシツクリ来たのが剣術、そして合気道の二つでしたわ、道場の人に連絡して、その師範代に家来してもらって鍛えてもらったもんです。合気道の方はある技一点以外ほとんど会得出来ませんでしたわ。ワイが3年かけて唯一習得できたんが

入り身やった。」

「なるほど、君のあの縮地の真似事はその入り身からの派生かい？
もともとそれが出来るのを知っていたのとその動きが正直だったか
ら反応できたものだが、いやしかし武術の質が違うのによくあそこ
まで剣術用に変化させることが出来たね。そしてやはり君に師はい
たのか……。」

感嘆したように言ってから嘘を吐いていたのか？と咎めるような目
をする。

「ああ、今は師となる人物は居ませんよ。合気も剣道も辞めてます
家の兄はまだ合気道続けてるみたいですけどね。才能あったんかも
う素手やったら兄には敵いませんわ」

ククと笑い自分の兄の顔を思い浮かべる。

「つと話が逸れましたが、入り身のアレンジについては……、な
んと言いますか元から知ってたような気がしないでもないんですよ
ね。それはまた後で話すとして、続けましょうか。」

そう言っつて多少崩れてきていた居住まいをまた直す。正直そろそろ
足が痺れ始めてきているがそれを顔に出すようなことはしない。

「そうですね・・・、どこまで話しましたか・・・、ああ、確か事件が起きて鍛え始めたつて所でしたか、それから時は一気に飛んで中1になりますか・・・、ほら、ワイの見た目つてひ弱に見えるやないですか、それが理由やつたんか、かなり絡まれたんですよ。不良共に。初めてそれを撃退した時は喜びに打ち震えましたよ、昔のワイとは違う！！もうただ蹂躪されるだけの存在やないんや！！つて」

その時の事を昨日のように思い出してまだ一年しか経っていないというのにかなり昔のように感じた自分を可笑しく思う。

「そして絡まれては撃退して逆恨みされてまた襲われる、これが続いて、高校生やヤクザの人とも相手することもザラにあるようになった。その時あたりですね入り身が縮地の真似事みたいに变化したんは。」

本当にあれが一年前の事なのかと思うほど懐かしく感じる、それは昔にあつて今には無いモノ、そして自分の求めているものがそこにあるからだろう。

「そしてそれからしばらくして気付いてもうたんですよ・・・、ワイが、撃退できることを喜んでるんやなくて相手を好きなように殴れて倒せるから悦んでるんやと。そう気付いたら後は早かった、やつてた武道をすぐに辞めましたよ、武の道を歩けるほど正常な人間や無いつて気付いたから、それでも絡まれるのは収まるわけでもなかったから撃退はし続けてました。でもワイは・・・ワイは・・・」

そこから先は少し言う事に躊躇いを感じる、自分にとってのもはや
払拭することが出来ない汚点となる場面なのだ。信じれる人物であ
るとはいえ、躊躇うのが当然である。

隼人はそれを察してか先ほどから目を瞑り何も言わず聞きに徹して
いる。それをありがたく感じながらその先を言う覚悟を決める。

「ワイは・・・、それに溺れてもうたんですよ、戦って得られる快
感に・・・、溺れてからは、自分から絡まれやすい場所に行つて、
喧嘩の毎日、それでもその喧嘩の毎日は突然終わることになった、
それはある日ワイが不良の知り合いのヤクザの人とやりあった時、
慢心が過ぎましてね、そいつが持ってたナイフ投げつけられたんで
すよ、そしてそれがワイの腕にちよいと刺さりましてね、そこから
先はあんまり覚えてないんですわ。ぶち切れて、気がついたらそい
つの持ってたナイフをそいつの足にかなり深く刺して、逃げられへ
んようになつた相手を竹刀で生かさず殺さず鬩ってたらしいですわ
」

腕の服をまくつて右腕に奔っている傷を見せる。

「らしいとはどういうことかな？」

それに全く動じることなく平静を保ち片目を開けて問いかけてくる。

「ワイも覚えてないんですよ、気がついたら軽い血の海ができて、ワイはその中で蹲って泣き叫ぶ力も無くなった奴に竹刀振り上げてたんですわ。それで救急車呼んでその場を後にしたんです。その話しはその場におった奴に聞きましたよ。」

「警察ごとにはならなかったのかい？」

「ワイの父親が動いたらしく、そのヤクザの組自体に圧力かけたらいいですわ、詳しくはワイも知りません、兄に聞いた事ぐらいしかその後については知ってません。その噂が流れたんか不良もなんも絡んでこんようになっただんです、そしてふと気がついてワイの周りを見渡してみたら誰もおらんようになってたんですよ・・・。もともと親友なんておりはしませんでしたが・・・、ちよつとシヨツクやったもんです。それで腕だけは錆びひんようと部活で竹刀振るつまらん毎日を過ごしてた。それが中1の終わりから最近まで続いてました。」

半ば自業自得とはいえ失ったものの大きさを思い出してギリツと歯噛みしそのことを後悔して言う。

「今は違うのかい？」

「今は違います、ほんの最近、冴子さんが暴漢に襲われつつた日にそれは一変したんです。あの時ワイはいけ好かんゴミを掃除する程度の気持ちで助けに行った、けどそこで見たのは冴子さんが蹲る暴

漢に木刀を振り上げてる姿、その姿がどうしても被つたんですよ、血に濡れて竹刀ヤクザに振り上げてた自分に、そんな後味悪い経験、女の子にさせるわけにはいかへんかったから止めに入って、勘違いされてワイごと切られそうになりましたが、まあ、なんとか勝つてその場を納めました。」

今でも鮮明に思い出すことができる、それだけ自分にとっては大事な出会いだったのだ。忘れるなどできるはずが無い。

「ワイにはさつき言った通り、友人と言える人物はいません、いても朝会つたら挨拶してくる奴らぐらいのもんです。そんな中、ワイと張り合えるほど強い女の子が友人になってくれたのは、めっちゃ嬉しかった、暗闇の中で何するわけでもなく燻つてたワイにとって光明みたいな存在やったんが冴子さんやった。それに、冴子さんからはどことなくワイと同じ臭いがしたんですよ、自分に近い存在と友人になれたと思うってその日家に帰ってから狂喜してました・・・。そんなこんなでまた毎日が楽しく過ごしていけるようになった。冴子さんにはお礼のしようもありません、燻って落ちぶれてたワイを再度発火させてくれたんですから。まあ、ワイの歩いてきた人生はこんなもんです。」

夢中になって解らなかつたがとても長く話していたらしい、喉が渴いてたまらない。

隼人は先ほどの話を吟味しているのか眼を閉じたまま考え込んでいる。

・・・どうやら何か結論が出たらしい、静かな凧いだ眼でこちらを見つめくる、先ほどまで感じていた重圧感は消えている。

「君はもう武道の道を歩む気はないのかい？」

「いや、このままじゃいずれ冴子さんに勝てなくなるほど差が着けられるからまたどこかで鍛えなおそうかと思っていましたよ。どうやって鍛えるか困ってましたけど。」

これは偽りのない本心だ、武の道から外れたとはいえ今持っているモノを腐らせる理由にはならない、むしろ競争相手がいるのだ、実戦から離れ多少錆びていた腕をまた磨きなおす必要があったのは確かだった、

「なら、話しは早い、君、私の弟子になってみないか？私がこの家にいるときは手解きしてあげよう、いないときは冴子と打ち合っておけばいい。」

「は……？今なんと？」

言われたことが理解できずに、いや信じていることができず問い返す。

「私の弟子にならないかと言った。」

言っている本人はさも当然といった表情でこちらを見ている。

「いや……、ワイの話し聞いてましたよね？」

何を言っているんだこの人はと思いつつ念のため確認する

「無論聞いていたとも。」

「正気ですか？正道から外れて力に溺れた人間ですよ？ワイは、それでも弟子にするって言うんですか？」

顔が思わず険しくなり相手を睨むようになってしまふ。

「くどいな、それがどうしたというのだ？」

「なっ!？」

言われた言葉に驚愕し、後に出てきた怒りの感情で口が上手くまわらなくなる。

「君ぐらいの年齢でそれほど力を持っていれば酔いたくも溺れたく

もなるまだ君は若いんだそれだけの才能に恵まれているのに捨ててどうする、安心するといい、君の進んでいる道は昔は剣の道と言われていた道の一つだ。修羅道？戦いが無くてなにが剣の道か。」

今まで自分自身が蔑んでいたことを肯定され、怒りは水泡のように消えうせ代わりに困惑と感動がこみ上げてくる。

「それでも……ワイは……ワイは……。」

頭が回らず、何を言いたいのか自分にも良くわからない。動揺を表すかのように眼が揺れ動いている。

「大体だ、君はその事を悔んでいるんだろう？なら大丈夫だ、君はまだ剣士を名乗れる。何も感じないのは鬼か悪魔ぐらいのものだ。」

「本当に……、ワイを弟子にしてくださいませんか？」

こみ上げる感情を何とか押さえ込み搾り出した声は擦れていた。目頭が熱い、心が何かで満たされたような感じがする。

「勿論だとも、私は君がどこまで強くなるのかが見たい、生まれる時代を間違えたような君がこの時代でどこまで名を上げることができるとかが私は知りたい。だから、私は君に甘くは一切しない、潰

れずについてくることだ。いつか私を超えるほど強くなるのかが楽しみだよ。」

「解り・・・ました、喜んでついていかせて・・・貰います、師匠！！」

ついに我慢していた涙腺が決壊したのか眼から涙が出て止まらない。それは蔑んでいた自分を認めて貰えたが故か？それとも自分を必要としているといわれたが故か？それは秀治本人にしかわかることであつた。

7話

空はどんよりと曇り今にも雨がふりそうだが、そんな天気の中、少し沈んだ表情で浩一は車を走らせていた。隣には険しい顔をしてムツツリと黙り込んでいる秀治が腕を組んで座っている。

「最近変わりましたね、秀治。」

車の中にまで充満し始めたどんよりとした空気をなんとかしようとして、隣に座る秀治に話しかける。

「ん？いきなり何の話や？」

片目だけ開いて兄を見る。何の話か考えて無意識に眉間にしわが寄る。

「身に纏っている雰囲気がここ最近変わってますよ。主に毒島……冴子ちゃん？でしたっけ？その子と知り合ってからあたりでしょうか。」

「あー、まあ前と比べたらそりゃあ、なあ……、変わっとなるとは思うで、うん。」

得心がいったのか首を縦に何回か振ってその意見に同意を示す。

「前のあなたはただ腐っていくだけで見るに堪えなかったですが、今はどこか芯が通ったように感じます。眼が昔のようにキラつき始めていたので心配していましたが……、どうやらその心配も杞憂に終わったみたいですし。」

「あー、やっぱりわかってたんか……。」

半ばそうじゃないかと予想していたので余り驚きもせずクツクツと笑う。どちらかというと驚きよりも予想が当たって面白いという気持ちの方が強かった。

「昔も言いましたが……、あなたの面倒を昔から見えたのは私ですよ？そんな私の眼を誤魔化そうなんて百年早いつていうものです。しかし本当に変わりましたね、昔のあなたには無かった芯が出来るなんて。」

「いや……、まあ、認めてもらったんよワイの人間性を……、それも他人からな。」

カラカラと照れ笑いしながら答えを言う。それを聞いた浩一は一瞬

驚いた顔をしたがそれをすぐに引つ込めてまるで自分の事のように喜び始める。

「へえ、認められたんですかあなたの人間性を……、で誰なんです？認めてくれたのは？冴子ちゃんですか？」

やたらと問い詰めてくるのは気になるからであろう。それもそうだが、秀治の本性を知ったそれが見た人間は大抵近寄ってこなくなる。基本的に一人ぼっちだった弟を救った人間が誰か気にならないはずが無い。それは家族である自分には出来なかったことなのだから……。

「フフン！！聞いて驚け！！なんとあの剣術家で有名な毒島隼人師匠や！！あの事を言ってもなんら動じることなくワイをそのまま受け入れて肯定してくれたんや。」

「それは良かったですねえ、その人には感謝の念しか浮かびませんよ……。それで？冴子ちゃんには言っただんですか？というよりもどこまで関係進んだんですか？もはや向ここの親公認と同じ状態でしょう？」

何故だか知らないが兄はこの件に関してはかなりしつこく問い詰めてくる。そんなに気になる事なのだろうか？弟の事を気にする前に自分も彼女の二つや二つは……、二つ作ったらいけないか……。

とりあえず彼女を作れと言わざる終えない。兄ほどの顔と経歴の持ち主ならばモデルだろうに・・・、何が「女性には興味が余り無いんです。」だ。

一時それで男色かと思ってかなり引いてたことがあるのは知っているだろうに、それ言った時は初めて兄と殴り合いの喧嘩になった事は忘れない。結局投げられまくって一方的に負けて

「見たか愚弟！！これが兄の力だ！！」

と言われたことは屈辱の記憶として色濃く残っている。

話しを戻したら早く彼女を作れ23歳独身男めが、頼むから弟の自分を安心させてくれ、売れ残ったとか言われたら笑うしか無いぞ・・・。

「いやー、冴子はんは唯の恩人やで？それはそうとコー兄も浮いた話は無いんかいな？」

こういうときはワザとボケた答えを返して切り返すに限る、どうせお決まりの台詞が帰ってくるだろうと解っていても弟の立場からしていわずにはいられない。

「何度も言ってるでしょう。私は男にも！！女の人にも余り興味がないんですよ。それにそんな話があったとしてもそんな話を私があるあなたにするとおもうているんですか？弱みになりそうなことをワザワザ。」

男の部分にやたらと力が入っているのはその道の人だと勘違いされたのがかなり嫌だったからだろう。確かに自分がそれだと思われたらそう勘違いした奴を殺したくなるが。

「はいはい、思ったりませんよ。人に弱みを握らせるようなことはするな。それは家族にも同じことである。弱みを握られたらその者に逆らえなくなるのと同じだと思え……。やる？その話は耳にタコできるほど聞いたっちゅうに……。」

昔から兄が自分に教え込んでいる教訓である。母が死んでからぐらいに言い始めたことだっただろうか？古い記憶で余り記憶にない、というより幼少時のことはあまり思い出さないようにしている。余計なことおもう出してしまっからだ。

「あなたはその自覚がまだ足りませんよ、足元を掬われてからでは遅いんですから。それにしても貴方を認めてくれた人は私を含めて二人目……。良かったですねえ、秀治。増えたじゃないですか。」

本当に嬉しそうに笑ってくれる。そのことになにやら照れくさく感じることもあるがこの次の台詞が予想できる故に今回は余り何も感じない。

「で？冴子ちゃんには言わないんですか？それとも言つつもりが無いんですか？」

ほら来たとしか言いようが無い。

「んー、あいつにこの事を言っんはなあ……。」

この事は現時点一番の悩みとも言える問題だ。思い切って告白するのかそれとも言わないでいるのか……。

「何か言えない理由でもあるんですか？嫌われたくないとか？」

「いや、そんな心配はしてへんよ？……ただあいつは……昔のワイとよう似とんのよ。上手い事自制してるみたいやけど……、ガチでやりあったワイには解る、あいつは血に飢えたところがある。」

「……、よくそこまではっきりと断言できますね。何か理由があ

るんですか？」

そこまで自信有りげに断言する弟を意外に思っただけで問い返す。

「……、戦ってる時に見た顔がワイの晒い顔にそっくりやったんよ。まだ色々理由はあるけど、まあ似たようなもんや。だからこそあいつにはこの事は言いたくないんや。あいつは厳しくも優しくもある。特に自分に厳しい奴や……。それは自制できてることから解る。ワイはできひんかったからな……。まあ否定はされへんやろうけど……。傷の舐めあいみたいな関係になりそうぞ嫌なんよ、ワイは。」

そう言うてからまた目を閉じる。この話題は終了だと言わんが如く。その空気を察したのか兄はそれ以上踏み込んでこようとしてはこなかった。

「そいじゃ、ワイは寝るわ。着いたら起こして。」

そう言うて背もたれを倒して仰向けの状態になってから腕を顔を隠すように乗せる。

「おや？眠るんですか？」

「ああ、あっち着いたらずっと対外用の口調で話さないかんし、そ

れにあいつに会うしな……。」

ずっと避けていた話題を振ってきたことを少し憎らしく思うがそれが弟なりの甘え方だと理解しているので憎みきることはない。むしろ文句を言うてくるのは可愛いぐらいだろう。

弟は本気で嫌いな人には何も言わないのだから、愚痴や文句を平然と言ってくるあたり懐かれているんだろうと思う。

「父のことはあいつと言っではいけませんよ。少なくとも本人の目の前では。」

自分も確かに好きな相手ではない、むしろ嫌いと言えるだろう。もはや父にはなんの期待もかけてはいない。

あの時弟を見捨てて自分の保身に走った父を見て理解した。もはや私達兄弟は父にとって要らないのだと。

「わかっとするよ、んなへまはせーへん。けどあの糞親父には会いとー無いわ、何時まで経ってもな。母親の親族もや、あいつらワイらの事母親殺した親父の子としか見とれへん。ワイらも十分被害者やゆーねん。」

心底面白くないというように先ほどの上機嫌な口調は消えうせ、声のトーンが下がっている。

「それが解らないのでしよう、彼等には。何だかんだ言つて自己中心的な人物しかいませんから紫藤家の血族には。母も父に裏切られた悔しさで貴方の育児を放り投げて酒に溺れて死にましたから・・・」

いまだに何故あの父を見捨てなかったのか解らない。他に女も子供も作られても何故愛し続けたのが解らない。そんなに魅力のある男には見えないのだから。

もしかすれば引き止めていたのは国会議員の妻という地位と良い暮らしだろうか？それとも母の女としてのプライドだろうか？

どれほど考えてもこれに関しては答えがでそうになかった。

「にしても何であの糞親父は来るんかねえ？見捨てた女ちゃうんかいな？」

「表では上手く仮面被つて生きてますからね、自分の風評悪くなることはかなり追い詰められた状態でしかしませんよ。裏ではバレない範囲で良くやってるみたいですけど。まあ、元とはいえ妻だった人の七回忌に出席しないことはしないでしよう。狸ですからねあの

人は……。信じるだけ馬鹿をみますよ。」

「ワイらは支えあつてこーや。周りは敵だらけ、信じられる奴なんておらんねんから。」

「私が貴方を捨てることはありませんよ。あなたは弟でもあり息子のような存在でもあるんですから……。」

今まで自分の手で育ててきたのだ。父に指図されることも無くただ自分の意思で、グレた時もあったがそれでも見捨てることなく大事に育て続けてきた存在を今更捨てられるわけが無い。

「支えられっぱなしの……。ワイは。いつか……。返さなあかんなあ……。」

眠くなつてきているのかだんだんと声が小さくなつてきている。

「眠りなさい。ちゃんと着いたら起こしてあげますから。」

そんな弟の様子を微笑ましそうに見ながら言う。

「ああ……。ありがとな……。んじゃ……。おやすみ。」

「ええ、お休みなさい。」

車のエンジン音と周りの車の音を抜けば弟の寝息ぐらいしか聞こえない。

少しして完全に寝たと確信できてから暖かい微笑を浮かべて秀治の顔を見る。そして・・・

「返さなければならぬのはこちらの方ですよ・・・、あなたの存在で私がどれだけ救われているか・・・、あなたが居なければ私は父の操り人形のままだったかもしれないんですから・・・。」

とエンジン音にすらかき消されるほどの小さな声でそう呟いた。

「起きなさい秀治、着きましたよ。」

体が揺すぶられる感覚に合わせて声が聞こえてくる。

「ん・・・、ああ・・・、もう着いたんか・・・。」

まだ重いマブタをどうにか開いて眼を擦りながら背もたれごと体を起こして多少狭いながらも車内で体をグツと伸ばす、

「くうあー・・・、ん！！よう寝た気がする。体が凝り固まってしやーないの。」

体のあちこちの骨からゴキゴキという音が聞こえてくる。あまり無茶な体勢で寝た覚えは無いので純粹に寝心地の悪い椅子で寝たのが原因だろう。

「ええ、とても良く眠っていましたよ、後10分で式が始まりますから早く行きますよ。」

そう言うのが早いかさっさと車から降りて傘を差して行ってしまった。

「はあ！？後10分！！？ってマジや！！えっ！？ていつか後1、2時間あたり余裕持できるよつに来たよな！？寝てる間になんてんや！？？」

慌てて腕時計を確認して嘘でないことが解りさらに慌てることになつてしまつたが、ワタワタとしつとも寝ている間に着崩れた衣服をすぐに整えてから持つてきていた傘を引つ掴んで車を降りるあたりにまだ余裕が見える。

「ちょー！！まっつてやコー兄！！」

扉を勢いよく閉めて少し転びそうになりながらも先にいく兄の後を追うように着いて行く。

後ろの車から聞こえてきた電子音はおそらく兄が遠隔操作でカギを掛けたのだろう。

しかし何故こうも時間が飛んでいるのか？新車のスタンド使いが襲来でもしたか？など馬鹿なことを考えているうちに式場に到着した。

「遅かつたな浩一、あと少しで始まる、連いてこい。」

よくよく聞き覚えのある声だったので意味の無い思考を止めて嫌々ながら声のした方を見てみると、我等が父である紫藤一郎がそこにいた。

あいかわらず老けている、30後半にはすでに頭が禿げて、腹も膨れてそこらのおっさんのような外見になっていたというのは紫藤家の不思議の一つだ。

これでも昔の写真は誰？と言えるほどにはカッコいいのだから始末に終えない。母親似の我等兄弟ではあるがそれが遺伝してないかどうか戦々恐々しているのは兄弟の秘密だ。

実は、最近兄が頭の生え際を気にするようになってきたからもう駄目かもしれないと思ってるのは秀治だけの秘密だ。言ったらまた殴り合いの喧嘩になるのが眼に見える。

そしてあの時自分を見捨てた許してはならない存在である。息子の身柄と自分の地位を秤にかけて地位を選んだのだから絶対に許してはならない。

少しでもこちらへの気遣いがあればあの事だけは回避できたかもしれないのだから。

父は一議員として犯罪者どもに屈するわけにはいかなかったと言っているが、確かにそれは理解できる。父は社会ではかなり権力、そして影響力を持った人間だ。

右翼の大臣候補者・・・確かに屈するわけにはいかないだろう・・・、しかし自分の息子を人質にとられていた状態で挑発するような事を言い、あまつさえ出来た息子だから覚悟はできているというような事をカメラの前で言うのはどうだろうか？

自分を攫った人間が違ったならばあんな結果にはならなかっただろう・・・最悪殺されていたかもしれないが・・・いやそちらの方が当時の自分にとって良かったのかもしれない、そして父が挑発しなければ何ら事が起こることもなく何も知らず普通の状態で帰れただろう・・・。

運が悪かったとしか言えないのかもしれない、一つでも何か違う要因があれば変わったのかもしれないのだから・・・、それでもあの時の自分は父が助けてくれると信じて・・・裏切られた・・・。それだけは当ても今も自分にとっては覆しようのない事実なのだから。

結局、全て事が終わった後に警察が飛び込んできて犯人は逮捕されたのだが・・・、それが原因で人間不信になり誰も信じなくなったのも無理も無い話だ。

「父さん、お久しぶりですね。」

兄が愛想笑いを浮かべて父と握手を交わす。

「ああ、久しぶりだな。積もる話もあるだろうが、今は見ての通り時間がない。後にするぞ。」

そう言ってこちらには眼もくれずにさっさと奥へと進んでいった。

正直そちらのほうが自分としても有難い、あまり話していたとは思わないからだ。それは向こうとて同じ事だろう、負い目のある人間とは話していたくないものだ。

「さあ、秀治、そこで惚けてないで、私達も行きますよ、今回は時間が押しているので親族への挨拶巡りは私がしておきますからさっさといきなさい。」

兄もそう言って踵を返して奥へと向かって行った。何か引つかかるモノを感じつつも遅れたら何と言われるか分かったものではないので慌てて着いていく。

そして兄の姿が奥の部屋に消えて初めて何か引つかかっているモノが分かった。

「もっかして……、これだけ時間押してるのってワイに親戚回りさせんために遅らせたんか？」

そうだとしたらかなり兄に気を使わせたことになる。しかし何時もは連れていくのに今回に限り連れていかない理由が無い。

別に自分がいるのといないので時間が長くかかるわけでもないのだから。

そして寝る前に話していたことと関連づけて考えると、ワザとギリ

ギリにここに到着した理由にもなる。もしかしたら着いていたが起こさなかったのかもしれないが。

どちらにせよそうであればしばらく兄に頭が上がらない、聞いても確実にはぐらかされるか誤魔化されるだろうことは車の時の態度から察するに間違い無い。

「・・・はあ、ホンマに支えられてはつかやなあ、今も昔も・・・。それに比べてワイは何もしてやれんなあ、何時か返せたらええけど・・・。」

はてこれは親孝行ならぬ兄孝行か？と栓も無いことを考えながら続いて兄と父が入っていった部屋に入っていった。

何事も無く無事に母の七回忌も終了したその後解散し、途中で食事をして帰っているのだが、来た時とは決定的な違いがそこにはあった。

「昔に比べたら随分と運転が上手くなったものじゃないか。」

「え．．．、ええ、有難うございます。」

我等が父の紫藤一朗の存在である。さしものの兄も居心地が悪いのか返答の齒切れが悪い。

食事の際に何故ここにいるのか？と問えば

「電車とタクシーで来たから帰るのには時間がかかる、元から家に帰るつもりだったからな、それにお前達に大事な話がある。東京にとんぼ返りするわけにもいかんよ。」

とのこと、明日の仕事はいいのか？と問えば

「明日は特に用事を入れていない。強いて言えば憂国一心会本部に顔を出すとアポをとったぐらいか、何、地盤を更に固めておこうと思っただけだ。」

と返ってきた。それならそうと一報入れて貰いたいものだった。サプライズゲストが父だなんてどんな罰ゲームだろうか？

と不満に思いながら後部座席で眼を瞑っていると、

「そういえば秀治、お前、数ヶ月前に顔を合わせた時とは雰囲気が変わっているが・・・、何かあったのか？」

瞑っていた眼が驚愕で見開かれる。父親の前では今も昔もできるだけ感情を外に出さないで無表情を貫いてきたつもりだったのだが・・・、そんなに解りやすいものなのだろうか？

「何をそんなに驚いた顔をしている？お前程度の腹芸が見抜けなくて政界で幅を利かせられるわけがなからう？相手の雰囲気の違いなぞすぐに見抜けるわ。」

見た目はただのおっさんだがこれ以上ないほど有能だということを失念していた、目の前にいる父は狸なのだ。嫌いだからと言って侮っていい相手ではなかった。

・・・後、今後気をつけるからバックミラー越しであきれた顔でこっちを見るのを辞めてくれコー兄

「お前は私とは話したくないだろうから言わんでもいいがな。厄介ごとを起こさなければそれでよい。」

元からそれほど興味が無かったのかそれともこちらを氣遣ったのかさつさと前を向いてケータイを弄くりはじめる。

興味が無いなら何故話を振ってきたのだろうか？もしかしたらお前の考える事などお見通しだという警告だろうか？

「ところで父さん、私達に大事な話があるとのことでしたが……。一体何の話なんですか？」

ハンドルを回して角を曲がりながら兄が父に尋ねた。

「ん……、ああ……、それは家に帰ってから言おう。ここで話すような話ではないのでな。」

とはぐらかすような答えが返ってくるばかりであった。嫌な予感こそするが父がそう言っている以上これ以上とやかく言えども口を割ることはないだろう。

ポツポツとお互いの他愛の無い日常の話を交わしつつ、ついに我が家へと帰ってきた。

「……………すぐに私の部屋に来るようだ。」

そう言って父は車から降りて家の中へと消えていった。

「話っというとっただけど・・・、コー兄なんか解る？」

後部座席から身を乗り出して運転席に座る兄に話しかける。兄は顎に手をあて少しばかり考えてから

「恐らく・・・、ですが家のことではないでしょうか？いつもの裏の仕事の手伝いなら電話でもできますし、まず貴方を巻き込むわけが無い、何も出来ませんし。私と貴方の両方に関係のある重要な話と言つとこれが妥当かと思えます。」

と結論を出した。

「家のことねえ・・・、ワイにや元から関係の無い話やなあ、ワイ何も期待されとらんからなあ、アイツに・・・。」

「あの人は貴方が自分を憎んでいることを知ってますからね、そんな相手に家を継がせるほど馬鹿ではありませんよ。・・・、しかし今更何の話でしょうかね？」

兄が顎に手をあてながら首を傾げる。

「まあ、ここでアレコレ悩んでも答えはでんわな、んじゃ!! さっさと行くとしよか!! せやないとアイツ何言ってくるか解らんし。」

これ以上話し合っても結論は出ないと踏んで乗り出していた身を戻して車から降りて兄を待つ。

「……、確かにそうですね。では、行きましょか。」

兄もそれに同感だったのか、車から降りてカギを閉めて待っていた弟を促して家へと入っていった。

いつもは訪ねる事の無い父の部屋、兄は仕事の手伝いをする時に訪ねたり、掃除したりしているようだが、秀治とは全く縁の無い場所

であった。

兄が中で待っているはずの父に来た事を告げるためにドアをノックする。

「ただ今参りました。」

「入れ。」

中から短い返答が返って来たので二人並んで入室する。

「私達に話し……とは？」

早速兄が口火を切って話を促す、自分では父の相手をするには経験不足にも程があるので兄に任せるのは妥当な判断といえる。

「ふむ……、家の事についてだ。」

「それは紫藤家についてのことと解釈してよろしいでしょうか？」

「その通り、紫藤家の家督を誰が継ぐかと言うことだ……。」

その言葉に兄がピクリと体を反応させるが、幸い後ろを向いている父はその事に気がついていないようだった。

「家督……、というと誰にこの床主の地盤を継がせるか……ですか？」

平静を装ってはいるが長年一緒に暮らしてきた自分なら解る。兄の声が多少緊張している。

「鋭いな、まさにその話だ。」

「それで……、誰に継がせるのですか？」

恐らく兄だろう、長男で実力も申し分無い。とそう秀治は信じて疑わなかった。しかし父の口から出た答えは違った……。

「地盤は東京の和也に任せる、お前達は和也のサポートに徹しろ。」

とありえるはずのない答えだった。その言葉に兄弟揃って眼を見開いてから片や肩を落とし方や憤慨で体を震わし、顔を真っ赤にさせ一朗に喰いかかった。

「ちょっと待つてください!!!何故・・・、何故家を継ぐのが浩一兄さんでは無いのです!!!」

あまりにショックだったのか肩を落として呆けている兄に代わり待ったをかける。冗談にしては質が悪すぎる。自分も怒りで頭が上手く回っていない自覚はあるがこのまま何も言わずに流されるよりはるかにましだった。

「こいつより和也の方が才能がある。ただそれだけの話だ。お前に關しては最初から期待すらしていないから安心していいぞ。」

「私のことはどうでもいい!!!長男は浩一兄さんのはずだ!!!たったそれだけの理由でアイツに家督を譲るだど!?納得できるわけがないだろう!!!」

「くどいぞ、秀治、それに何を勘違いをしているか知らないが、私はお前達にお願いしに来たのではない、命令しに来たのだ。」

「ッ!お前はどこまでッ!!!」秀治い!!!「ガッ!?!」

余りの言い草に堪忍袋の緒が切れて父に殴りかかろうとした腕を横から跳んで来た兄に捕られて投げられる、受身こそ何とかとったも

のの不意の事で衝撃を逃しきれず呼吸が一瞬止まる。

「に、兄さん何を！？」いいんですよ、これで……。「……………え？」

背中に奔る痛みを無視してすぐさま飛び起きて兄に叫ぶが、自分の言葉に重ねられるようにして言われた兄の言葉が理解できずに怒りが急速に勢いを無くしていく。

「いいんですよ、これで……、前々からこうなるんじゃないかとは薄々感じていました……。私にとっては今更な話なんですよ。まあ、こつもスツパリと言われるとは思っていませんでしたが。」

兄が達観したような表情でそう語るのを見てそれが完全に本心からの言葉であると悟り父子とも絶句する。片や自分の考える事を前々から先読みされていたことに対して、片やよもや兄がそのようなことを考えていた事に驚愕して。

「それに……、昔は憧れていましたが……、でも今は国政に携わること何ら魅力を感じないのですよ。私は今の教師の仕事で満足しています。人に物事を教え導くこの職業に誇りを持っているんです。だから私は父に感謝しているんですよ。この職を私に与えてくれた父さんに……。」

とても晴れやかな顔をしてそう語った兄を見て、もしかしたら家督を継がなければならぬという可能性は逆に兄を苦しめていたのではないかと・・・ふとそう思った。

「ほう・・・、誇りを持つてか・・・、ハッハ！手の内に居ると思っていたが、何時の間にもやら手から離れていたというわけか・・・。よく私の目を誤魔化してこれたものだ。」

調子を取り戻したのか父は面白いモノを聞いたとでもいうようにカラカラと晒っている。

「操り糸は切れました、私はもう父さんの人形ではありません。私は紫藤浩一という一人の人間です。貴方が昔から一人の人間だったように、私も一人の人間なんです。何時までも思い通りに動く都合の良い人形だと思わないでください。」

多大な決意を眼に宿して父を見据えキツパリと言い切る。そのような眼で見据えられても何ら動じない父も流石と言えよう。

「その糸・・・、いつ切れた？」

未だに含み笑いをしつつ面白げな表情をして問いかけるがその眼だけはカケラ程度の笑いも含んではいなかった。

何か物を観察するような眼、そんな眼で自分の息子である浩一を見

ていた。

「完全に切れたのは今でしょね・・・、秀治の件以来少しずつ緩んではいきましたが、今回の話で吹っ切れさせて頂きました。これで私を縛るものは何も無い・・・。」

「それは私の言う事はもう聞かないということか？」

その問いに浩一はただ微笑をもって答えた。

「ふん・・・、分かっているならそれでいい、どちらにせよお前は私には逆らうことなぞできんだからな。これで話は終わりだ、ご苦労だったな帰っていいぞ。」

兄への興味が完全に失せたのか父は此方に背を向けて退室を促した。

「解りました。行きますよ秀治、何時まで呆けているつもりですか？」

先程から話に置いていかれて手持ち無沙汰な様子で立っていた秀治に声をかけて部屋から出て行った、それに追従しようとする父が思い出したかのように此方を向き声をかけた。

「まだあの件で私の事を恨んでいるのか？」

「・・・・・・・・・・、逆の立場に置かれたら貴方は私を許しますか？」

その言葉に先程まで胸に滾っていた激情が再び首をもたげかけるがそれを何とか押し殺して顔から表情を消してそう言った。

「ふ・・・・・・・・、愚問だったか、許せ。」

「・・・・・・・・・・それでは失礼しました。」

退室する前に一礼をしてから部屋から出ていった。

兄はすでに部屋に帰ったのか廊下には誰もいない、そんな人気の無い廊下を歩いて部屋に帰りつつ明日は道場の方に泊めてもらおうとそう決意した。

8話

ブラックコーヒーか塩を片手にご覧ください。

甘さ加減を間違えたかもしれませんが覚悟はいいですか？（作者は
書いてる途中胸焼けしかけました）
ではお楽しみください。

いつもと同じようで何かが違う帰り道、別に冴子がまたあの格好をしているわけではなく、秀治が「アクロバティック走法！」と言って曲芸染みた動きをしているわけではない。

普段と余り変わらないような表情をしていてどこかピリピリとしたイラついているような空気を発しながら自分の自転車を押している
秀治

何かを迷うような素振りを見せてはチラチラと隣で自転車を押しつつ自分の歩幅と合わせて歩いてくれている秀治に目をやりその度顔

を朱に染めて俯く冴子。

時折なぜ秀治がイラついている雰囲気を纏っているのか不思議に思つて首を捻つていたりもしている。

そんな今日はバレンタインデー、もてない男の嘆きが自室に響く日であり、恋多き乙女が好きな友人にチヨコを送る日である。

もてる男はチヨコを貰つて自分の人気の高さを改めて自覚させられる日でもある。

そんな状況が続く中そろそろいつも別れる2又の道が近くなつてきたのを見て冴子は意を決したのか迷いを捨て去るように2、3度頭を左右に振つてから

秀治の自転車の後ろの荷台に載せてあつた自分の鞆を手にとって中を探り始める。

秀治はさつきから何をやっているのかと多少の呆れともしかしたらという期待の視線を送っているがそれもしかたないことだろう。誰だつて隣に歩いている見知つた人間がいきなり頭をブンブンと振り始めればそれが気にならない訳がない。そして今日はバレンタインデーなのだ自分が好意を持っている女子が鞆を探り始めれば期待せざるおえない。

昔から親にさえチヨコを貰えなかつた秀治にとってこの日はちよつとしたコンプレックスなのだ、兄から貰っている分はあるがそれは男からなのでノーカウントである。

そしてようやく目当てのものが見つかつたのか冴子は鞆の中から何

かの袋を取り出ししていた。それを横目で見ていた秀治の目が期待で光った。

「秀治・・・、ちょっと、止まってくれないか？」

恥ずかしそうに目を左右に泳がせながら少し震えた声でそう冴子は言った。

「なんや？」

はやる気持ちを抑えて気だるそうに答えて自転車を停めて冴子と向き合うようにして立つ。

「・・・・・・気が付けばイラついていた心中が嘘のように治まっていた。それはそうだろうもしかししたら初めて女の子から、

それも好きな子からチョコレートを貰えるかもしれないのだ。この日自体が嫌いな秀治にとってこれほど良いことはない。

自分がそう思っていることを気取られまいと表情も普段どおりにしておく。

これ自体はさつきからやっていた事なので簡単だった。イラついた秀気は気取られてしまっていたがそれは秀治がまだまだ修行不足なだけの話だ。

師である兄はちょっとやそつとのことでは感情のブレを全く見せない、俳優になっても食っていけるだろうと思えるほどの芸達者だ。

洒落ではすまないことであれば取り乱すのだがその姿を秀治は見た

ことがなかった。

「あの・・・、何だ、秀治・・・これを・・・」

顔を真っ赤に染めながら冴子が秀治に差し出したのは一つの小さな箱だった。

それを無言で受け取って蓋を外して中身を確認する。期待で胸が高鳴っていく。

中に入っていたのは装飾はまだまだ拙いものの手作りだとわかるチョコレートが数個入っていた。

「これを・・・ワイにか？」

「ああ、もちろん。」

ちよつとした感動で声が震えそうになるがなんとか表に出さずにすんだ。

それを聞いた冴子は満面の笑みでコクリと頷いた。

「それでは・・・、頂きます。」

箱に入っていた中でも装飾のないトリュフチョコを摘んで口に入れる。

思っていたより容易く口の中で溶けて甘味が広がる。

「生チョコ・・・？」

「ああ、初めてだったから少々梃子摺ったが、母に教えてもらって何とかなった。どうだ・・・美味しいか？」

「ああ・・・、甘いものは好きやからな。美味しいよ。ん、今度ワイの手作りのケーキ作ったるわ。これでも菓子つくんのは得意やねんで？」

「フッフ、それは作った甲斐があったと言つものだ、楽しみにして待っているとするよ。」

「にしても初めてやなあ、こうして女の子からチョコレート貰うんは。」

はあく、と万感を込めたため息を吐いて箱に蓋をして自分の鞆の入っている前かごにそつと置く。気が付いたら口端が吊り上っていてだらしない笑みが顔に浮かんでいた。

冴子はその言葉を聞いて怪訝そうに眉をよせて小首を傾げていた。

「どしたん？んな不思議そうな顔して。」

「いや……、君はチョコレートは沢山貰っているだろうと思って
いたのだがな……。その……。あれだ君は、もてるだろう？」

「……………、貰ってへんよ、それにもとてもあらへん。」

「顔もまあまあ良ければ運動も出来て頭も悪いわけではない、性格
もいたって温厚な君がもてない？ふむ……。女子相手に何かやつ
たんじゃないだろうな？」

不思議そうだった顔が疑いの表情に変わったのを見て何かおかしな
嫌疑をかけられかけているのを確信してまだ言っていなかった過去
話を暴露することにした。

「怖がられとるんよ、これでもワイはここら一帯には狂犬で名が知
れ渡つとる不良やつてな、一年のころ暴れすぎたせいで誰も寄つて
けえへんようになってもうたんや。」

挨拶ぐらいのもんやなまともにしてくるもんは、まあそれも挨拶せ
んと無視してたら因縁つけられるやもせんと思つてのことやろうけ
どな……。」

案の定かなり驚いた表情をしてこちらを見ている。自分の見知った

人がかなりの悪だったと聞かされたのだ驚いて当然だろう。
そして少しの間何かを思案するような顔をして

「君が・・・不良か・・・、なんと言えばいいか・・・、そうだな
似合わない、うむこれだな、私からすれば君が不良なのは余りに不
似合いすぎる。

推測になるが、どうせ絡んできた不良を返り討ちにし続けていたら
不良の部類にいれられたんだろう？君は自分から理由なく手を出す
人間じゃないからな。」

と核心にとても近くて遠い答えを返してきた。どうやら自分から絡
まれにいつていたことは流石にわからなかったようだ。だがそれを抜き
にしてもそれは秀治の意表を突くには十分すぎた。

「・・・・・・・・、なんでそこまでワイを信用するかねえ・・・・・・・・。」

「半年もこうして付き合ってきたんだ、人となりぐらいは私でもわ
かるさ。初めて出会った頃と比べればかなり丸くなってる気もする
がな、

あの時の君は本当に飢えた獣のような目をしていたからなあ。」

頭をガシガシと掻いて苦笑を顔に浮かべながらぼやく様に言つとク
スクスと口に手を当てて可笑しそうに笑いながらそう言った。

「あの時つくとあれか？お前がワイに勘違いして襲い掛かってきてガチで戦いあつた時のことか？」

「確かにその時の話だが・・・、その言い方はないだろう？私の体目当てで襲つた男を庇つたんだ、誤解しないわけがないだろう。」

ムツと脹れた顔をして好きで襲つたわけじゃないと否定してくる。

「まあ、状況的にそれほど間違つちやないやろ？」

「ムウ・・・。」

カラカラと笑つてからかうようにいうとついに黙りこくってしまった。ちよつとからかいすぎたかと思つて話題を少しだけ変えることにする。

「あゝ、まあ、それは置いといてや、そんなこと思つてる奴によおあん時ケータイの番号なんぞ教えたの？」

「あれは君が悪人ではないと確信したのと話していて面白い人だったからな、それに私が止めを刺してしまうのを止めてくれただろう、恩には報いなければ駄目だろう？だからだよ、それで問いを返すようで悪いが、君こそどうしてあの時私のケータイ番号を聞いてきた

んだ？」

その意図を察したのか未だにムツとした顔をしているがこちらの話に乗ってきてくれた。目を閉じてその時のことを思い出す。

「ん〜？そりやなあ、うんお前が思ってた飢えた獣っていう表現はあながち間違っちゃないねんな。あん時のワイは自分と対等に戦えるような奴がおらんことに不満感じとったからなあ。

不良狩りでも始めるか・・・、とでも思っとなところでお前と会ってんや。

ワイと同等の戦いが出来てしかもめっちゃ可愛いっていうより美人やなお前の場合そんな女の子が現れてみ？そんなま逃がす訳ないやろ？」

鮮明に思い出したところでクツクツと笑いながら目を開けて目の前の彼女を見ると顔を赤くして目をそらしている冴子がいた。どうやら先ほどのセリフに照れているようだ。

本当に大人びているのに一々反応が可愛い奴だと思う。とりあへずはこんな時はさらに弄くって遊んだほうが楽しいのであえて気がついていないフリをして追撃することにする。

「どしたん？そんな顔赤くして？」

「・・・い、いや、なんでも、ない・・・。」

今にも消え入りそうな声でそう言ってくる。顔も真っ赤にしたままだ。すこし悪戯心が悪乗りしてしまい俯いてしまった彼女との間をスツと詰める。

こちらが動いた気配を感じたのか顔を上げて確認しようとするがもう遅い、もともとそんなに離れてはいないので、そうして一足一刀よりさらに近いお互いの体が触れ合ってしまったいそうな程近づいて彼女の顔に自分の顔を近づける。

冴子はパニックに陥っているのか顔を先ほどより赤く、湯気でもでそうなほど赤くして目をすごい速さで泳がせている。

そんな彼女の後頭部に手をやって此方に引き寄せるとビクリと体を一瞬硬直させた後、目をゆっくりと閉じた。手を当てている所から彼女の体が震えていることがわかる。

本来はほんの悪戯で額同士をくっつけて熱を測る真似事をしてからかうつもりだったが、すでにそんな余裕は秀治には存在していなかった。

顔を朱に染めて目を閉じてこちらに首を上げて見上げている姿を間近に見てしまいその場に流れる空気に喰われたのだ。

意識し始めると今度はこちらの顔にも血が上って顔が赤くなっているのが知覚できた。おそらく冴子に負けず劣らず赤くなっていることだろう。

胸の鼓動が煩いほど高鳴る。彼女の唇から目が離せない。はたして

彼女は触れている手から自分も震えていることがわかってるだろうか？

そんな出来心で起こした行動は思惑とは違う結果を呼びそれはもう止まれないところまで来てしまっていた。

頭に当てていた手を彼女の顔を撫でるように移動させアゴをクツと上げる。頭に血が昇りすぎてクラクラする。

そしてそのまま彼女に顔を近づけて、その唇を奪った。それはただの軽く触れるようなキス、唇が離れたのがわかると冴子は閉じていた目をゆっくりと開いた。

上気して朱に染まった頬も上目づかいでこちらを見る潤んだ瞳も何もかもが自分を魅了してやまない。

ゴクリ・・・、と自分の喉から音になる。どうやら無意識に唾を飲み込んでしまっていたらしい。しかし今はそんなことはどうだっていい。

冴子がこちらを潤んだ瞳で見上げる目と自分の視線が絡み合う。そして今度はどちらともなく顔を近づけてゆき、

唇が触れた瞬間自分は荒々しく冴子を抱きすくめて覆いかぶさるような体勢でキスをしていた。冴子が驚いて腕の中で身を擦じらせるが逃がさないと言う代わりにさらに力強く抱きしめる。

今度は触れるだけではなくしたを入れたディープキス、初めは目をキョドつかせて動揺を顕わにしていた冴子だったが、舌が絡めとられ唇が吸われるにつれ脳が熱病に犯されたかのごとくボンヤリとしてくる。

気がつけば自分から秀治の首に抱きつくように手をまわしていた。

その状態でいったい何秒いや、何十秒たっただろうか？

秀治は狂ったように律動を刻む自分の心臓を煩いと思いつつ彼女の口の中を蹂躪する。時に激しく時に優しく、時に彼女のたどたどしい舌使いにまかせながら。

未だに残っている理性をかき集めて、胸からフツフツと湧き出す黒い欲望を抑え込み続ける。

脳裏から自分の声で喰らってしまえ、犯してしまえと聞こえてくる。もちろんそんなことができるはずがない。自分にとって彼女はただの女ではないのだから。

その考えに行き着いた瞬間脳に氷柱を直接ぶち込まれたかのごとく急激に冷えて頭と言わず全身から血の気が引いていく。

今・・・、何を考えた？特別だから犯さない？なんだそれは・・・、特別じゃなかったら犯していると言っているみたいではないか。自分はその下衆と同類だったのか？

今まで夢中で絡めあっていた舌の動きが止まり今まで彼女の口の中に伸ばしていた舌が引っ込んでいく。唇が離れて彼女との間に銀の橋が架かるがそれを気にしている余裕なんてなかった。

冴子は唇が離れて少ししてから秀治の首にまわしていた手を離して今度は抱きつくように彼の背中に回して胸板に頭を預けて耳を澄ませる。

早鐘のように高鳴っている自分と彼の心音が今は心地が良かった。

彼にしてはあまりに強引だったとは思うが満更でもない、むしろ本懐であった。

今更ながら自分の足に力が全く入らないことに気づく、どうやら先ほどのキスで腰が抜けていたらしい。今立っていられるのは秀治が確りと抱きしめていてくれるからだろう。

そのことにちよつとした充足感を感じながら今度は彼の厚いとは言えない胸板に顔を埋める。

服から微かに漂う洗剤の香りと今日の部活で掻いたものだろうちよつとした汗の臭い、これが男の子の香りというものだろうか？

そこでふと気がつく、・・・・・・彼は何故ここまでキスが上手いのだろうか？と

やはり先ほどの女の子にモテないというのは嘘では無いのだろうか？・・・と

一度疑念を抱けばそれはさらに加速し歯止めが効かなくなっていく。普段の彼女であれば一笑に伏していただろうが、今は先ほどの余韻で頭がまだ上手く回っていないかった。

秀治のキスが上手い理由はただサクランボの緒を軽く結べるほど器用であっただけである・・・がそんな事は知らない彼女の妄想は悪い方向へと突き進んでいく。

それはあたかも無人の野を行くがごとくの速さであった。

女であれど悪いと言われている者に全員が興味を持たない訳ではない、むしろ肝試しとして近づく女はいるんじゃないか？そんな女と付き合っているからキスが上手いんじゃないか？

これは一度問いたださねばなるまいと胸板に顔を押し付けながら心に決める。

冴子の独占欲は人より少し強い程度であるが、好きな男を知らずと誰かと共有しているなど考えられることではなかった。

背中にまわしていた手にギュっとならからを込めて毅然とした表情で彼の顔を見るがその瞳は不安に揺れていた、

それはもしこの想像が本当だったならば私はどうすればいいという不安の表れでもあった。

しかし、その心配は彼の顔を見て吹き飛ぶことになった。顔を蒼白にして目が一所に留まらず不安げに、何かを振り払うようにあちこちへと揺らしている彼の顔があったからだ。

「秀……次？」

いつもは見ない彼の余裕の全く感じられない表情、何かに追い詰められているような顔を見て不安げなそしてか細い声で彼を呼びかける。しかし彼はそれに気づいた様子はない。

彼の背中にまわしていた手の片方を放して彼の顔に手を当てる。

手を当てられた秀治はビクリと身を震わせて今気がついたかのように自分を不安げに見上げていた冴子に目を合わせる。

冴子にはそのときの彼の顔が前に鑑でみた自分の顔と重なって見えた。

何か認めたくないことがあるが認めるしかない、しかしそれを認めてしまえば何か壊れる、そんな迷いが現れている顔だった。

「一体どうしたんだ……？秀治、いきなり、その……、キ……キスしたかと思えば今度はそんな顔して、君にはそんな顔はして欲しくない、
……だからいつものようにどこか余裕を持ったふてぶてしい顔をしておいてくれ。」

秀治は自分の顔に当てられた手から伝わる心地よい暖かさが染み渡って体中から一時的に失われていた熱が戻ってきているような気がした。

彼女にまた気を使わせてしまったなと反省して無理やりいつも通りの表情を顔に貼り付けるてさらに誤魔化すように笑みをつかべる。

「あ、ああ、ごめんな、いやあ、急にキスしてもうたから嫌われたんじゃないかとおも「嘘だな。」！！?。」

「なあ秀治・・・、さつきも言ったが私たちは付き合い始めてもう半年だ。何かを君が私に隠しているのは知っている、君が言うまで待つつもりだがな。」

しかし君が何を抱え込んでいようと私が君を好いているというのは変わらないよ。

「・・・だから頼ってくれ、今君が何を悩んでいるのかも言うてくれなければ私には解らない。それとも私はそんなに頼りないように見えるか?」

「まさか、ただこれは自分でケリつけなあかん問題やからな。まあ、自分自身の問題やねんから何とかしてみせるわ。心配してくれてありがとうがとな。」

その顔には先ほどの動揺はもう見られなかった。

もし自分と同じような葛藤であれば確かに他人が関与できる問題ではないので素直に手を退くことにする。安心したところで先程の疑

問がまたかま首をもたげてくる。

「そうか、なら私はもう何も言うまい。ところで・・・だ、先程のキスでどうやら腰が抜けてしまったようだな？一人で立つてられないんだ家まで送ってくれればありがたいんだが。」

「ん？ああ、それくらいならまかせとけや。」

そう答えると彼女は満面の笑みを浮かべてこちらを見た。綺麗だなと思うが背中に奔るこの悪寒は何だろうか？

顔に当てられていた手が撫でるように動いて頬に添えられる。自分と同じく剣道をやっているが自分とは違い女の子らしい柔らかな指の感触がなかなか心地よい。

やはり先程から背筋がゾクゾクする、風邪でも引いたのだろうか？

「それと・・・だ、なんであんなにキスが上手い！！理由いかによってはただじゃおかんぞ！！」

多少涙目で訴えてくるすがたはとてもいじらしくて魅力的だがそれどころではなかった、なぜなら頬に感じていた心地よさが激痛へと変わったからだ。

どうやら手を頬に移動させたのはこのためだったらしい。

「いつ！？いふあい！？ひゃんのはなひゃ！！ぐあ！？」

冴子の腰と頭にまわしていた手を驚いて放してしまい、体が崩れ落ちそうになった彼女は咄嗟に手にグツと力を入れて倒れまいとするそしてそれを見た秀治は慌てて腕の力だけで立っている彼女を掬い上げるように抱きかかえなおす。腰が抜けた云々は本当のことだったらしい。

しかし慌てて抱きかかえなおした体勢は自分の両手を塞いでしまうものだった。

人それをお姫様だつこという。

「さっきのモテないって話は嘘じゃないだろうな!? 本当はモテていて女の子をとつかえひつかえしてるなんてことないよな!」

ギリギリと頬を抓る力が強くなっていく。冴子はすでに涙目で声も裏返りかけているがこっちだって泣きそうだった、主に頬の痛さとそんな人間に見られた心の痛さで。

「ふっ!! ふそひゃなひ!! ふそひゃないひゃらあ!!」

「そういえば初めてのデートの時もやたらと落ち着いていたな!! やはり手馴れているのか!? どうなんだ秀治い!!」

聞いちゃいねえ、そんな言葉が秀治の脳裏によぎった。

その言葉に合わせるように今まで背中を掴んでいた左手が右頬に伸びてそれを引っ張る。みよーんと音がしそうなほど左右に頬が引か

れて伸びる。

「いふあい!!いふあい!!ひよ!!マヒひやめ!!モへへまへんひやらあ!!ひやれほほふひあつへまふえんふあらあ!!」

身に全く覚えの無い嫌疑だったがこの嫌疑だけは何が何でも晴らしておかなければならない。父のような人間と同じようにみられているなんて不本意であり不名誉極まりない。

それも自分が愛しいと思っっている相手であればなお更だ。

「本当だな!?嘘じゃないな!?信じていいんだな!!.....
それにしてもよく伸びるな。」

頬がミョーンミョーンと引っ張っては戻され引っ張っては戻されと忙しい。

「ひひよはにひまんのもひははへはほふんやなひ!!はっ、ほら!!
!なひへにはへはへよほよほまへんな!!ひよひゅーはらはほんへふやほほはえ!!」

グニグニと頬を弄くられては上手く喋れたものではない。
ようやくまともはこちらの話の聞く気になったのか最後に一際両側に引っ張られてから解放された。

ちなみに先程から二人の顔はとても近い位置にある秀治が冴子をお姫様抱っこしている状態であるからそれは当然のことだ。

つまりはさつきから冴子の手から出来るだけ体を反らして逃げていたのを元に戻して向かい合えばどうなるか、

それは強制的に「もうあなたしかみえない」という状態になるということだった。

「うつ……あ……。」

「……っ!!」

それは互いの吐息が顔にかかってしまうほど近い距離

図らずも先程の激しいキスが双方の脳裏にフラッシュバックし、二人とも顔を茹でたタコの如く赤くする。

さつきは二人とも霧囲気に流されていてその場の空気に酔っていた気がする、しかし互いに素面に戻っている今は余り耐えられるものではなかった。

「で……、どうなんだ？」

「………何が？」

「さっきの話だ、本当に彼女はいないんだな？」

「彼女どころか友達すらおらんって返しとこか。」

顔と目を合わせない会話、いや詳しく言えば冴子は真っ直ぐに秀治を見つめているが秀治が前を向いて顔を合わせようとしないだけであった。

「……………、嘘だったら後で酷いぞ？」

「意外とシツコイやっちな、小学校前半はいじめっ子、後半は人間不信、中1ん頃は荒くれ者で今は不良も避けて通る危険人物、もう女といわず男もよってこんわ。クラスでもちよいとした腫れ物扱いやしな。」

今思い返してみても碌な人生を歩いていないなと実感して目を瞑って諦めたようにため息を吐いて顔を2、3度左右に振る。

「……………、そうか疑ってすまなかったな。」

頭も冷えてきた所で先程の自分はどうかしていたと思ひ謝る。抓っていた頬を今度は優しく撫でる。

「はつきり言うてな、ワイがお前に内緒で他の女に手えだすことはまずないわ、ワイがここまで変われたんは兄さんのお蔭でもあるけど、大半はな冴子お前と出会えたからや。」

あん時お前と出会ってなかったら中1の頃と同じになってたやもしれんかったからなそれ程あん時のワイは不安定やったんや。

それを変えてくれたお前のことを感謝してるし大事にも思ってる。だから裏切るような真似は絶対にせえへんよ。」

無意識に手に力が入る。その事に気づいた冴子が少し顔を顰めて身を振るが力は強くなっていくばかりだった。

「ん、秀治」

「だから・・・、なんや？」

「ちよつと痛い。」

自分の掴まれている胸の部分に目をやって軽く非難するように言う。

「おつとすまん無意識で力入れとつたわ。」

慌てて手から力を抜く、痣になってなければいいのだが……。

「ところで、だ先程の私の言葉を覚えているか？」

ようやくこちらを向いた顔を両の手で固定してさらに身をよせる。互いの鼻先が触れ合いそんな程の距離10センチも離れていないだろう。

「あ・・・ああ、頼りにしろ云々か？そりゃ覚えとるけどさ。それがどうしたよ？」

いきなりのことで驚いたのか目をキョドつかせて怯んだように言う。それでも視線がチラチラと唇に行っている辺り男の子なのだなぁと感じる。

「まだ君の返事を聞いていない。」

「へ？」

なんとも間の抜けた声で返してくれるものだった。何のことが本気でわかっていないのだろう。キョドつかせていた目をピタリと止めてじつとこちらを見つめている。

「私は君のことが好きだと言った。それについてのはっきりとした

答えを私は聞いていない。」

答えはわかりきっていても自分は告白したのに相手がそれに答えていないというのは気に入らない。すこし拗ねたような口調になってしまったが仕方ない。本当に不満なのだから。

それを聞いた秀治は得心がいったのか「あゝ。」と言って首をコクコクと振った後ニヤリと悪戯小僧のような笑みを浮かべてスツと顔をこちらに寄せて啄ばむようなキスをした。

「これが返事ってことで。」

顔を赤くして明後日の方向を向いてそう言って来るが私はこみ上げてくる可笑しさに耐えるのに必死だった。

「ククツ、似合っていないなあ秀治、気障なセリフと行動は君に全く似合わない。」

「一度やってみたかったことやったんや。似合ってるのは自覚しとよ。」

拗ねた口調で鼻をフンと鳴らしている。まだまだ子供っぽいところがあつて弄くりがいもあれば可愛がりがいもある奴だなと思う。

基本こいつは素直なのだ。いい意味でも悪い意味でも、昔から人付き合いが余りなかったせいに変に擦れていない。故にこちらが信頼すれば信頼で返してくれる鑑のような奴だ。

なるほどこいつの兄にあたる人は本当に育てがいがあっただろう。兄の話をしていておきのこいつの顔をみればどれほど懐いているか解るといふものだ。本当に大事に育ててきたんだらう。

大きな子犬・・・、惚気た補正もあるかもしれないが例えるならそんな奴だった。

狂犬とは上手い名前をつけたものだと言もしらない者に感嘆する。

「どしたん？急に黙り込んで？」

首をコテンと倒して不思議そうにこちらを覗き込んでくる。さっきの例えと相まって頭に生えた犬耳がピコピコと動いているのが見えるようだ。

「いやいや何でもないよ。それにしても全て君からというのもなんだな。」

「なに？・・・むうっ!？」

いきなり顔を近づけてきたことに驚いた秀治が顔を反らそうとするがそれを許さじと両手でまた頭を固定する。そして驚いて目を見開いている彼に私はキスをした。それは最初に交わされた触れるだけのキス。そして唇を離してもなお呆然としている彼に

「責任は・・・、とってくれるよね？」

と微笑みながら言うと、彼は口端を歪めた不敵な笑みを浮かべて

「もちろん喜んでとらせてもらう。」

と確約した。

それから何かが急激に変わったということはない。ただいつも一緒に歩く帰り道での二人の幅が無くなったただそれだけの話。

9話

神聖な空気の流れる道場の中、いつもそこでは門下生や師範代が切磋琢磨し腕を磨きあっているのだが今日は剣道着を身に纏った男女が向かい合って座っているだけであった。

「私以外誰もいない日に家に呼べとは……、また大胆な頼みごとをしたものだな、誤解されてもしかたがないぞ？」

「お前だけにしか話せんことがあつてな、誰にも聞かれなくなかつたんよ、変な頼みごととしてすまんかつたな。」

「私と君の仲だろう？これくらいはどうとでもないさ、それで？話したいこととはなんだ？重要なことなんだろう？」

「そやな……、まずあん時以降かなり進んでもうたワイ等の関係や、もつと段階踏んで進めるつもりやったからなあ、っと、勘違いすんなよ？別にあん時言ったことを反故するっていうわけやない。」

ピクリと眉を動かした冴子を見て誤解しないように言い含める

「それで……、それがどうしたというんだ？」

「お前に言っていない事、全部言おうと思ってな、関係進めるならこれだけは言つとかなあかんとは思つとつたんや。」

長い息を吐きながら軽く上を見上げて言う。二人きりになりたかつたのはこれが理由だ、いずれ話してその上で受け入れられたのなら付き合うつもりだった。

しかしそれが崩れてしまった今、言わないという選択はない、それは彼女に対する裏切りにもなる。自分自身そんな卑怯な真似はしたくなかつた。

「ほう……？ようやく言ってくれる気になつたのか。」

「まあ……な、ワイと付き合つ以上、言わへんわけにはいかんもんや、失望したなら振つてくれてもええよ。」

緊張で喉が渴いてきているのを感じ来る途中の自販機で買ったミネラルウォーターでソレを潤す。

「ワイが昔、狂犬つて名前の不良やつたことは言つたな？あん時お前にいつてたことは……、まあ、ある意味正しい……でもな、それには続き……、いやまだ足りひん部分があつてな……。」

「……………、君が不良を返り討ちにしていた云々か？」

その時のことを思い出すように冴子は顎に手を当てて少し考えた後そう言った。

「それや、確かに返り討ちしかしてへんかった……………、でもな、それはワイから襲われに行つてたつていう点が抜けとんねん。」

あん時のワイは他人と本気でやりあう楽しみにドツプりと浸かつてもうてな、返り討ちにした奴が連れてくる助っ人共々叩き潰しとつたわ……………」

天井を見上げ、ため息と共に思い出されるのは昔、自分が栄光の日々と言っていた、今となつては随分と色褪せてしまった懐かしい記憶、

二年もたつてないのに懐かしいと感じる自分を可笑しく感じて湧き上がる笑いの波を噛み殺しながら視線を下に落として目の前の彼女を見れば眉を上げて驚きこそ露わにしていたが何も言わずに黙つて耳を傾けていた。

「そんな日々も……………、まあ終わりは来るもんや、ある日、返り討ちにした不良の一人がヤクザ連れてきよつてな……………、氣い抜いたつもりはなかつたんやけど、

投げられたナイフ避けたつもりが……………、避け損ねて二の腕スツパリいかれてこのザマや。」

袖をめくり上げて今でも残っている傷跡を見せる、切られた箇所
の肉が醜く赤く腫れ上がっている。ソレを見た冴子は僅かに目を細め
たが何も言わずただ聞きに徹している。

「んで……、それでブチキレテ正気戻ったらそいつのナイフで太腿
刺して動けんようにして、返り血あびるほど一方的に蹂躪した後や
った……、ここまでは師匠……、まあお前の父親にも言ってることや。」

乾いてきた唇を湿らせるようと舌で舐めるが、口内もいつの間にか
カラカラになっていたことに気がつき水を呷るようにして飲んだ。

「師匠は、ソレの罪意識でワイが剣道習うんやめたと思っとなるよう
やけど……、それは違っんやな。」

一息ついて真っ直ぐ冴子の目を見つめる、ここが山場だ、今まで兄
にしか明かしたことのない自分の秘密だ。果たして彼女がこれを聞
いても受け入れてくれるだろうかという一抹の不安はある。

しかしそれ以上にきつと大丈夫だという自信の方が強かった……、
彼女と自分は根底で似ているのだから否定すれば自己否定にも繋が
る、果たして自分に敵しい彼女がそうするだろうか？

こんな浅ましいことを考えながら告白する自分に嫌気が差すがこうでも思っていないければ怖くて言えない、言うことができない。

「ワイはな、そんな時の血まみれのソイツ見て・・・晒ってたんよ無意識で楽しそうに声上げてな、そう、ワイは楽しく感じとったんよその行為自体を、

まだ正気には戻ってなかったのやもせん、だけどなそんな時に紫藤秀治は他者を踏み躪ることに愉しみを感ずる人間やと自覚した。ハッ！！自分自身は親父の事も言えんど外道やったつちゆうわけや！！」

自嘲の笑みを浮かべながら両手を広げ万感を込めて叫んだ。あの時落ちぶれていた自分を兄が認め、救ったからこそ、それ以上墮ちずにすんだ。

外の世界では冷遇されようと小さな自分の世界で自分の全てを認め、飲み干し、愛してくれた存在がいたからこそ、それ以上墮ちることなく上がってくる事ができた。そのことを思い出すだけでも涙が出そうになる。

現に今話している最中でも感極まって泣いてしまいそうだった。

「まあ、その話が広まってから誰もワイに近づかんようになった、当たり前やなこんな危ない奴に近づく阿呆はおらんわ。兄さんが必死にワイを支えてくれて二年なる頃には前より人間らしくなったよ、それでも……、人間は一度覚えた快樂の味は忘れへんもんや、お前と会う頃には今度は自分から狩りにいこうかって考えるほど不安定になっとなった。部活連中は相手にならん上まず寄ってこない、大会予選でも弱い奴しかおらんかった……」。

自分が遠慮なく力振るっても壊れへん存在が欲しかった……。」

「そんな中、私に会った……か。」

再度水を飲もうと手を伸ばしたが冴子がそのペットボトルを掴み取り中身を少し飲んでから袖で口を拭き自分の言葉に続けるようにそういった。そのことに多少驚きながらも返されたソレを飲み唇を濡らす。

「まあ……、そやな。あん時はホンマに嬉しかった……、昔から求めとったもんが転がり込んできた気がしてた。飢えた獣……、言っ
たもんやわ……、
ワイはな冴子……、あん時お前を極上のエモノとしか見てなかった
……。」

冴子は黙したまま何も語らずただ話に耳を傾けているだけだ、その表情からは何も読み取れるものはなかった。

「そう、ようやく自分と同じ奴と巡り合えた思った……、あん時止めさすんをワイが止めたんは、お前に落ちぶれてほしくなかったからや、一度ワイが沈んでみたいに……、
会ってそうそう、そいつが沈んだら面白くもなんともないやろ？」

「あの時私に言ってくれた言葉は嘘だったということか？」

キスの時に言っていたことだろう、しかしそれはあの時の自分にとって別段重要なことではなかった。

「いや、判断基準の一つではあったよ……、でもあん時は兄と同様とまではいわんが、女にあんまり興味なかってな。欲情もできるいい女やったら抱きたいとも思う、だけどそれだけや……、それ以上思うことは何も無い、己の欲を満たすだけの存在程度にしか思っただけだった。昔攫われた時に色々あつてな、女は嫌いだったんよ。

普通に接することはできる、付き合うこともできたやろう、でも心から思うことはまず無かったやろな。」

今までの話を聞いてももっと騒ぎ立ててもいいはずなのに静かに話を聞いてくれている彼女に感謝の念を込めて真っ直ぐ眼を見つめる。

「初デートの時でも本気で楽しかった！！初めはただのエモノとしか思っただけだったのに、

お前はワイを戦わんでも満たし続けてくれとった、初めての経験やっただよお前と過ごした時の全てが新鮮やった……、気がついたら本気でお前のことが好きになっただ……大事やと思えとった……。

今にも胸がつまりそうなほど熱い感情が膨れ上がってきている、昔の自分が持つてなかった物、彼女が自分に与えてくれたものだ。感

謝してもしたりない。

「だからこそ！今こうして全て晒して正面からお前に紫藤秀治という存在を叩きつけとる！お前の前では自分を偽りたくないか……、嘘は吐きたくないから……。」
話はこれで終わりや……、返答を……聞かせてくれ。」

居住まいを正して彼女の眼をまっすぐに見つめる、胸のうちに秘めていたモノはほとんど吐き出した。後は、彼女がどう答えを出すか……だ。
静かに聞いていた彼女はペットボトルから水を飲みソレを自分の脇に置いたあと厳しい表情でこちらを見据えた。

「一つ聞きたい……。」

「なんや……？」

「君が今言ったこと全て、嘘偽りは無いな？」

「無い。」

「そうか……それなら私から言いつことは無い、よく言ってくれたな……。」

正直罵倒されるものだと思っていた分意外すぎて唾然とした表情で彼女の顔を見つめてしまう。果たして彼女は本当に自分の話を聞いていたのだろうかという疑念さえわいてくる。

「なんという顔をしているのだ君は、私は内容がどうあれ、君が今まで隠していたことを教えてくれて嬉しかったよ……確かに気軽に言えるような内容でもないこともわかった。しかし言ってくれなければ、私はいずれ君を失望していただろう、私がそんなに信用ならないか……とな。」

そう言っただけ残りも少なくなっていた水を全て飲み干して空になったそれを元の場所に戻した。

「本性を隠していたことが悪いとは言わないさ、それを言ってしまうえば私とて同じことだ。先ほどの話を聞いて思ったがなるほど君と私は根本の部分で似ているのだろう、私も君と出会った夜は愉しんでいた……、自分の力を惜しみなく振るえる明確な敵を得られたことに……、それを自覚したときには悔やんだよ、君に止められなければ殺めてしまっていたかもしれない、そう思うと怖くてな……。」

「私は君を受け入れよう、君がとうに私の本性をかぎとって受け入れていたようにな。」

「そっか・・・それは「その上でまた一つ聞きたいことがある。」
・・・なんや？」

秀治が何かを言おうとするのを手で制して冴子は言葉を続けた。

「これはどうすれば治る？理由無く力に酔ってしまっ本質をどうすれば変えられる！！最近あの夜のような事がなく期待してしまっている自分がある！！私はどうすればいいのだ！！
教えてくれ・・・秀治・・・、私は、どうすれば変わることが出来る？」

彼女の慟哭が二人以外誰もいないガランとした道場に響く、最後は泣きそうな声になりながらこちらをすがるように見つめてきている。それを聞いて秀治は自分を悔いた、何故気がつかなかったのかと、

自分に厳しい彼女がそのことを気に病んでいないはずがなかったのだ。自分でさえ認めたくなかったのだから彼女がソレを認めるのにどれほど心を痛めただろうか？

彼女は自分とは違う繊細な14歳の少女なのだ、自分のような何も知ろうとしないガキではないのだ。

「・・・すまんけど、その答えはもってないわ。」

「……………何故だ？君は……………変わったのではないのか？」

「これに関しては耐えてるだけ、お前と似たようなもんや。」

「それでもいい、教えてくれ。私は……………もうそれすらもままならなくなってきたしまっている。どうすればいいか……………、自分ではわからないのだ……………」

「……………、ワイが耐えられとるのは死合いたい対象が変わることなくお前やからや。昔と違って分別はできるようになったからな……………、お前に嫌われたくもなかったし。」

それに一度ドッキリ漬かってもうたモンから言わせてもらった、これは治らん。不治の病に似たようなもんや、自覚してもうたが最後、どうかで出さんと精神を蝕む毒になってそれは気いつかんうちに肥大する。

ワイが兄さんの言葉すら破ろうかと思ってもうてたぐらいや、我慢するのは厳しくなってくる、結局上手く付き合ってくしかないんや。

「……………か。」

そう答えると彼女は絶望したように俯き何も言わなくなってしまうた。しかしこう言うしかない、これとは長い付き合いだからこそ分かる。

コレは欠陥に近いものなのだ、治すことができないもの、潰かりす

ぎればはみ出し者になり、我慢していればいつかは手に負えなくなる、そういうものだ。

俯いている彼女を見てもしかしたら何とかかなるかもしれないと思った。昔から、こいつと出会った時から願っていた事。

毒をもって毒を制するという言葉がある、毒が彼女を蝕むのならば・
・、自分がそれを制する毒になればいい、正直自分もいつかは我慢できなくなると思っていたから好都合だ。

彼女の手を負えなくなる前に自分にソレを吐き出させればいい、そう思って彼女にこう言葉をかけた。

「なあ、冴子・・・、お前、ワイを敵と思えるか？」

「何を言っている？」

顔を上げた彼女は本気で何が言いたいのかわからないらしく眉を八の字に寄せた怪訝な顔をしている。

「いや、思えるかやないな・・・、敵と思え一時でもええから。お前が遠慮なしに力振るう相手欲しいんやったらなつたる、こつちとしても望むところやしな。冴子、お前が納得いつてなかったあの夜の決着つけようやないか。」

言うのが早いか秀治は床に手を付いて立ち上がり足に奔る軽い痺れを無視して持ってきていた木刀を袋から抜き出し座ったままの彼女の眼前に突きつけた。

「……、それは君がただ私と戦いたいだけではないのか？それに君を敵と思えだど？出来るわけがないだろう。」

眼前に突きつけられているソレになんら臆することなく冴子は眉を寄せて首を鳴らしている秀治を睨み付ける。

「ふん、それでも本気は出せるやる？建前はええねん。我慢すんなや全部吐き出してまえや、全部受け止めた上で負かしたるわ。」

「そんなこと……」

「いゝや出来る、出来るはずや。一度戦い始めたら止まらん口やろ？それにお前がそんなこと思うようになった原因の一端はこっちにあるかもしれんからのお。」

反論しようとした冴子の言葉を遮り事情を聞いていた先ほどから思っていたことを言う、こと毒島冴子がそんな事を思うはずが無いのだ。出会った当初はそんな臭いは無かった、なら彼女を変えた原因はあるのだ。

「人は根っここそは余り変わらんよ。それこそ自分を根底から覆すような事情が有らん限りな、ただお前にはそんなは無かった。」

「根底から覆すか……、君と出会った時の強姦魔の件である可能性はないのか？」

「ハッ！そんなもん自分の根底を垣間見ただけやろうに、自覚してんだろ、オレ等はそんなもんだってな。」

「オレ等……？」

「おつと……、まあ、そんなことはないってことや、人は根底は余り変わらんがそれ以外は容易く変えることはできるってことや。それが意識的でも無意識でも関係なくな。」

つい興奮しすぎてしまい口調が変わったのを直す、先ほどの彼女の姿が多少昔の自分と被るところが有るために少し熱が入りすぎたようだ。

「お前とワイは根っこよう似てる所がある、無意識的にも影響は受けやすかったんやろ。ワイもお前と付き合い始めて大分変わってるよ、でもそれがワイだけやと思うか？」

変えた原因があるとすれば一つしかない、あの夜以降あってそれ以前に無いもの、つまりは紫藤秀治という存在だ。

「……、君と付き合っただけ私が変わったといたいのか？」

「その通り、付き合い始めた当初のお前やったらんなこと考えたか？いや考えすらつかんかった筈や。そんな発想できる奴なんてお前の周りにはここに一人しかおらんやろ？」

突きつけていた木刀を引き床に突き立て自分の胸を軽く指で叩く。

「ふっ……、確かに君しかいないな……、なるほど、この苦悩の原因は自分だと言いたいのか……、似てしまった所は恐らく……、なあ君は私と付き合っただけ変わったにの、それを教えてくれないか……？」

脇に置いてあった木刀を手を取って、ソレを杖にして立ち上がりこちらを静かな瞳で見つめそう尋ねた。

「ワイがお前に似たところねえ……、そうさな、お前のその自分を律する有り方……かな、お前のその有り方はワイには眩しく思えた、こっちはアレに溺れた身やからの。まあ、もともとが勝手すぎて、そこまで徹底した律し方はできひんかったけどな。」

アゴに手をやり少し考え込んでから答えを返す、結局自分は元々強

すぎた我を抑える程度にしか出来なかったが、彼女と出会わなければ抑えようとも思わなかった筈だ。それを聞いた彼女は少しだけ頬を緩ませて笑った。

「そうか……、私のこの性分にか、私は君のその自由さが羨ましいと思ったよ。私が知らない有り方だったからな、しかしそこまで自由に振舞うのは私自身が許さなかった……。」

お互いがお互いの目を見詰めて逸らすことなく腹の内を明かしあう。

「でも長い間付き合っただけでお前はワイに似て少しだけ自分に素直になった……か。」

「君は私に似て少し自分に厳しくなった。」

「しかしソレが悪いことかと言われれば……。」 「そう悪いことやないってか？」

切られた言葉を繋げるように秀治がその続きを言う。

「そういう事だ、恨む理由も無い者を敵に見れるほど血に飢えているわけではないよ。」

「そっか……」

「しかし、丁度私は実戦的な稽古をしてみたいと思っ
ていてな、その相手を探しているのだが……受けてくれるかな？」

「ん、そっか。」

流れるような動作で構えられた木刀を見て秀治は顔に穏やかな笑いを浮かべ静かに肯いてそれに応じた。

今まで流れていた穏やかな空気はいつの間にか消え去り代わりにあの夜と同じ空気が流れ始めていた。

「いいねえ、この空気……そうは思えへんか？」

「……」

今回はどうやら軽口に付き合う気は無いらしく返ってきたのは必勝の意思を灯した強い眼光だった。前回それで油断したところを襲われたのから学んだようだ。しかしその口元だけは軽く吊り上っていた。

秀治はそれを見ると満足そうに鼻で笑い肩を軽くすくめた。

瞬間彼女の体が視界から消える、どこに行ったかなど考えるまでも

ない下だ。

「フツ！！」

下からの逆風の一撃が迫り来るのを後ろに飛びのくことでギリギリ回避する。それを逃がすまいと追うように腹へと向かう刺突、体を捻りソレかわすが胴着の表面を木刀が掠めていく。

かわした時に体を回した勢いそのままに体を回し木刀を彼女の即頭部へと走らせる……が、彼女は身を屈めてそれをあつさり避けると前に泳いだ体そのままに秀治に肩から体当たりを喰らわせ、たたらを踏ませた。

「ハツ！！やりおる！！」

たたらを踏みながらも薙ぎ払うように放った胴狙いの横なぎを下から切り上げられて受け流される、相変わらずの馬鹿力とでも言おうか、いや昔より強くなっている打ち込みにたった一合交わしただけなのに冴子の手には軽い痺れが残っていた。体勢が大きく崩れた彼に止めの追撃をかけようとするも彼の笑ってこちらを見る顔を見て足を止める。

「なんや、けへんのか、来たら仕舞いにするつもりやったののに。

」

その崩れた体勢のまま体をピタリと止めかれは右手に持った木刀を下ろし体勢を戻した。どんな体勢であろうと何かしらの行動を起こせるのが彼だ、冴子は止めを刺したと思えば腹に蹴りを入れられていたことを忘れてはいなかった。

「今度はこっちから行かせてもらおう……防げよ。」

アレを使おうと木刀を腰だめに構え踏み込んだ刹那、空のペットボトルが顔に目掛けて飛んでくる、どうやら床に落ちていたソレを彼女が蹴り上げたらしい。

「つおお!?!」

踏み込んだ足そのままに上体を引き、ソレを上へと切りとばす。その隙を突くように彼女が木刀を自分に振り下ろそうとしているのを見て、無茶を承知で全身に力を入れ体勢を固定しそのまま振り上げた木刀を彼女のソレを目掛け振り下ろした。

木を叩く軽く乾いた音が響くが、彼の手にはほとんど手ごたえというものが無かった。彼女を見れば手から木刀が弾き落とされたにも関わらず何ら体勢も速度も落とすことなく踏み込もうとしている。それも良く知った歩法で……、

こちらが反応するのを最初から分かっ
ていて彼女が自ら木刀を手放
し肉弾戦に切り替えたことに
そして技を盗まれていたことを
理解し、そのことに驚愕して
数瞬動きが鈍ったのが
勝敗を分けた。

「しまっ!？」

木刀を持っていた右手を思い
きり蹴られて思わずソレを
取り落とす。体勢を立て直
して迎撃しようにもすでに
手遅れ、右腕は彼女の左手
で抑えられている、力を入
れているのか生半な力では
振りほどけそうも無い。

そう思い左手で彼女の手を
掴み体を回転させ彼女の体
ごと巻き込んで体勢を崩さ
うとしたがここまでで気づ
くべきだったのかもしれない
、なぜ彼女がまだ肉弾戦を
挑んできているというのに
拳打の一つさえ繰り出して
いないのかを、

足払いでもかけて転ばせて
からマウントを取るといっ
てもできるのだ、しかし驚
愕がまだ抜けきっていな
かった秀治はそのことには
気づけない、そこまで頭
が回らない

「まだまだっ!！」

「いや……、終わりだよ、秀治。」

耳元に彼女の囁く声が聞こえてくるその声は隠しようも無い喜悦に染まっていた、左手で彼女の手を掴もうとするが右腕を掴んでいたソレはすぐに放され、刹那首に腕がまわった。

「ぐっ!?!があっ!?!」

裸締めが決められ頭に血が回らなくなっていく、それを何とかしてはなそうともがいても元より力業でどうこうなる技でもない、

そういえばあの夜は何でも有りだったなと気付き苦笑した所で意識が落ちていった。

「おや?気付いたのか、意外と早かったな。」

目を覚ますと冴子に膝枕をされている状態で頭を撫でられていた。何があつてこのような状態になったのかと寝起きのボケた頭で考え

て意識を失う前に何があつたのかを完全に思い出す。

「どんくらいトンドつた？」

「4〜5分と言ったところだな。」

「そっか……。」

彼女は顔に華やかな笑いを浮かべて秀治の頭を機嫌良さ気になで続けている。このように頭を撫でられるのは兄以外では初めてだなと思いつつ、頭を感じる柔らかな感触を存分に楽しむ。

「ワイが負けたか……。」

「ああ、今回は私の勝ちだ。」

「そっかあ……、負けたんかあ……。」

今更ながら自分が敗北したという実感がやって来る、同年代の人間に負けたのは初めての経験だった、別に悔しいという感情は無かった、あるのは充足感だけだ。そう言えば以前言った事が本当になつてしまったなと苦笑する。

「どうした？」

そんな秀治を不思議に思ったのか小首を傾げてこちらの顔を覗きこんでくる。彼女の烏の濡羽のような美しい漆黒の髪が顔にかかるのがくすぐったかった。

「いや、前にワイを負かすのはお前かもしれんと言ったのが当たったのが面白くてな、それにしてもあそこでペットボトル蹴り上げて木刀捨てて体術で挑んでくるってのは予想外やったなあ。お前がんな行動するとは思わなかった。」

「ふふふ、誰かに似たのさ、以前剣を持っているのに体術で攻撃してきた男がいてな、実戦ではそのようなこともあるのだと学ばせてもらったのだよ、君こそ今回は剣術のみではないか。」

「ほっとけ、誰かに似たんや。」

そこまで言っつてふと込み上げてきた笑いが抑えることができず誰はばかることなく大声で笑い始める、それは彼女も同じのようではばらく道場には二人の愉快そうな笑い声が響いていた。

「なあ、冴子どうやった？本気の喧嘩ってのは。楽しいもんやろ？」

「さあ？どうだろうな、まだ燻っているのかもしれないぞ？」

未だ笑いの波が収まらないのか片手を口に当てて面白そうな顔をしてこちらを窺っている。

「嘘付けや、戦つとる時笑つとつたくせによ言つわ。」

呆れたようにため息を吐きながら言うと、冴子はまた鈴を転がしたような声でクスクスと笑い始めた。

「一人で足りひんもんがあるんやったら二人で補えばええ、つらい事があつても二人で背負えば多少は軽くなる、一人で歩かれへん道でも二人やったら歩けるやろ？支えあえばええ。人は全て背負つて生きれるほど強いもんやない、少しは他人を頼れお前は一人で抱えこみすぎる節があるからの、恋人でありパートナー、そんな関係で行こや。」

「なんだ？新手のプロポーズのつもりか？しかしそうだな……、それがいいのかもしれないな。」

そこで彼女は頭を撫でるのを止めて天井を見上げて長く息を吐いた。頬に当てられた手にそつと指を絡ませるとそれに応えるように冴子

も指を絡ませてくる。

「まあ、改めてよろしく頼むわ。」

「ああ、こちらこそよろしく頼む。」

そう言って二人は絡ませあっていた指を解き手を合わせて優しく握りしめあった。

秀治が今現在いるのは自宅の客間、そこは高級な装飾品が飾られどこか気品というものを感じさせる内装であった。そんな部屋では秀治を含め3人おり、兄の浩一と彼女と無事になってくれた冴子が初の顔見せをしていた。

「初めまして、毒島冴子と申します。」

どこか少し昔の淑女を思わせるような服装をした彼女が机を挟んで正面に座っている浩一に頭を下げて自己紹介をする。その服装を決めるのにまた一悶着あったのだがそれは今は別に関係は無い。ただ秀治が苦労しただけの話だ。

ちなみにこの服の元の持ち主は美雲さんだ。和服以外にまともといえる服をほとんど持っていないことを知ってしまった秀治が軽く絶望してしまったのもまた別の話だ。ちなみに持っていたとしてもそれは全てこの服を同じように美雲さんのお古だったりしている。

「こちらこそ初めまして、私が秀治の兄の浩一と申します。秀治からよく話を聞かせてもらっていますよ毒島さん。家の愚弟と仲良くしてくださいよう……。本当に有難うございます。」

それに対して浩一は頭を机に付かんばかりにまで下げて自分よりも10も年が下である少女に礼をいった。

「そつ、そんな頭を上げてください、私も彼にお世話になっている面もありますので……、あと私のことは冴子と呼んで下さいませんか？」

それに慌てたのは冴子である。まさかいきなり頭を下げられて礼を言われるとは思っていもいなかったため、対処に困ったように顔を顔の前で2、3度ふり別に大したことはないと言って頭を上げてくれるように促す。

「そうですね、ありがとうございます。では冴子さんと……、それにしても秀治、突然この家に冴子さんが来ると聞いた時は驚きましたよ、せめて一日前あたりにそう言う事は私に伝えておきなさい。おかげで慌てて準備しなければならなかったじゃないですか。」

そう言われ浩一は頭を上げ優雅に今しがた淹れたばかりなのか湯気がたっているコーヒーをゆっくりと飲んでいく、あまり兄と距離が離れていないせいか漂ってきたコーヒーの香りが鼻腔をくすぐる。それにしてもこの香りは確か兄が大事にとっていた高級な豆ではなかるうか？

こう見えて浩一はコーヒーを愛飲する。特に「72時間働けますか？」をやっている最中はとても良く飲む、そして終わりに近づくとれ機嫌も悪くなっていく。寝てないから当たり前だ、どうも期末や中間試験の時にそれをするらしい。

酒は全く飲まない代わりにコーヒーをととても良く飲むようになった兄だが、だんだんと味や香りも楽しむようになって以来インスタントでは満足できないようになってきたのか豆を買ってくるようになった。兄の数少ない嗜好品の一つである。

確かこの香りはその中でも最高級の物ではなかっただろうか？未だにブラックで飲めない自分には詳しく分らないがそうだったはずだ。いつもの嗅ぎなれた香りとはまた少し違う。そう、この香りは「72時間働けますか？」を始める時と終わった時に兄が飲むコーヒーの香りだったはずだ。ちなみに秀治自身は香りだけで違いが分る程度になるまでに調教されていることを知らない。

「いや、決まったの連絡する直前やったからそれは無理やで、ところでワイにもそのコーヒー飲ませてくれへん」

「駄目です。それよりも何用ですか？貴方のことですからただ顔見せに来ただけではないでしょう」

最後まで聞くこともなく満面の笑みで切り捨ててきた、間違いないこれ兄の秘蔵の一品だ。それにしてもお気に入りなのコーヒーに角砂

糖3個入れられて飲まれるのがそこまで気に入らないのだろうか？
この前それを言ったら「当たり前です。せめてミルク一個だけで我慢しなさい。コーヒの良さが分らない貴方にこれはもったいなさすぎます。もう少し味覚が大人になれば同好の士になれるのですがねえ……」と返ってきた、……悪かったな味覚が子供で。

「ん、まあ、そうやな。手合わせ終わった後に高校どこ行くかの話になっての、聞いてみたらワイと同じ藤美学園って言うもんやから、そこで教師やつてる兄さんにどんな学校か聞いてみようかおもて。」

そう言つて自分の目の前にある良く冷えたダカラを入れたグラスを手に取りそれを一気に飲み干す。

「へえ、うちにですか。そうですね……、あそこは全寮制、生徒は全員寄宿舎に入られます。それは知っていますね？」

「はい、設備も一人につきワンルーム与えられ風呂、トイレ、台所等の設備が整っていると聞きます。」

ここ近辺で見て唯一MARCHに匹敵するクラスのレベルを誇る地元の有名校、それが私立藤美学園、毎年結構な数の生徒が東大合格を果たし2〜3人はアメリカのハーバードでさえ合格できる優秀な生徒を多く抱えるこの学校、昔浩一が一郎に人脈作りに入れられたのもここに理由がある。

「ええ、その通り、何を言うなら学園外に出るには必ず許可が必要ということ、門限が定められていること、春、夏、冬の休み以外家には帰れないこと、ぐらいですかねえ……。勿論お泊りも禁止ですよ。」

「なんやえらい締め付けが厳しい所やねんなあ……。聞いてるだけで息が詰まりそうやわ。」

「いえ、そうでもありません、就寝時間は決められていませんので夜更かしなども出来ませし、教師である私が言っては問題ですが……。授業中に寝るよりサボる方が問題視されないんですよ。」

「それは……。何故ですか？」

「所詮学校といえど客商売と言うことですよ、まあお客様サービスと言ったものです簡単に言えば。授業の妨害は他のお客様のご迷惑となるので許されませんが、邪魔しない限り問題では無い、つまりはそういうことです。」

小首を傾げて冴子が問いかけると浩一はその顔の微かな自嘲の笑みを浮かべてそう言った。

「教師も色々大変やねんなあ……」

つまみとして出された煎餅をバリバリと食べながら感慨深そうにそう言つてジュースを飲む、うん、やはりこの組み合わせは無いと思う、煎餅の醤油味でダカラの味が大変なことになっている。冴子にはケーキを出している分これは兄の急に予定を詰め込んだことに対するささやかな嫌がらせだろう。

「ええ、大変ですよ。手のかかる同僚もいますし……、まあ、それはともかく、冴子さんやはり貴方はスポーツ推薦枠ですか？秀治は議員推薦で行かせるつもりなんですが……。」

「いえ、一般受験で行こうかと……」

「ふむ、そうですね……、なら勉強で解らない所や苦手な所があれば聞きに来なさい。解りやすく教えて差し上げましょう。秀治に教えてもらうというのも手ですよ、こう見えて全国模試等ではトップクラスの成績を保持していますから……英語以外」

秀治がなぜあれだけ暴れて退学になつていない理由はここにあった、成績を見れば学校最高、金の卵を手放したくなかつたのだ。バックにいる紫藤一郎の存在もあったが、ソレは学校がそう思っているだけである。一郎自身は自分の立場を揺るがしかねない事でない限り動かない、冷え切つた親子関係であることを知られていないからこそその勘違いであつた。

「流石にそこまでして頂くわけには……」

「構いませんよ？ただ私からも一つお願い事が有りますが……」

「お願い事ですか……、私に出来ることであれば引き受けますが……」

「そう難しいことではありませんよ、ただこれからも私の愚弟をお願いします決して見捨ててやらないでください。それだけです。ところで貴方の苦手な科目はどれですか？物理、化学以外の科目の高校で習う範囲のことなら教えてあげられますよ。」

「そういうことなら喜んで承ります、苦手な科目ですか……、それなら英語をお願いできますか？何分異国の言葉ですので勝手がきかず……。」

恥ずかしそうに伏し目がちにそう頼み込んでくる、秀治は嫌な予感がしたがここから離れるわけにもいかない、兄には弱みを握られすぎていてここで逃げようものなら惜しげなく冴子に色々と暴露してしまうだろう。例えば何時まで兄と一緒に寝ていたのか等

「英語ですか、秀治と同じですね……なら調度良い機会ですのでう

けてみますか？私の講義を、秀治を教えるために買ったホワイトボードも有りますので。秀治準備して来なさい、貴方も参加するのですよ。なお教材は冴子さんと共同で使うこと。」

「……、あゝい」

嫌な予感が当たった、結構久しぶりだが仕方ないだろう……、今回は冴子がいるからそう厳しくは指導されなはずだ……多分。そう思いながら席を立っていつも通り準備しに行く。また面倒な事になったものだ。

昼に来たはずなのに冴子が家帰ったのは7時を過ぎていた、……張り切りすぎだよ兄さん。冴子の奴ちよつと表情が虚ろになってたぞ。誰が基礎からミツチリコースなんて頼んだんだよ、ああ冴子だったか……ご愁傷様だな。

未来、何度かこの講義がまた行われることになるのを二人は知る由も無かった。

外伝 1

小室の奴が自著伝？らしきものを書いていてらしいので真似して私も書いてみることにした。あいつが昔の事を書くと言っのならば私は近頃の出来事でも書くこととしよう。

まずは自己紹介からいこう。私の名前は毒島秀治、このコミュニケーションのトップである紫藤浩一の弟だ。名前が違う？婿入りしたんだよ、そこらへんは察せ。

私と妻は毒島の剣術を生き残った人達に伝える為に道場を開いている、中々に盛況ではある、まあ、白兵戦での2トップが教えるのだから当然といえよう、もっぱら教えているのは妻のほうだが……。

サボらずに働け？失敬な、高校生の頃（そ〜いやコレ歴史用語に認定されたんだっか）と違って毎日サボらずに働いているぞ、奴等を狩って安全生活圏を拡大するのに奔走する毎日だ。

たまに妻に代われと言われるので代わってはいる、やはり暴れたいのか……、いい年して（ここから墨で塗りつぶされて読めない、下に“減額決定”と達筆で書かれている）

……、この本出っっぱなしにしてたらいつの間にか妻に読まれていたらしい、先程台所で「君が人の事を言えるなんて驚きだな」

と凄い笑顔で微笑まれました……、どうしよう小遣いの額が、
額があ……。

頭抱えてたらいつも尻にしかれてるねと息子に笑われた、何処で覚
えたそんな言葉。とりあえず後でゼツて手合わせで扱いてやるぞ
あのクソガキめ。……でも妻にチクられたらどうしようか？

話が盛大に逸れてしまっていたようだ、元に戻すでしょう。

あれから、奴等に平和だった世界を壊されて既に10年近く経った、
奴等はそれまでであった常識も良識も何もかも全て壊して行った、生
き残ったのはほとんどが機転と運のいい人がほとんどだ。

昔と違ってここには喚き散らすだけで自分は動かない人はいない、
状況がそれを許さず自然と消えて行った、誰も彼もが自分の利用価
値を他者に示さねば生きてなどいけない、そんな世界。それでも犯
罪は無くならない、このコミュニティは私達と兄が居るからまだ
治安は高い方だ。

この世界では女性はとても優遇されている、まあ、人類自体が絶滅
危惧種になつてるので仕方ないことだ、種の保存を優先するには女
性を大切にすることは何よりだからな。女何人も困っている奴もい
る、世も末だな。この場合仕方ないのやもしれんが。

奴等の出た原因が何かなんてまだ誰も知らないし解らない、調べても何も出てこなかったのだ。おそらくコレからもそうなのだろう。ああ、やってられない。

このコミュニティの頭脳である高城も「いつか私が解明してみせるわ、なぜなら私は天才だからよ。」とみたいなことを言って意気込んではいたが、どうなることやら……。

高城沙耶の名は今では知らない者はいない程の奴等の研究に関しての権威になってるから重圧も半端が無いのだろう、

なぜかって？アイツが提唱し、人体実験をして実証した「Zウイルス保存法」は人類にとっての希望になったからそうなるのも当然だ。

詳しく言えば

奴等が火達磨になった時にやたらと早く倒れることに眼を付けた彼女は奴等を奴等たらしめているモノは高熱に弱いのでは無いかと推測した、

加熱で殺人病の元を殺せるのであれば……と思いついた彼女はある一つの実験をする。肉に奴等の血を塗りたくりその肉に感染させる、感染している奴等は腐らないことは知っての通りだ。

今コレを読んでいる君達も安全区域の外でアーウー言って徘徊している奴等を見た事があるだろう？

あれは10年前からあのままの姿だ、腐るのは着ている服ぐらいの

モノ、おかげで子供の教育に悪い、裸のままですらつかないで欲しいものだ。

君達が男であるなら解るだろう？もし、もしだ、とてもスタイルの良い女性の奴等が安全圏の直ぐ向こうに居たとしてだ、ソイツの着ている服がすでに申し訳程度でだ、その……なんだ、あれだ……うん察してくれ。

まあ、腐らないんだよ奴等は、つまりそれに感染したのも腐るところがないと彼女は考えたわけだ。実際そうだった、血を塗りたいくつた肉は腐ることが無かった。

そこで先程書いた加熱で何とかなるかも知れないに繋がる、彼女はその肉を焼き、説明した上でそれを食わせた、実験体はいまや兄さんの側近である山仲だ。

どうも山仲は高校時代の頃に兄に足を挫いたところを助けてもらって以来、兄に忠誠を誓ったらしい、それを食うときも「紫藤先生が信じているなら大丈夫です。」と言ってそれを食った。

あれにはその場にいた全員が唾然としたものだ、そして山仲は奴等にならなかつた。まあ、実験は成功したんだな。それ以降兄は彼を重用するようになったと。うむ懐かしい話だ。

これにより人類は腐ることなく、鮮度を保った食料を保持することができた。この時代に腐らない食料の存在はとても価値のあるも

のだ。もちろん、初めは口にする人はほとんど居なかった。

当然だ、そんな危なそうな食料を食べる奴なんかいない。よって我々がその見本となる為にそれを食べてソレの安全を証明することもあった。感謝しろよ後達共今お前等が食ってるものは私達が身を削って作り出したのだからな。

うむ、ここ最近で起こった一番大きな出来事だな、といっても2、3年ほど前の話だが。そろそろ夕食のようだ、息子が私を呼びに来たので行くでしょう。さて、次は何の出来事について書こうか？

外伝 2

小室君も夫も何やら日誌のようなものを書き始めた、後世に何かを残したいとは感心なことだ、私もその便乗させてもらうことにする。

私の名前は毒島冴子、この本の持ち主の毒島秀治の妻だ、どうやら彼は現状についての事を書いているようなのでその手助けをする為に筆を執ったということかな。

前のページでも言っていたように、平和な時代が消えうせてしまつてからもはや10年の歳月が流れている……、思い返してみれば存外時の流れと言うのは早いものだ実感できるものだ。

世界中で奴等が発生してから十年、人類は必死に戦い生き延びてきた……、私は住んでいた国が日本で良かったと心から思う。日本の四季が人の味方になってくれているのだから、案外八百万の神というのは実在するのかもしれない。

春夏秋冬、これら全てが奴等を防ぐ盾となつて我等を守ってくれている。どういふことが解るか？

春には生命の芽吹きが、夏は虫の音が、秋にはソレに加え豊穰の恵みが、冬こそ辛いものがあるが山に入り込んだ奴等を殺すには丁度

良いものがある。

台風といえどあれはあれで良い飲み水を補給するのに一役買っている。つまりはほとんど無駄なモノが無いのだ。不味いモノは地震くらしいものだろう。

ところで奴等が現れて以来問題となってしまうた事は何か知っているかな？これはほとんどの人が見落としていた問題であったものだ。犠牲者が出て初めてその事に気がついた。私も秀治もソレと戦りあったことはある。

それは犬の野犬化であり野生動物の繁殖だ。初めて野犬化した犬に襲われた時はソレへの対応は厳しい物があつた、その時の私達は対奴等の剣術に慣れすぎてしまっており感を取り戻すのに些か苦労したものだ。

結局あの時は夫が刀を捨ててショットガンを撃ち撃退したが、その後で思つたものだ。奴等を相手にしすぎてしまい腕が鈍っていると……、そこからは夫と手合わせをして鈍った腕を鍛えなおし今の毒島流剣術というものがある。

もし今読んでいる君が剣客なのであれば、長き間奴等のみを相手どるのはぬるま湯に浸かっているのとはほぼ同じモノだと頭に刻み付けて置いたほうが良い、もはや我々生者の敵は奴等だけにあらず、飢えた獣もそれに加わるのだから。

別に奴等の相手が役に立たないと言っているのではないので勘違いはしないでくれ、あれはあれで実戦経験を積むのに最適な相手であることは間違いは無い。だがそれだけ相手をしていては駄目だと言っているだけだ。

野犬の相手をする時は気をつけることだ、たかが犬とは思っていると死ぬぞ。アレは動きが速い、噛まれれば奴等になることはないものの狂犬病にかかる恐れはある、そして何より群れてくる。本当に厄介なものだ。

ここまで言えば何故、山への立ち入りに許可がいるのか解るな？あそこでは奴等の相手は勿論のこと、毒虫、蛇、先程言っていた野犬の群れ、ひどい時はどこから流れてきたのか猪と出くわすこともある。

この間夫が手傷を負いながらもソレを引きずってきたのには驚いたものだ、何時もは鹿や兎を狩ってくるというのにな。犬を引きずってくるときもある、今では野犬でさえ立派なタンパク源となるのだからため息をつきたくなる。

食料の話をするれば今は食料よりも調味料の方がかなり貴重なモノとなっている。まだここでも塩は何とかなるが砂糖などの他のモノとなると流石に入手が困難になってきてしまう。

流れの行商から手に入れるにしても高い、家計を預かっている者から言わせてもらえば高すぎる。中世ヨーロッパの胡椒も真っ青にできるほどだ……これは少し言いすぎたかな？

まあ、確かに命がけで嗜好品などを売りまわっている彼等からすればその程度の値段は当たり前なのだろうが……、それにしても思わざる終えない。

入手するために生産地に行くだけの燃料費（この国では石油がでないためガソリンはとても高価なものとなっている）やその他諸々を考えれば確かに妥当と言えるのだが。

砂糖などの甘いモノと言えば二日前夫が山に入って蜂の巣を持ち帰ってきた。何でも、奴等が集まっている木があるから何かと思えば蜂の巣がありその音に釣られて奴等が集まっていたようだ。

発煙筒で燻して蜂を無力化したあと奴等も殺してとってきたらしい。刺されなくて良かったなと思う。子供達は流石に蜂の子を食べるのは無理だったらしく、巣から搾り取った蜂蜜を舐めて喜んで、やはり子供は甘いものが好きなのだ。

夏は夫でも滅多に山に入ることはない。夏のあるところは死地となっているからだ、蝉の声に釣られて毎年大量の奴等が山を登り始める。その間町の方が手薄になるので夏は領地拡大に努めている。

蝉の声で奴等の音源探知も利かなくなるがそれは我々も同じこと、大量の奴等がどこから現れるか解らないなかで聴覚が利かなくなるというのは危険すぎるというものだ。

夫は一度それで奴等に囲まれて死にかけたらしい、木に登って他の木に飛び移りその場を離れて危機を脱したらしいがそれ以来夏にはほとんど入らなくなった。うむ良い事だ。

今、思いつくのはこれくらいか……、何かまたいい話題があれば書くでしょう。今コレを読んでいる君、精進を怠らないことだ。磨かない刃はすぐに錆びてしまうからな。

原作1話

「まだ5限目終わってへんのお前がここに来るなんて珍しいやんけ。何かあったんか？」

剣道着姿の秀治が部室の壁にもたれて座り電子辞書を弄りながら今部室に入ってきた者に声をかける。隣に彼の木刀が2本立てかけられている所を見ると稽古をした後だろうか？

「・・・、いや私も偶には息抜きをしたいと思って来たただだよ。君がいるとは思っていなかったよ。」

教室からバツグと消えていたから寄宿舎に帰ったかまた屋上でサボっているのかと思っていたが・・・精が出るな。」

その声をかけられた者、毒島冴子は関心したように言って感嘆の息をもらしながら秀治の肩に頭を預ける。やはり稽古後なのだろうか。彼の肩から感じる体温が高い。少し息も切らしているようだ。

「部室で二人つきりつくか、静かな場所で二人になるなんて久しぶりやな、ちょうど休憩挟んでテレビでも見よかと思とった所やねん、一緒に見よ〜ぜ？」

そう言っつて自分と冴子ともちよつと真ん中に電子辞書を移動させる。

「まだ平日の昼間だぞ？大した番組はやってない気がするが・・・、まあいいだろう本当になんか久しぶりだからな一人きりというのは、君の意向に従おうじゃないか。」

そう言っつてチャンネルを回し始めるが・・・

「全て臨時ニュースだと？どうなってる？」

「何やでかいことがあつたんかね？」

そう言っつて二人して大人しく流れているニュースを聞き続けるが、そのあまりと言えはあんまりな内容に二人とも表情が険しくなつていく。

「暴動？日本全国で？それも被害者が急増中だと？秀治これをどう思う？どの局も同じことを言っているみたいだが・・・。」

冴子はチャンネルを回して他に情報は無いのかと探し続けるながら秀治の意見を聞く

「すごく・・・不自然です・・・。じゃなくて、待て、こういう時はネットが早い。」

咄嗟にネタで返してしまい、冴子が「は？」と言って手を止めてこちらを怪訝そうな顔をして見たので慌てて持参した小さなシヨルダールバッグからiPhonを取り出してインターネットに接続する。

「どうやって調べるつもりだ？見たところ情報が抑えられているらしいが。」

「人の口には戸は立てられへんってなあ、2ちゃんやったら何か情報の一つでも転がってるやろ。」

「あゝ、あの偶に犯行予告ののるあれか・・・。」

呆れたようにこちらを見てそう言う、目が本当に調べられるのか？と如実に語っていた。

「まあ、見てみっ！！と・・・、なんやこれ？」

「」「」「」「」

二人揃ってズラリと並んでいるゾンビという単語に首を傾げる。

「かつしくな……、間違っただけ知らんうちにオカルト板にでも踏み込んでみたか？」

はて？と首を傾げながら一番伸びていたスレッドを取り合えず開き目を通していく、横で冴子がやっぱりといった目でこちらを見ている。

「死体が歩いて人を喰らう？<<奴等>>が外にうじゃうじゃいて外に出られない？何の話だ？」

「所詮暇人の戯れ言だろう？ニュースでは暴動と言っているが流石にゾンビは無いだろ。」

「……、いや、あながち嘘でもないやもしれん、これ見ても。」

鼻で笑うように冴子はそう言い放ったが、秀治は張られていたリンク先にあった動画を見ると顔をしかめて冴子にiPhonを手渡す。

「……、なんだ？これは、これこそ映画か何かだろう。そ

んなに気にすることでもあるまい。」

手渡されたモノを見た冴子も顔をしかめてそれを突返す。その画面には血で赤く染まった子供の腹に顔を突っ込んで喰らうように動かしている片腕が千切れ、背中から臓物が見える男を上から撮った画像だった。

「……、まあ確かに、外でこんなことが起こってんねんやったらここが無事ってのもおかしい」

その言葉を遮るように備え付けられている校内放送のスピーカーからガガツツと音が鳴り響く

『全校生徒・職員に通達します！！全校生徒・職員に通達します！！現在校内で暴力事件が発生中です、生徒は職員の誘導に従って直ちに避難してください！！繰り返します現在校内で暴力事件が発生中で……』

ブツ！！

キイイイ……ン

ガキン……！！

『ギヤアアアアアッ!! あっ!! 助けてくれっ 止めてくれ!! たすけっ、ひいっ!! 痛い痛い痛い!! 助けてっ!! 死ぬ!! ぐわあああ!!』

「.....」

「.....」

沈黙がその場を支配する、遠くから悲鳴が聞こえるのは今の放送を聴いた生徒、職員全員がパニックになっているからだろう。そして二人同時に顔を見合わせて喰らいつくように再びi P h o n の画面を見る。

画面の中では先ほどハラワタを喰われていた子供と喰らっていた男が次はお前だとも言うつようにこちらを見上げていた。そこで動画がブツリと切れて終わる。
ネット接続を終了して元の待ち受け画面に戻して再度彼女と顔を見合わせる。

「べつやらマジやもしれんなあ.....」

「ここまでタイミングがいいとドッキリという看板を探してしまい

「そうだよ……。」

お互いに引き攣った笑みを顔に張り付かせて現実逃避するように話し合う。

そんな彼らを現実に引き戻したのは無機質な電話の着信音だった。

思いもよらない所からの音に二人の肩がビクツと跳ねる。恐る恐る画面を覗いてみるとコー兄と電話をかけて来た者の名前が表示されていた。

二人して力なく笑いあってから電話にでる。

「おっす、どしたんコー兄。」

「どうしたもこうしたもありませんよ。さっきの放送聞いていましたか？まだ無事なんですよね？どこにいるんです。」

矢継ぎ早に質問が飛んでくる、兄なりに少し取り乱しているらしい。

「そんなに一編に言うなって、聞いたったよ。ワイ等は無事や、場所は剣道部の部室、冴子はんと一緒におるよ。」

「……………、何か如何わしいことでもいていたのではないでしょうね？」

「まさか、二十になるまではんなことせんよ。その場の空気に呑まれたらその限りでもないやろうけどな。それより外で可笑しなことが起こってるみたいや、氣いつけたほうがあええぞ……………」

大げさに肩をすくめてため息を吐きながら言った後声のトーンを下げて真剣な声で言う。

「……………、その様子だと何があったか知ってるみたいですね、で一体何があったんです？」

電話越しの声からもふざけていた調子が消えて真剣味を帯びる。

「信じられへん話やけどネットでは死体が動き回って人を襲ってるつちゅう話が飛びかっとなるよ。テレビは情報統制されて暴動って言われてるけどな。」

「……………、秀治ふざけている場合ではありませんよ？あなたの頭はいつの間にかそこまで悪くなっていたとは、氣がつかまませんでした……………」

少し間をおいてから心底呆れたという声がiPhonから聞こえてきた。馬鹿にしたような響きが多分に含まれている。

「とりあえずマジヤ、様子がおかしい奴には寄らん方がええ、多分そいつ死んでるから。後、取っ組み合いはすんなよ、噛まれたり引つかかれたりしたら終わりやもせんからな。それと万一戦うんやったら頭潰すか首の骨折ることや。」

疑われても仕方の無い内容だがあまりの言い草に少しだけ腹が立って少し早口で言いたいことを言い切ってしまう。

「……………、疑って悪かったですネ秀治、どうやら本当のことみたいですよ、今部屋にいるんですよね？なら私の分の木刀を持ってきてもらいたいのですが……………」

先ほどまであった声の余裕が消えている

「……………、何かあったんか？」

「窓の外を見れば誰だっかわかりますよ。後ろから踏み潰されるかもしれないので教室に待機していて正解でした。

……………まるでB級のホラー映画を見ている気分ですよ。」

電話越しの声は吐き捨てるようにそっぴい捨てた。

「わかった、コー兄の分の木刀も持ってたらええねんな？ワイの予備でもええか？つゝかコー兄って木刀使えたっけ？」

「止めを刺すのに要るんですよ。「紫藤先生早く逃げましょうよ！」「わかっています！もう少しだけ黙っていてください。」

「……とすいませんね話が途切れました。職員室で集合しましょう。車のキーもそこにありますから。」

おそらくは生徒の声だろう。どうやらパニックになる前に押し止めたらしい。

「職員室やな？わかった今からそこに向かうわ、死ぬんやないで？」

「ええ、そちらこそ私より先に死なないように……、あっ！！！ちよっと待ってください！！！」

「………なんや？」

せつかく映画のように格好良く締めれると思ったのをぶち壊されて多少不機嫌そうに返す。言外に空気読めといているのがわかるだろうか？

「あゝ・・・、そのですね、できればまだ保健室で逃げそびれてる筈の鞠川先生を拾って欲しいんですよ。」

手間もかかれれば危険なのもわかっていますが・・・、お願いしていいですか？」

兄の声の後ろから生徒達の絶叫が聞こえる。それもそうだろう今自分も意外すぎて叫びそうになってしまった。

「別にええけど・・・、そっか、コー兄にもついに春が来てたんか・・・。にしてもコー兄が巨乳好きだとはおもってなかったわ。うん一本とられたわ。」

「別にそういう訳ではありませんよ。あなたとはまた違う意味で放っておけない人種なんですよ。それに彼女の親友から面倒を頼むと頼まれていますから。」

「はいはい、そういうことにしとくわ。じゃ、また職員室で。」

「ちょっと、まー!..」

何かを言いかけているが最後まで聞かずに強制的に電話を切る。

「いや、あの女には興味が無いと公言しとったコー兄についに春かあ……、フッフッフ、弟めは応援しますぞあ……こっちがやられたんと同じぐらい。」

グフフと下卑た笑いを浮かべて自分がやられた数々のことを思い出して晒いながらiPhonをバツクに入れる

「冴子!!はよ行くで!!!まずは保健室に行つてから鞠川先生拾つて職員室や。」

そう言つてニュースを見続けていた彼女に声をかけて竹刀と一緒に立てかけてあつた自分の前使つていた白樫製の鍔つき木刀を腰に差して部屋に戻る。

「職員室ではないのか?」

ニュースを聞いていてもこちらの話には耳を澄ませていたのか首を軽く傾げて問いかけてくる。

「兄さんが鞠川先生助けて欲しいんやと、くう……コー兄に彼女よ出来よと願ひ続けて早3年、ついに芽が出たんか……、長かつた!!!実に長かつた!!!」

もうこのまま魔法使いなるんちゃうか思っただけ心配しとっただけだ。」

「ああ、よかったよかった。」と口を動かしながらも勿論手は止めていない電子辞書もバッグに放りこみ置いてあった自分の今の愛刀である黒檀製の鍔付の大刀と小刀を手に取る。

冴子もすでに木刀袋を秀治のバッグに放りこんで木刀を試すように振っている。

「そうか……あの浩一さんが、君のお兄さんには世話になっているからな。そういう理由ならば嫌とは言わんよ。」

「ん!!じゃあ行くか!!ゾンビが何か知らんがワイ等の前に敵はおらん!!」

意気揚々とバッグを担いで部屋から出て行く。両手には右に大刀、左に小刀を持っている。

「……この状況でよくここまで余裕を持っていられるものだな……、なあそれが君の長所だったか。」

やたらとハイテンションな秀治を見て呆れたようにため息を吐いてその後ろに付いていく冴子であった。

剣道着＋袴

秀治が走れねえといった理由で改造を施した一品、裾のたくしあげ無しで走れるようにしたもの。高2の時に父親にせびって買わせたオーダーメイドの特注品。

黒檀製の木刀（大刀・小刀）

推定重量は大刀が900g～1kg小刀が400～500g長さは1mと55センチ高1の頃冴子に完全に追い抜かれて自分の身体能力にさらに磨きをかけて習得した二刀流剣術裏では血のにじむほど技量の上達に精を出している。

「刀一本でいつか絶対に勝つ！」とは秀治の言
ちなみにお値段6万以上

「父は財布」とは浩一の言

i P h o n

教師である兄に頼み込んで秘密裏に持ち込んだ物、今年のお年玉で買った。ただし成績が下がると没収される

2話

二人とも無言で保健室を目指して走る。空いた窓から下の階からは絶えず悲鳴と怒号が聞こえてきている。この階にも錯乱して逃げ惑う者や下の階から逃げてきたのか血を流しながら床に座り込んで荒い息を吐いているもの。

この機に乗じて女を犯している輩もいたがそれは秀治が通り抜けざまに後頭部に一撃入れて気絶させていた。

現在地は教室棟の3階、そして保健室は一番危険と思われる一階に存在していた。下の階の声の様子から察するに確実にゾンビと思われるものがあるようだが、

3階にはまだ来ていないのか遭遇はしていない。

「・・・・・・・・酷いありさまだな。」

「まるで映画の中に迷い込んだ気分だな。」

今まで走ってきた道の惨状を見て言葉少なに話を交わす。

「3階ですでにこれやと2階や1階はどうなってるか考えたくない

なあ。」

「それを言うな、気が滅入って「ストップ!!」「!?!」

もうすぐで階段という所で女の人影がフラフラとよろめく様にして出てくる。

しかしその姿はさっきまでの道にいた生徒とは明らかに違っていた。

破かれたのか申し訳程度にのこっている制服もそうであれば、元は緑であったスカートを赤黒く染めあげて本来腹であった部分から臓物が飛び出し腸を引きずるようにして歩いていたので。

それを見た下に降りようと階段に向かっていた人たちが悲鳴を上げて今来た道を走って逃げていく。

それを聞きつけたのかそれともエモノの気配を察したのか・・・、

ズル・・・ズル・・・

と石造りの床に紅色の線を描きながら、あたかも救いを求めるように腕を突き出し目から赤い血の涙を流してこちらへとゆっくりと歩いてくる。

「これが・・・!?!」

「ゾンビ!?!」

冴子の言葉を引き継ぐように秀治が叫ぶ。その言葉には隠しよりの無い生理的嫌悪感が滲み出していた。

その間にも「ゾンビ」はゆっくりとだが着実にこちらへと足を進めてきている。

それを見た秀治は無言で冴子の前に出て二本の木刀を構える。

「何の真似だ?」

「いや、こんな時に好きな女を前に立たせるほど男捨てた覚えはないで?ここはワイに任しとき。」

極めて明るくまるで犬の散歩をしてくるかといっているが如くそれが当たり前かのように笑ってそう言い切る。

「下にはアレがひしめいているだろうに、どちらがやっても変わらないと思うが。」

「そのセリフ吐くんは心落ち着かせてからにせい。顔、軽くやけど

引き攣ってんで。」

そう指摘された冴子はハツとして顔を手で抑える。

「……………君は大丈夫なのか？」

何が？とは言わない、それは分かりきっていることだ。それに「アレ」はもうすぐそこまで来ている。

「安心せえ……………心押し殺すん……………表情偽るんは紫藤家男子の18番や。」

そう言つて遂に間合いに入ってきた「アレ」に襲い掛かるように上段から木刀を振り下ろした。

手に肉を叩き骨を砕く懐かしい感触が木刀越しに伝わってくる。頭を砕かれ脳髓を撒き散らし、目を飛び出させた「アレ」が糸の切れた人形のように地面へと倒れこむ。

ゾクゾクとした感覚が腕から背中、背中から全身へと駆け巡る。久々に味わった、いや味わえた感触に全身の細胞が沸き立つような感じがする。そう、昔の自分はこの感触に病みつきになり墮ちたのだ。

人型の、いや元は人であったモノを壊してしまっても後悔は無かった。「アレ」は「人」という自己暗示が思ったより効いているのだろうか？

血振りをして木刀に付いてしまった血を払い落とす。

そして少しだけ吊りあがった口端を元に戻してから背後にいる冴子に振り返る、そして彼女のすぐ後ろにいつの間にか立っていた人影を目に映すが早いか、

「あぶねえ!!！」

「なっ!!！」

小刀を手放し彼女の手を取って自分の背後へと放り投げるように引きずり倒した。

「くっそ!？」

「秀治!？」

後ろにいたモノ、先ほど床に座り込んでいたゾンビとなってしまった少年に振ろうとしていた木刀を掴まれて止められる。右手に力を

入れてそれを振り払おうとするが、信じられない程の力で抑えつけられていてビクともしない。

その事に驚愕して少しだけ隙ができた瞬間、左肩を掴まれて上から抑え込まれるようにして床に押し倒された。

「ぐっ！！おおおおおお！！」

掴まれた左肩が万力のような力で締め上げられて動かすことができない。

死ぬ、そのイメージが脳内を駆け巡った、気がつけば木刀から手を放し、すでに眼前にあった少年の顔を離そうとゾンビとなった少年の首を右手で掴み、

渾身の力を振り絞ってそれ以上の接近を拒むんでいたが・・・、それは接近する速さを緩める程度の効果しかなかった。力負けて徐々に顔と顔の距離が縮まっていく。

ガチガチと目の前でかち鳴らされる歯から濃密な死の気配が漂ってくる。

すでに顔からはいつもの余裕は消え去り、表情は怯えの色で染まっていた。

「兄さ」「はああああああ！！」「！？」

死を覚悟した瞬間に冴子の怒号が廊下に響き渡り顔スレスレの所を木刀が過ぎ去っていく。

それは目の前の少年の頭を砕き眼前にある顔を弾き飛ばした。飛び散った血が頬に多少付着する。

くたりと少年の体から力が抜けて左手から木刀が滑り落ちる。それを震える腕で何とか横に投げ飛ばし床に手をつけて起き上がる。

心臓が恐怖で縮こまっていたのが息を吹き返したかのようにドッドと勢いよく脈を打ち鳴らし始める。今更ながら全身から冷や汗が滝のように噴出してくる。

全身の筋肉が震えが止まらない。

「た……、助かった……、すまん冴子……、って何やってるん？」

廊下の壁にもたれて乱れた息を整えながら礼を言おうといつの間にか目の前に座り込んでいた彼女がペタペタと顔に触ってくる。

「どこも噛まれていないな？」

「ああ、あと一秒遅かったら噛まれとったやろうけど、大丈夫や。ホンマに助かった、ありがとな。」

「いや、礼を言うのは私の方だ、私が後ろに注意を払っていればこんなことにはならなかった、目の前のことに気を取られて背後が疎かになるなど・・・、私の未熟のせいで君を失ったとなれば悔いても悔やみきれない。」

「こつちにも責任はあるやろよ。来た道におらんかったら安全と思っ込んでもうて注意するようにも言ってなかったからな。」

まっ、どつちもまだまだ未熟ってことや。オレらは恋人であって相棒でもあんねんから背中合わせてやってこ。」

「・・・お互いの辛いことは背負いあつたらいい、楽しいことは分け合えばいい、一人で歩けないなら支えあつて行けばいい」
だったか。」

「そ〜や、これからの教訓としてこのことを活かせばええ、まだどつちも生きてんねんからどうとでもなる。今回はワイがお前を助けてお前がワイを助けた。それだけの話や。そう悔いる話でもないやろ？」

うっし！！足の震えも止まったしちやつちやと保健室行こ〜ぜ。頼りにしてるで？相棒さんよ？」

「・・・、そうだな、私も頼りにしているよパートナーさん。」

冴子の差し出した手をとって立ち上がり落ちている二本の木刀を拾い上げて腰に差す。

「さてこっから1階に降りて保健室直行や、アレがうようよしたるやろうけど・・・、覚悟はええか？足引っ張んなよ？」

「君こそな。」

お互いに軽口を叩きあい階段まで行つて下を見れば、下からさらに4〜5匹がこちらに上がってきていた。

秀治は首と指の骨を鳴らしてから腰から自分の木刀を引き抜き、冴子は体をグツと伸ばして緊張していた筋肉を解して準備を整える。

「それじゃあ。」

「では・・・、」

「行こうか!」

そう言って二人は同時に階段を飛び降りて下へと向かっていった。

3話

「そろそろ保健室のはずやけど！！つとあ」

「ああ、こつ多くてはキリが無いなっ！！」

行く道の先々でうるついているゾンビ共を蹴散らして保健室へと二人は向かっていた。

「そこの角曲がればって、多！？」

保健室の前ではかなりの数のゾンビがひしめいていた。中から男と女の声があるのを聞く限りまだ無事なのだろうと思っていた矢先、ゾンビにドアが破られて先頭にいた数匹が保健室へと入っていく。

「ッ！！やっぱ！？外はワイが抑える！！お前は中に入った奴を！！」

「わかった！！」

群れに飛び込んで二本の木刀を振るって奴らを吹き飛ばし保健室へ

の道を切り開く。

二人が保健室の壊れた扉の前に辿り着いた瞬間、保健室から男のやるせなさを含んだ悲鳴が響き渡る。

冴子は部屋へと飛び込み秀治はそこで立ち止まり後続のゾンビを迎え撃つ。

近くにいるゾンビは残り8匹、部屋に入ったのは6〜7匹だろうか？

「来いやあ、死に損ない共があー！！全員纏めてあの世に送ったるわあー！！」

まだ部屋に入ろうとしていた奴の首の骨を叩き折り、注意がこちらに向くように大声で怒鳴りつける。それが功を奏したのか、生気の無い顔がギョロリとこちらを向きうめきながらフラフラとこちらへと寄ってくる。

「ハッハア！！」

あと7匹が纏まっている場所に自ら飛び込んで先頭に立っていたモノの頭を近寄るが早いか潰す、大刀では十分な威力が乗らない程近くに寄って来ていたモノには小刀による一撃を首に叩き込み骨を砕いて沈黙させる。バックステップと同時に木刀を切り払うように動かして3匹目の頭を横殴りに叩き砕く。

残りの4匹が飛び下がる前にいた場所に殺到するように倒れこむ、あと一秒遅ければまた組み付かれて命は無かっただろう。

予想以上のスリルに背筋がゾクゾクと粟立つが楽しい遊びもここまでのようだった。

後は起き上がるうともがいている奴らに止めを刺すだけなのだから。

「冴子、そつちは上手いこといったか？」

全てに止めを刺し終えた後、挨拶でもするかのような気軽さで保健室に入り中を確認する。失敗したなんていう可能性は考えてもいない。そしてそこで見たのは、

木刀を振りかぶって噛まれて血を吐いている少年に止めを刺した冴子の姿だった。

「介錯か……。覚悟は決めてやってんやろうけど、潰されんなよ？」

「潰されそうになったら君が支えてくれるだろう？なら私はどこまでも進んでいけるさ。」

気遣うように秀治がそう言くと冴子は血振りをして木刀に付いた血

を振り落としながらそう返した。

「いくらでも支えたるよ、だから余り気に負うなよ？ん、じゃ鞠川先生も保護したことやし予定通り職員室にいこや。」

「ああ、有り難う、それでは鞠川先生。準備はいいですか？」

「早くせんと奴らがまた来よるから準備も手早く頼みますわ、ワイ等二人やったら突破できても先生おったら突破できるかわからへんし。」

「ふえ！？ちよ、ちよと待って！！今薬を持てるだけ入れるから！！」

そう言つてワタワタと慌しく動いて薬のある棚から色々な薬を持ち出して彼女の救急バッグの中に入れた。

「んしょつと・・・、これでいいわ。ところでなんで職員室なの？」

「車のキイがあるから。」

「それもそうね、それじゃ行きましようか。」

疑問も晴れたのか冴子の後ろに続いて保健室を出る。冴子と秀治はすでに保健室から出て廊下の様子を伺ってゾンビが来ないか警戒をしていた。

鞠川先生が来たことを確認してから元来た道を戻るようにして移動する。そうしたほうがゾンビに出くわさずに済むからだ。全て殲滅してきたから頭の潰れた死体だけは数多に転がってはいるが・・・

「君は・・・確か紫藤先生の弟さんの秀治君よね？一時期保健室に入り浸っては湿布根こそぎ持っていったあの・・・。」

何で今その話を持ち出すのだろうか？冴子はそんな時もあったな、といった呆れを含んだ顔で遠い目をしている。あの時は連日連夜の筋トレで筋肉痛が酷かったのだからしかたないではないか。

242

「え、ええそうですね、その秀治です。っと、こっからはアレが出てくるんで気いつけてくださいよ？」

目の前にあるのは階段、つまりこれから行くのは降りるときに無視をして通った2階である。そこから職員室に行けばいいのだがこの階段からだともまだ遠いのだ。

かと言って1階を通ることはできない。3階も今はどうなっているかわからない、すでに浩一の一行が職員室に着いている可能性のあ

る今は遠回りすることはできない。

携帯も今は何故か圏外と表示されている状態だ、やはりHardbankだったせいだろうか？こんなことならitumoにすればよかったと半ば後悔する。

「あれって、ゾンビのこと？」

「それ以外ないですよん。」

元から黒くてわかりにくい所々血に濡れた木刀で肩をトントンと叩きながら階段を見上げてそう言う。

「冴子、教室からいきなり出てくる奴には注意しろよ？後バランス崩すのは頼んだ。」

「角を曲がるときもな、1階よりは少ないとは思っが、気を抜けば死ぬぞ？」

「わっつとるよ、せいじゃ、行くで？」

そう言って2階に上がり1階よりは格段に少ない数しかいないこと

に安堵のため息を洩らす、これなら天井から降ってこないかぎりやられることはないだろう。

移動速度こそ鞠川先生に合わせて早足ほどの速さだが、何度も死線を走り抜けた1階よりは格段にまだ。

「秀治、いくぞ。」

「アイアイ。」

冴子が崩してその後ろから着いてきている秀治が殺す。ベルトコンベアに近い流れ作業だ。

「秀治君や冴子さんほど強かったらさつきみたいに一人で相手取れるんじゃないの？」

その光景を見て少し不思議に思ったのか鞠川先生が前を行く二人にそう質問を投げかける。

「確かに一人でもやれんことはない、でもや、今より危険やからなまあ、この学園脱出するつてのにこんな所で体力使うんも馬鹿らしいやろ？」

それにあれにもし組み付かれたらワイやったら何とかなつても冴子はんや鞠川先生やったらまず命は無い。

頭のリミッター外れてんのか知らんけど、とんでもない力やからな。

ワイが片手で押さえ込もうとして力負けしたからの。」

「先生秀治君がどれだけ力が強いのか知らないんだけど……。」

「ん？ああ、そついやそやな、まあ、ダンベル1000キロクラスの人間が負ける程度の認識でええよ。」

話しているうちに職員棟に繋がる端の前のドアに着いた。冴子が身を屈めて橋の上の様子を覗っている。

「はあ、すごいよねえ……。」

そう言つて感心していた鞠川先生が床に敷いてあつた足拭きマットに足を取られてその場でこける。それを見た冴子が呆れたようにため息を吐いて近づいていく。

「いたたたた……、もお、なんなの？」

「走るのに向かないファッションだからだ。」

それを言うが早いか鞠川先生の履いているロングスカートに手を伸ばし、それを縦に引き裂いた。鞠川先生の悲鳴と秀治の歓声はその

場に響く。裂け目から見える生足が素晴らしい。
しかしいつまでも見ているとゾンビではなく自分に木刀が飛んでき
そうなので自重しておくことにする。

「ああ、これブランド物なのにく。」

「服か命か・・・どっちが大切だ？」

「うううううううう・・・どっちも!!」

本当に兄と同じ27歳なのだろうか？余りにも子供っぽさが残って
いる人だと見ている目に多少の呆れが入る。

それでもこの状況でその台詞が飛び出してくるあたりかなり肝も据
わってるのかもしれない。

なるほど、これはあの何かと世話焼きな兄が放っておけないと言っ
わけだ。目を放していたらどこへ行くかわからないから危なっかし
いのだろう。そう思っていたら職員室の方向から何かの発砲音が聞
こえてきた。

どうやらゾンビ以外に誰かがいるらしい。

「職員室か？」

「みたい・・・やな。」

橋にはどうやらゾンビの影は見当たらない、未だに座り込んでいる鞠川先生を助け起こして。その場に早足で向かっていると今度は少女の悲鳴がその方向から聞こえてきた。

「冴子!!」

「わかっている!!」

二人同時に走り出してT字路に出ると反対側からも二人の男女が現れた。こちらを見るなり厳しい視線を投げかけてきた女子には見覚えが無いが男子の方には見覚えがあった。

よく授業をサボって屋上で寝ている奴だ・・・、確か小室孝といったか？

職員室を見れば銃?のようなモノを持った男子と迫りくるゾンビの頭に悲鳴を上げながらドリルを突き刺してそれ以上の接近を防いでいた。

しかしドリルの音が大きい、あれでは他のゾンビを呼び寄せるといい餌にしかない。

その場にいる他の4匹がその音に誘われるかのごとくフラフラと歩み寄っていく。

「私達は右!!君たちは左を頼む!!」

「あいよ!!」

「わかったわ!!」

冴子はその場にいた者に号令を出して突撃する。それに続くように他の3人もそれぞれ言われた通りに左右へと分かれて手近なゾンビへと踊りかかった。

一番右を冴子が、その近くにいたモノを秀治が一瞬で近づき頭を潰す。

左ではモップを武器に女子生徒が素早く連激を入れてバランスを崩し止めにノドに一撃を入れて止めを刺している。その一連の淀みない動きに秀治、冴子共に感嘆の息をもらす。

一番奥、つまり一番女の子の子に近づいていたゾンビを金属バットを大上段に振りおろして頭蓋を砕き吹き飛ばした。

更にゾンビが来ないことを確認してようやくあたりに安堵の空気が

ながれた。

「よう！！生きとってんな小室、いつも通りに屋上でサボっとって喰われたと思っと思ったぞ？」

「サボろうとはしたんですけど、そのおかげでこの騒ぎにいち早く気づけてなんとか・・・、紫藤先輩もいつも通り授業サボって鍛錬ですか？」

こちらの軽口にあハハと苦笑いで返してから秀治の服装を見てそう言ってきた。

「まゝな、部室で鍛錬した後、一息ついとったらこの騒ぎや、とこるで家の兄さんしらんか？生徒連れてこっちに向かっているはずやねんけど・・・。」

「紫藤先生ですか？すいません僕達も屋上から逃げてきたばかりなんで何も・・・。」

「そっか・・・、うん、すまん、ありがと、あとどっちも紫藤やからワイのことは秀治でええよ？めんどいやろ？」

「知り合いか・・・？」

2年の後輩と仲が良さげに話し合っている秀治に冴子が首を傾げて
そう言う。

「ん？こないだお前こいつと会ったやろ？部屋来んと屋上で木刀
振ってるワイ捕まえに来た時に、そーいやあん時おつた今村と森田
はどくした？・・・やっぱ喰われたか？」

「・・・・・・・・、はい、今村は知りませんけど森田は、奴らになっ
てました。」

「・・・・・・・・、そつか、あいつも死んだか・・・、ところで奴ら
つてのはこれのことか？」

そう言うって木刀で転がっている死体の一つをつつく。

「え？、ああ、奴らっていうのは死んでも動いている奴らのことで
す。ゲームじゃないんだからゾンビっていうのはどうかって永が・
・。」

そこまで言うって顔を悲痛そうに歪めて押し黙る、今この場にいる
ことを見ればどうなったのかは大体予想はつく。

「……………、死んだか？」

「……………、はい。」

手が白くなるほど拳を握り緊めて顔を俯かせる。会話を聞いていたモップの子も顔を俯けている、仲がよかった奴だったのだろう。

「すまん……………、突っ込んだこと聞いてもって。」

「いえ……………」

「ん！！この話はもう終わりにしよか、ところでさっきから話に入ろうとしているこいつの事は知っとるな？お前からという奇跡の人、剣道部主将の毒島冴子はんや。ほらほらお前も自己紹介して。」

背中をぽんぽんと労わるように叩いて他の話へと促す。

「あ……………、2年B組の小室孝です。よろしくお願いします。」

そう言って孝は頭をペコリと下げて手を差し出した。冴子はその手を握って握手したまま

「先ほど勝手に紹介されてしまったが、3年A組の毒島冴子だ、よろしく頼む。」

と華やかな笑みを浮かべてそう言った。

「は……、はい、こ……、こちらこそ。」

「おお……。」

藤美学園一の和撫子と名高い日本美人の笑顔というのはそれだけでも十分凶器たりうる。

それを離れてみていた先ほど銃を撃っていた男子も見とれているというのに至近でそれを見てしまった孝の衝撃はいかほどのものだろうか？先ほどまで暗かった顔が一変して赤くなり目を泳がせている。

これを入学以来何度も繰り返してしまった故に付き合っている男がいるにも関わらず告白者が続出し、ファンクラブが設立されたのは秀治の苦い思い出である。

なにせこのファンクラブの掲げる命題が「冴子さんには優しく、憎き紫藤には死あるのみ」なのだ。

かなり迷惑だったのはいうまでもない。大半が男子剣道部員で稽古の最中に本気でノドに突きを入れられそうになった経験は数知れな

かった。

「私、槍術部の宮本麗っていいます！！全国大会2連覇の毒島先輩と紫藤先輩ですよね！？」

いきなり大声を上げて慌ててその間に入っていったのはモップの子だった。その子と入れ替わるように開放された孝がフラフラとこちらに歩み寄ってくる。

「前に秀治先輩が言ってたこと・・・、本当だったんですね。」

「な？そうやる？あいつはド天然の男殺しやねん・・・、惚れんなよ？お前にゃあの娘がおるやる？」

冴子がこちらを向いていない隙に釘を刺しておくことは忘れない、孝の両肩をグツと力を入れて掴み声のトーンを低くして言う。そうしているうちに今度は銃を持った男子、平野耕太を落としかけている。

これで本人が無自覚というのは笑える話だ、高校に来て友達1000人の代わりに恋敵1000人できたのは全国でも自分だけだろう・・・、非常に認めたくはないが。

「何よ……、みんなデレデレしちゃって……。」

ゆらりと先ほど悲鳴を上げていた女の子が立ち上がりながらおどろおどろしい声でそう呟いた。

そうだと声高に同意したい、この状況で新たな恋敵の出現は勘弁だ。まさか誰もつきあった女がニコポナデポスキルを持ち合わせていたなど思いもしないだろう。

「おい、何言ってるんだよ高城。」

それを聞いた孝が自分の幼馴染の一人である高城を宥めるが、

「うるさいわね!! 私には天才なのよ!! その気になれば誰にも負けないんだから!!。」

と水に油を注いだかのようにヒステリックに叫び始めた、そうでもしないと自分を保てないともいうように。

「それは頼もしい、ですができるなら声はもう少し小さめでお願いします屍人たちが寄ってきてかねませんから。」

突然上の階からそんな彼女を諷めるようにそんな言葉が降ってきた。

「誰かいるのか!？」

高城の近くに行っていた孝が上階にその声をかける、が秀治はその声の持ち主のことをとても良く知っていた。よく聞き馴染みのある声だったからだ。

「小室君、君はもう二年生なんだから私の声ぐらい覚えておきなさい。やあ、秀治、それに冴子さん無事だったようですね。ご苦労様でした。それに鞠川先生も無事でなにより。」

そう言って上から足音を立てずに下りてきたのはスーツとネクタイを外し、所々に血の付いたカッターシャツを着た紫藤浩一その人だった。

4話

「はい、それをそつちに運んで、そうそう・・・、あとはこれをこ
うしてっ！と、皆さんお疲れ様でした、バリケードはこのぐらい
でいいでしょう、さあ休憩にしましょう。」

紫藤浩一の監修の下で男子たちがバリケード作りに駆り出されソレ
がついに完成する。それに対して女子たちはそれをみていた者、
シヨックを受けているのか呆然と座り込む者、浩一の依頼で男子た
ちの為に水を用意している者等様々だ

「ふゝ、全く、人使いの荒い兄さんだことで・・・、と、ありがと

」

差し出された水が並々と注がれた紙コップと受け取り軽く手を上げ
て礼を言う、コップを渡した女子は「どういたしまして」と微笑み
次の人へと水を渡しに行った。

それを一気に飲み干してゴミ箱へと投げ込むが空気抵抗が思いのほ
か強かつたらしく途中で失速し床に転がった。

それを見て軽く舌打ちし入らなかったコップを拾い改めてゴミ箱に
入れる、ふと気になり冴子の方を見ればどうやら少し疲れているら
しく椅子に座って自分の肩を揉んでいる。

それを見てニタリと笑いながらスススと気配を殺して音を立てずに
背後へと忍び寄り彼女のうなじにふうと息を吹きかけた。

「ひゃん!」

身体をビクリと跳ね上げ可愛い叫び声を上げた後、手加減のまるで感じられない裏拳が顔めがけて飛んできたが予測していた行動の一つだったのでそれを軽く避けて彼女の肩を掴んでマツサージを始める。

「今の裏拳、ワイやなかつたら直撃しとったぞ、もちっと手加減つてもんをやなあ・・・、それにしてもお前、結構肩凝ってんな。」

「君ぐらいしか私にこんなことしてこないだろう、仮に君でなくとも手加減の必要は無い気がするがな、ん・・・、もうちょっと右、最近胸が重くなってきてな、肩こりがキツクなってきたんだよ、アツ・・・、そこ・・・。」

「あゝ、先生それよくわかるなあ、先生も胸が重くて重くて・・・、偶に紫藤先生に頼んでマツサージしてもらってるんだけど、すぐに凝っちゃうのよねえ、というわけで秀治くん次お願い。」

秀治が凝っている場所をウリウリと攻め立てていると今まで隣で突っ伏していた鞠川先生が急に話に参加してきた。それもとても興味深い話を引っさげて・・・だ。

「あゝ、家の兄さんマツサージめっちゃ上手いねんな、意外も意外やけど・・・、昔はよう揉んでもらってたわ、それはそうと先生？家の兄さんとはぶっちゃんけどうなんですか？」

椅子を回して冴子を机に突っ伏させ隣で顔だけ上げてこちらの話に参加している彼女に声を潜めてたずねる。その間にも肩を揉んでいる指は休むことなく動き続けさらに凝り固まった場所を解し「あつ！！そこっ、そこお・・・。」と冴子を喘がせている。

周りの男子の何名かが腰を引いた体勢になっていたがそれは無視した。それ以外の男子と目を輝かせ始めた女子は紫藤浩一の恋バナというべきとても珍しい話題を聞きつけてきた人間だ。

「ええ？どんなって、どういうこと？」

「いや、家の兄さんを恋愛対象としてどうかって話ですよ。弟のワイが言っちゃなんですが、家柄良し、人柄良し、掃除洗濯炊事、何でもござれのパーフェクト超人やで、先生と同年やったはずですし結婚相手としてどうですか？ワイも歓迎しますよ？先生が姉さんになるんやったら。」

本気でボケている彼女に少し毒気を抜かれながらも人好きするような笑みを浮かべてしつこく喰らいつく。

「ええ〜！！先生いきなりそんなこと言われても……、ほらこんなのは相手の気持ちも大事だし……。」

「兄さんのことなら大丈夫、絶対に好意は持つてるはずやから！！あの過保護な兄さんがワイと冴子を危険に晒すのにも関わらず先生助けるようにワイ等に頼んでんで、これで何も思っていないってことはまずない！！」

絶対の自信を抱いて断言する。もしかしたらあの過保護な兄のこと手のかかる妹のような存在として保護者気分で付き合ってるのかもしれないが昔と比べれば大いなる前進には変わりはない。

秀治はこの振って湧いたチャンスを逃す気はサラサラなかった。ちなみに冴子にしているマッサージはすでに背中全体が終わり腕等の部位に移っており、
なすがままに揉まれている彼女はずっと前から蕩けていたりする。

周りにいた人間がもつと良く聞こうとしてジリジリと間を詰めてきている。話題の中心である紫藤浩一は高城となにやら話しこんでいてこちらには全く注意を払っていない。

「え〜、でも……、でも……。」

反論しようとして今までのことを思い返し、逆に肯定できる内容ばかりが思い浮かんできて彼女はだんだんと顔を赤くしてゆき慌て始めた。どこからかもう少し、後一步という声が秀治には聞こえた気がした。

「鞠川先生！！そこにキイは有りますか！？」

そんな弟の企みを崩したのはこの話の中心人物であり秀治の兄の浩一だった。声がかかった瞬間、周りにいた人間はビクリと体を跳ねさせた後、ほぼ全員が明後日の方向を向いて素知らぬ振りをはじめた。

「え！？あつ、はい！！今探します！！」

声をかけられた彼女はというと顔を赤くしたままこれ幸いと話から逃げ出して自分のバッグを開いて車のキイを探し始めるがそこにすぐさま浩一の声が飛んだ。

「あなたのコペンのキイではありません、部活で使うマイクロバスのキイです、こちらからではあなたたちが邪魔で見えないんですよ。」

「えっと、えっと・・・、あつ！！あります！！ちゃんとかかっ
ます！！！」

アワアワとバッグから手を離して壁に目を走らせキイがかかっていることを確認するとそれを浩一に報告した。そんな彼女を見てまんまと逃げられたと秀治は口惜しげに舌打ちをする。

「そうですね……、では皆さんに……、」
「なによ……、これ……、」
「……、」
「どうかいたしましたか？宮本さん……これは……、」

浩一が目を向けた先では宮本がテレビに目が釘付けになっていた。それを見てテレビに目を向けた彼の顔が険しくなつてゆきりモコンを手にとつて何も言わずテレビの音量をあげていく。

テレビに映っていたモノそれは先ほど秀治達も見ていたニュースの放送だった。

「皆さん、静かにしてこれを見てください。」

浩一が未だに雑談を続けている生徒を静めて注意をニュースへと向けさせた。

放送されているのは街の映像、ニュースキャスターの女性が現地の様子を伝えている途中にいきなり銃の発砲音が連続で鳴り響ったが

問題はそこではない、
その女性の後ろに映っていた中身の入っている死体袋、それが一人で起き上がったのだ。銃で撃たれたらしくすぐに力を無くし再び横になった、

それをみた彼女はパニックを起こし悲鳴を上げてそれでも尚現場の状況を掴もうとしているのが声で判断できる。

カメラマンが逃げたのかカメラが突然倒され彼女の悲鳴が遠くなくていく、どうやら逃げ出したらしい、・・・原因はわかる倒されたカメラに映っている足の持ち主達だろう、奴等が出たのだ。

そこで映像は途切れ、再びカメラはテレビ局に戻った。しかしニュースの発表ではこれはただの全国各地で起こっている暴動だから家の外に極力出ないようにという注意のみだ、奴等なことには全く触れていない。

「これが暴動！？馬鹿じゃねえのか！！」

「こんなのが全国で起こってるっていうの！？私たちは一体どこへ逃げればいいのか！！」

等と各自が思い思いに騒ぎ立て始める、それも無理は無い、今その状況に置かれている者からすれば文句の一つでも言いたくはなる。

「静かに！！奴等は音を聞きつけてやって来るそうです！！また襲われたくなければ黙って！！」

浩一が手を打ち鳴らして周りの注意を喚起し静かにするように警告する、しだいに喧騒もおさまってゆき、またテレビの音声のみしか聞こえない状態へともどる。

いつの間にかチャンネルを変えていたのか今放送されているのは諸外国の様子だった、各国も酷い有様のようだ。

「先生・・・、元に戻るんですよね！！また元の日常を過ごせるんですよね！！」

「できるわけないし・・・。」

女子の一人が浩一に縋り付きそう叫ぶように言ったが、それに浩一が答えるより早く高城が呆れ返り冷めたような口調でそう返した。

「高城！！そんな言い方は！！」

「パンデミックなのよ！！勝手になんとかなるわけないじゃない！！」

孝がその答え方を咎めたが彼女は止まらない、いや、さらに火がつ

いたかのように話し始めた。

鳥インフルエンザにスペイン風邪、黒死病等、歴史に残る数々の完全爆発の例を上げていく、

そんな中鞠川先生が肉だから一ヶ月ぐらい後には腐っているかもしれないと言って生徒達に希望を与える

しかし高城がその意見を腐るかどうかわからないと一刀両断し一刻も早くここから逃げ出すべきだと言って未だに事を軽く見ている者達に現実を叩きつけた。

これは元々生徒である彼女よりも先生という立場にいる浩一が言った方が問題は少なく済む筈だが彼女はそれをさせなかった。

なぜか？

今この状態で彼にその事を言わせてしまえば下手をすれば彼の、紫藤浩一という存在が持っている求心力が下がるか失うかをするかもしれない。

そうなればこの集団はバラバラとなり機能しなくなる。それだけは避けなければならぬ、纏まりの無くなった集団というのがどれだけ恐ろしいモノかを知っているからだ。

逆に今自分が問題を起こし、彼がそれを上手く納めれば求心力は上がる、集団は纏まり一致団結して事に挑むことができる。

元より彼が動かないことは有り得ないと断じての行動だ。自分が勉

強できるだけの頭でっかちの天才ではないと行動で示し彼に宣言しているのだ。

彼女は紫藤浩一と言う人間を認めている、最初のアレに動じることなく生徒を纏め上げその上でここまで来たのだ、そんな人間が無能である筈が無い、

その認識は自分の家とよく関わりのある人物、紫藤一朗の息子であることも後押ししていた。

「んだよテメエ！！もう少し明るく先を考えられねえのかよ！！さつきから気が悪くなることばっか言いやがって！！大体外に逃げるだど！？ここで救助を待てばいいじゃねえか！！」

「そうよ！！わざわざ奴等がうようよしてる外に逃げようだなんて馬鹿げてるわ！！」

こうして突っかかってくる輩がいることも計算内だむしろいなければ困る。彼女は眼鏡の位置を中指で直し腕を組んで真正面からそんな輩達と向かい合おうとするが、

そんな彼女の前に彼女を庇うかのように眼光を鋭くし杭打ち機を構えた平野が背中を向けて立ちふさがった。

それを見て大またでこちらに向かってきていた柄の悪い男子が怯んだように一瞬足を止めたが相手が平野だとわかると見下したような笑みを浮かべて平野と睨み合う。部屋に殺伐として空気が流れ始めるがその時

「静まりなさい!!」

浩一がそう怒声を発し拳を机に思い切り叩きつけた。轟音が部屋に鳴り響き騒いでいた生徒もそうでない生徒も身を竦ませて彼を窺った。

「今私達が争いあつて何になると言つのです!!いつも貴方達に言っている通り心に余裕を持ちなさい!!今こそそれを実行する時なのです!!」

心に余裕を失つた人間がこの先の化け物だらけの世界で生き残つていけると思つているのですか!？」

「心に余裕を持ち、常に冷静な判断を下して動けば私達がこの程度の苦難を乗り越えられない筈がありません!!今こそ真に心を一つにし結束を固める時です!!逃げるのではなく立ち上がつて現状に抗うこと、これを忘れてはいけません!!」

こつこつと足音をたてて先ほど作り上げたバリケードの前へと移動する。

「今自分にできることは何か?やらなければならない事とは何か?常にそれを頭の中で考えるのです。逃げていては何も掴めるモノも得られるモノもありませんただ失つていくのみです。」

どんな絶望的な状況に置かれようとも抗うことを忘れた者に栄光が

訪れることは無い、それは歴史が証明しています。だからこそ抗え！！今自分に出来るベストを尽くせ！！立ち向かうときは今なのです！！誇り高い藤美学園の生徒達よ！！」

身振り手振りを交え覇気を伴った力強い声で演説を聞かせる。浩一の持つ人を扇動させる才能と昔、父親に教わった政治家になるための英才教育を活かしたモノだ。

最後に彼が大きく両腕を広げ語りきった時、あたかもそれを待っていたかのように誰かが拍手をし始めそれは次第に周りを巻き込み喝采となる。

初めに手を叩き始めたのは彼の弟である紫藤秀治、彼もまた自分の兄から同じ教育を受けている、ならばこそこの行動である、初めて拍手をした者となり周りを巻き込んでサクラとなり兄を補佐した。

極限状態に追い込まれている生徒はそれに気がつくことはない、気がついたとしても高城ぐらいのものであったが彼女は何も言うことはない、これが自分の望んだ結果だからだ。

思った以上の結果を彼は引きずり出してきたが別に文句は無い、自分の仲間というべき者達はそれに吞まれてはいないからだ。

自分を責め立てていた生徒達は皆バツの悪そうな顔をして反省しているようだ。彼女は争いになる前に事が済んだことに安堵の息を吐いた、思っていたより介入が遅かったのだ。

「デブオタ。」

「はい、なんでしょう？高城さん。」

「庇ってくれてありがと、助かったわ。」

本心を言えばなぜ小室ではなくコイツなのかという不満はあったが危険を冒してまで助けに入ってくれたものに礼を言わない程彼女は礼儀知らずでは無い、尤も争いが始まってしまえば口汚く罵っていたのはあるうが、それはまた別の話だ。

彼はまさか礼を言われるとは思ってもいなかったのか目をパチクリとまたたいした後

「はい!!」

と満面の笑みを浮かべて大きく肯いた。

「きゃあ!!」

「な……、何だ!？」

「や……、奴等だ!!あいつ等ここを嗅ぎ付けやがったんだ!!」

不意にバリケードを張ったドアに何かがぶつかる音が聞こえ浩一の後ろを覗いた生徒は一樣に混乱し始める、なぜならドアのスリガラスに映っているモノ、

それは奴等の一匹がガラスに顔を擦り付けて中に入ろうとしているという考えたくも無いものだったからだ。混乱が感染しさらに騒ぐ声が大きくなっていく。

「選りなさい！！私と共に奴等に立ち向かってこの学園から脱出するのさ！！それともこの学園に残り奴等に怯えて隠れ逃げる道を選ぶのかを！！」

そんな中、戸を叩く音を背に浩一は両腕を広げ生徒達全員に聞こえるように声を大きく張り上げてそう問いかけた。

5話

「助かりました。」

「いえいえ、お礼には及びません、生徒を助けるのは教師としての使命ですから、私達はそのままバスに向かいこの学園から脱出します。ついてきますか？」

「はゆ、はい！！ぜび！！」

その後、誰一人として残るといふ者はいなかった。浩一を先頭に戦える者が奴等を排除して正面玄関へと降りる階段で奴等に囲まれていた男女数名を新たに仲間にして今に至る。

もはや人数は50人に近い、武器を持っている者が過半数以上いるとはいえ音を立てずに移動するといふのは不可能な状況だった。

武器を持っていると言っても実際に使えるといえる者はさらにその半分の10名そこらだ。状況は依然として厳しくいつ死人が出てもおかしくはない、

むしろ此処までよく無事に辿り着けたといっても過言ではなかった。

「さてここからですが……。」

階段から下を覗いてみればかなりの数の奴等が正面玄関までの間を徘徊している。これでは戦える者が血路を開く方法では切り抜けられない、囲まれて喰われていくのが目に見えている。

「誰かが高城君の説を試すしかない……か。」

冴子の言葉に浩一はうなづいて同意を示し、生徒達の顔を見回していく、数名を除いて嫌そうなどというより怯えた顔をしている者ばかりだ。

「そうですね……、ではここは「僕が行きます。」……小室君？」

見回した後目を瞑ってため息を吐きながら誰が行くのかを言おうとした所で何か考えるような表情をしていた孝が名乗りを上げた。

「理由を聞いてもかまわないか？こういう役は私達の方が適任だと思うのだが。」

「同感やな、ワイ等の方が向いとる。」

秀治と冴子の二人がそれを止めるように前に出るが孝は静かに首を振ってその申し出を断った。

「二人は何かあった時のために控えておいて下さい。」

「孝・・・なんで？」

「何でかな？」

宮本が困惑したように孝に縋り付いて聞くが、孝自身もなぜ自分がこんな事をしているのかわかっていないのかそう返すだけだった。

「何もかも面倒なんじゃないの？」

「今でも面倒だよ。」

そういつて孝は困ったような笑いを浮かべて下へと向かおうとする。それを何とかしるでも言うつかのように宮本は浩一を睨んだ。合流した当初は上手く隠していたのかその目には嫌悪のような色が見え隠れしていた。

浩一は真剣な顔でその視線を受け止めると軽くうなずき

「素晴らしいほど仲間思いですね、小室君、私は君のような勇敢な

生徒を持ってて幸せですよ。」

と言つて奴等に聞こえないほど小さく拍手した。それを聞いた孝はそんなんじゃないとでも言いたげに照れたように苦笑して頬を掻いた。宮本の目がさらに厳しいものへと変わる。

「しかし・・・、私の仕事をとられては困りますね、こういうのは教師の役目であり大人の役目ですよ、だから下がっていなさい、」

「先生に何かあつたら誰がこの集団を纏めるんですか？」

「音さえ立てなければ何も起きませんよ。私は高城さんを信用しています。不明瞭な情報を渡すほど彼女は馬鹿ではありません。仮に何かあつた時には秀治か冴子さん、もしくは君に任せましょう。」

「俺に・・・、ですか？」

「ええ、この状況で自分から名乗り出ることが出来る人は少ない・・・、それが出来る人、それは人を率いる者としての資質がある人間です。」

それを言えば自分が呼ばれるだろうと待っていた秀治も冴子さんもその資質はあるでしょうが、私は自分から名乗り出たあなたを高く評価します。

何、私のことは心配入りませんよ、これでも合気道の段持ち、投げ

飛ばして殺すことはできません。だから私に任せなさい。」

「は……はあ。」

相手に何も言わずに言葉を叩きつけ封殺するマシンガントーク、孝はそれを聞いてまだ納得していないながらも何を言っても無駄だと悟ったのか不承不承それにうなずいて了承をしめした。

秀治は兄が何がしたいのか大体わかったので何も言わずに先ほどからその兄を睨んでいる宮本を本人に気付かれない程度に観察していた。

兄も気付いているのに何も言わないので黙って観察しているだけに止めている。

生徒全員が固唾を呑んで音も無く奴等の蠢く一階へと下りその中に混じっていくのを見守る。奴等は自分達の中に生者が紛れ込んだのに気付いた様子はなくただ彷徨っているだけだ。

そんな中彼に歩み寄ってくるモノが一匹、誰かが息を呑んだ音が不気味と大きく聞こえた。浩一は何ら慌てることなく無言で構えるがソレは何をするわけでもなく彼の隣を通り過ぎて行った。

安堵したような空気が辺りに流れたがここで息を吐いてしまえば奴等に気がつかれる恐れはある。どこまで音に敏感なのかはまだはっ

きりとわかっていないのだ用心するに越したことは無い。

浩一はいつの間にか汗でじっとり湿っていた手を拭い足元に転がっていた靴を手にとって思い切り自分達が進む方向とは別の方向の壁へと投げつけた。

投げつけられた靴が壁にぶつかる音が思ったよりも響きその場にいる奴等全員を引き寄せる、それはまるで誘蛾灯にさそわれる虫のようであった。

彼はもう自分の置かれている状況になれてしまったのか音をならすことなく奴等の間を縫うようにして移動し閉じていた正面玄関の扉を開け放った。

「次は誰行く？ワイは最後に行かせてもらっけど。」

「私が行こう、まだ奴等も多い」、どうすれば奴等の気を引けるのかもわかった。」

「気いつけるよ？」

「わかっているぞ。」

次に冴子、その次に孝と次々に玄関へと向かい40以上いたのがす

でに10名以下だ、現時点で残っているものの中で武器を持っているのは二人、さすまたを持った少年と秀治のみだった。

「次、さすまたの少年、お前が行け。」

「はっはい。」

先陣を切った人間が全員なにかしらの物を壁に投げつけ奴等の気を引きに引いていたので近くにいることには変わりはないが、玄関まではもう何の影もない。

しかし、それが少年の油断を呼んでしまったのか、走っている途中にさすまたと手すりが当たってしまい甲高い金属音が一階だけだけでなく外にまで響いた。

「「走れ（りなさい！！）」」

孝と浩一の声が重なり全員がそれに従い、まずは武器を持った者達が道を確保するべく玄関から飛び出した。

残った者達も一様に玄関へと走り出したが・・・、途中で戻ってきた奴等に横から襲われ絶叫と共に食われていった。

それにつられて更なる数の奴等が玄関までの道を塞いでしまいもはや切り抜けることも出来なくなってしまう。

「先陣切ったほうが良かったかもしれんの、殿なんぞ勤めずに。まさかここまで足引つ張るやつがおるとはのお・・・」

秀治は喰われていく者達を見て無感動にそっぴい捨てる。他に逃げ道は無い。か周りに目を奔らせて探した。しかしそれは見当たることなく、やはり切り抜けるしかないのかと思ひ兄がいる。だろ。う正面玄関に目を向けた。

「ああ、そっか・・・、こっちが塞がれてもまだあつこは通れるかもせん。正面玄関・・・、間に合うかねえ？」

焦りが一周してしまつたのか。極限まで冷えた頭がまだ間に合うと思われ。る逃げ道を弾き出す。それを実行すべく秀治は踵を返して二階へと駆け上がった。いった。

「冴子さん、秀治は!!」

「わからない!! 彼のことから大丈夫だと思つが!!」

浩一が襲い来る奴等を投げ、倒れたところを足で首を踏み折り、牙子が奴等の頭を的確につぶし、後ろで逃げている者達に近づけさせまいとする。

しかし、いかんせん数が違いすぎる、こちらは戦えるのがすでに15名前後、奴等はおそらく2、300は下らないだろう。唯一の救いは走ってくるかもしれないので離れた場所にいる奴等がくるまでにはまだ時間があるということだろうか？

「このままでは支えきれんぞー!!」

「それでも支えるしかありません!! 私達がここで諦めては誰が彼らを守るといのです!!」

すでに何人の生徒が犠牲になったのかわからない、把握していられるほどの余裕などない、武器持ちの何人かもすでに喰われている。しかし喰われた者がいることで奴等の包囲が甘くなり自分達が逃げやすくなっているというのは認めたくない事実でもあった。

そんな中校舎からガラスが割れる音と誰かの雄たけびが轟いてくる。その音の主は秀治、二階から窓ガラスを蹴破り正面玄関の屋根を影も無く疾走している。そしてそのままの速度で彼は宙へと跳び、グラウンドへと着地した。

「なんとも派手な登場ですね。」

「二階から飛び降りるか・・・、相変わらず無茶するやつだ。」

守りが手薄な場所ではすでに何人もの生徒が奴等の餌となっている、すでに残った人数が20名近くしかない。

ほとんどの武器なしの生徒は乗り込んだがまだ乗り込んでいない生徒もいる。武器持ちは皆奮闘してはいるがすでに後10名前後、そろそろ支えるのも限界だ。

「紫藤先生！！バスの準備が整いました！！早く！！」

バスの入り口を平野と共に守っていた孝の声が聞こえてくる。数に押しつぶされそうになっていた前線で戦っている生徒達にとってそれは光明だった。

279

「皆さん早くバスに乗りなさい！！慌てず迅速に！！」

浩一の隣を眼鏡をかけた男子生徒が通り過ぎる時にその生徒が足を纏れさせて躓いてしまい地面を滑るようになってしまう。

「あつ・・・！！足が！！」

どうやら足を挫いてしまったらしくその場でもがいている。

「冴子さん!!」

「わかっていきます!!」

転んだ彼を助け起こして背負いバスへと走る、襲い掛かってくる奴等の相手を冴子が一手に引き受けているなか孝がそれに加わった。

「手伝います!!」

「助かる!!」

一方秀治は首のタオルを掴まれて喰われかけていた少年を助けその少年を守りながらバスへと向かっていた。

バスとの距離はまだ遠い、道を作っていた生徒達も今はバスへと引き上げてしまっている。奴等をバスの入り口に近づけまいとしているのは平野、孝、冴子の三人のみだ。

奴等にとってエンジン音を鳴らし発車を待つバスはとても旨そうな餌として見えるのだろう、校庭にいる奴等は皆それを目指してゆっくりと距離を詰めてきている。今バスから出て来た兄が加勢しているがおそらくそう長くはもたないだろう。

とはいえ自分達も人のことをいえる状況ではなく、未だ細く残っている道を通ってはいるがほとんど囲まれているといってもいい状態だ、

このまま行けば奴等がバスに取り付き始めるのが先か、それとも自分達が奴等に完全に囲まれておやつにされるのが先かのどちらかだ。

元々完全には支えきれてもいなかったのだ、その上守っていた生徒がいなくなってしまうえば奴等が押し寄せてくるのは当たり前のこと、しかし戻さなければ喰われていただろう、冴子と自分以外はお世辞にも強いとは言いがたい者達ばかりだ。

もはや生徒達が体を張って作っていた道は急速に閉じようとしている、バスも限界は近い、自分達がもし無事に着けたとしてもその頃にはバスが限界を超えている。

もしそうなればどうなるか・・・、おそらく兄と冴子は最後まで戦ってくれらるだろう、自分が生きている限り見捨てることは無い筈だ、しかしそれは二人を死地に送り込むこと他ならない。

それは秀治にとって我慢できることではない、自分が命を捨ててで

も守ると決めた人たちが自分の責任で死ぬ、そんなもの認められるはずが無い。

自分一人ならばものの数秒で辿り着いて見せるのにと齒噛みした時、今遅れているのはこの少年を守っているからではないか・・・、と思ってしまった。

そう思ってしまった時すでに秀治の目には自分の後ろでバットを振り回している少年が自分と自分の大切な人たちを死地に誘っている原因だと映った。

それ故に、見捨てることに躊躇することはなく、戻すことの出来ない引き金を自分から引いた。

「よお、二年坊。」

「なんですか!？」

二人ともに奴等を殺しながらの会話、しかしこうして話していられるのは少年のペースに秀治が合わせてやっていたこと他ならない。

「バスの方も限界が近いみたいやからワイは走る、これから先は守ってやらねへんから自分の命ぐらいは自分で守れよ。」

「そ・・・、そんな!？」

実質見捨てると言っているのに他ならない宣言に少年の顔が焦りと絶望に染まったが秀治はそれを何ら気にすることは無い。彼の目にはすでにこの少年が自分の敵としか映っていないからだ。

「じゃあな、生きたきゃお前も走れよ。」

「先輩!!ちよつと待って!？」

何か言おうとしているが元より返答は求めていない、何を言っただろうと聞く気が無いからだ。

故に抑止の言葉を見捨てて秀治は走りだす。完全に置いていかれた少年は少しの間呆然としていたが我に返ると置いていかれまいと同じように走り出した。

周りの奴等をいや景色すらも全て置き去りにしての全力疾走、走り故に音は余り出ること無く、奴等が気付いたところには既に横を駆け抜けている。

バスは依然としてエンジン音を鳴らし奴等の注意を一手に引き受けている、今自分が奴等の近くを走っても余り気がつかれることはないのはソレのおかげだろう。

しかしそれは守っている者の負担が大きくなってきているというこ

とだ、今は4人で支えていられているようだが守っている者達の顔には既に焦りしか浮かんでいない。すでに限界は超えている。

やはり走って正解だった、思っていたより奴等がバスに近づくのが早い、走らなければ完全に手遅れになっていただろう。

「全員バス乗れえ!!」

その声を聞いた者が全員こちらを見て急いでバスに乗り込む、どうやら後ろの少年はまだ取り残されてはいないらしい、もしそうなら全員がバスに乗り込むことは無かつただろう。

その数秒後に秀治が入り口に飛び込むのに邪魔な奴等を後ろから踏み倒しソコに飛び込んだ。

「何とか間に合ったか・・・さて、あの二年坊はどうなってるか・・・。」

荒れた息を整えながら誰にも聞こえないほどの小さな声でそう呟き額の汗を拭いて見てみれば、奴等に完全に囲まれて身動きがとれなくなっている少年がいた。

どうやら自分が通った後に完全に道が閉じてしまったようだ。

「先輩!!」

奴等の中から彼の叫び声がする。顔にはありありと助けてくれと書いてあったが、元より秀治には助ける気は有らず、状況はすでに手に負えないものになっている。彼には悪いがもう手遅れだった。

「鞠川先生・・・、バス早よ出して。」

それを何ら感情の浮かんでいない無機質な目で見つめた後バスのドアを思い切り閉めて運転席に座っている彼女にそう言った。

「えっ！！でもあの子は！？」

「手遅れや、助けに行ったとしても何人死ぬかわからん、はよ出せへんかったらワイ等も手遅れになるで、っ！？もう来よった！？早くバスだし！！」

急かすようにバスのドアが外から叩かれる、いやドアだけではない、平野が射撃している窓のしたにも奴等が取りつき始めている、秀治はドアが開けられぬようにあらん限りの力を込めソレを閉め続けた。

「　　ッ！？わかったわ、でもあの娘を何とかして！！これじゃあバス出したときに落ちるわ！！」

その音を聞いて決意したのか彼女はそう返してバスの後ろを指差した、見れば窓から身を乗り出し「卓造!!」と叫び手を伸ばしている女子がいる。

それを見た少年がバットを無茶苦茶に振り回してバスに近づこうとするがそのバットすら奴等に奪われ組み付かれた。

「ナミ!! ナ、ミ、イ、イ、イ、イ、イ、イ、!!」

そう最後に絶叫を上げ、彼は奴等の波に吞まれて消えた。

「卓造!?! いや・・・、いやああああ!!」

泣き叫んで窓から外に出ようとするが冴子がソレを許さずにバスの中へと引き戻す。尚外に出ようと暴れるが浩一がソレに素早く近づき首に手刀を叩き込んで気絶させた。

「愛する人が奴等になるところなんて見せるものではありません、今は眠っていた方が幸せでしょう・・・。」

浩一が悲しげに顔を歪ませながらそう言って窓の外を見れば・・・、すでに奴等は彼のいた場所には群がってはおらず・・・、奴等の中心から誰かが新たに起き上がるうとしているのを見えた。

「　　ッ！！鞠川先生！！扉が破られる前に早く！！」

「わかりました！！・・・ッ！！もう人間じゃない、もう・・・人間じゃない！！。」

それ以上見ることができずに目を逸らし彼女に出発するように声をかける、彼女は自己暗示をかけるように自分にアレはすでに人間ではないと言いつき聞かせアクセルを思い切り踏みつけた。

タイヤが急速に回転を始め、それに続くようにバスが一気に加速し纏わり付いていた奴らを引き剥がし発進する。

バスの中は急発進に続いた急カーブにより大いに揺られ、絶えず奴らが車体に当たり撥ねる音とその衝撃と共に耳に入ってくるような有様だった。

最後に先ほどとは比べ物にならないほどの衝撃がバス内部を襲う、ついに正門を破り学園の外に出たのだ。

こうして学園脱出はなった、一時は50人近くにまでなった人員は今では半数以下に減っている。

浩一はそのことを考え悲痛そうに顔を歪めて結局必要なくなっ

まったもう一つのバスのキイをクルクルと回してもてあそびため息と共にそれをポケットにねじ込んだ。

「……………」
「雨きそうですね、これは。」

先行きに不安しかない門出になってしまったことに内心頭を抱えて無意識の内にそう呟いた。

6話

「だから！！さっき言ったとおり学園の中で安全な場所見つければ良かったんじゃねえのか！！そうすればもっと死ぬ奴が少なかったかもしれねえじゃねえか！！」

「そうだよ！！さっきまで四十人近くいたのに今じゃもう二十人もいないじゃないか！！さっきあったコンビ二とか安全な場所で助けを待てば良かったんだよ！！」

金髪の柄の悪いし男子がバスの中央に立ち回りを威嚇するように睨み付けながらそうが成り立てる。それに追隨するように気弱そうな男子もそう続けた。

窓の外ではテレビ局のヘリが奴ら？（パニックに陥った人間かもしれない）にしがみ付かれながらも飛び立ちソレらを振り落としていく。その中の一体が偶然バスの近くに落下し地面にグロテスクな赤い華を咲かせた。

「ちょっといい加減にしてよ！！こんなんじゃ集中して運転できないじゃない！！」

それを見てしまった鞠川先生が先ほどからのバスの雰囲気もあいまってバスを停止させ後ろを向き騒いでいる男子達を叱りつける、そ

れは八つ当たりに近いものではあったがそうしなければ自分を保てないほどに彼女も現状に追い詰められていた。

「クッ!!」

「君はどうしたいのだ?」

そんな男子生徒に呆れた目を向けながら冴子がそう尋ねると

「こいつだ!!仲間見捨てて殺したくせにのうのうとこのバスに乗ってやがるこいつが気に入くわねえ!!こいつが途中で卓造ってやつ置いて走ってこなかったらアイツは死ななくてもすんだんじゃねえのか!!」

そう怒鳴り指を指したのは先ほどからの喧騒も全く気にすることなくただ呆然と外の景色を眺め続けていた秀治であった。冴子と浩一の眉がピクリと動くが皆、秀治に注意がいつておりそれに気付いた者は誰もいなかった。

「……………、まあ見捨てたんも殺したんも確かに事実やわな。」

指をさされていた秀治はゆっくりと窓の外からその男子生徒へと能面のような表情が全て消えた顔を向け長い沈黙の後そう答えた。

あのことは秀治の中では元々一度喰われそうになっていた所を救いそれが足枷となったから切り捨てただけの話だった。自分がいても居なくても結局死ぬことには変わりが無かっただろう。

しかし、それは他の人から見れば確かに見捨てて殺したことにしか見えないのだ。それが反感を買いこういう事になっても不思議は無かった。

「……そうよ、あんたが！！あんたが卓造を見捨てなければ！！」

「やめなさい！！今そんな事を言っても意味が無いでしょう！！」

浩一が慌てて止めに入ったが一度漂い始めた空気は止まることはない、そこかしこでヒソヒソと声を潜めて秀治を糾弾し始めている。元々そういう空気は存在したが今の問答で完全に火が点いてしまったのだ。むしろここまでもったことこそ奇跡といえる。もっとも日本人特有の事なかれ主義が生み出したモノといえればそれまでだが。

秀治が音一つたてることなく静かに席を立つとそれだけで周りの声が静まり返った。糾弾はすれど直接火の粉を浴びることは嫌なのだろう、大体の人間はそんなものだ今の状況で抱えている不安を何とかしたいからとりあえず見えやすい標的に当たる、いきなりこんな世界に放り出されたのだからそんな行動をとるのも仕方ないことだ。ここにいる皆は特殊な訓練を受けていたわけでもないただの学生、そうただの学生なのだから。

「んだよ……、事実を言われてキレたのか？何とか言えよこの人殺しがあー！ー！」

一歩も退くことなく糾弾してくるこの少年は稀有と言うことができ
るだろう。少なくともここそこそとしかできない奴らより勇気がある。
流石武器を取って他の人が乗るまでの時間稼ぎをした一人とでも言
えようか。だからこそ許せないというのもあるのだろう、自分より
も強い秀治が他人を見捨てたということに。

「……ワイは何の理由も無く人助けで命を賭けられるほどお人よし
じゃなくての、お前の言ってることもそうや、よく知りもせん足手
まといを助けながら行っとつたら死ぬと思ったから置き去りにした。
ただそれだけの話や。」

深く息を吸った後しつかりと少年の目を見据え声から感情を消し去
り冷たくそう言い放つ、いい終わって数瞬後、何を言ったのか理解
したのか再度バス内部が喧騒に包まれる。ゆっくりと周りを見回し
てみればほとんどの学生が自分に向けて敵意の視線を放っている。
向けていないのは兄と冴子、そして意外なことに小室達の5人……
いや宮本を抜いて4人だけだ。

「てめえ……それ本気で言ってるのか？」

「ああ、本気やとも冗談とでも思ったか？」

人を殺したという事に対して何とも思わない、いや思えない。他人を殺したことぐらいで動じるものなど無い、なぜなら自分……紫藤秀治は母を殺して歡喜の情しか沸かなかった人間なのだから。

「それで？ワイにお前は何を望むんや？」

もはやバスに乗って行動を共にするということも出来ない。ならば最後に集団を纏めるのに一役買うのもいいだろう。相手が要求することなんてわかりきっている。

「待て一つだけ聞かせろや、てめえはこれからも他人を切り捨てても生きる道を選ぶってんだな？」

「ま、そのつもりでおるよ」

「わかった……もういい、もう喋るな。このバスから出て行け、てめえなんて仲間じゃねえ……敵だ」

「そつだ出て行け……！」

「お前なんて仲間じゃねえよこの人殺し!!」

その一言でまたバスの中が喧騒に包まれる。本当に事が面白いぐらい思い通りに運ぶ、人を扇動するのは兄よりも苦手なのだが……、これが頭に血が上った相手ほど躍らせやすいというものか。

なるほどいつも兄が余裕を持ってという理由はこれだったか。

そう思い横目で兄を見ると何か行動を起こし始めようとしているのを見て、それをサツと手を上げて制止する。どうせ今言ったことを逆手にとるような案を出してこのバスから追い出されないように便宜を図ろうとでもするのだろうか。きっとその案は自分が戦闘の矢面に立つとかいうモノだろうが……そんなことさせるものが。

「オーケイ!!お前らの言いたいことは良くわかった。流石にここまで反感持たれとんねやつたら素直に出て行くわ、寝首搔かれないからのお!!」

周りの喧騒に負けないほどの大声を張り上げそういうが早いか目の前に立つ少年を押しつけてバスの入り口に向かう。

「待ちなさい!!秀治!!」

後ろから兄の声が聞こえるが無視する。すでに賽の目も振られてい
るのだ、たとえ兄といえど出来ることなど何もないだろう。

バスの外にでて少し歩いてから空を見上げて立ち止まる。もう夕暮れ時だ空がいつもものように赤く染まっているのを見て何故か無性に腹立たしかった。

背後からバスの扉が閉まる音がする。兄の声が聞こえないのをみるとどうやらあの過保護な兄も諦めてくれたようだ。ここからは独りだと思つと自分でやったことながらも溜め息を出さざる終えなかった。

「私を置いていくなんて感心しないな。」

そう考えていた故に背後から聞こえてきた声に驚いて後ろを振り返るとそこには少し悲しげな顔をした冴子が立っていた。

「お前には安全なバスの中にいといてほしかってんけどなあ。」

「本当に、君は人に頼れやらパートナーやらと言っておいて私にはまるで頼ろうとはしないのだな……そんなに私、いや人に頼るのが怖いか？」

「ッ!?!?」

そう言いながら顔を更に悲しげに歪ませながら近づいてくる冴子に
思わず息を呑み無意識ながら後ずさりする。

「私の身を案じてくれるのは嬉しい、しかしそれ以上に傷つけてい
ることに何故気付いてくれない？共に歩むとは君が私に言ってくれ
たことだろう……」

こちらの後ずさりなど知ったことかとも言うつかのように何の戸惑
いも無く距離を詰めまた後ろに下がろうとする秀治の腕を掴んで引
きとめ彼の頭を優しく抱きしめる。

「大方の事情は浩一さんから聞いている。頼られたところで拒むこ
となどしない、私には君が必要だ、だから置いていかないでくれ」

母親が子供に諭すように優しく言い聞かせながら彼の頭を撫でる。
事情を聞いていると言った時に秀治が怯えるように体を震わせたが
それも少しして収まった。

「ッ！？すまん！！ちょっと我慢せよ！！」

「なっ、なんだ！？」

少しの間そうしていた後秀治は焦った声でそう言って冴子を抱きかかえて目の前のトンネルへと逃げるように走りはじめた。

何事かと思い後ろを見れば自分たちの背後からかなりスピードを上げたバスが突っ込んで来ている、中で何か起きているのか運転は滅茶苦茶だった。そしてそのまま路上に止めてあった車とぶつかりそこを軸にバスが跳ねて飛び横転する、しかしその勢いが全て殺されることはなく地面を削るように火花を散らしながらなおソレは二人に迫っていた。

二人が駆け込んだ瞬間バスがその入り口を塞ぐように衝突し炎上し始める。

「何とか間に合ったか……」

「いやまだだ!!」

冴子をおろして安堵の息を吐くが、まだ終わりでは無いとでも言うかのようにさらに炎は勢いを強くしていくそれを見た冴子は彼の手を引きトンネルの出口へと走った。

それに一拍おいてガソリンに引火したのか更なる爆発音と共に爆風が二人の背中へと向かっていく。トンネルから出た瞬間に秀治は冴子を後ろから抱きかかえ地面へと伏せるようにして飛び、ついに追

いついた爆風に吹き飛ばされた。

吹き飛ばされながらも腕の中にいる彼女を傷つけまいとしっかり抱きしめ右肩を削るように着地し地面を二転、三転と転がっていきようやく停止する。

「……よお、大ジヨブかあ？」

「おかげさまで私は大事ないが君こそ無事か？」

「なんとかな〜……」

痛む肩を抑えながら立ち上がってみれば先ほどの爆発音に惹かれてきたのかヘルメットを被った奴らが一匹近づいてきていた。

「さっそくお出迎えか……」

「一匹だけだ幸先は良いようだな」

すれ違いざまに冴子が木刀でソレの首をへし折り秀治に肩を貸しながら階段を上っていく。

先ほどなんとか無事だと言っていたが恐らくそれは嘘なのだろう、

背中が爆炎に撫でられたのか少しだけ焦げており、彼の両腕は先ほど地面を転がったときに負ったのだろうか皮膚が浅く切れて血が滲み出ている。

「本当に大丈夫なのだな？」

「見かけだけや、言うほど重傷やない。うん？」

本当は右肩を動かすだけでも激痛が奔っているのだが笑って安心するように言っているとバッグから何か音楽が聞こえることに気がついた。どうやら奇跡的にi p h o nは壊れていなかったようだ。

「む、兄さんからメールか……、何々、無事だったらメールを返すように……か、それじゃ返信っと」

二人とも無事だと打ったメールを送信してそのままネットに繋いで現在地の確認を始める。

「ん、ちょっと今ここ何処か調べてるから周りに奴らがアレ以外におれへんかどうかの確認を頼むわ」

「わかった。」

冴子はそれを聞くと一瞬うれしそうな顔をした後そう言って土手の下へと向かっていった。

「ふんふん、よし大体の地理は覚えた橋は向こうか、しかし遠いねえチャリの一つでもあれへんもんか……」

「秀治！！ちよつと来てくれないか！！」

何か見つけたのか冴子が土手のしたで大声を上げて自分を呼んでいる、大声を上げているところからみてどうやら周りに奴らはいないらしい。

「ん〜なんや〜？」

「エンジンのかかっているバイクがある！！土手に上げるのを手伝ってくれ！！」

「マジで！？」

すぐさまバッグにiphonを放りこみ土手の下に降りて彼女の元へと駆けつけると確かにバイクが転がっていた。さっきのヘルメット奴の物だろうか？

二人で協力してそれを土手へと引き上げて何所か破損していないか調べ始めるがどうやらそれほどスピードを出して土手下へと落ちたのでは無いらしくどこにも目立つ傷はなかった強いて言えば少しだけ塗装が剥げている程度であろう。

「どうだ、いけそうか？」

「ん〜、まあ大丈夫なんちゃうの、ガソリン漏れてるわけでもないし……」

「運転は免許を持っている君にまかせたぞ」

「今年の夏あたりお前とツーリングしてどっか行こうかと思って取ったもんがこんなところで役に立つとはなあ……」

今年の初め辺りに今村にバイクの魅力を語られ免許を取る決意をし（彼女と遠出できるが決めてだったのは言うまでもない）春休みをそれに当ててまで取ったのだ。それがこんな形で役に立つとは思ってもみていなかった。

それを言えばこんな世界になること自体カケラも予想していなかったのだが……、これに関しては予測しろというのが無茶な話だろう。

「フッフ、人生何が役に立つか分からないというものさ、無駄にならないだけよかったじゃないか」

「そう思っとくかねえ、まったく……」

冴子は何がおもしろいのか含み笑いを洩らし、秀治は初めてバイクに二人でのるのがこんな楽しみも何も無いものになってしまったことに残念だと言わんが如く肩を落として溜め息をついた。

「さて、とりあえず橋にでも向かうとしようや、合流するにせよ家帰るにせよ渡らなあかんねんから、ホレはよ後ろ乗り」

「はいはい、わかったからそう急かすな」

ストッパーを外しバイクに跨り後ろの開いた座席の部分を叩くと彼女は両手をあげて宥めるようにそう言って後ろに乗った。

「それじゃ、急ぐからしつかりと掴まっとけよ」

「ああ、わかった、だが急ぐのもいいが事故だけは起こさないでくれ」

「あいあい」

顔に底意地の悪い笑みを浮かべ唇をなめあげてからアクセルを思い切り回した、当然バイクは一気に加速しはじめ……

「なっ！？ちよつとまで秀治！！もつと安全運転を！！」

「なにい？聞こえんなあ！！まあ安心せえ事故は起こさんよ事故はなあ！！フハハハハハ！！」

冴子の抗議の声と秀治の笑い声をその場に残し二人を乗せたソレは土手をかつ飛んで入った。

命がヒヤリとする感覚が大好きなある種の変態といえる秀治はスピード狂だった。後に冴子は寿命が縮む思いだったと語ったという。

6話（後書き）

何故原作で乱交バスが起こってしまったかの考察

人には三大欲求である食欲、性欲、睡眠欲の3つがある、バスがあの状態になったのはZ-dayから3〜4日経ったところ。

つまりはその間満足な食事など取れておらず、奴らが外にいるためにバス内部という閉所に閉じ込められていたということになる。

寝心地の悪いバスの座席では睡眠も満足に取れていたとは思えない、寝たにせよ体は凝り固まっていたはずである。もともと奴らがすぐ外にいるという恐怖があるというのに安心して満足な睡眠を取れるだろうか？おそらく否であろう。中には悪夢を見て眠れない生徒もいたはずだ。

描写をみるに水分不足にはなっておらず、排泄物もバスには無いようなのでそのときばかりは外に出ていたことになるそして水などは奴らが近くにいない自販機でジュースか何かでも買っていたのではないかと思われる。

三大欲求である二つを満足に取れず、バスという密室ともいえる場所に数日間閉じ込められていた彼らにとって性行為というものは唯一の気晴らしといえる物だったのではないだろうか？作中で紫藤が恐怖とは最大の媚薬、と言ったのはこのことを指しているのだと推測する

そして紫藤浩一がそれを許可したのは自分の影響力を落とすたくなかったためだと考えられる、もしそれを禁止してしまった場合生徒たちの不満は彼に向くことは避けられなかったはずだ最悪暴動に至

り追い出されていたのはサスマタの少年ではなく彼になったかもしれない、それを許可した場合自分が何をせずとも影響力が上がるのだ生徒を駒としてしか見ていなかった紫藤が許可しない理由が無い許可しても何も痛むものもないのだから。むしろ勝手に懐いてくれるのだ彼にとってこんなにおいしい話もないだろう。

最後にどうしてあぁなっぺっていったかを考えるに

誰かがそういうことを始めた　ほかの人も真似しようとするが紫藤先生の顔を伺う　紫藤先生がそれに対し喜んで許可を与える
乱交だー！！

おそらくこんなところだろう。

以上考察を終了する。

7話

すでに時は真夜中過ぎ、バスは渋滞に巻き込まれて遅々として進まないようになって数時間経過している、おそらくこのままでは朝になっても橋は渡れていないだろう。

そんな中、浩一は外から聞こえる銃声に怯える女子生徒二人と真摯な態度で向かい合い宥めていた。恐怖は伝染していくものなので放っておくこともできないからだ。弟が身を挺して不安分子達を鎮静していった以上、集団として完璧に纏めるこそが浩一の義務であり使命であった。

「そんなに怯えなくても大丈夫ですよ。このバスは安全です。外の銃声も警察の人が奴らを殺すために撃っているだけです。害はありません。仮に奴らが入ってきてしまったとしても私があなた達を全力で守り通しますから安心して今は眠りなさい。子供はもう寝る時間ですよ」

「は……はい!!」

人好きする笑みを浮かべて安心させるようにそつと頭を撫でていると女子生徒達は目に尊敬と何か熱いモノを浮かべ元気よく頷く。すでにその顔から恐怖の色は消え去りはじめていた。

それを見て浩一は満足そうに頷くと最後にクシヤリと彼女たちの頭を一撫でしその場を放れ肩と首の骨を鳴らし凝り固まってきた体を解しながら少し眠そうな鞠川先生の座っている運転席へと近づいていく。

「鞠川先生、運転代わりますよ、あとは私に任せてゆっくり休んでおいてください」

「いいんですか？紫藤先生、あなたも休んでおいた方が……」

「私はその気になれば3日寝ずに行動できるのは知っていますでしょう？寝不足や疲労は美容の大敵でもあるんですからここは素直に代わっておきなさい」

「……、わかりました。それじゃあ後のことは任せましたよ、紫藤先生」

子供に言い聞かせるような口調に少し不満気に頬を膨らませつつもやはり疲れていたのかそれ以上は何も言わずシートベルトを外して少しふらつきながらも後部座席に向かおうとするが途中で床に転がっていたバットに足をとられ目の前にいた浩一に倒れ掛かるかたちとなった。

「おっと気をつけて下さい。床には色々なモノが転がっていますか

ら注意しないとこけてしまいますよ」

「す……、すみません今どきますんでって、あれ？」

浩一に抱きしめられているような体勢になったことに赤面して離れようとするがいつの間にか手首を捕られ背中に手を回されて離れられないようにされていた、どういふことかと思ひ浩一の顔を見れば真剣な顔をして自分の顔を見つめている。

「え？ええ！？ど……どういふ……」

元々疲労と眠気でばやけていた頭が混乱し始め、不意に昼間、目の前にいる人の弟である秀治に言われた言葉がよぎっていく、

『絶対に好意は持っている』

それがよぎっていったとたんに浩一の顔が徐々に近づいてくるのを見てさらに混乱の度合いは増し……、嘘！？あれって本当だったの！？やら、まだ私心の準備が……、等の思考がぐるぐると頭の中を回り始めどうすればいいかわからずにオロオロとし始めるが、もう直ぐそこに浩一の顔があるのを見て目を閉じてその場の勢いに流されて覚悟を決めるが浩一はそのまま何もすることはなく顔を通り過ぎていった。

「ふ……ふえ？」

「秀治と冴子さんの件でお願いがあります。このまま聞いてください」

「??????ツ!?どんな内容ですか？」

耳元で囁かれたその言葉にオーバーヒートを起こしかけていた思考を切り替えて話に応じる。

「今向かっている御別橋、ある程度近くになったら私は一芝居打ちますのでそのときに離反する生徒と一緒にバスを出て欲しいんですよ。その時には秀治達も近くに来ているでしょうから床主城の城門で待つように言うておきます。それを拾って南さんの家に非難してください」

秀治からメールが返ってきてから少しして電話をかけたらバイク特有のエンジン音と風切音、それと何故か冴子の悲鳴をBGMに秀治が電話に出たので移動速度に関しての心配はしていない。向かっているのは床主大橋とのことだったがこれから連絡をとればこちらに向ってくれるだろう。

「え?な……なんでそんなことを？」

「二人を助けるためですよ。今のまま放っておけばあの二人は必ず死んでしまいますから」

「あの二人だったら大丈夫だと思うんだけど……」

学校で見た彼らの無双ぶりを思い出して少し不思議そうな顔をする。

「確かに今は大丈夫ですが、問題はこれからなんですよ。当たり前のことですが今外で休むことは危険すぎてできません、彼らはそんな中バイクで移動しています。つまり、彼らはこれから不眠不休での行動を強いられることになります。だからですよ……」

「……そうね、いくらあの子達がどれだけ強くつても休まなかったら倒れちゃうわね……、でもどうして私に？あなたが行ってもいいんじゃない……」

「確かに、私が行っても構いません、ですがそれをしてしまえばこの秩序が程なくして崩れてしまうでしょう。鞠川先生、あなたにこのバスという狭い空間に閉じ込められその上飲まず食わずの状況で多大なストレスを抱えている生徒達を纏められますか？最悪……暴走しはじめた男子達に犯されますよ。だから私はここに残らないといけません、私ならそうだったとしても鎮圧も可能ですし。その事を考えると今私の弟と冴子さんを助けられるのはあなたしかいな

いんですよ。どうか引き受けていただけませんか？」

「……ええ、わかったわ」

犯されるという言葉に顔を青くしながら鞠川は頷いた。

「ありがとうございます」

「どういたしまして」

考えてみれば、義も利も理もある話だ。彼らには一度命を救われて
いる、もしこの場で断つても彼は残念そうな顔をして受け入れてく
れるだろうがそれで彼らが死んだとなれば自分で自分を許せなくな
るだろう。

しかたないなあ、と思いつつその頼みごとを思い返していると、紫
藤先生が私に頼るのは初めてだなと思いつたりクスクスと笑いなが
ら拘束も解かれたことなので彼から離れた。

周りでは生徒達がざわついている、それもそうだろう。いきなり自
分たちを引率している教師二人が抱き合って何事かを囁きあってい
れば気にもなる。

「……どうしたんですか？急に笑い出して……」

「ヒ・ミ・ツ」

唇に人差し指を当て機嫌良くそう言っただけで鞠川先生は最後尾の広い座席へと向って行く。その様子を浩一は少しだけ首を傾げて見続け彼女が横になったのを確認したあと、ようやく視線を外して誰も座っていない運転席へと向っていった。

「紫藤先生、何を話してたんですか？」

まだ暖かい運転席に座りシートベルトを閉めABCを確認している。と先ほどのことを不思議に思った生徒が座席から身を乗り出して質問を投げかけてきた。

「そうですね……、俗に言う愛の告白！といったモノでしょうか？答えはもらえませんでしたけどね……」

内容を言うわけにはいかないのだからにも本当可のようにウソを吐き若干気落ちした素振りを見せてそう言つと……

バスが驚愕の叫び声と黄色い声で一杯になった。

「ちょ……ちょっと！？紫藤先生！！一体何を！？」

そう言いながら座席で横になつていた鞠川先生がすぐさま顔を真っ赤に染めて起き上がりこちらに転ばない程度に急いで走ってきた。

「まあ、いいじゃないですか。このぐらい、こんな時だから明るく楽しい話題を提供してあげただけですよ。」

数時間前とは違う騒ぎ方をしている生徒達を見て嬉しそうに笑う。一部の生徒グループには通じていないようだがそれも計算通りだ。バックミラーに映っている恐らく近い未来離反するであろう今騒いでいない生徒達に目を向けた。

「紫藤先生と鞠川先生が……か、秀治先輩が知ったら喜びそうな話だな」

孝が明るく笑いながら隣に座っている麗に話しかける。

「全く、呑気なものよね、外はあんなだつていうのにそんな話する

なんて……」

先ほどから浩一に鋭い視線を送り続けていた麗が軽く鼻を鳴らしてあきれたようにそう言う。

「あんた達、本当にその話信じてるわけ？」

「高城さん僕も……！」

「デブチン……！あんたは黙ったときなさい……！」

「はい………」

突然前の座席からヒョッコリと頭を出して高城が話かけてきた、どうやらさっきのやり取りを聞いていたらしい。彼女の隣に座っていた平野が何かを決意したように高城に話しかけたが、にべもなく一蹴されて空気の抜けた風船のようにしょぼくれてだまりこんでしまっていた。

「信じてるって……、どういうことだ？」

撃沈した平野に心の中で敬礼を送り何のことかわからなかったので質問を返した。

「ほんとあゝにバカねえ、観察してたらわかることじゃない。話をしたときの鞠川先生の表情の変化を見てなかったの？どう見たって色恋の話してた顔じゃなかったわよ。それくらい自分で気づきなさいよ。まあ、疲労とか空腹とかで頭回ってないのはわかるんだけどね……」

不思議そうに首を捻る孝に心底あきれたようにため息を吐いて丁寧に説明する。

「つまり……、紫藤先生と鞠川先生は人には言えないことを話し合っていたって言いたいのか？」

「詳しくは私たち生徒には聞かせられないような話ね。どちらにせよ明るい話じゃないのは確かだと思っわ、鞠川先生の反応から悪い事じゃないと思っけど……」

そう言ったとき高城はアゴに手を当てて真剣な顔で悩み始めた、手持ちの情報が少ないなりにそれを纏めて考えているのだろう。

「聞いてくればいいんじゃないか？」

「無駄よ、適当にはぐらかされるのが目に見えてるわ、あの先生が

何のために告白とか言ったと思ってるの？深くまで踏み込んでこれないようにするためよ、頭回ってないなりでも少しは考えてモノをいいなさいこのバカ」

「じゃあどつするんだよ」

ムツとして孝が高城に問いかけると彼女は片手でめがねをクイとあげて前を向くと

「私に任せておきなさい、今はあの先生の言うとおりに早く眠るとね。最悪明日は忙しくなるわよ」

バックミラー越しにこちらを見ていた浩一に挑むような笑いを浮かべながらそう言った。

それを見た浩一はニコリを笑い返して隣で少し涙目になりながら顔を赤くしてうなっている鞠川先生の頭を弟にするようにクシャクシヤとなでつけた。

「あなたも明日は忙しくなるんですから、早く休んだほうがいいですよ。いい子ですから……ね？」

「子ども扱いしないでください!!」

そう言つて撫でていた手を払いのけプリプリと怒つて彼女は席へと戻つていく。それを笑つて見送るとポケットに入れてあつたケータイが震え始めたことに気付きそれをとつた。

「もしもし、秀治ですか？ああ、冴子さんですか、秀治は？……そうですか、それでこちらが心配になり電話をかけてきたと。ええこちらは聞いているとおり無事ですよ、そちらは？」

周りで騒いでいる生徒に聞こえないように小声で話を続ける。

「それはよかつた。それにしても丁度いいタイミングですたね。私から電話しようと思つていたところなんですよ。……ええ、はい、あなた達には明日の昼には床主城の城門にいて欲しいんですよ。……理由ですか？ふふ、そのときのお楽しみということで、それでは無事を祈っていますよ。ああ、それと秀治にあなたがあなたであることは変わりないと伝えておいてください。それではまた」

ケータイを切手ポケットに入れる、後ろではまだ生徒達が騒ぎ続けている、自分で起こしたことが少し騒ぎすぎだと呆れて深いため

息を吐いてから

「皆さん！いい加減騒ぐのを止めて寝なさい！何が起こるかわからないんですから体調ぐらいいは整えておきなさい」

手を打ち鳴らして注意を引き付けいまだザワザワと騒いでいた生徒達を一喝する。バスのあちこちから「は〜い」というなんとも気の抜けた声が返ってくる。いい具合に恐怖も消えているようだ。悪夢に魘される生徒も少なくなることだろう。鞠川先生はもう寝てしまっている。やはりよほど疲れていたのだろう。

「ここからが正念場ですね……、気を引き締めてかかりましょうか」
フロントガラス越しに見える星空を見上げ自分を叱咤するようにそう言っただけで浩一はハンドルを握った。

「はい、そちらこそ。わかりました、ではさようなら」

電話を切って秀治のバッグの中i p h o n eをしまいこむ。身を刺すような夜風の冷たさと向かい風に少し身を震わせ暖かさを求めて運転している彼の背中に顔を埋めて強く抱きしめる。きつと風を真っ向から受けることになっていて彼はもつと寒い思いをしているに違いなかったから少しは暖めてやりたかった。

「なあ、秀治」

「あん？」

「寒いな」

「ああ……、そつやな……」

暖かくなってきたとはいえ四月の夜風は厚着とは言えない彼らの体力を徐々に奪っていつていた。学校から出ですでに8〜9時間近く経過している、途中で秀治がおやつとして持っていたカロリーメイトを食事代わりに二人で分け合って食べたり奴らの居ないところに置かれた自動販売機でコーヒーを買って飲んだりしていたがそれだけで成長期の彼らが満足するはずもない。

用を足すためにしばらくとまることもあったが奴らが来ないか気を

張っていれば休憩になるはずもない。空腹に眠気、そして風の冷たさが彼らの心身をもにガリガリと音を立てて削っていつていた。

「……、浩一さんが言っていたよ、あの事をどう思っているよ」と君が君であることはかわらないと、私も同じ意見だ。君が今どう思っているよと私は気にしない。だから君は君の道を歩けばいい、私はそれについていくよ、どこまでもな」

その言葉にピクリと彼がからだを動かして反応を示した。

「……、なあ、昔のこと……どこまで兄さんから聞いている？」

「君が子供として扱いをうけていなかったことぐらいのものさ、君が私の両親のことをうらやましいと言っていた意味がよくわかったよ」

「そっか、なら暇つぶし程度に思って聞け、どこにでもある不幸自慢やけどな」

そう言って秀治は自分の過去、というより紫藤家の昔のことを語り始めた。

番外

紫藤秀治の母親である紫藤智子は妄執にとりつかれて狂っていた。最初から狂っていたわけではないある男に狂わされたのだ。

愛した男を奪われ、その愛した男は自分に見向きさえせずそれどころか自分を冷遇するようになっていつている。生まれもよく才女と謳われた彼女にとってそれは耐えられるものではなかった。

故に男とぶつかった、男に振り向いてもらえるように、昔の彼に戻って欲しかったがために……、しかしそれは功を奏すことは無く、男はそれを疎ましく思い更に自分から離れていつていくだけであった。

女は荒れた、荒れずにはいらなかった、思い通りに行かないことへの不満や悲しみを忘れたいがために碌に飲めもしない酒も飲んだ。それでもぶつかるのを止めることはなかった、何もしなくても離れていくのならば何かして離れられる方がまだマシであり後悔も少なくなるはずだからだ。

そして男はそのしつこさに折れたのか女を一度抱いた、それは唯のご機嫌取りだったのかもしれないが女はそれに歓喜した、一度でも振り向いてくれたからだ。

しかし、双方ともに思っていなかったことがここで起こった。女が身籠ったのだ。

それを知った女は天に昇らん程に歓喜した、これであの人がまた自分に振り向いてくれるかもしれない、昔のような関係に戻るかもしれないからだ。女は希望に満ち溢れていた。

しかし、その希望は濡れた紙より容易く破られた。

男が全く自分に振り向くことがなくなったからだ冷遇の度合いも酷くなった。

女は問い詰めた

「何故振り向いてくれないのか」

と、それに対して男は言った

「誰の子か分からんモノを孕んだ女に振り向くと思っているのか？」

と、男は自分以外の人間を信じていない人間だった。他人が自分のし上がるための道具にしか見えない、見ようとしなない人間だった。故に女の懐妊が男の目には余りにも妖しく映っていたのだ。尤も、仮に自分の子であっても世話をしようとは思ってはいなかった。子が出来たからと言って女にはもう相手をしてやるほどの価値が男には無かったからだ。

「産むのも育てるのもいいがこれ以上私に関わらせるな、ああそれと……私の風評の害になることはするなよ、もしすれば……わかっているな？」

そうやって男は女の元を去り東京へと帰っていった。もうこの家は男にとって帰る場所ではないのだ。

女は狂った、もうどうすれば男が昔のように自分に接してくれるか分からなかったからだ。自分のプライドにかけてこのままでは終われなかった。来る日も来る日も考え抜いた。

そしてある日考えていると胎の中を何かに軽くたたかれるような感触を感じた。それはまだ名前すら考えられていなかった自分の息子が胎内から自分を蹴ったモノだった。

女は天啓ともいえる案が自分の中から湧き出してくるのを感じた。

ああ……、そうだ自分の子だと認めず相手にしないつもりなんだっ
たら、彼が利用しようとする振り向かざる終えないほどに優秀な子に育
てればいいんだ……、そうすればまた相手をしてくれるかもしれないな
い……

女の考えは破綻していた、しかしそれに気付くことはない。かくし
て女の妄執はその未だ胎の中にいる息子に引き継がれることになる。

女は男が自分より優れた者を重用しないことは知っていた自分より
優れた者はいずれ自分の腹を食い破ってくるかもしれないからだ。

だから初めに思い浮かんだ我が子に付ける名の意味は「あの人の次
に秀でた人になればいい」であり子の名前は「秀次」としようと考
えていた。

しかしそれはそれを哀れに思ったその子の兄である自分のもう一人
の息子、浩一に止められた。「次に秀でている」より「治めること
に秀でている」方が良いと女に言い女はそれを内心渋りながらも承
諾した。

こうして名の文字とは違う意味となることを願われながらも女の息
子の名前は「秀治」となった。

これが『紫藤秀治』という名を持つ紫藤智子の「人形」が産まれる前の話……

「人形」が生まれてからの教育は苛烈を極めた、もはやそれは虐待といってもよかったかもしれない。

幼稚園にも保育園にも行かせることなく自分の手で徹底的に様々な学問を修めさせた。解けなければ叱り、余りにも理解が遅ければはたいた。

しかしどれだけ「人形」の頭が良くなっても男が振り向くことはなかった、そして女はそれを「人形」が優秀ではないからだと言いつつに厳しく教育を施していく、その繰り返しがいっしょか常になつていた。

しかしそれを「人形」は悲しいを思うことはない、それが「人形」にとつての「普通」だったからだ。

そんな「人形」にも救いはあった。自分の「兄」である浩一が存在
だった。

浩一の下でだけは「人形」は「人形」として扱われなかったからだ。
浩一は哀れんで付き合っていただけかもしれないが、「人形」
にとつてそれはどうでもいいことだった。

そしてそんな生活が何年も続き「人形」は大きくなり「小学校」と
いうところに入れられる。

そこは「人形」にとつて理解できない場所だった。しかしそれにつ
いて誰かに何も言うことはない、「人形遣い」に「何を思つても何
も言つな」と言われていたからだ。

自分がやっている「勉強」に比べれば寝ていても理解できるほど簡
単な「お勉強」

楽しそうに笑っている「同級生達」、そしてそれを暖かく見守る「
先生」と呼ばれる大人

「人形」は「同級生達」に混ざつて遊んではいたがソレを楽しいと
思うことはなかった。人形にとつて低俗すぎるモノだったからだ。
混ざっているのも「周りと同じ行動をとれ」と言われていたからだ
けにすぎなかった。

そうやって「小学校」で過ごしているといつしか「人形」は「優等生」として周りから認識されていた。常に寡黙にして冷静、頭も良く運動もこなせた「人形」は「同級生達」にとても頼りになる存在となっていたのだ。しかし「人形」はそれをただ不思議そうに首を傾げ、何とも思うことはなかった。

なぜなら「人形」は一つ勘違いしていることがあったからだ、周りにはいる「同級生達」も自分と同じだと思っていたのだ。疑問に思うこともあったがそれを深く考えることはしなかった、その先の思考を意味の無いものとして切り捨てていた。

そしてその勘違いは「授業参観」というものに碎かれ「人形」は初めて「絶望」というものの味を知った。

「人形」は周りにいる「人間」を見て思う

どうして「同級生達」は自分達の「母さん」にそんな楽しそうな笑顔を浮かべているの？

ドウシテ「父さん達」は「同級生達」ヲ蔑ンだ目デ見てナイノ？

ドウシテ「トウサンタチ」モ「カアサンタチ」モアタタカイメデ「
ドウキュウセイタチ」ヲミテイルノ？

そこで初めて「人形」は「人形遣い」の命令に背いて「同級生」の
一人に尋ねた

「ねえ、君は……お父さんのこと好き？」

尋ねられた少女は何時もは全く喋らない「秀治」が話しかけたこと
に驚いていた様だが尋ねられた内容に幸せ一杯の笑みを浮かべて

「うん！！大好きだよ！！」

と答えた。それが今はどちらも覚えていないが「紫藤秀治」と「宮
本麗」が初めて会話したときのことである。

「おじさんもおばさんも宮本さんのことが好きなの？」

その隣にいた彼女の「両親」と思われる人物に聞くと彼らは苦笑して顔を見合わせた後、暖かい笑みを浮かべて「人形」に頷いきを返した

「そう……よかったね。」

「うん……しどう君はどうなの？」

「……どうだろう？わかんないや……」

「ふん、おかしなの」

そこで会話を適当に打ち切りその場を逃げるように立ち去って机に突っ伏すようにして眠るふりをした、もうこの光景を見ていたくなかった。

ここに「人形」の「普通」は崩れ去り自分かなり「特殊」だということを自覚した。

そして自分がとてつもなく「不幸」であるとも知り、絶望というものの味を知る。

しかしそれを知っても自分の「生活」が変わることも無い。ただただその思いを胸に秘め続けた。

そして「二年生」になった時、「同級生」の一人の親が離婚していなくなったことを知った。

それが「人形」にとつてとてつもなく甘美な響きを持った言葉に聞こえた。

そしてそれも胸にしまい込み「人形」は動き続ける。

それから数日後、兄が自分の相手をしてくれなくなった。困惑して話しをしてみれば、

「母さんがあなたの相手をするなど言ってきました、従わない場合私はお前に対して何もしないともね」

昔から「人形遣い」は「人形」が楽しそうな顔をするのを見るのが気に障っていた。

何故私があの人に振り向いてさえもらえないで辛い思いをしているのにあの子は笑っているのだろうか？私はある子が優秀にならないから相手さえしてもらえないのに……

そう昔から思っていたが表に出すことは無かった、しかしもう我慢の限界であり、それが爆発したのだ。

「人形」にとつての唯一の楽しみを奪ってしまえばその笑顔をみることもないだろうとおもつての行動だった。それが自分の首を絞めることになるとは思わずに……

それからの「人形」の行動は速かった。

珍しく「自分の家」に来ていた「父さん」に訪ねていった。

「ねえ父さん、どうすれば「母さん」をいなくさせることができるのかなあ？」

と、男はその質問に少し驚きながらもそれを言う理由を聞いた。

「だって、僕にとって「母さん」はいらないんだ、いらないからずてるの、それで何か良い方法は無いかなあって思ってる」

男は聞いた

「何故私に聞く」

と「人形」は答えた

「だって「父さん」も「母さん」のことがいらないんでしょう？だから何か良い方法は無いかなあ？」

と、男は驚愕していた、「人形」の自分とよく似たその考え方に、そして同時にこれはチャンスだとも思っていた。

そして男は「人形」にある一つの案を授ける、それは誰にもばれる事もなく、自分に被害が全く来ないモノだった、そして最悪といっても良いモノでもあった。

「学校で暴れる、「同級生」が何かしてきたら暴力を振るってもかまわん」

と、「人形」は不思議に思ったそんなことでいなくすることができ
るのだろうか？と、それでも「父さん」の言うことを信じて行動し
ようと思ったのでそれを満面の笑みを浮かべて頷いて承諾したが…
…その笑みは小学2年生が浮かべるものとは思えないほど歪にゆが
んだものだった。

「父さん」の言うとおり学校で暴れ「優等生」の称号は地に落ちた。
止めようとして寄ってきた「同級生達」も殴り、喧嘩になった。

こうして「人形」は「人形師」に反旗を翻し始める。

「人形遣い」はあわてた、「人形」がいきなりこうなった原因が分
からなかった。叱り飛ばさうとも殴りつけようとも変わることはな
く「人形」は暴れ続けた。

そして夜に飲む酒の量だけが静かに増えていった。

それから数ヶ月後「人形遣い」は倒れた、元々酒には弱かった体質

であったのにその酒に溺れて体が不調を訴え始めても酒を飲み続けたからだ、たとえそれが命を縮めようとも飲まなければやってられるものではなかった。

しばらくして「人形遣い」は生涯の幕を閉じる、「人形」と思い通りにいかない世界を憎んで

そして「人形遣い」が居なくなったことに「人形」はただひたすら楽しそうにケタケタと晒うだけだった。自分が何をさせられたのかの意味さえ知らずに……

「人形」は「人形遣い」が居なくなつて「人形」の生活が変わつたかというところでもなかった。

操り主を失つた「人形」はどう行動すればいいのかわからず「昔」と全く同じ生活を営んでいた。そして気付いた自分の周りに「昔」と違い人が全く居なくなつていているということに。

「兄さん」は何故か「人形遣い」が居なくなつたというのに「人形」から距離をとるようになった。

「父さん」は何も変わることなく「人形」に対して無関心を貫き続けている。

そして「小学校」の「同級生達」はここ数ヶ月を通して「人形」に

全く近寄ることが無くなっていった。それは「人形」が暴れなくなつた後も変わることはなかった。

「人形」はいつの間にか独りになっていた。

そしてそれから数ヶ月後、「人形」が攫われるという事件が起こる。「人形」は攫われる時何も出来なかつた自分の無力さを呪い、「誘拐犯」の要求を突っぱねて自分を見捨てた「父さん」を憎んだ。

それから2日後、警察の尽力によって何とか助け出された「人形」は他人を極度に恐れ、信じないようにになっていた。

夜「人形」は鏡を見て思う

何故自分はこんな目に会うのか

何故「父さん」は自分を見捨てたのか

何故両親は自分のことを暖かい目でみてくれないのか

考えていると自然と涙が出て止まらないようになった。

なぜ……

どうして……

思考が上手く纏まらずぐちゃぐちゃになる、気付けば喉の奥から嗚咽混じりの泣き声が漏れ出していた。そして不意に自分の「普通」を壊した「同級生」の少女の幸せいっぱい笑顔思い出した。

羨ましい……

と思ったそして

あんな笑顔を浮かべてみたいな……

ともそう思っ鏡をもう一度見ればそこには涙でグシャグシャになった顔をした自分がいた。そしてあの笑顔を浮かべようとしてみただけが出来ない、出来るはずがなかった。「人形」は「幸せ」というものを知らないのだから。

なんであんな風に笑えるんだろう？

「人形」は考えて答えを出した、

ああ、そっか……自分を愛してくれる親がいるからだ

と、思えば「同級生達」も皆同じ様な笑顔を作っていた。それがわかった時「少年」に夢が出来た「いつか暖かな家庭を得て幸せに暮らすこと」そして「自分を認め愛してくれる存在を得ること」の二つ、

「少年」の願いの片方は意外と早く叶えられることになる

「少年」の兄である浩一が何か心境の変化があったのか「昔」と同じ、いや昔より親密に接してくれるようになったのだ。そして自分を認めて愛してくれたのだ。

浩一は「少年」に自分が父から学んだことを全て教えていった、もう二度と弟を父に傷つけられないように父の手口を全て教え込んだ。

「少年」はそれを学び、いつか家を出るために家事を覚え始めた、そして他人の前に出ても身が竦まない程度に回復した後は武術を習い始めた、いざという時の選択肢を増やすために……

いつしか少年は昔の「同級生達」の顔も名前も忘れ始めていた、い

や昔の記憶に蓋をして思い出さないようにしたのだ。そして自分の夢の根源となった「少女」の笑顔すら忘れ去った。

それから数年が経ち「少年」は中学校へと入っていく相変わらず周りに人がいない生活を送っていたが「少年」はそれを気にすることは無かった。兄がいれば十分だったからだ。

そしてある日「少年」はガラの悪い不良数名に絡まれる、何時も寡黙でどこか暗い感じを放っていた「少年」が良いかも見えたのだろうか。

しかしその予想は裏切られ「少年」は不良たちを振り返りにする、少年は歓喜した、自分は無力ではなくなっていると実感できたからだ、しかしその喜びの中に自分が持っていなかったものを当たり前のようにもっていた者に対して自分が蹂躪するという暗い喜びがあったことには気付くことはなかった。

その後「少年」は不良たちに絡まれ続けることになる、その数は日に日に増えていった。

兄はこれを知っていたが止めはしなかった、相手が勝手に絡んでくるのだからどうしようもないと断じていたのだ、ただ弟にやり過ぎ

ないように注意するのと、絶対に自分から手を出すなどだけ言っておいた、自分から手をだしてさえないければどうとでもやり込めることができるからだ。

こうして誰も止める者がいなかった「少年」が「返り討ち」ではなく「蹂躪」する喜びに味をしめソレに溺れていったのは必然だったのかもしれない。

そしてその半年後、「少年」は人に殺しかねないほどの重傷を与えた。

「少年」は恐れた、人を殺しかけても「楽しい」としか思えなかった自分を、そして言いつけを破ったから兄にまた相手にされなくなるかもしれないという可能性を、

「少年」の心配は杞憂に終わる、浩一がその全てを許し受け入れたからだ、そして浩一は初めて弟に命令という名のお願いをした

「一人でもいいから友達というものを作ってください」

と、弟の話聞き自分以外に心を許せる人間がいなから他者を傷つけても平気なのかもしれないと思ったからだ。実質、「少年」は浩一以外の人間には心を開くことはなく寄せ付けさえしていなかった。

そして「少年」は兄からの初めてのお願いをこなすために「友達」を作ろうと奮起した……が、「少年」は「友達」の作り方が全くわからなかった。

しかし、今の自分では駄目だというのは理解していた、何も喋ることとは無く笑い一つ浮かべる事の無い自分では人に好かれるわけが無いのは明白だったからだ。

故に「少年」は「自分」というものを徹底的に変えた、周りから見ればそれは「変身」といつても過言ではないものであった。

目指したものは「道化」、人は自分より馬鹿そうな者を見れば無自覚で心のどこかに慢心のようなものが生まれることは知っていた。人間が親しみの沸きやすい「方言」を学んだ、言葉一つで他人が自分に近寄ってくるようになるのであれば今の「方言」を捨てることなど容易かった。

常に笑みを浮かべるように心がけた、相手の警戒心を全てこそぎ落として近づきやすくするために。尤も「少年」の常に浮かべるようになった笑みは人好きするようなものではなかったが……

世間一般で「面白い」と言われている人たちの動きをネット等で見て学んだ……どうやらリアクションが大きければ受けるらしい。

こうして「少年」は知識を集め、学び、習得していった。

が、周りの「同級生達」はその急激な変化を不気味がり全く近寄ってこようとはしなかった。

「少年」はそれを不満に思っただけはいたが全て自分の自業自得といえるものだったので我慢した、いずれ誰か近づいてきてくれる人が現れることを信じて待ち続けた。

しかし、誰も「少年」に寄ってくることはなく、「少年」はゆっくりと腐り始めていく。

中学二年になって数ヶ月たったあと「少年」は人生で初めて「友人」というものを得ることになる。

そして物語は始まりを告げる。

番外（後書き）

前編というのを訂正、後編をセットで投下してたの忘れていた。

8話

夜の誰も居ない町、いや少量の奴等を除いては生きているモノなど猫や犬程度のモノとなってしまうた町に秀治たちはバイクに乗って疾走していた。

二人の顔には隠せないほどの濃い疲労が浮かんでいて顔色が良いとはお世辞でも言えないモノとなっている。

「なるほどな……これが君の昔の話の全てか……。君が私に……いや親しい人に頼らないのは捨てられるのが怖いからか？」

「まあ、そうやねんやろなあ……。見捨てられへんとはわかってんねんけど、もし頼ってそれが迷惑やと思われて捨てられたら、みたいなことどうしても思ってもうてな……」

どうしても頼ることができないのだと言外に言うように深くため息を吐く、兄には言っていないが一時でも兄に拒絶された記憶は思いのほか大きな傷を残していた。

「そうか……。話してくれて有難う、あまり思い出したくもない類の話だったのだろう？」

「……もつと何か詮索されるかと思ったけどあんまり聞かへんねんな」

ひたすら前に続いている夜道から目をはなして背中にしがみついている冴子に目をやった。

「私に人の言いたくない過去を探って喜ぶような趣味は無いさ、それよりちゃんと前を見て運転してくれここで事故でも起こしたらシヤレではすまないのだぞ」

「……そ〜かい」

本当は聞きたいことなど山のようにあるだろうに……気を使われているなどと思わず苦笑を浮かべて前に向き直り先ほどから目指していたガソリンスタンドへと入っていく。

「んじゃ、お前はガソリン入れるの頼むわ。ワイは休憩所になんか無いか見てくるわ」

そう言っただけバイクを止めエンジンを切り自分の財布から金をいくらか抜き取って冴子に手渡す。ただそれだけの行動だったというのに右肩に激痛が奔り一瞬顔を歪めてしまった。

「わかった……くあ」

幸い冴子はそれには気がつかなかったようだ、大きく欠伸を浮かべているその姿をみて少し罪悪感が沸いた。今冴子がここにこうしているのは自分の責任なのだから。ソレが顔に出る前に後ろを向いて休憩所へと向かう。

「ふう〜奴等は……多分おらへんやろ、おったらスタンドに入った時点で出てきてるはずやろっし」

秀治はそう誰にいうわけでもなくブツブツと粒やいきながら暗い休憩所に入っていった。

それを見送って冴子はバイクにガソリンを補給し始める。先ほどの彼の過去について思うことが山ほどあった、しかし冴子はそれを彼に言うつもりはない

「……あのような顔をされてはな」

天井に明るく輝く蛍光灯を眩しそうに見つめそうぽつりと呟く、後ろから見た彼の横顔は恐怖と不安の色で染まっていたのだ。恐らくこの話をして自分から離れていくのではないのかと思っていたのだ

ろう。

だから聞くのをやめた、もう言う機会もないだろうがあんな顔をして彼をさらに追い詰めるような真似はできなかった。

「母親を殺した……か」

ただでさえ疲労で集中力が切れているというのに考えごとをしてしまったからだろう、ここには自分たち二人以外に誰かがいるということに気がつかなかったのは、そしてソレが自分のすぐ後ろで息を潜めているのを気取れなかったのは。

「なっ!?!」

「おっと姉ちゃん動くんじゃないよ、間違っつて刺しちゃうぜえ。クカカ、オレはついてるこんな所でこんな美人な姉ちゃんを手に入れちゃうとはなあ!!」

耳元に荒い息遣いが聞こえたと思ったときにはすでに遅かった、男のモノなのだろう太い腕に動けないように抱え込まれていた。拘束を外そうとしてもがいたが喉にナイフを突きつけられ耳元でそう囁かれ動きを止める。

しかし男にとって意外なほど女の力が強かったからだろうか？もがいた時に喉に突きつけられたナイフがすこしだけ皮膚に突き刺さりそこから紅い血がツツリと流れ出していた。

「身包みは全て差し上げますのでその人だけは解放してくれませんか？」

秀治が戻ってきたのはそんな時だった。顔には人好きするような笑いを浮かべ物腰も柔らかくそう男に話かけながら休憩所で買ったのだろう何かの缶をバッグに詰め込みこちらに歩いてきていた。

「よう兄ちゃん！！そこで止まりなあ、この女を殺されなくなかったらなあ！！」

突きつけられていたナイフが更に深く刺さり血が堰を切って溢れ出す、ソレを彼は何も言わずに静かに観察しているだけだった。そして冴子は表面上全く怒っていないと見える彼が激怒していることを悟った、顔こそ笑っているが目だけが別の生き物のように殺意にたぎっていたからだ。

「抵抗する者を連れては逃げるのもままならないでしょう？バイクでも何でも差し上げますからどうかその人だけは見逃してくれませんか？」

「そうはいかねえなあ！！こんな壊れた世界で生き残るためには良い女がいねえとなあ！！」

「そうですねその意見には同意してもいいですね、でもその人は私のものですよ、私から奪わないでくれませんか？」

顔に歪んだ笑いを浮かべながら男は冴子の体を弄り始める、先ほどから怒りで頭が湯だつてどうかなつてしまひそうだった、しかし冷静さだけは手放すことなどできない、今自分が下手な行動をすれば彼女を永遠に失いかねないからだ。

「ハッ！！奪わないでくださいなあ？そんな頼みごとだけで自分の大切なモノを奪われなくなるとでも思つてんのかよ兄ちゃん、オレは奴等に家族を奪われて！！奴等になつた家族を殺してきてるんだぜえ、だからオレも奪つてやる！！そのヘラヘラした顔が絶望に歪むさまをオレに見せてくれよ兄ちゃん！！」

冴子の喉に突きつけたナイフを秀治に向けてピツと突きつけるようにむけながらゲタゲタと晒う、しかし男にとって不幸だったのは今自分の腕の中にある冴子が自分の思っているような獲物ではなかったことだろう。

「ふっ！！」

「ぐがあ！？げえ！！」

その隙を見逃すことなく冴子は男のつま先を踵で踏み抜き痛み之余りに腕の拘束を緩めた瞬間体を捻って抜け出し男の方に向き直り、男の腹に腰だめに構えた拳を突き刺した。

男はたまらず地面に膝をついて胃の中に入っていたモノを全て吐き出していく、尤も男は何も食べても飲んでもいなかったのか吐き出したものは胃液だけであったが。

「形成逆転というモノですか……、さて人の女に手を出した覚悟はできていますか？出来ていないわけがないですよねえ？うん？なんです冴子？」

「ここは私に任せて欲しい」

「……そういうなら私は何も手出しはしませんよ」

先ほどまで笑顔の直ぐ下に隠していた殺意や怒気をあたりに撒き散らしながらゆっくりと蹲っている男へと近づいていく秀治を冴子が止めた。このままでは彼がまた人を殺めてしまうことが理解できたからだ。

秀治に代わり今度は冴子が蹲っている男へと向かっていく、ツンとした刺激臭が鼻についたがそれを気にすることなくこちらを恨めしげに見上げる男に視線を合わせる為に自分も膝をついた。

「……私も肉親を失ったことがあるから悲しみの一部は理解できるさ、狂ってしまった程に家族が愛おしかったのだろう？ならこんな事をするのは止めることだ、こんな事をしていても死んだ君の家族が喜ぶことはないと思っよ、死んでも家族に誇れるように生きるべきなのではないか？」

「てめえに！！オレの何がっ！！」

「わからないさ、君にこう言つのも私の唯の自己満足だ。でも心に少しでもいいから留めておいて欲しい、生きる、死んだ君の家族の分までな。私と言えるのはこれだけさ」

「ッ！！」

最後にそれだけ言っつて冴子は彼が待つバイクの所に戻る、後ろでは男が悔しげに顔を歪め自分の手が傷つくのも構わずに地面に拳を振り下ろし続けていた。

「……首大丈夫か？一応これ貼っとくぞ」

「ああ、ありがとう……ひぁ！？秀治何を！？」

「ジツとしとれ消毒代わりや」

傷口を確認して既に血が止まっていることに安堵の息を漏らした後傷口の部分をなめあげる口の中に鉄臭い味が広がった、当然牙子は暴れたがそれを押さえつけ傷口の周りを綺麗に舐め上げた後にバツグから取り出していたバンドエイドを貼り付けた。

「あまり意味が無いと思うのは私だけかな？」

「ん、そうやなあんまり消毒としての意味はないな。まあマーキングでも思ってくれてもかまえへんよ、お前は誰にも渡さんっていう意思表示でもおもってくれたらな。それにしてもスマンな、こんなことならワイがこっちに居ればよかったわ」

「油断した私も悪いさ、そう気にするな。それにしても何も言わないのだな？」

「はつきり言って納得はいつてないよ、でもやられたお前がアレで済ませたんやからこっちがそれ以上口出しするんは筋が違うとおもってな、ほらガソリンも入れ終わったしいくぞ」

「さてよ、姉ちゃん」

秀治はバイクに跨ってキーを挿しこんでエンジンをかけながらそう言った所で蹲っていた男が冴子に声をかけた。秀治がソレに不快気に顔を歪め何かを言おうとしたのを手をあげて制した

「どうした？」

「襲って悪かったな……、それだけだもう行っちまえ、てめえらの顔なんざもう見たくもねえよ」

男は冴子に対して軽く頭を下げると蚊でも追い払うかのように手を振って二人に背を向けてスタンドの外へと歩いていく。冴子は少しだけ顔を綻ばせてそれに対し

「そうか、達者でな」

とだけ答えた、男はそれにただ手を上に大きく上げてそれに答え夜の街へと消えていった。

「ほれワイらも行くぞ」

「そつだな行こうか……」

二人も最後にこの言葉をかわした以降何も言わずに男とは別の方向へとバイクを走らせて夜の街へと消えていった。

おまけ

学園黙示録のOP曲を登場キャラ風に解釈してみた（問題があれば消します）

紫藤秀治で2番

何が正義で何が悪だとか、そんな概念なんて無くなってしまっただろう。たとえ悪だとわかっているにせよ生き残ればそれが正解だ

と言えるからだ、善悪など気にしては这个世界では生き残ることなど出来ないのだから。

いつか自分も絶体絶命の場に取り残される時が来るのだろうか？もしそうだったとしても最後の言葉なんていう陳腐なものを残すつもりはない、そこを自分にとっての最後の場にするつもりなんて更々ないのだから、死の運命とて抗って覆してみせようその為に力をつけたのだから。

昔から欲しかったモノは何とでもない唯の平穏で幸せで楽しい日常だった……、それをようやく手に出来る所に来て満足していたというのに……。

しかし今の何処リアルにそんな現実フィクションが在るといっただろうか？そんなモノはもう存在しない。在るのはただ血に濡れなければ生きられない日常だけなのだから。

昔の常識なんて叩き潰していった今リアルを見据えて奴等を切り払って生き延びた、迷うことなんてない迷えば死ぬだけだったからだ。

崩れていった「何時も通りの日常」という世界の先で何を教えられるのだろうか？何を聴かされるのだろうか？もしそれが歩みを止めてしまうようなものならば耳を塞いで目を閉じてしまおう。ほら、こうすれば何も見ることも知る事もない。いづれは知らなければならぬ事でも後で考えればいいんだ、そうすればとりあえず今を歩き続けていられる。

こんな世界では儚い夢だということとはわかってはいるそれがどれだけ貴重なものなのかも……、しかしそれを諦めるつもりは毛頭ない。ただ一つの夢の為に歩き続けよう。

夢を叶える為ならば何も言わず誰にも知られないように罪を犯そう。
それで得られるというのならば安いものだ。

目の前には昔と変わらず無限の選択肢が広がっている、ならば自分
にとって最善の未来を引き寄せる為にそして大切な者達を守るため
にどのような選ぼうじゃないか、生きている限り自分は夢を諦める
つもりはないのだから。

9話

「おや？高城さんまだ起きていたんですか、さっきも言った通り寝不足は美容の大敵ですよ」

時間はすでに3時をまわりバスの中は静まりかえっている、起きているのはバスを運転している浩一とその直ぐ横に立っている高城沙耶の二人だけだ。

「さっきあんたが鞠川先生と話してたこと、吐いてくれるかしら？」

高城は浩一の言っていることを無視してそう切り出す。

「何のことでしょうか？あれはただの告白ですよ、踏み込んでくるのは野暮だとは思いませんか？」

「ええ、そうね私もそう思うわ……、それが本当に告白だったのならね」

そう言って高城が眼鏡を中指で押し上げ後ろ手に隠していた杭打ち機を浩一の頭に突きつけた。

「もう一度言うわ、吐きなさい、あんたが本当に話していたことを、
一体何を企んでいるのかを」

「……、まさかそんなモノを持ち出してまで来るとは些か予想外で
したよ、いや予想以上と言うべきですか。もう少し平和に話が進む
と思っていたのですが……」

浩一は少し驚いたような眼をして横目で高城を見つめた後、自分の
頭に突き付けられたモノに全く怯える様子もなく笑みを浮かべる。

「あんたは私が皆が寝静まった後に機器に来ることがわかってた、
それに初めから私を、いえ私達を巻き込む話も言つつもりだった……
…そうでしょう？くだらない前置きはいいわ。早く本題に入りなさい」

「その前にそれを下ろしませんか？あなたの細い腕にソレは重いで
しょう？」

「それもそうね、こんなモノただの小道具に過ぎないんだし、あんな
たが正直に言うなら元から必要のない代物だしね」

高城は何のためらいもなく食い打ち機を床に置き今までソレを持つ

ていた右腕を揉み始める、やはり重かったのだろう。

「何のためにもってきたかお聞きしても？」

「……わかってて言うてるでしょ、アンタ……、交渉ごとは常に相手と同等か優位に立っている時にするもの、今は陳腐だけどこんなやり方しか優位に立てないから持ってきただけ、あんな野蛮なやり方は趣味じゃないんだけどね、それにしても銃突き付けられて動じないなんてアンタも大概バケモノね」

浩一がクツクツと笑いながらそう言うてきたのでため息と共にそう返した。

「いやですねえ、褒めても何も出せませんよ？」

「褒めてないわよ、それよりいい加減本題に入りなさいよ」

「そうですね、入りましょうか、簡単に纏めると私の弟と冴子さんの救出依頼ですよ、彼女はこここの近くに良い家の鍵をもってますから」

「へえ、あの二人にねえ……それで？私たちに何をしてもらいたいの？」

寝ている生徒を起こさないように隣にいてようやく聞こえる程度まで声を抑えて話し合う、誰かに聞かれることは絶対にあってはならないのだから。

「彼女の護衛を、そして彼らと合流した後行動を共にすることを」

「その話、私たちに何か見返りはあるのかしら？」

「飲み物に食事、風呂、よく眠れるベッドぐらいでしょうか？移動手段としてハンヴィーがあります」

「命を賭けるにとしては安すぎると思うんだけど」

冷たい眼で運転席に座る浩一を見下ろしてそう尋ねる、確かに奴らの蔓延る外に出るにはこの対価は安い、安すぎるといっても過言ではない。

「確かにそうですね、しかし後ここで何日過ごすことになるのかは私も知らないことです、それを考慮に入れて頂ければ……飲んでも構わないぐらいの条件にはなるのではないのでしょうか？もしかしたら橋を渡れないという可能性もありますよ」

橋を渡ったとしてもそこに避難所があるかどうか分からない、いや浩一自身は確実にあると思える場所は知っているが言うつもりはなかった、その場所を言ってしまうえば彼女は確実にこの話を蹴るからだ。

「……、あるかどうか分からないモノに期待するより目の前の確実なモノを手に入れるといたいのかしら？私としても親の安否は早く気になる所なただけ」

「私としても引けないですよ、見す見す弟を殺す決断を下すことはできません。貴方達が行かないというのなら私が一人で行くまです」

「ッ！？その意味……わかってて言ってるの？」

「もちろんですよ」

これが遠まわしの脅しであることを高城は理解していた、このバスはもはや浩一人のみで成り立っているといっても過言ではないのだ。バスに乗っている生徒の心の拠り所と化していると言ってもいい、それが抜けるようなことがあれば……待っているのは崩壊だけだ。

「……、わかったわ、呑もつじゃないのその話、貸しにしといてあげるわ」

「有難うございます、生きていればいつか返しますよ」

「必ず返しなさいよ、で？どうやってこのバスを降りろっていうの？」

「私が一芝居うちますのでそれに乗ってくださいただで結構です」

「あんたの言うことに反対すればいいわけね、それじゃ私はもう寝るわ明日は忙しくなりそうだし……あんたこれから頑張んなさいよ、荒れそうなやつが何人かいるから」

「ご忠告どうも、しかし大丈夫ですよ。私が弟を糾弾してバスから追い出した人たちに容赦するわけ……ないじゃないですか」

人好きする笑みから薄ら寒いものを感じさせる笑みへと表情を一転させ舌なめずりをし齒向かえば情けはかけないともいうように手をゴキリと鳴らす、高城はあたかもそこに蛇がトグロを巻いて獲物を待ち受けている虚像を見て思わず背中が冷たいものが奔り身を震わせる。

「どうかいたしましたか？」

「……ッ！？何でもないわよ！！」

心配げにこちらを見つめる彼の顔に先ほど感じたものは何も残されていない、彼女は心の中でもう一度バケモノめと密かに毒づきながら動揺を悟られまいと気丈に席へと帰っていった。

「……さて、これでもし宮本さんが動かなくても彼女が動く……、私があるたにしてあげられる最後のバックアップになるかもしれない、せん、生き延びなさいよ秀治」

浩一は窓の外に見える星空を見上げながら同じ空の下どこかでバイクを走らせているであろう弟に向かってそうポツリと呟いた。

9話（後書き）

やった！！ついにお気に入りに入り200超えたぞ！！
これからも頑張りますのでよろしくお願いします。

できれば感想もね！！（切実）

10話

浩一は目の覚めた鞠川先生と運転を代わり生徒の前で演説を行っていた、内容は団結力の大切さとリーダーの必要性だ。

「始まったわね……、ほら起きなさい、いつまで寝てるつもり？」

「んあ？……ああ高城さん、おふあよつございまふ」

後ろで浩一の言う「芝居」が始まったことを確認して未だ隣で大口あけて爆睡していた平野を揺さぶり起こす、これから働いてもらわねば困るのだ。

「よだれ、たれてるわよ」

「ああ……」

まだ寝ぼけているのか平野はポヤンとした表情をしながら袖で口元を拭う、これがいざ戦闘となれば人が変わったようになるのだから人間とは分からないものである。

「しっかりしなさい、これから忙しくなるわよ」

「忙しくって……何ですか？」

眼が覚めたばかりでうまく状況が飲み込めていないのか不思議そうな顔をして首を傾げている。

「後ろを見ればわかるわ、アイツ、このバスを正式に自分の指揮下に置くために動き始めたみたい」

「アイツって……紫藤先生のことですか？」

「他に誰がいるって言うの？」

高城が指を刺したところでは浩一が熱弁を振るいどれだけリーダー無き集団が危険かということを説いていた。

「ええ、そうよ、生徒を自分に心酔させて大勢を味方につけてこれから起こること全てをある程度コントロールする気でしょうね、下手したらこれから何もできなくなるわよ」

「……友愛しましょうか？ってあれ？杭打ち機は？」

平野が目を鋭くして浩一を睨むようにして見るが昨晚寝る前に置いていた杭打ち機が無くなっていることに気がつき慌てはじめた。

「「「「よ「「「、ちょっと見させてもらっていたのよ」

「へえそうなんですか……でもコレの何を見るっていつんです？ただの杭打ち機ですけど……」

「何だっついていいでしょ！！私が一々アンタに説明する義務でもあるっつていうの？このデブチン！！」

「ないであります！！サー！！」

「だあれがサーよ！！」

「お前ら……仲良かったんだな……」

突然前の座席で始まった寸劇に孝は目を丸くして意外そうにポツリとそう呟いた。

「だっ！！誰がこんなデブチンと！！」

我に返って周りを見渡して見ればいつの間にかこちらに来ていた鞠川先生と宮本が生暖かい視線を向けてきていることに気がついた。

「で？結局どうだったんだ？」

「え……な、何がよ？」

「昨日のアレだよ、ほら紫藤先生の」

「ああアレ、私の勘違いだったみたい、聞きに行ったらさんざ惚気話聞かされたわ、全く骨折り損もいいところ、いいわよね〜鞠川先生あんな出来る男に慕われちゃって」

両手のひらを上に向けてため息を吐いた後そう嘘をついた、ここで煙に巻かれたなどと言えば目の前で顔を赤くしている彼女に質問されるのは明らかだ、それだけはあつてはならない。確実にばれてしまうからだ。

しかし孝はこれから大丈夫なのだろうか？今も「高城は難しく考えすぎだよ」と笑っている、単純なものだ。こんなことでこれから生き残っていけるのか不安になったがその分自分がしっかりしていればいいと思い直し……これからの苦勞を思っと思わずため息が出

た。

「ええ、そうね、ちょっと追い詰められてたみたい。それよりも小室、これからどうするつもり？」

「どつって……何がだよ？」

「このままなし崩しでアイツの下につくのか、それとも昨日の先輩達と同じようにバスを出るのかよ。私は出るわ、アイツの下にもつきたくないしあいつ等と一緒に行動もしたくないから」

「高城さんが行くなら僕も……」

「アンタも来るの？なら奴らの相手は任せたわよ」

「任せてください！！何があっても弾の続く限り守って見せます！」

「おいおいお前ら、なんでバスを出る必要があるんだよ、紫藤先生についていったらいいじゃないか」

「私も嫌よ、アイツの下につくなんて絶対嫌、ねえ孝、いっし

よにバスをおりましょうよ、この機会を逃したらきつともう降りるなんて出来ないわ」

「麗……、お前までいったい何を……、ッ！！大体外に出てどこへ行くこつていうんだよ！！」

孝は周りの友人達が全員バスを降りるといつているのにわけが分からないとでも言うように左手で頭を掻き毟りそう反論する。

「えつと、私の友達のお家がこの近くにあるから連れて行ってあげてもいいわよ？ここであなた達が行ってもし死んじやったら私も紫藤先生も悲しいし、それに生徒を守るのは先生の役目だものね」

「鞠川先生まで！？ああ、もう！！わかったよ！！降りる、降りるさ！！お前らと一緒に降りればいいんだろ！！……全くなんでこうなっただか……」

半ばヤケになつてそう言った孝はバスの天井を仰いで顔を手で覆う。こうなつた時に他人を見捨てられない所が彼が人が良いと言われる所以なのかもしれない。別に彼にはバスを降りるほどの理由なんてないのだから。

「決まりね、じゃあ早速行動に移すわよ、ちよつと紫藤先生！！」

「ですから……っと、何ですか？高城さん」

自分の名が呼ばれたことに気づき演説を途中で切り上げてこちらを向く、彼としてもこれからが本番なのだ。

「悪いけどアンタと一緒に行動するのはここまで、町にもついたら私達はバスを降りさせてもらおう」

「……………なんですか？」

浩一は浮かべていた笑みを引き攣らせた状態で固まり信じられないという顔をする。それはわかっていても演技とは思えないほどの真に迫ったものだ。ソレと知っている鞠川先生も少し困惑しているような顔をしている。

「自分が何を言っているかわかっているんですか？外がどれだけ危険か理解できないあなたではないでしょう。奴らがいるんですよ」

自分が全て仕組んでいることとはいえ浩一は手を抜く気はサラサラ無い、周りに怪しまれるわけにはいかないからだ、尤も彼女ならば本気で相手をして大丈夫だという確信があった、恐らく彼女は弟と同じことをするつもりだろうと当たりをつけているからだ。

「そんなもの当然わかってるわ、でも私はあんたと違って足手纏いになる連中連れ歩く程お人よしじゃないの、わかる？」

どうやって口で浩一に勝つのは恐らく今の自分では不可能に近い、だからこそ高城が選んだのはいたってシンプルな答え『浩一を相手どることはしない』ということだ、つまり先日ここを出て行った先輩と同じことをしてやればいい。

挑発して突っかかってきた者と派手にやりあえば良いのだ、それだけで周りは勝手に納得してくれる。

「おい高城い……それはオレ達が足手纏いだって言いてえのか？」

「ええ、そうねその通りよ、喚くだけで何も出来ないバカとこれ以上一緒に行動してたくないの」

「んだとゴラァ！！天才だからって見下してんじゃねえぞ！！」

学校で一度コレと同じ状態になった時はほとんど賭けに近いものがあり不安ではあったが、今は絶対の安心をもってこういう策を実行に移せる、なぜなら今の自分には

「それ以上高城さんに近づいたら撃つー!!」

戦力的に足手纏いだった自分をこの地獄が始まってからずっと守り通してきた優秀とっていいボディガードがいるのだから。

「ハッ!! てめえに俺が撃てんのかよ、バカにされてもへラへラ笑うだけで抵抗もしねえお前によお!!」

「……………、そう言うんだったらもう一歩足を進めたらどうかかな？
足……………止まってるよ」

杭打ち機の照準をガラの悪い少年に向けたまま高城を守るように前に出る。

「ああ……………お前の言う通りだよ……………、オレはバカにされても何もせずただガマンしてきた……………、普通に暮らしたかったから……………普通に生きていたかったからずっと……………ずっとガマンしてきたんだ!!」

「でもそんなモノに価値はない……………、普通に生きていける世界なんてもう存在しない、普通なんてもう何の意味もない!! だったらオレは撃てる!! 奴らでも!! たとえそれが生きている人間であつてもオレ達の邪魔をするならオレは誰だつて撃つー!!」

学校で過ごしていた時から考えられないほどの平野の剣幕と気迫に少年は気圧されていた、しかしそのまま尻尾を丸めて逃げるようなことは彼のプライドが許すことはなかった。少年にとって平野はただの昼行灯でありソレに怯えたなどということは許せることではないからだ。

「面白え、撃てるもんなら撃ってみろよ平野お!!」

「二人ともそこまでにしていただけませんか？ 生きている者同士で争いあっても仕方がないでしょう」

さらに一歩足を踏み出そうとした少年をタイミングを見計らっていた浩一が後ろからその両肩を掴み制止した。流血ぎたにまで持ち込む必要は無いからだ。

「し……紫藤先生」

「チツ……」

浩一が介入したことに金髪の少年は怯んだように退き、平野は残念そうに舌打ちをした後高城の後ろへと下がっていった。

「しかし困りました……、どうも貴方達にこれ以上団体行動を求めても無駄なようですね……外に出るとして生き残る公算はあるのですか？」

「そのことを考えてない私だと思っ？」

ほとほと困ったという顔つきでため息を吐きながら浩一がそう聞くと高城は豊満な胸を張り真っ直ぐの彼の顔を見つめてそう答えた。それを聞いて浩一は頭が痛そうに手を眉間にやり深いため息を吐く。

「鞠川先生！私の代わりに彼女達の保護者役をお願いして良いですか？ここで彼らだけで放り出すというのも気が引けますから……」

「え！？わっ私！？えっと、えっと、わ、わかりました」

「有難うございます」

いきなり自分が呼ばれるとは思っていなかったのかワタワタと慌てたあと鞠川先生は敬礼の真似事をしてそれに答えた。浩一はそれに生暖かい眼差しを送りながらニコリと笑って礼をいった。

「さて、あなた達には一つ誓っていただくことがあります、これを了承しない限りバスから降ろすつもりはありませんよ」

「……内容によっては力ずくでもバスを降りさせてもらうけどそれでもいいかしら？」

浩一がゆっくりと高城に近づいてくるのに反応して平野は杭打ち機を構えるがソレを察した高城が片手を上げてそれを止める。

「構いませんよ、絶対に断れませんから」

「へえ？それはどうかしら？」

どんな無理難題を吹っかけてくるかと身構えて挑戦的な笑みを浮かべてこちらを睨んできている彼女に友好的な笑みを浮かべて向かい合う。

「絶対に生き残ること、何が最善かという思考を止めないこと、そしていつも心に余裕を持つこと、例えばそれがどれだけ追い詰められた状況でも……です。足掻きなさい、頭の良いあなたならばきっとその時の状況をひっくり返すような妙案を出すこともできるでしょう」

まさか助言を与えられるとは思っていなかったのか鳩が豆鉄砲を喰らったような顔をしている。それを見た浩一は苦笑してつい弟と同

じよつに頭をクシヤリと撫で付けた。

「そつ、それくらいわかつてるわよ！っ！っていつまで撫でてるつもり！！」

「おつとこれはすいません、弟のせいで撫で癖がついてしまつていてつい。まあ、その調子ですよ、あなた達もこの事を心得ておきなさい」

払いのけられた手を見て軽く笑いながら謝罪し、後ろにいる面々にも念を押しておく。そして未だに猛っている彼女の横をすり抜け

「ではまた生きて会いましょう、幸運を祈っていますよ」

奴らがないことを確認し、バスのドアを開いた。

11話

バスを下りたあと小室一行は鞠川先生の言う「お友達のお家」へと偶に襲ってくる奴らを蹴散らしながら順調に進んでいた。

「先生さつきから何度も周り見回してますけど……何か探してるんですか？」

「ん〜、ここ辺りにいるはずなんだけどな〜」

「いるって……何がですか？」

「それは会った時のお・た・の・し・み〜」

先ほどからキョロキョロと何かを探するような素振りを見せていた鞠川先生に肩に金属バッドを担いだ孝が怪訝そうな表情でそう尋ねるが彼女は顔に悪戯っ子のような笑いを浮かべそれに答えることはない。

「会って……こんな所に誰がいるっていつんだらうな？」

「私を知ってるわけないじゃない」

「それもそうだな」

隣を歩く高城に尋ねるも突っぱねられてしまう、まあ彼女が知っている筈もないので孝は少しだけ肩をすくめてため息を吐いて上を見上げる、高くそびえたっている床主城といつも通り青々とした空が広がっている、時間で言っても今は朝なので色が変わり始めるのもまだまだ先の話となるだろう。

「なぜ君はいつもこういう事を私に黙っているのだ!」

「お前がバイク運転できるんやったら言っといたわ!! 運転できる奴が一人しかおらん以上そいつが無理してでもやるしかないやろうが!」

「くっ……、例えそうだとしても患部を冷やすぐらいのことは出来ただろう!! 無理をして倒れでもしたらどうにもならないのだぞ!」

城門に差し掛かったところで二人の男女が怒鳴りあう声が聞こえてきた、こんな所で怒鳴りあうなんて奴らが怖くないのだろうか? それにしても聞こえてくる声はどちらとも聞き覚えがあるような気が

してならない。ふとあの二人の顔が浮かんだがすぐに頭から追い払う、あの二人がこんな所にいるはずが無いからだ。

「あゝ！！やっと見つけたゝ！！」

その声に首を捻っていると先ほどから何かを探していた鞠川先生が顔を輝かせて城門へと飛び出していきここからは死角になっていて見えない所に飛びついていった。

「もゝ心配したんだからねゝ、無事でよかつたあ！！」

「ッ！！奴らか！？」

「鞠川校医！？何故ここに……」

「ハア！？鞠川先生！？アダダダダダ！！イタイイタイイタイ！！抱きしめんのやめて！！右腕がっ右腕があ！！」

何やら場がいい感じに混沌としているようだ、言うなれば周りに流れていたBGMがシリアスなモノからコミカルなモノへと変わったというものだろうか？少し動揺している他の面々と顔を見合わせ重々しく頷いた後、一番城門に近いところにいた自分がそゝと首だけ出してその場の確認を試みれば……

「秀治先輩に毒島先輩！？どうしてここに……」

思わず口から声が出てしまう。そうそこには先ほど頭をよぎっていた昨日別れた二人と今飛び出していった鞠川先生がいた。詳しく言えば驚いた表情で目の前の出来事にオロオロとしている毒島先輩（かなりレアな姿かもしれない）と後ろから鞠川先生に抱きつかれて絶叫している秀治先輩がいた。

中々にカオスだ、孝は目を揉んでからもう一度見るが彼が期待したような幻でも何でもない、目の前に広がるのはいつも非情な現実だった。孝はその光景を見なかったことにしようとして首を引っ込めようとしたが

「そこにいるのは小室君か！！もしかバスに何かあったのか!？」

「何い！？つて痛い！！痛い！！ちょ！？マジではなして！！」

「だめよ〜お兄さんをあんなに心配させて〜そんな悪い子にはお仕置きだべえ〜」

冴子に見つかりこっそりと逃げるといふ選択を排除する。冴子は先ほどの驚いていた表情から一転して猛禽を思わせるような鋭い表情

へと変わり自分に対して真に迫った声で問いかけてきたが……、自分と彼女の間にいる二人のせいで何か台無しになっていた。

「いえ……そういうわけではないんですけど……アレ止めないんですか？」

「構わないさ、奴にとってもいい薬だ、全く肩の怪我について私に話していなかったとはな……」

「ヤッターマン！？年が知れ……ぐがあああ！無言できつく絞めんのやめて……あつ！？でも背中に幸せな感触が……」

冴子はやれやれとでも言うように眉尻を下げてため息を吐いていた……がその顔とっている事が秀治の言ってしまった事ですぐさま塗り替えられる。

「ええい！！うるさいぞ！！秀治！！今大事な話をしているんだ静かにしろ！！大体いつまで鞠川校医とくっついてるつもりだ！！さっさと離れる！！」

下げた眉尻をギチリと音が鳴りそうなほどに吊り上げくっ付いている二人を引き剥がしにかかっている。孝の中でいつも淑やかで男子生徒の憧れだった先輩像にヒビが入る音が聞こえた気がした。

「うえ！？こっちに言う！？せめて抱きついてる方に言おうや！！」

そう言つて反論を始める秀治だったがその顔は孝が見ても先輩の方が悪いと言えるほどに緩んでいた。

「ならその伸びきつた鼻の下を何とかしろ！！見ていて腹が立つ！
！鞠川先生もいい加減に離れてください！！」

「ん〜いいわよ〜ちょうど触診も終わつたし、どうやらただの打撲傷のようね、肩の骨とかにヒビとかはないってないようだから大丈夫よ。先生特性の薬を塗ればすぐに治っちゃうんだから」

「うっそ！？今のが触診！？」

驚いたことにただふざけて絞め付けていたのではないらしい、度々場所を変えては絞め付けていたので嫌がらせで最も痛がるポイントを探していただけだと思っていた。

彼女はそう言つたあとパツと離れていくと共に右肩の痛みと背中に感じていた素晴らしき感触が消える、少し惜しいなと思う

「素晴らしき母性を見つめてまうのは男の性なんよ……だから冴子
そんな笑顔で見つめるのはやめてくれんかの？」

「うん？私は君が何を言っているか全く理解できないなあ君の勘違いじゃないのか？」

口調こそ柔らかかだが感じさせるのはその真逆といつてもいい。どうやら肩の事を黙っていたのと今の事を合わせてかなりご立腹のようだ

「さて……お遊びはここまでにして、何でお前らここにおんの？」

無言の圧迫の中秀治は今近くにいるのは不味いと判断して……小室達一行の事情を聞くとという手段で逃げに走った。

鞠川先生が機嫌良く先頭を切ってバイクを押し歩いていくのに追従しながら互いにこれまでであった事を話して情報を交換していく。中には合流してからずっと秀治に向かって敵意を叩きつけている者もいるが他はそれなりに友好的な雰囲気で談笑している。恐らく合流したあとに配った缶コーヒーが一役かっているのだろう。

「なるほどねえ、まあ災難やったの小室」

「本当ですよ……皆バスを出るって聞かないんですから、それで先輩達はどうしてあんな所にいたんですか？」

「ん、兄さんに昨日の夜辺りにそこに居れって言われたからやの。どうもお前らが出て行くこと見越してたみたいやなこりゃ」

それともそういう方向へと兄が持っていたかのどちらかだが此れは思うだけで口に出したりはしない、別に自分達いや自分に警戒心を持たせる必要は無いのだから。

「うわ……ってことは先生も……」

「あはは……昨日紫藤先生に頼まれちゃって……」

小さく舌をだして鞠川先生がそれに頷く、それに対して孝が参ったとでも言うつように右手で頭を掻いて肩を落としたため息を吐く。

「ん、まあ気にするだけ無駄やの。兄さんが何考えてるか読もうな

んてワイにも出来んことやからの。この話は終わりにしよか……どうやら着いたみたいや」

前を見るとバイクを引いていた鞠川先生が困ったような顔で目の前のメゾネットを見上げていた。「お友達のお家」が「奴らのお家」になっていることは考えていなかったようだ。

「……結構いますね」

「ん〜、まあ問題ないやろ、これくらい。ああそうそう、災難続きで悪いけどこの面子のリーダーお前やねや小室」

「ええ！？なんで僕が!？」

「ワイがやったら言うこと聞かなさそうなのが一人おるし……、何よりお前以外の連中のことを全くと言ってええほど知らん。冴子も同じくな」

「そしてそれは君達にも同じことが言える。私達のことなどほとんど知ってはいないだろう？ならば両者のことをある程度は知っている小室君が指揮をとったほうがいいということさ」

「その通り、で？お前らはそれでええか？」

秀治は冴子が続けて言った言葉にわが意を得たりと大きく頷いたあと他の面々の同意を求めた

「別にいいんじゃないの」

「高城さんがいいんだったら、僕も別に異論は……」

「私はそういうの向いてないし、皆がそれでいいって言うんだったらいいんじゃないかしら？」

「孝やりなさいよ」

まさに満場一致、反対の意見なんて存在すらしていなかった。

「皆!?!」満場一致やから拒否権は無いと思つとけよ、すまんな」
「……」

全員の反応が予想外すぎたのか孝が慌てて何かを言おうとする前に秀治が逃げ道をバツサリと切り捨てる。孝がジト目で秀治を睨みつけるようにして見るがいい笑顔でサムズアップが返されたのを見て何を言っても無駄だと判断したのかため息を吐く。

周りを見回しても同じような反応が返ってくるだけで、いや鞠川先生と平野は顔ごと目をそらしたのを見るとどうやら罪悪感らしきモノは一応あるようだ。そして最後に見るのは自分を上目遣いで見上げてきている麗。その目はただ「リーダーになって」とだけ伝えていた。

とどのつまり、孝には初めから断れるような道は無かったのだ。

「……はあ、わかったよ、頼りないかもしれないけど僕みたいな奴でいいならやってみるよ」

ため息と共に了承を示す。孝は目の前の彼女がピアと目を輝かせたのを見て苦笑する、彼女が喜んでいるのを見ると自分まで喜んでいくような気がするからだ。まあ男なんてそんなモノなのだろう。

「じゃあ皆、さっさと奴らを片付けてゆっくり休もう、旨い飯に風呂そして柔らかい布団が僕らを待っている!!」

多少ヤケになってそう叫び近寄ってきた一匹をバットでホームランする。今まで思い通りにならないことだらけで鬱憤がかなり溜まってきたいるのだから奴らで晴らしてもバチはあたらないう。奴らをかっ飛ばしたバットをそのまま奴らの蔓延っているメゾネットへと向ける。

「行くぞ!!! 全ては僕らの衣食住の為に!!!」

「「「「衣食住の為に!!!」」」」 「い……衣食住の為に」

「…………… バカばかりだわ、つてか何で毒島先輩まで言うてるのよ。キャラが違うでしょキャラが……」

孝の号令の下に一齐にメゾネットへと突入していく、プライドが邪魔をして孝の悪乗りに乗るに乗れなかった高城が呆れたようにそう言ったのが辺りに虚しい響きを残していく、断じて自分だけ乗れなかったので疎外感を感じているわけではないのだ。

ちなみに冴子は普段からそんな悪乗りが大好きな人間が近くにいるために慣れてしまっただけである。

後にこれは彼の黒歴史として仲間内で偶にからかわれる絶好のネタと化するのだが、神ならぬ一少年である孝にはそれを知る術はなく、将来悪ふざけで秘密裏に書かれることになる

「ハイスクールリーダー伝 タカシ!!! 作者 平島高藤」というふざけた名前の作品がよもや思い人と結ばれる時に読まれるとは想像だにしていなかった。

11話(後書き)

感想待ってます(切実)

12話前編

奴等が自分達の「日常」というものを文字通り食い荒らしていった日から漸く一日半が経過し小室孝をリーダーとした一行は鞠川先生の案内したメゾネットにて2回目の夜を迎えようとしていた。

「わ〜!!おいしそ〜!!」

テーブルの上に並べられた料理の数々（和食メイン）に鞠川先生が子供のように目を輝かせながら席につく。

無論作ったのは冴子である、秀治も手伝いはしたが自分より上手く料理できる冴子に味付けなどは任せやった事と言えば具材を適度な大きさに切った程度だ。

ちなみに食材等は先生の友達の部屋の冷蔵庫にろくなものが入っていなかったためにメゾネットの他の元居住者達（今の奴等）の部屋に侵入し冷蔵庫の中身を有難く頂戴させていたのだ。

その際に着替えやその他これから役に立ちそうな日用品も持っていたのは言わずもなである。

「やはり料理では勝てる気がせんのか……」

「これで負けたら私の立つ瀬がないさ、ほらさっさとこれも運んでくれ」

皿に載せられた料理をツマミ食いし眉を寄せてそう呟いていると後ろから現れた冴子が秀治の頭を軽く小突いて右手に持っていたほかほかと湯気を立てている白米が盛られた茶碗を差し出す。

ツマミ食いをしているのがバレてしまったのにたいして苦笑と軽い謝罪を返した後ソレを受け取り風呂にも入り各自ラフな格好で寛いでいるテーブルへと向かっていく。

そう全員だ、こんな時に見張りの一人も立てないのは無用心ではないかとも言えるがそうでもない。

理由は簡単だ、今はまだ夕方と夜の境目言わば逢魔ヶ時である。つまり日はまだ沈み切ってはおらず、外もまだ明るい。

そんな中で見晴らしのいい場所（このメゾネットではベランダに当たる）に見張りを立てるといふのはここは安全だと看板を出しているようなものなのだ。

外が暗くなるまで見張りはせずにメゾネットの中で過ごし暗くなったら見張りを始めるという案で固まった、消去法で見張り役が小室と平野の二人になったがそれは仕方ないことだろう。

一番体力があると言える秀治は昨日一睡もしておらず更に言えば満身創痍に近い状態だ右肩はどす黒く染まり左肩も奴等に掴まれた時に付けられたものであるう手形がくつきりと痣となって残っていた

りする。

そして冴子は大きな怪我こそないものの昨日寝ていないというのは同じである、二人とも口には出さないものの時折欠伸を噛み殺していたり何かを振り払うように軽く頭を振って目頭を押させるなどといった行動を見せている……限界に近いのだ。

そして体力的に劣るその他の女性陣にも夜の見張りを頼むわけにもいかない小室と平野が見張り役になるのは必然であった。

「……………いただきます」「……………」

全員が揃ったところで手を合わせて食事始める。和食が中心の食卓だが一つ大きな特徴があった。

海産物以外の肉類がまるで使われていないのだ、別にその食材が無かったというわけではない。

むしろどの部屋の冷蔵庫にも（この部屋を除いた）牛なり豚なりの肉はあったのだが……それを調理するのも食べるのも気分的に憚られたので使わなかっただけだ。

むしろあれだけ昨日から飛び散る肉片や血液を目にして喜んで肉を食べるほど平野を除いた一行の心臓には毛が生えていなかった。

まあ味は文句なしに美味しいのでどこからも不平不満の類は出てくることはなかった。

「ぶはあ、やっぱりお酒はおいしくわね、ん、秀治くんも飲んでみる？」

鞠川先生がどこから取り出したのかビール瓶を開けてソレを飲んで
いる、テーブルに用意した覚えは無いのでいつの間にか取ってきた
のだろう。

それをジッと見つめていると何か勘違いをしたのかビールを並々と
注いだジョッキを此方へと突き出してきた。

未成年に酒を勧めるのは保険医としてどうなのだろうか？とフツと
頭に過ぎったが軽く息を吐き頭を振って沸いて出てきた疑問を振り
払った。

「……じゃあ遠慮なく頂かせてもらいますわ」

差し出されたジョッキの中身を零さないようにゆっくりと受け取り
シユワシユワと泡立つソレを見つめる。

昔から興味はあったのだ、コレは美味しいのか？不味いのか？酔うと
いう感覚はどのようなものなのか？……と。

別に法を破ってまで知ろうとまでは思っただ事だったが、昨日昔
話をして母親を思い出したからだろうか、それが妙に気になったの
だ。

ゆっくりと目を閉じた後、並々と注がれているソレを一気に飲み干
していく。

苦い……

最初に抱いた感想はそれであつたがそれでもどこかそれを美味いと感じる自分があるのも事実であつた。周りでは一気飲みした自分を啞然とした表情で見ている。

はて何かおかしな事でもしただらうか？

「秀治くん大丈夫？気分悪くなつたりしてない？」

まさか一気飲みするとは思つてもいなかつた鞠川先生が心配そんな顔をして微かに赤みがさした秀治の顔を観察するようにつめてそう言う。

こんな所で急性アルコール中毒になられたら困るところではすまないからだ。

「ええオレは大丈夫ですよ、それよりおかわり貰えますか？中々おいしいですねえコレ」

「あの〜先輩もしかして酔ってます？」

カラカラと顔に柔らかい笑みを浮かべながらそう言うと言いかい側の席に座っていた小室がおそるおそるそう尋ねてきた。

「アツハツハ、酔ってない酔ってない、ただかビール一杯程度でこのオレがどうかなるかっての、オレは日本最強の高校生剣士だぞ」と、アツハツハツハツハ！！」

駄目だコレ完全に酔っ払ってる、と秀治以外の全員の心の声が一致した。自分で言った言葉にツボったのか大爆笑している彼を見て大丈夫だろうか？と心配する。

「やっぱり酔ってますって、口調が可笑しくなってるじゃないですか。あと性格もなんか変わってませんか？」

「ああ？口調？あんなもんキャラ作ってるだけに決まってるんじゃないかねか、生まれも育ちも床主のオレが自然に関西弁になんざなるわけがねえだろうが。」

まあオレはオレだってことは変わらねえからそんな細かいことは気にすんな。さもないと将来ハゲちまうぞ」

素面の状態では絶対に返ってこないような答えが返ってきた、確かに自分のことを全く話そうとはしない人ではあったがキャラを作っていたなぞ思った事も無かった。

そこまで思ってた事と気付く、そう……自分は全く知らないのだ紫藤秀治という人間性を。

自分にとって彼という人間は頼れる優しい先輩という認識だったのだ、だからこそ

バスでの一件を見たとき純粋に戸惑っていた。

自分は見たことも聞いたこともないのだ彼のあそこまで冷酷な表情を、そして非情と言える言動も……、だからこそ敵意を向けることも呼び止めることもしなかった、いやできなかった。

彼をよく知っているはずなのに目の前の立つ「彼」が誰か知らない人のように感じられたからだ……そうちょうど今と同じように。

思わず生唾を飲み込むさつき飲み物を飲んだはずなのにやけに喉が渇く、目の前で毒島先輩に止められながらも

新たに注いだビールを飲もうとしている「彼」と同じようにキンキンに冷えたウーロン茶を飲もうとしているの間にか握り締めていた拳をひらくとジツトリと手汗で濡れていた。

「ちょっと孝、大丈夫？ なんだか顔色が悪いみたいだけど……」

「あ……ああ、大丈夫だよ。ちょっと疲れが出ただけさ」

どうやら顔に出ていたらしい、彼女に安心するように苦笑いをしながらそう言っつて、気付かれないようにそつとズボンで手汗を拭う。

危なかった……もし止められていなかったらあのままどんなことを思っていたかわからない、今はそんな事をしている場合ではないっというのに……

心の中でそう思いつつ前を向くと、秀治先輩がこちらを赤い顔でジツと見つめていた。

「な……なんですか？先輩」

「いや、具合が悪そうだったからちょっと……調子悪いんだつたら休んでもいい、見張りはオレと平野に任せろ、リーダーに倒れられたらグループが崩壊しちまうからな」

そう言うと酒臭い息を吐きながら食事を進めていくビールは没収されたらしく鞠川先生の手に戻っている、
その顔からはバスで見たような冷酷な一面は全く窺えないむしろいつも通りの良く知る先輩だ。その様子をみて少しだけ疑問に思っていたことを聞く事にした、

「……先輩少し聞きたいことがあるんですけど」

「あん？冴子との馴れ初め秘話ならいつでも話してやるが……」

「どっから出てきたんですかその話……いやそれもそれで聞いてみたいですけど、今は真面目な話です。」

どうして僕にリーダーを任せたんですか？別に毒島先輩でもよかったですんじや……」

質問の内容を聞いた瞬間に彼の箸の動きがピタリと止まり何か観察

するような鋭い視線でこちらを見てきた。
思った通り何か他の理由が存在しているようだ。

「お前が一番その地位に相応しいからだと言ったはずだが……」

「それ以外の理由もあるんじゃないですか？ 僕が聞きたいのはソレ
なんですよ」

「……………」

そう言うと彼は沈黙し何かを迷う素振りを見せた。素面の状態なら
素知らぬ振りをして惚けるだろうが今の彼は酒に酔っている状態、
なら話してくれるかもしれないと思い聞いたのだがどうやら当たり
だったようだ。

「…………ふーっ、確かにあるよ大した理由じゃないがな、半分は昼間
言った通りお前が立場上一番適役だったからだ、
もう半分はお前は後ろから人を刺せるような人間じゃないとオレが
判断したからさ」

目を閉じて思い返すのは今や幻想と消えた藤美学園のコイツと過
した時のこと、初めはやる気の無い一不良生徒という認識だった。

だが付き合いを重ねていくうちに恩師の息子であると知り興味を持

ち、今村経由で自分が過去やってきたことを知らされても付き合い方を全く変えることのなかったコイツを見てハッキリとした好感を持ち惹かれていった。

今更ながらコイツを中心に4人揃って馬鹿話をするのは楽しいものだったと思う……もうあの時は千金を払っても取り戻せないのだからもっと楽しめばよかったと僅かながら後悔する。

「この半年近くお前と付き合い合ってきて思ったのはお前がお人よしで器が大きいということだ、まあ甘いともへタレとも言えるが……それは置いておこう。」

もうわかっていると思うが、この最高に糞つたれた世界には命の危険がゴロゴロと転がっている、その中で徒党を組んで生き延びるためには何処が一番警戒しなければならないか分かるか？オラ問題だ答えてみる高城」

「……背中つていいわけ？」

「大当たりだ、前を警戒していたら後ろからザックリいかれたってのが一番恐い」

この世界で一番警戒しなければならない存在は奴等ではない、警戒しなければならぬのは人間だ。

奴等には力こそあるが知恵は虫より劣る、それならば対処のしようなどそれこそ幾らでもあるのだ。

しかし人相手だとそうではない、奴等には無い知恵がある。大体人を壊すことなど簡単だ、よく壊していたからわかる、そしてソレは自分も同じだということもだ。

頭をやればどれだけタフでも関係が無い。

この中で一番非力であろう高城でも寝込みを襲えばここにいる全員を殺すことなど簡単だろう、尤も彼女はそんなこと何があってもしないだろうが……

人は精神的に追い詰められると被害妄想が激しくなり最後には自己の内にある「正義」という継り行動に移す時がある、自分の学校での行動がいい例だ。

そんなことは有りもしないのに勝手に他者を敵とみなし見捨てた、コレが自分に跳ね返ってこないとも限らない、「因果応報」という言葉の通りえてしてこういうものは巡り巡っていつか帰ってくるものなのだから。

「わっ、私達がそうするっていうの！！冗談じゃないわ、それを言うんだったらアンタが一番危険じゃない！！」

「その通り、だからこそ小室をリーダーに推した、絶対に裏切らないと確信できて信頼も信用もできる奴にだ」

それを聞いた宮本が激昂して秀治に突つかかる、まあ言い方を変えればお前達を信用していないと言っているのと同じでありまさにその通りでもあったので否定はしなかった。大体一度似たようなことをやっている身だ、まさにそんな疑惑を持つのに丁度良い相手になってしまっている。だからこそ小室を選んだのだ。裏切ろうと思ってもきつと裏切りきれないだろうあのお人よしに……

「あんたが裏切らないっていう保障はないってことになるけどそこから辺はどう言うつもり？」

「こいつをリーダーに推した最後の理由になるが……こいつはなあオレにとつて生き残った最後の後輩であり男の友人なんだよ。だから大丈夫だ学校の時みたく切り捨てやしねえよ……まあこんな言うのは恥ずかしいことこの上ないから隠してたんだよなあ」

あれ？じゃあ何でオレは今言っちゃまったんだろうなあ？と言って子供のようにケタケタと笑い始める。

その姿を見てさっきの疑心暗鬼に囚われていた自分が馬鹿らしくなった。

確かに先輩には非情な一面はあるのだろう、でもそれでも先輩が自分で言っていたように先輩は先輩なのだ、自分の知っているのと何も変わらない、

何も変わっていない先輩だ。それなら心配することは何も無い、こんな事で一々ビクビクしていたら本当に禿げるかもな。

そう思い沸き出てくる苦笑を噛み殺していると……

「ああ、一つ言っておくがオレは別に理由もなく警戒してお前を推したわけじゃねえ、それなりの理由ってのはある」

急に笑うのを止めて今度は何やら据わった……いやバスの時に見たような冷たい視線を此方に向けてなぜ自分が警戒しなければならぬのかを語り始め……

「宮本、お前だよさつきから敵意バシバシぶつけてきやがってお前が敵視してくるからいらぬ警戒しなけりやならなかつたんだよ……兄さんにも学校で同じようなことしてたなあ。何だ？何かオレ達兄弟に恨みでもあんのか？聞いてやるよ」

と先程から自分を睨み付けていた宮本に対してそう言った。

12話 後編

「……………何かしたか聞いてやるですって？よくも……………よくもそんな口を……………！！！」

顔を般若の如く歪めワナワナと震え始める。よほど許せないことがあったのだらう、ここまで濃い人の恨みや怒りの念は久しく受けた事がない。

だが生憎とこれ以上に濃い感情を受けたことがありそれと比べればこんなもの少し強い風と似たようなものだ。

昨日にしる今日にしる良く母を思いだすものだ……………ああ鬱陶しい

「チツ……………うざってえな。さっさと見えや面倒くせえ」

機嫌が悪くなっていくのを隠そうともせず吐き捨てるようにそう言う。するとその言葉でついに切れたのか俯けていた顔を跳ね上げ

「私は留年させられたのよ！！アンタの！！兄である！！紫藤浩一に……………」

と半ば叫ぶようにそう言い放った。

食卓の空気が凍りつく……秀治を除く誰もがその言葉に対して信じられないという顔をしている。

誰もお人よして面倒見が良い彼がそんな事をするとは思えなかったのだ。

「ほお、兄さんに留年させられたねえ……」

しかし自分は違う、兄がどこぞの正義の味方のように徹頭徹尾善人では無いことを知っている、それに……それに何より自分達の背後には奴がいる何をされていても不思議ではない。

「驚かないのね、もしかしてアイツから話を聞かされてたのかしら？」

「いや、オレはそんな話聞いたことも無かったな。しかしなるほどねえ、ちよつと前から少し違和感を感じるようになったのはそれですか……」

自分と冴子が兄の持つクラスになったこと自体がすでに可笑しかったのだ、理由を聞いた時は見事に騙されてしまったが……なるほどこういう裏があったのか。

視界の端で冴子と鞠川先生が何やらハツとした顔になっているのを見ると、彼女達も何やら心当たりがあるようだ。

「私のパパは警察の公安で働いてて貴方の親の紫藤一郎の捜査にあたっていたの……それをアイツがああ男が私の成績を操作してッ！」

「なるほどな……」

多少怒りで支離滅裂にはなっているがこれで大体把握はできた。つまり予想どおりの事が起こっていたということだ。

「それでお前は兄さんを恨んでいると……そういふことか？」

「そうよ……アイツもアイツの父親も絶対に許さない!!」

自分も敵視してくるのは言わば「坊主憎けりや袈裟まで憎い」という奴だ、自分が何かされたわけでもないのにもう一人の兄を侮蔑しているのと同じようなものだろう。

「……兄さんにもそうせざる終えん理由があつたと考えた事は？」

「そんなの有るわけないじゃない!!大体……」

「わかった、わかったからもう黙れ、キャンキャン吠えるな耳が痛い」

そう言った拳句目を瞑って今入って来た情報を頭の中で整理する、未だ彼女は何か言っているようだが完全に頭に血が昇っている今これ以上何を聞いても罵倒ぐらいしか返ってくるものも無い、聞くだけ無駄だ。

宮本の父が公安警察で奴の調査をしていた……、そして奴は何かの案件の尻尾を掴まれそうになって自分の息子である紫藤浩一を脅すか何かをしてその娘を留年させて自分の周りを嗅ぎまわっている彼女の父を黙らせた……。

推測は入るが大体こんなものだろう……しかしそうなると一体何を脅しとして使ったのだろうか？

今の職？いやプライドがやたらと高い兄のこと自らの誇りとまで言った教職に泥を塗るくらいならば自分から辞めているはずだ……、では何だ？

兄のこれまでの行動を思い返しそこに何か共通点が無いかを探る、………が手持ちの情報が少なすぎて纏めるも何も無い。

そう考えていたら突然何か固いモノが勢いよく額にぶつかり冷水が降り注いでくる、そして何か硬質で円筒状のモノが股の上に落ちてきた感触、聞こえるのは怒声と悲鳴、そして必死になって宮本を宥めている小室の声。

ソレを聞きつつ結構な痛みが奔っているソコを触るとヌメリとした何か生暖かいものが流れ出してきていた。

閉じていた目をゆっくりと開きながら、そのナニかに濡れた指に舌

を這わせる。

鉄臭い味が舌の上で広がり踊る、その臭いは生臭くこの二日で飽きるほど臭わされることになったものだ……つまり「血」だ。

ソレを綺麗に舐め取った指から目を放し正面に戻すとそこには後ろから小室に組み付かれ動けないようにされながらもなお自分に対しいまや殺気まで混じり始めた怒気と罵詈雑言を吐き散らす宮本がいた。

どうやら彼女にグラスを投げつけられたらしい、つい昔の感覚で相手をしてしまったのが原因だろう。

憎いと思っっている相手に挑発された挙句無視を決め込まれては激怒するのも仕方ないだろう、

どうやら自分は無意識的に挑発していたようだ、

この二日色々と不愉快なことが立て続けにおこりすぎたせいで感情のコントロールが出来なくなっているのかもしれない最悪の場合いつの間にか手が出ていたということになりかねない……気をつけなければ。

食卓を見回すと先程の平和な風景は何処へ消えてしまったのか、そこにいるのは少し恐怖の混じった目で事態の推移を見守っている者や自分に火の粉が飛んでこないようにとそのずんぐりとした図体を小さく縮めている者、

余りの急展開についていけずに唯うつたえている者……そして隣で静かに殺気だっている者だけだ。

「落ち着け、大事はない。この程度の痛みには慣れてる」

「私は十分落ち着いているさ」

横で目を細くして宮本を睨む冴子に手を出すなど釘を刺す、ここで彼女まで参加したらもう取り返しが付かないことになる、空中分解させまいと小室をリーダーにしたことすら水泡に消えてしまふ。それだけは何としてでも避けなければならぬ。

「どうだか、まあ今のは昔の不良を相手にする感覚で宮本を相手してたオレが悪い。だからそう怒るなって、それよりお前が兄さんからオレの昔話を聞いたのは最近か？」

「うん？ああ、確かにそうだが……やはりこの一件となにか関わりがあるのか？いや、それよりも早く手当てをしてくれないか？見ているこっちが痛くなってくる」

「多分な、イコールで結べるかどうかは分からんが理由の一つではあるはず……ま、後で治すよ」

口元まで垂れてきた血をペロリと舐め上げながらそう返す、痛みと共に冷水を被ったせいか頭が冷えた。とりあえず股の上に転がっているグラスを机の上に戻す。

頭もそうだが着ている服も下着もグツシヨリだ後で着替えなければ風邪をひきかねない。

「少しは自分を大事にしたらどうだ？君が傷ついて悲しむ人だっているのだから」

「アツハ、嬉しいこと言ってくれるねえ。オレが傷ついて悲しむのは……ああそういうことが、なるほどね」

言っている途中でようやく気がついた、兄が何故忌まわしき我等が父上様に屈した理由が……

「うむ分かればよろしい、ほらさっさと治してこい」

「ああ、そういう意味で言ったわけじゃねえよ、兄さんが何で落としたかの理由が分かったって話だ、しかしとなるとやってくれたな 冀親父殿……」

悔しげに顔を歪ませ両手で濡れた髪を掻き揚げた後深呼吸を繰り返して再び荒れ始めた胸中を治める、

昔奴が兄に対して言っていた言葉が脳裏に浮かぶ「どちらにせよお前は私に逆らうことなどできない」その意味が今完全に理解できた。

もはやコレは糸でなく鎖の域だ、通りである時アツサリと退いたはずだ……糸は切れども大きすぎて見えない鎖は残っていたのだから。

ああ、見事に死角だった、自分自身奴が親だからソレは無いと思いき無意識的にその手段を除外していたのだろう、だがやはり奴にとつて自分は息子ではなかったようだ。

「すまん宮本、どうやらお前が落とされた理由はオレにあるらしい」

どうやら自分という存在は知らぬ間に兄にとってこれ以上ない程重い足枷になっていたことに対して悔しさで胸が一杯になる。

「それってどういうわけ！？もしかしてあんたが何かしたんじゃないでしょうね！！」

「ちよっ！いい加減にしる麗！」

「孝は黙っててよ！！これは私とこいつ等兄弟との問題なんだから！！」

「だから落ち着いて話し合えって言ってるんだ！！一々突つかかってたら何もすまないじゃないか！！」

「ッ！！わかったわよ！！暴れなければいいんでしょ！！それじゃあキツチリと今の言葉について説明してもらおうよ」

「言われずともするさ、まあこれを聞いて信じるも信じないもお前次第だがな、先に言うておくがオレは嘘は吐かんからな」

秀治が言った言葉を違う意味で取ったのかまた暴れようとする宮本を小室が肩を掴み力ずくで押さえつける、

紫藤家の詳しい家庭内事情を知らない彼等にとっては今の言葉の意味はそうとしか捉えられないだろう、
実際微かな疑惑の色を含んだ眼差しが冴子と鞠川先生以外の者から向けられている。

「僕も全く関係が無いことじゃないので詳しい説明をお願いしますよ先輩」

「あゝ、確かにそうか……というよりお前にとっては結果的にマツチポンプみたいなものになるか……すまん、
だけどオレは何も知らなかったのは事実だ、そう疑ってくれるな」

兄が落としその弟がそれについて発生した問題の相談に喜んで乗る、彼にとって詐欺にかけられたのと心情は同じようなものだ。

「簡単に言うとオレが人質にとられた場合によっては冴子も同じかもしれないということだよ」

「はあ？それってどういう意味よ」

「私もだど？すまない少し事情が読めんももう少し詳しく説明できないか？」

鞠川先生以外の全員が怪訝な顔をしてこちらを見る、そして自分は不思議そうな表情を浮かべて鞠川先生を見る、

そして全員がそれに釣られて鞠川先生を見る、全員の視線を一身に受ける鞠川先生はオロオロする……なんだこれ？

「何か知ってるんですか？」

「え！？え〜つと……別に大したことじゃないんだけど〜言わなくちゃ駄目？よね多分……」

「今はどれだけ些細な情報でも欲しい、これから話すことも所詮は推測の域なんだからもつとソレを正確なものにしたい、だから何か有るんだったら言っただけで欲しいできれば詳しく」

そう今から話すことは嘘偽りが無いと言っても唯の推測にすぎない。推測を真実に近づける為にはどれだけ些細なものであれ知る必要がある、

兄の場合そんな些細な事に何か大事なものが浮き出ているのかもしれないのだから

「えつと、えつと……ちょっと話が長くなっちゃうかもしれないんだけど〜」

「なら後で話してもらいましょうか、今は説明するのを優先させてもらいます……あ〜できれば救急箱とか持ってきてくれませんかね」

そう言っただけで自分の額をペチペチと叩く、血はまだダクダクと流れ出てきており顎から滴り落ちた血液が服を赤く染め上げていつている

……
思ったより傷が深かったようだ流石先程机の上に戻したグラスの底に蜘蛛の巣状のヒビを入れただけのことはある。
ちなみに手のひらを返したのはもしかしたら持っている情報がとんでもない地雷なのではないかと恐くなつたからだ。

「それなら任せて！！あつという間に治してあげるわ」

「有難うございます、さてじゃあ理由説明といこうか……まずこの一件は兄さんは喜んでやったわけじゃなく巻き込まれたんだとオレは見てる」

宮本がこの時点でまた何かを言おうとして口を開いたが隣に座る小室が彼女の固く握り締められた手に自分の手を重ねて首を静かに横に振つたのを見て口を閉じて黙つた。

それを見て中々いい仕事をするものだと感じる、やはり昔から付き合っていただけあってどこか深いところで繋がっているものがあるのだろう。それともそれ程本当の所どうなのか知りたいのだろうか？

ソレを見て高城が少しだけ羨ましそうな顔をしたのに気付き自分の後輩の意外なまでのモテっぷりに少し驚くがすぐにその表情をしまい先程の真剣なものへと変える。

だが高城はその些細な変化に気がついたのか自分に見透かされたのを察して顔を真っ赤にしてこちらを睨み強引なアイコンタクトをはかってきた。

言語化するなら「別にそんなわけじゃないんだからね！！」だろう

か？それに対して「まあ頑張れ」といった意味を込めた視線を投げ返しておいた。
どうせ苦勞するのは小室だ、精々高みの見物でもして楽しませてもらうようにしよう。

「理由は簡単だ、オレ等兄弟に偉大なる糞親父殿を助けるために手を汚すなんて選択肢は存在しねえ、
それに兄さんはあの仕事を自分の誇りだと言っていたんだよ、プライドの馬鹿高い兄さんがソレを汚すような真似を自分からするはずがないってことだ」

「じゃあどうして私が落とされたっていうのよ！！」

「そこで最初のオレと冴子が人質にとられてたかもしれないっていう推測に戻るわけだ、
お前は知らんだろうが紫藤家の親子仲は最悪と言って良いほど悪くてな……オレ等を切り捨てるなんてことは奴にとって簡単な話だってことさ」

「もしかしたら私達が留年させられていたかもしれないということか？」

「その通り」

もしくはそれ以上に酷い条件を突き付けられていたかのどちらかだ……と語る。兄に対して最強の鬼札となりうるものを使ってまで従わせた。

言い換えればそうまでしななければ不味いことを警察に嗅ぎ付けられ

ていたのだろう。

「ちょ、ちょっと待ってよ！それじゃあ何！？アイツは強制的にやらされてたってこと！？そんなの信じれるわけないじゃない！」

「言っただろ？信じるも信じないもお前次第だつてな、こっちは唯兄さんを一番近くで見てきた弟として一番有りえそうな推測を立ててるだけだつての本当は違つかもしれん、

あくまでそうかもしれないといった可能性だけでも心に留めて置いてくれるだけでいいのさこっちにとってはな」

言うなればこれは宮本にとっては毒だ、ただ単純に恨むだけだった今までとは違うようにして迷わせればいい、もしかして……まさか……そういった疑念が有れば有るほど思い切った行動には出られなくなる。

「大体そういう根拠は何処にあるっていうのよ！！」

「オレ等が兄さんの持つA組に入れられたというのがその証拠の一つだ、大方自分で守るつもりだったんだと思うよ担任ならオレ等の成績を弄くられても対処できるからねえ、

まあ話を続けるが学年主任といえどたった一人で成績を弄くって留年させられるわけがないんだよ、弄くつたのはデータに残る、

残っていないとしてもお前を見てきた先生方は違う、十中八九弄くられていることに気がつくソレが自分の持つ科目であるなら絶対に
な」

「それって……他にも協力してた先生がいるってこと!？」

「まあそうなるな、糞親父殿が理事の学校……何があっても可笑しくは無い、結構居るんじゃないかねえかなあ？親父殿の息がかかってる先生は」

関わっていたのは恐らく複数人……本当にそんな輩が居たのかは知らないが兄が単独でやろうとしても流石に無茶がある、

家の学校は全寮制だけあって生徒と先生との結びつきは強いほうなのだから。

そして最後に学年主任である兄を黙らせ強制的に協力させることによつて留年を決定させたというのが裏で起こっていたことだろう。

「嘘よ……絶対嘘よ!!そんなの有りえるわけがないじゃない!!」

「だ〜から、何度も言わせるなって、この話は全てオレの推測であり真実ではないんだよ、もう一度言つてやる、信じるも信じないもお前次第だつてな」

成功した、最低でも自分が今まで信じていたものの地盤をグラつかせることは出来たと思う。

こういうものはもしかしたらと一度でも思ってしまったら終わりなのだ。決して自分の意見の押し付けをしないというのがミソであるこの推測と名を騙った思想誘導。

この中で今自分が何をしたかを正確に把握しているのは冴子と話が始まってから鋭い視線をこちらに寄越している高城ぐらいのものだ

ろうか、

天才というだけあるやはり気付くか……しかもここで何か言って撒いた種を潰さないところを見ると正義だ悪だなんて下らないモノに思考が凝り固まった頭でつかちというわけでもないらしい。

ここで正義感に従いこれは一種の思想誘導であると暴露してしまえば先程の状態に戻る、

いや一杯食わされかけたということに気がついた時点で内部崩壊は避けられない、つまり近接戦闘の鬼とも言える二人を敵に回すことに他ならない。

しかし放置しておけば宮本も自分も紫藤秀治の手のひらで思うがままに踊らされることにはなるが対立は無くなり平和が訪れる、命の危険が満ち溢れている現在こちらのほうが賢い選択ではあることは確かだ。兄が認めるだけのことはあったということだろう。

まあ、それが納得できるものかそうではないのかは丸分かりだが……ここらへんは本人の経験不足から来るものだろう、もしこれが自分で作っている表情ならば中々の女狐っぷりなのだが……根は単純のようだからそうではないだろう、これからどうなっていくかは全く予想できないが。

「お待たせ、ごめんちょっと電話してたら遅くなっちゃって……えっつともしかしてもう終わっちゃった？」

鞠川先生が片手に学校からずっと持ち歩いていた医療バッグ、そしてもう一方に秀治のI P h o n e を持ち緊張感なんて全く感じさせ

ない声でズツシリと重い空気が漂っているリビングへと帰ってきた。

「ええ、今終わったところですよ……ところでそれオレのですよね？別に使うのはいいですけど壊さないでくださいよ」

「これでもちゃんと自分のケータイは壊さないで持っていましたよ」
「だ」

中々に失礼な事をサラリと言つてのけた秀治にベエと舌をだして反論する。しかし自分のケータイはバタバタしていてあの保健室に忘れていったというのだから呆れるしかない

「はあ……それで？何でオレのを使つてたんです？この家に備え付けの電話が無いってわけじゃないでしょうに」

「え〜っと、このバッグ取りにいっいたらバイブ音が聞こえて誰のかな〜と思つて探したら秀治君の……
かかつてきた相手が紫藤先生だったからつい通話ボタンおしちゃつて気がついたら話こんじゃつてたの」

「はあ、それで何て連絡が来たんですか？」

「皆無事ですか？ですって、それでちょっとその事について聞いてみたんだけど……」

「どうでしたか？」

「詳しい話が聞きたかったら今向かってる高城さんのお家に来なさいですって、それまでは生き延びることだけを考えて行動しなさいとも言っていたわね、

ああ、それとご両親とも無事らしいわよよかったわね高城さん」

「な……なんで向かってる途中なのに無事だつてわかってるのよ」

突然振って沸いて出た朗報に面食らい声に動揺が出てきてしまっている。

「私も気になって聞いたら……」最近ではケータイでネットが使えるようになって便利ですねえ』って言えば分かるって言ってたけど……どういうことなの？」

「えっ！？そっそんなのいきなり聞かれても……わかるわけないじゃない！！」

「ああ、そういうことか……流石オレの兄さん似たようなことをする、つまりネットで高城の家の番号調べて電話して連絡取ったってことですかね」

「……ああ、そういうこと、ってもしかしてこの方法あの時すでに気がついてた？とすれば……一杯喰わされたわね」

普通の家だったらネットにつないだ所で番号なんて出てくるはずがないがコイツの場合家が家だ。

憂国一心会の本部がある場所である、つまりそこに繋がる番号なん

てものは調べたら簡単に出てくる。

台詞から察するに大方兄に心理戦や口での勝負を挑んで丸め込まれたのだろう。当の彼女は背もたれに体を預け手で顔を覆って天井を見ている、

顔が見えないからわからないが安否が知れて喜んでいるのは確かだろう唯一見える口元が緩んでいる。

「ふむ、話も一段落してさらに高城の両親が生きてることが確認できたんだここは空気を変える意味でも盛大に祝ってやるべきじゃないかと思考するが、小室お前はどう思う」

「……………いいですねソレ、できるだけ派手にやりましょうー！」

「ちょ、ちょっと……………別にそんなのやつてもらわなくてもいいんだけど……………」

「ここは素直に祝われておけ高城君、今は騒ぐ口実があればなんだったいいんだろうさ、

さてせっかくの料理が冷めてしまったな……………新しく何か作るか、どうせ置いていく食材なんだからこの際だ惜しみなく使わせてもらおうとしよう」

こうして本人の意向を完全に無視して方向でささやかな祝賀会が始まる、高城は備え付けの電話を使って自宅に電話をかけて安堵の余り泣き他の全員から祝いの言葉を受け取る。

こうして一時的に食卓を覆った暗い雰囲気は見事に消え代わりにま

た明るく和やかな空気が流れ込む。

そうするうちに日も日は完全に暮れ闇が足音をたててやって来る……
そして長い夜が始まった。

12話 後編（後書き）

しばらく書いてなかったから腕が落ちた気がする、元から技量は高くないから差なんて分からないとは思っけどね。

前から原作読んでて思うことはやはり紫藤先生が報われてないなあということだねえ……

やはり私にはあの人が必要な悪人に見えない、どちらかというと元はとてもいい人だったんじゃないかと思わざるえない。歪む前に授業してるシーンがあるけどそこでめっちゃ楽しそうに笑ってるからなあ？

そこらへん読んでて目的のためなら手段をいとわず自分が犠牲になることも辞さない姿勢に私は惚れ込んだっけって思い出しましたよ。

母親を死に追いやった原因でもあるというのに健気に父親を信じ続け拳句の果て母親と同じくばいされたからブッチギレテ歪んだのが原作紫藤なんだよなあ……

元々プライドが高い人だったんだろうね、だから自分のプライドをゴミのように踏みにじった父親が許せなくて復讐を目論んだんだと思います、多分国会議員とかそんなのはあまり紫藤先生にとっては元から価値がなかったんじゃないかなあ？

最初にメガネ君をあんなにアツサリ見捨てられたのも既に宮本の件で目的の為に他の人を切り捨てるという覚悟的なものが出来てたからではなからうか？

まあ捉えようは人によって自由なんだけどね、ただしアニメ版紫藤てめーは駄目だ。

13話 前編 ちよつとだけ改訂

「中々エグイことをするな秀治」

「あゝ？何の事だ？って腹の上に座るんじゃないやねえよ他にも空いたソファはあるだろうが」

「惚けるな、夕食の時のことだ。あそこまでやらなくても良かったんじゃないか？別にいいじゃないか私程度の重さでどうにかなる君ではあるまい」

「ああゝ……確かにそうかもな、まあ重いってわけじゃねえけどさ……」

リビングの長いソファで寝転がって独占していると夜食と明日の弁当を作り終えたのか冴子がそう言って腹の上にそつと座ってきた、

別にこれが初めてというわけではないが今のオレの服装は前を完全に開いたバスローブ姿である、

そして彼女は裸エプロンと言っても過言では無い服装。

ぶつちやけ色々と不味いものがあるので早くどいて貰いたかったのだがソレをハッキリと口にするのも気恥ずかしい。恐らくソレを狙ってやってることなのだろう。

ちなみに他のメンバーは今リビングにはいない、小室と宮本は見張り、高城はテレビのニュースを見て情報収集、

平野はその横でもくもくと銃弾を込める作業、鞠川先生はオレの iPhone を使って友達と長電話の最中だ。

夕食の一件に関しては別にやり過ぎたとは全く思っていないかったのだが、冴子がそう言っているのなら本当にやり過ぎていたようだ。まあ彼女が言っているのは恐らく「あんな真似しなくてもよかった」ではなく「もっと他に上手くやり込める方法があったのではないか？」ということだが……

「ん、アイツは昔から気が強かったからなあ、正面から責める正攻法が一番効くと思ったからやったんだが……」

「ちょっと待て前から彼女のことを知っていたのか？」

「いや、今日面と向かって話し合うまで完全に忘れ去ってたよ……」

聞いてないぞ、とでも責めるように冴子は少しだけ眉間に皺をよせてそう言ったのに対し肩を軽く竦めてそう返す。

実際おぼろげながらも思い出してきたのは無意識で喧嘩を売る少し前からだ。母親とのステキなオモイデと一緒にああそう言えばこんな奴いたなあと思っただぐらいのものなのだ。

他に何か大事な事を忘れている気がしてならないが無理に思い出そうとすると色々とステキなことと一緒にあって出てくるので極力気にしないようにしている。

「まあ小学生の時の同級生とか同じ中学校に居たとか他愛の無いことだ」

一度弱いもの虐めは止めると言って割り込んできてガチで喧嘩になりかけたこともあったかと思いつき出し苦笑する。

あの時は決して向こうから手を出してこなかったのだから折れる形になったがもしあの時手を出していたらまた今日の話し合いも別の形になっていたのだろう。

「君の幼いころを知っているのか……これは後で聞いてみるべきかな？」

その端正な顔にニヤリと小悪魔めいた笑いを浮かべ手をオレの頬に当ててそう言うてくる、段々美雲さんやオレ、そして兄さんに似てきたものである。昔は真面目な子だったのにどうしてこうなったのだろうか？

答えは簡単だ、付き合ってるうちに段々と毒されてきたのだろう、隠していた性癖を表に出すようになってきたとも言える。

これ以上サドツ気が増して蠟燭とか持ち出してきたあかつきには尻尾撒いてキャンキャン吠えるしか自分には道が残されていないかもしれない……冴子恐ろしい子！！（物理的な意味で）

「おゝおゝ、それは是非とも勘弁して貰いたいね、黒歴史なんて掘り返されたくも無い……あっコラ！！乙女が男の胸板に手を這わせるんじゃないありません！！何だかイケナイ気分になってくるだろうが！！！」

是非ともそうならないで欲しいものだ。体をブルリと震わせて神に届けと祈りを捧げていると頬から彼女の手がツツリと滑りながら首にそして胸へと移動してくる。

それを見ていかにも楽しそうな表情でクスクスと笑う冴子、これは可笑しいどう考えても可笑しい、もしかすればもしかするかもしれない。

「冴子……貴様、酔っているな!!」

「フ……酔っているのは君の方だろうか？私は至っていつも通りさ」

「酔っている人は全員そう言うんです!!さっさと部屋で寝に行け!!ちよ……ちよっと待て何をするだあー!？」

「別に何もするつもりは無いさ、ただ今日だけは今日くらいは一緒に寝たいとそう思っただけだよ」

いきなり冴子が座っていた体勢を崩して完全にオレの上に重なるように寝転ぶ形に変えた。いかん酔ってる!!これは完全に酔ってる!!

学校ではこんな積極的じゃなかったのに!!偶に誘ってるんじゃないかコイツ?と思うことはあったけどこんなに露骨じゃなかった。

「完全にナニするつもりじゃねーか！！ちよ、待てストップ！！これ以上は18禁なるから！！オレまだ17だから！！あいつ等にも刺激強すぎるから！！」

「なあ秀治」

「な……………なんだよ？」

かなりの真剣味を含んだ呼びかけにドギマギしながら答える、ああ！！！心臓の音がうるせえ！！

「皆死んでしまったな……………」

「……………そうだな」

「皆強くなって、今年は全国大会団体優勝も夢ではなかったのにな……………」

「……………ああ強くなってた、それも夢じゃ……………なかったかもしれねえな」

あれ程五月蠅かった心臓の音が嘘のように引いていく、脳裏に来ては過ぎ去っていくのは部員の楽しそうに笑っている顔だ。

突然全てが壊れてしまった……………、例えるならまさにそんな感じだ。あの日も普通の一日が過ぎ去るはずだったのだ、笑ったり、過剰な

筋トレに苦しんだり、挑んでくる部員を返り討ちにしたりと……

それがゾンビが急に発生して部員を全員喰い殺してしまいました。なんて……全く持つてフザケタてる、有りえない……でもソレが有りえてしまった、それが今だ。

悪い夢なら覚めて欲しいと切実に思う、これがフィクションであるならばどれだけ良かったか……でもそうじゃない全て現実だ。本当にフザケタ話だ。

「皆気のいい者達だった……私のことを恋敵だと笑って言う者もいれば応援してくれた者もいた。中には告白してきた者もいた……君が振って泣いている子を慰めたりもしたか……でももう君以外誰も残っていない、皆いなくなってしまった」

「もうよせ、それ以上考えるな……オレだってお前と同じだあいつ等が居なくなつて悲しいのはな」

頭の後ろにやっていた手をオレはここに居ると言うように冴子の顔にピタリと当てる、彼女はその手を力強く握り締めてきた。

「同じではないよ、君と私は違う」

「同じだオレもお前も皆死んじまって悲しいのは」

「違うさ、君にはまだ浩一さんがいる、何時の間に関り合つたか知らないが小室君もそうだ……しかし私にはもう君だけしか残されて

いない、

父も居るのは外国だ……たとえ生きていたとしても、もう二度と会えることはないだろう。本当に君だけなんだ……

私にはもう君しか居ないんだよ……それなのに君は私を置いていこうとする……私を一人にしないでくれ、置いていくな……」

「……………」

彼女が流し始めた涙が零れ落ちてオレの顔を濡らしていく、これほど弱った彼女を見たのは何時振りだろうか……美雲さんが亡くなつて以来か、

しかしコレはあの時より酷い。まあ自分のほぼ全ての人間関係が崩れ去ったのだからそれも無理は無い。

「なあ秀治、全てを失ってしまった女が唯一残ってくれた愛する男にその寂しさを埋めて貰おうとする……果たしてそれは誤っていることだろうか？」

「間違ってる……なんて言えるわけねえな、確かにそうだよなあ、いくら強えつつつてもお前も女の子だもんなあ……。そりゃ堪えるか……、あいつ等とも仲良かったもんな」

「ん……………」

頬に当てていた手を彼女の頭の裏に回してそのまま抱き寄せる、抵抗は無かったむしる彼女の方から自分に倒れかかってきたと言っても過言では無い。

「はあ……せつかく考えないようにしてたつてのに、完全にあいつ等のこと思い出しちまったじゃねえか……」

「……………」

お陰でこっちの気まで滅入ってきちゃった……と言外に語るが冴子は何も言わずただ抱きしめられるがままになっている。

そしてまた一つ大きなタメ息を吐き彼女の好きなようにやらせておこうと決めた。

一度母親亡くしてこの手の話題にはデリケートなのに今度は規模が規模だ、唯でさえ前回でも全国大会で予選落ちするんじゃないかとこのうほど気落ちしてたのだ。

察してやるべきだった……、唯彼女が何時も通りすぎてわからなかった何て言い訳にもならない、こんな事になって何時も通りで居れる輩など高校生で居るはずが無いのだから。

「ごめんな察してやれなくて、オレはあいつ等のことなんて忘れようとしてたのにな……」

「私だってそうしてたさ……、思い出さないようにしてた、でも弁当を作っていたらな……いつもの日常が頭を過ぎってきてな……止まらなくなつたんだ……」

「それでオレの所にね……、良く我慢してたもんだ、お前のことだから周りの誰もが一杯一杯だから何時も通りに振舞って余計な心配

をかけないようにしてたんだろっな」

でもそれが限界が来た、昔の彼女、オレと出会った頃の彼女であればまだ耐えれたかもしれない、しかし彼女の心の壁を時間をかけてひっぺがえしていったのはオレだ。

良かれと思ってやった、そっちの方が遥かに息をするのが楽だからだ、結果自分を良く見せてくれるようになり笑顔も増えた、部員達とかなり仲良くなれたのもそうだお堅い雰囲気も薄くなったからこそあそこまで近寄ってくるようになった、

だがその分失ったダメージが大きくなった、そして自分を出すようになった分心が脆くなっていた、それで今コイツは苦しんでいる。

まだ師匠さえいれば耐えれたかもしれない、でも彼女のいった通りもう会うことも無いだろう。本当に

「奴等」さえ「奴等」さえ出てこなければ……本当にそう思わざる終えない。そんな事しても生産性なんて欠片も無いことなんてわかりきってはいるのだがどうにも割り切れない。

切実にタイムマシンが欲しいと思った、ああ何故世界にはゾンビは存在すれどエルモンドは存在しないのか

「と思ったところで本当に無駄なだけか……」

逸れすぎた思考を中断し諦めて現実を認めて歩いていくしか道は無いのだと思いなおして深いタメ息を吐く、そう言えばこの事件が始

まっつて一体コレは何度目のタメ息なのだろうか？

タメ息を吐くと幸せが逃げると言うがもしそうなら自分の手元に残った幸せは随分と小さなモノになっていることだろう。

冴子は泣き疲れたのかオレのバスローブをガツシリ掴んだまま眠ってしまっていた。

事件が起こってから一睡もせず動き続けていたのだ、本心をぶちまけて泣いて今まで張っていた気力が切れて一気に疲れが出たのかもしれない。

「ふう、こりゃ朝までこのままか？ちつとつらいなあ……」

色々当たって寝にくくて仕方が無い、眠気こそ他人に譲り渡したい程あるが他の場所が完全覚醒してしまっている。

このままの状態で見られたら非情に不味いことになるのは請け合いだ、かと言ってあんなこと言われた後で一人でフラリと何処かへ行くなんてできやしない。

「どうせ見られてもあいつらだしなあ……まあいつか、オレも諦めて寝よう」

出発するのは明日だし……と考え何かオカシナ考えを持ってしまいう前にさっさと寝入るを決めた。気の利く誰かがきつと毛布か何かをかけてくれるだろうと期待して自身も目を瞑り襲いくる眠気にその身を任せた。

解説

エルモンド……学園黙示録の世界の中のドラえもん、公式ネタ。
わからない人は病院に転がっていた漫画の題名と表紙を見るべし

13話 前編 ちよつとだけ改訂(後書き)

あとがき

何で甘くしたのに警告なかったんだって？

今日がバレンタインだからさ……、あとチヨコレートはいらないから Give me 感想

一通も来ないってのは流石に堪えました。

あとこの冴子さんは原作以上に部員に慕われております。いつかこの本編で書いた通りにここでは非公式のファンクラブが存在し、告白されることもしばしば……

これはちよつとした複線のもりで書いたものでありまして、原作では高嶺の花すぎて手を出すのはばかられていた彼女です。それがここでは告白すらされている、

つまり主人公が隣にいて馬鹿やってるのに付き合ってたならそんな眼で見られなくなっていたということを少しだけ匂わせたもの、あれはネタだけどネタじゃなかったんだよ!!

これ見抜けた人マジエスパー、

前回無反応だったけどあの「絶対に逆らえない」ってのもコレの一つ(コレは分かり易い方)この作品における主人公の存在を複線にしたもの。

他にもかゝなり分かりづらいモノも用意しております。見抜ける

ものなら見抜いてみよ！！（笑）

え？……何でそんな微妙なことするんだって？それは別に回収しなくても……ゴホンゴホン！何でもありません、展開を簡単に見抜けないようにしていただけでございます。

まあ、それはともかく原作で何で冴子さんがあんなにアツサリ小室に惚れたのかを私なりに推測したものをだした今回の作品

仲の良い友達とか後輩、そして親をほとんど失った奴が何も感じないわけではないだろうという話、感じてなかったとしたらどんだけ冷血なんだよってなりますからね。

見える形での絆というものが欲しかったんでしょう、それも早急に……原作

でのあのお人好しっぷりはそれもあるはず、

よくよく人間関係考えたら完全に孤立しちゃってるんですよ冴子さんだけ、母親いない父親は外国に飛んでいて兄弟も無し、友人や後輩連中は全員学校で奴等に食われてお陀仏。

しかし他の面子はそうでもない、幼馴染である小室に宮本に高城、元々オタクとかで苛められてたから周りとの付き合いも薄かっただろう平野、それにコイツは高城に惚れていると……

そして親友が生きている鞠川先生、精神的ダメージは大きかったけ

どそれを人生経験と大人の意地で押し殺してらって感じだったかな？（高城邸での会話で判断）

そう考えると何も無いのは本当に彼女だけ、鞠川先生と違ってこちらには人生経験も大して積んでない18の少女。原作でああも振舞えただけでもマジすげえ。

その他もろもろを考えて自分の居場所が欲しかったor作りたかったんじゃないか？と推測。大体略奪愛をするような性格もしてないでしょうし……

高城邸では頼まれても無いのに小室達について行くこととしていたのは会長に頼まれたのもあるでしょうが、恐らくソレを自覚するのを無意識で回避したんじゃないでしょうか？

ついていけばまだ自分の居場所はあると思えますしね。ついて行かなかったら本当に鯉に餌やるぐらいしか無いというね

そうすればあの大して付き合いの無い人たち（主人公勢）の中でしていた彼女の滅私の奉公クラスの行動にも納得できるところがチラホラと……

まあ全部推測ですがね！！

そしてもう一つ言いたい事（アニメへの突っ込み）

高城邸……原作では裏門の描写は確かに無かった、しかし！！しかしだ！！アニメでは裏門は確かに存在していた、そう裏門は存在したんだ！！（大事なことから二回言いました）

なのに何故正面から出て行ったし！！裏門あるじゃん正面から突破して隣家に……より一度邸宅内に逃げ込んで奴等がドアを破るのに四苦八苦してる間に裏の窓からでて逃げたらいいじゃん！！

何故です何故裏門の存在を無視するのです！！高城会長おおおお！！！！

そんな感想を抱きつつアニメを見ていた私が自然と口から出てきた言葉はこれだった。

「裏門は犠牲となったのだ……物語の演出の犠牲にな……」

マジ話です。

裏門エ……

13話 後編

「ちょっと、秀治君起きて、そんな格好で寝てちゃ風邪引いちゃうよ」

「んう？ん、後2分寝かせて……」

「このまま放っておいて毒島さんが風邪引いても良いの？」

「それは困る」

誰かに顔をペチペチと叩かれながら言われた事に対して初めは鬱陶しそうにソレを手で払いのけた秀治だったが
次に言われた言葉に瞬時に固く閉ざされていた眼をカツと開き今まで寝ていたとは思えない程ハッキリとした声でそう答えた。

「ええっと、時間が時間だからこんばんわっていうべきかしら？」

「今何時ですか？」

「午前2時ね」

「寝かして下さいよ、こっちは昨日徹夜で疲れてるんですから……」

ハア……とタメ息を吐きながら現在進行形で胸板を涎でビシヨビシヨにしている冴子の頭を撫でる、これは着替えないと駄目だろうか？

「で？何で起こしたんです？」

「えつと〜、紫藤先生から電話がかかってきてね、それで……秀治君に話があるって言うのよ。私はこのまま寝かしておいてあげようって言ったんだけど……」

気まずげに何やら目をクロールさせながらそう言う鞠川先生に少しだけ何かが可笑しいといった疑念を持ったが、兄さんから電話がかかってきたと言う話を聞いたのでソレを追求するのはやめておいた。

「ハイ、これ。後毒島さんはちゃんとベッドで寝かしてあげたほうが良いわよ、そんな所で寝てちゃ疲れもとれないし……それならちゃんと一緒に寝てあげれるしね」

「ん、そう言えばそうですね、電話の後で運ぶことにします。はい、もしもこちら秀治」

今まで貸していたIphoneを返してもらいそれをそのまま耳へと持っていき電話越しにいるだろう相手を呼びかける、

そしてそれを見届けた鞠川先生は「それじゃあお休みなさい」と言っつてソクサと逃げるようにその場から離れていく。やはり何処可笑しい……何か有ったのだろうか？

『ついに一線越えたのですね秀治、私は嬉しく思いますよ……それはそうと私達は高城さんの邸宅に到着しました。お互い無事に会えたらいいですね』

「へ？何の話？……ほおそいつあく良かったねえ、ん、確かに無事に会えたら良いなあ……」

『……酒を飲んで様子が変わったと聞きましたが本当のようですね、』

「何の話だ？」

『自覚無しですか……まあ良いでしょう。話はそれだけですよ……後ちゃんと責任とってあげなさいよ』

「ん？ああ……何の事がよくわからんがわかった」

そう返すと電話がブチリと切れた、別に寝ているところ起こしてまで伝えることでも無い気がしたが、素直に兄の無事を喜んでおくことにした。

それはそうと一体兄は何を言っていたのだろうか？一線とは何の一線だ？

別に人としての一線を踏み越えた覚えも何も無いので全く意味がわからない。鞠川先生が挙動不審だったのに何か関係でもあるのだろうか？

とりあえずIphoneを入れるポケットも無いのでソファの肘掛の上に置いておいた

「まあ、こいつを運ぶとするかね……全く幸せそうな顔しちゃってからに、起こすにも起こせねえよ……たく」

満面の笑顔を浮かべて眠る彼女を起こすのは例え胸板がぐちよぐちよにされていようとはばかられるものだった。

ゆっくりと起こさないように上下の体勢を入れ替えてソファから立ち上がろうとするが服をガツチリ掴まれてとても立ち難い、しかしそれを放そうとしたら笑顔が急にクシヤリと歪んで泣きそうな顔へと一転するのだから困る、ちなみに脱ごうとしても同じ反応が返ってきた……本当は起きているのではあるまいな？

仕方が無いので四苦八苦して何とか姫抱きの体勢に変えてそのまま彼女を持ち上げる、何と言うか無駄な労力なのに全く嫌と感じていない自分に少し笑いが込み上げる。

このまま行けば将来尻に敷かれることは明白だろう、多分その時も自分は笑って敷かれているのだろうか……

何時かそんな時が来ればいいなと想像しつつ音を立てる事無く階段を上っていく、動いているのを感じたのか腕の中で彼女が身じろぎして顔を擦りつけて来る、

ああ頬が緩むのが止められない、きっと今自分はとてもだらしのない表情になってることだろう。

「おっす、情報収集頑張ってるか？」

「今の所重要だったのは馬鹿が橋の前でデモ起こして撃たれたって

奴ねって、何見せ付けてくれてんのよこのバカップル」

電気を消した暗い部屋に入って開口一番にそう言つとテレビに齧りついていた高城が此方を見ずにそう返答を返してきたが此方を見た途端に眉を寄せて咎めるような口調でそう言った。

「仕方ねえだろ、コイツが放してくれねえんだから、それよりちよつとその話詳しく頼む」

「その割には幸せ絶頂です！！って顔してるけど？まあいいわ……バカップルは相手するだけ疲れるし、ご馳走様そしてお幸せになって言つといてあげる。」

それはそうとデモのことだけど、どうやらこの一件はサヨにとつてはアメリカと日本が共同開発した細菌兵器が漏れ出したつてことになつてゐるらしいわね……殺人病つて名前まで付けられてるわ」

「こりやまた面白いことになつたな、諸外国でも同じことが起きてるつてのに共同開発した細菌兵器だつて言つてるところがマジ笑える」

ベッドに腰かけ脚の上に冴子を降ろしながらそう返す、しかし知らない間に外では面白い事になつてゐるものと半分呆れながら嘆息した。

「サヨは馬鹿の集まりだから仕方ないわよ、私も日教のせいだけでだけ苦労したか……」

「そついやお前ん家ウヨだつたな、苦労したる？」

「あんたもじゃない、せつかく出来た友達も離れてくし……昔から友達だつたのはあの馬鹿ぐらいのものよ」

「へえ、それで惚れたつてわけね」

「ちよつ!?!ばつ!?!」

そつ言つと高城が慌てて窓の外を見る、どうやら窓が閉まつてる為に我等がリーダーには聞こえていなかったようだ……残念

「あつ!!あんた何てこと言い出すのよ!!そんなわけつ!!」

「いやいや、その気持ちはよくわかるぞ、どうせお前もアイツの偏見無しで見てくれる所が好きになつたんだろ？」

「なつなんでそんなことまで!?!」

「オレも経験があるからねえ、オレの場合自業自得だつたがお前は自分の責任じゃねえもんな。嬉しかったろ?偏見無しで自分つてのを見てくれてるつて知つた時は」

そつ言つと真つ赤な顔をして黙り込みコクリと一っだけ頷きを返したきり黙りこんでしまった、ちよつと弄りすぎてしまったようだ。他人の色恋は引つ掻き回せば面白そうなものではあるが流石にオレも馬に蹴られたくは無いのでここで引き下がっておく。

「ところで他の奴等はどした？全員外か？」

「……………そうよ、仲良く全員で見張りしてるわよ」

言外に大分リードされちゃってるわ、と言って親指を立てて窓の外を指す。彼女の恋路は中々前途多難そうである。

同時に平野が少し報われないなとも思うがこれからの奴の頑張り次第では振り向いてくれることも夢では無いだろう。

何故ならこの短すぎる付き合いの中でもわかるがコイツも昔のオレ達同様人付き合いが下手、だから長い間行動を共にして純粋な好意を向けられ続けるというのには耐性は付いてないと推測できるからだ。

「くっくっく、プライドが邪魔して本心が言えないってのはつらいねえ〜」

「うっさいわよ！…！さっさと寝るなら寝なさいよ、この酔っ払い！」

「だから酔ってねえって何度言わせれりゃ気が済むんだ？」

「あんたが自覚するまでよ！…！」

しかしオレが酔っているか…………別に正常な判断は下せている、さっきだって迫られたが性欲に理性が負けることはなかった…………

うんどう考えても酔ってないな、酔っ払ってたらあの時襲ってるはずだもんなー！

そう考えて反論しようとして口を開こうとした直後窓の外、つまり3人が見張りに付いてるベランダから発砲した音が鳴り響いてきた。

「何があつた(の)!?」「」

同時に顔を窓の方へと回しそこから入ってきた小室と宮本に詰問するように問いかける。

「女の子を助けに行つてきます、僕に何かあつたら後は任せましたよ先輩」

「え?はあ!?ちょっとまってえ!」

「時間が無いんです!!行かせて下さい!!僕はまだ僕でいたいんですよ!」

抑止の言葉を振り切りさつさと階段を降りていってしまふ。それにしてもこの緊急時に外にいる女の子を助けに行く!?本当に状況わかってるのか!?

宮本の方は高城に何故止めなかったのかと問い詰められていてしばらく動けそうも無い。

「ああ糞っ!」

悪いと思いつつ急いでバスローブを脱ぎ去り冴子をベッドに横たえ、行つてしまった小室の後を追いかける。

お人好しがアイツの長所とはいえず知らずの他人の為に命を賭けるほど酔狂な奴だとは思つてもみなかつた、オレの人を見る眼が鈍っていたか！！

と心の中で毒づき舌打ちを鳴らす。

「待て小室、これだけ聞かせる何で他人の為に命を賭けれる？下手すりゃ死ぬぞ！！」

「そんなこと分かつてますよ！！でも放つておけないんです！！ここで放つてあの子が喰い殺されるのをただ見てるだけなんて真似……僕には出来ない！！」

「だからつて奴等の中飛び出して助けに行くつてかあ！？身の程を知れ小室！！そんなこと出来るのは物語の主人公だけだ！！現実はいくシヨンの様に上手くはいかねえんだよ！！」

そのまま出て行くこうとする小室の肩を掴み此方に振り向かせて胸倉を掴み上げる。しかし小室はそれに対して全く怯んだ様子を見せず強い光を秘めた眼でこちらを睨み返して来た。

「オレはぜつてえ許さねえぞ小室！！何でミスミスお前が死ぬのを分かつて見送らなきゃなんねえんだよ！！」

「僕だつて死にたいわけじゃない！！生きたいから行くんですよ！
！ここで見捨てたら僕の中の何かが壊れる！！僕はまだ僕のまま
在りたい！！！」

「ああもう！！この分からず屋があ！！勝手にしやがれ！！帰つて
こなかったらマジで許さねえからな！！！」

胸倉を掴んでいた手を放して小室を解放しそのまま立てた人差し指
で彼の胸板を刺すように突いて念を押す。

お人好しが過ぎる！！完全に予想外だ、学校での無気力少年っぷり
はどこへ行ったのか……昔とはまるで別人だ、

言っていることも分からない訳ではない、寧ろ似たような事を普段
から言っているので良く良く理解できると言つたほうが正しい。

要はここで見捨ててたら次も次もとなし崩し的にソレが自分にとつ
ての当たり前になるのが嫌なのだ、
オレにとつてはどうとでもない事だがお人好しのコイツにとつては
ソレは許せないことなのだろう。

「これをやる、お守り代わりにでもしる効果があるかわからねえけ
どなそれといざとなつたらコレを使えきつと役に立つ、ここに降り
かかる火の粉ぐらひは払つておいてやるから気にせず行け……死ん
でくれるなよ？」

そう言つて入り口付近に立てかけてあつた自身の愛刀の片割れであ
る小刀と小さな袋に入つたある物を押し付ける。バットも振れない

ほど近寄られた時に役に立つと言い、背中を向ける。

ああ全く、忙しくなりそうだ。

オレのすぐ両隣を高城と宮本が通り過ぎて行く、外まで見送るつもりなのだろう。そう言えば鞠川先生はどうしたのだろうか？まさかこの喧騒に気付かず寝ているのか？

いやまさかそんなことは、と思うがああポヤンとした人だ有りうるかもしれない……

そう思いながら何故かオレのバスローブを羽織った冴子が眠そうに目を擦りながら階段を降りてきているのを見て少しだけ気分が落ち着くのを感じた。

「よう冴子、良く眠れたか？」

「君が隣にいてくれたらもつと良く眠れたと思うよ……それより大変なことになってるみたいだな」

「まあな、でも仕方ねえっちゃ仕方ねえ事だな、オレみたいに割り切れると思ったのがそもそも間違いなんだからなあ、で？ちゃんと動けるのか？」

「ああ、大丈夫だ問題ない何時も通り動けるよ、君こそ肩の調子はどうか？」

「かなり痛みも引いてる、流石は鞠川先生特性の塗り薬ってところ

「だな、治りが速い」

実際に右肩をグリグリとまわしてみせる、もう痛みは微かにしか残っていない今朝まで上げられなかったのが嘘のようだ。元から傷の治りは速い方だがこれは少しばかり速すぎる。

オリジナルと言っていたしアレで特許とろうと思えばとれたのではなからうか？

外でバイクが走っていく音が聞こえてくる、小室が助けに行ったのだろう。約束通りこの家に群がってくる奴等を殺すでしょう。

「エモノは昼間と同じようにオレの木刀でも使っとけ、オレはバーでも使っとするさ」

残念ながら金属バットは小室が持って行ってしまったので残っている手頃な武器がコレしかない。

殺傷力で言えば木刀より上なのだろうがかなり短い、それに贅沢を言えば握りが欲しいところでもある。まあ握りのあるバールなんてあるはず無いのだが。

「んじゃ、最強の高校生剣士ズの出陣といきましょうか」

「ああ、どつするにせよ此処は守りきらないとな」

返されたバスローブを羽織り靴を履いて外へと出る、夜風の冷たさが身に染みるがそれ以上に感じる生臭さに顔を顰める。かなりの数の奴等が此処一帯に集まってきているようだ、そうでなければこれほどまで酷い匂いにはならないだろう。

道路を見れば既に宮本が門に近寄せまいと的確に一体ずつ奴等を沈めていつていた。高城はこつちに戻ってきてここから逃げる準備をするらしい。

さっきまで聞こえていたバイクの音も2階から一定の間隔で聞こえてきていた発砲音も聞こえないのを見ると多分小室が目的地に着いたのだろう。

ならオレがやるのはアイツが帰ってくるまでここを死守することのみだ。

コクリコキヤリと首を鳴らして小室が行ったであろう方向を見る。

そこまでしてふと何でオレはアイツにこれほどまでいれこんでいるんだらう？と少しだけ不思議に思ったが

その思考をすぐさま放棄してモップの柄で一騎当千の働きをしている宮本に眼を移し自身も意識を戦闘状態へと入れ替える。

「さて……、精々噛まれないように気をつけるとするか」

「油断するなよ？一回噛まれればそこで終わりなのだからな」

「ふん、誰にモノを言ってる対多数の戦いならここにいて誰よりもオレは慣れてるよ」

色々と言を思い出した夜になったことだ、いま少しだけ狂犬と呼ばれたあの頃に帰ってみるのも悪くないだろう。

そう思いながら音を立てずに門から外に出る、どうやら奴等は全体的に小室の居る場所へと向かっているようで殆どがこちらには見向きもしない。

当たり前だここで音を立てているのは未だ宮本一人でその音も近くに居なければ聞こえない程度のものである。

これは奴等がここに大量にいたのが幸いしたとでもいえようか？

これがほとんど人のいない道であれば微かな音でもよく響いて遠くまで聞こえたことだろう、しかし奴等でこの道は溢れかえっているといっても良い状態なのだ、

大半の音は奴等の体に吸収されて遠くまで聞こえない、それに奴等も自分で音を出していないというわけでもないのだ。

簡単に言えば誰もいない部屋は声がよく響くが、結構人がいる部屋では音が響くことは無いのと同じ原理、

つまり言いたい事は一つ

好きに暴れまわってもかまわないということだ、これならオレの独壇場である。

顔に昔と同じ笑いを貼り付け横を通ろうとした奴を片手で持ち上げそのままフラフラと歩いて来ている奴等の足元目がけて集団に投げつける。

投げられたソレは奴等の足を掬いながら転がっていき電柱に頭をぶつけて止まる。そして転んでいる集団の元へと一足で近づき手に持ったボールを奴等の頭目がけて振り下ろす。

頭蓋の碎ける音が鳴り肉を潰す感触がボールを伝って両手へと伝わってくる、

ああ……何と気持ちがいいことか、心残りがあるとすれば奴等に感情が無いから恐怖に染まっていく目が見られないということぐらいか……

潰した頭からボールの先端を引き抜くと灰色のゼリーっぽい何かも一緒になって出てきた、これが人の脳というものなのだろうか？

手加減をしないで良い分昔より気分が良いかもしれない、声を上げて笑い出したいぐらいだ。

でもそれは出来ない、奴等は無駄に耳が良いからだ、恐らく五感の殆ど全てが聴覚に行っているからだろう。

さあ……次のエモノは誰にしようか？

秀治が良い感じにイッてる頃小室は困っていた、行きはまあバイクが有ったからどうにかなった、
しかし帰りとなるとどうすれば良いか分からなくなった、入ってきた門は奴等で一杯だ、出るにも出られない。

「どうすっかなあ……」

「お兄ちゃん……」

「ん？」

「パパ、死んじゃったの？」

小室は子犬を胸に抱きかかえ目じりに涙を溜めながらそう問いかけてくる少女にどう答えるべきか……と少しだけ苦い表情を見せた後、庭に出されていた洗濯物の一つを手に取り少女の父親であった死体にそれを被せた。

「君を守ろうとして死んだんだ、立派なパパだったよ……」

そう言つて庭に生えていた名も知らぬ花を一輪手折り少女へとさしだす。気の利いた答えでは無いことは分かっているが今はこれが精一杯だ。

その花を受け取った少女は死んでしまった父親にその花を捧げると我慢できなくなったのか声を上げて泣き始めた。

「大きな声だしちゃいけないよ、奴等が寄ってくるからね」

「逃げられないの？」

「逃げるって言うっても道路に一杯いるんだ」

バイクのエンジン音に引き寄せられてきた奴等だどこか他の場所で大きな音が出ない限りここから離れることはないだろう。

あれだけ大口を叩いてこれか……と夜空を見上げてタメ息を吐く、先輩の言った通りヒーローのようにはいけないのが身に染みてよくわかった。

そう言えば何か入った袋を渡されたっけ、と思い出し、出るときに羽織ってきた制服のポケットを探る。どうやら四角い何かのようだ。

「道路じゃないとこを逃げたらいいのに」

「空でも飛べってのかってこれは……」

袋の中から出てきたものは小さな目覚まし時計だった。物のチヨイスがああ先輩らしい、奴等をおびき寄せるのにこれ以上簡単なものもないだろう。

「でも何処に仕掛けるか……」

そう言うって周りを見渡してもここは塀に囲まれた場所、下手なところに仕掛けたらさらに増えるものでもある。

「ん？塀？……そうかその手があった!!」

「どうしたのお兄ちゃん」「わんっ!!」

閃いた名案に指をパチリと鳴らして喜ぶ

「ここから無事に逃げれるってことだよ!!よしそうと決めれば早くしないと、門もそろそろ破られそうだ」

セカセカと動いきつつ目覚ましを数分後にセットしこれから逃げるのとは逆方向の塀にそっとソレを置く。

それを少女と子犬は互いに小首を傾げながら見つめているのであった。

「ふう〜……これで終わりか?」

「やりすぎだ、ここ一帯が直視できる状態ではなくなっているぞ」

返り血でどす黒く染め上げ所々に肉片をへばり付けたバスローブを羽織った秀治がポツリとそう漏らす。周りに転がっているのは何れも頭の中身を飛び散らせた死体の山、山、山だ。

宮本はとつくに引っ込んで荷物を運ぶ手伝いをしている、耐え切れなくなつたと言つてもいいだろう。それを見た冴子は少し気持ちわるそうに口を押さえてそう呟いた秀治を責めるように言つた。こちらは秀治とは対照的にほとんど真っ白なエプロンを着ている。

大体返り血など殆ど浴びるわけが無いのだ、奴等にはもはや血は流れてはいないので血は飛び散らない、飛び散つたとしても少量で服を染め上げるには至らない。

だというのに秀治は真っ赤だ、これはそう言う風に殺していたからそうなつたとしかいい様が無い、事実彼の顔や肉体にはほとんど血は付いていない。血や肉が付いているのは綺麗に服のみだ、いや汚いのだが……

「ついエキサイトし過ぎたか、まあ楽しめたからいいか……それよりも荷物運ぶのは終わったか？そろそろ鳴るころだと思つんだが……」

「鳴る？何がだ？」

秀治の言葉に合わせたように小室が向かつた先で大きな電子音が鳴り響く。奴等の動きがいつせいにソレに向かい動き始めた。

「これ、小室に持たせておいたんだよな、いざと言つ時に使えつて言つて」

「なるほど……これなら奴等をリスク無しでおびき寄せられるか……」

…」

「ちよつと！！そのバカップル！！早く車に乗りなさいよ！！小室を迎えにいくわよ！！」

後ろから高城が呼びかける声が聞こえてくる、あっちもどつやら終わったらしい。

「あいよ、それにしても主人公みたく上手くいったなあア
イツ」

「小室君のことか？」

「ああ、今回は運が良かっただけだってわかってりやいいんだが…
…」

「蛮勇は早死にの元だからな、それもこの世界では特に……」

そんな会話を交わしつつ同時に車の屋根に跳び乗る、それを待つていた鞠川先生は一気にアクセルを踏み込みまだまだ数え切れないほど存在する奴等を蹴散らして加速する。

少し行くと塀の上を少女を抱えて渡る小室が見えてきた、そんな小室に奴等は全く反応していない。というより気付いていないのだ、特大の音が彼の前後から響いてきているのに奴等がそんな自分達の足音程の小さな音に気付くわけがなかった。

「よう！！無事で何より！！」

「アレ役に立ちましたよ先輩」

車を横付けし寄ってくる奴等を平野がショットガンで蹴散らす。近距離のショットガンがあれ程威力のあるものだとは初めて知った。そして小室が屋根へと乗り込んでくる、助けに行く原因となったのだらう少女と子犬もセツトだ。

「ふむ、いらっしやいませというべきかな？オレは君を歓迎しよう」

「へ？あれだけ助けるの反対してたのにつすか？」

「お前が命賭けて助けたんだ、無碍には扱わんよ」

そう言って握手をしようと手を差し出すが何故かとても怯えて近寄りすらしてこない、何故だ？

「……………秀治、ソレを脱げ。そんなもの着ていたら怯えるのも当然だろっ」

「ああなるほど……………」

冴子の言う通り血みどろ肉片付きのバスローブを道路に捨て去り再

度手を出すがやはり寄ってこない。小室の後ろに隠れてしまっている。

「はぁ……何か着ろ、パンツ一枚で女の子の前に立つな」

頭痛そうにタメ息を吐いて今度はそう言う冴子、そう言われてようやく原因に気が付く。パンイチで幼い女の子の前に立って手をさし出す男……オウ変態だ……

余りの事に凹んで握手は諦めてすごすごと車内に入っていく、すこしエキサイトし過ぎて頭のネジでも外れたのだろうか？今の行動は余りに馬鹿すぎる……

「この露出狂、小さな子に変なものみせてるんじゃないわよ」

だからこそ宮本に言われたその言葉が余りにも残酷に胸の中を抉っていく。秀治は不貞寝することにした。

だから冴子抱きしめてくれるのはいいけど頭を撫でないでくれ……恥ずかしすぎて悶えそうになるから……

「ああ、やつちまったな……………」

紫藤秀治が朝目覚めて初めて口にした言葉はソレであった。

普段なら反応するであろう背中全体に張り付く柔らかい感触や右足に絡められた両足などに一切のリアクションをせずに物凄く暗い顔をしてそう呟いたのであった。

「ハッ……………ハハ、酒に酔った勢いとはいえあそこまで本音をベラベラと……………これからどんな顔をしてこいつ等と付き合えばいいんだよ……………」

それに冴子に今まで本性を隠し続けてきたのがバレテしまったというのも十分に痛い、まさに痛恨だ。

「道化」の仮面をこんな形で剥ぐことになろうとは思ってもいなかった、全ては酒の力を舐めていた自分の責任である。

「ああ……………本当にやつちまった……………」

今自分の周りに有る関係は全て「道化」を演じてきたからこそ出来たもの。かつての冗談の一つすら言う事ができない無愛想にすぎる

「素」の自分では手に入れられなかったものばかりだ。

本来「友達」なんてものは元々兄に言われたから作るうと思っただけだった、でもあの時自分の周りには近寄ってくる者なんて誰もいなかった、好き勝手暴れまわった結果だ。

だから自分を偽った、それでは意味が無いとは分かっていたもの、そうするしか作るには手立てが無かった。

勿論ある程度仲が良いと言える関係まで進み、それが自分にとって利があると判断できれば「素」を見せていくつもりだった。でも出来なかった、

初めて出来た「友達」が例え「素」の自分を全く見せていない歪な関係だったとしてもそれは自分にとって心地が良すぎるものだったのだ。

良い人とは言い難い、むしろ純粹に道を外れていた自分の「素」を見せるわけにもいかず、いつか、いつかと思っただけ先送りになっていた、らもう後には退けないほど時間が経ってしまった、

「素」を見せたことはある尤も仮面を被った状態だったが、そうさせたのはこの関係を壊したくないという思いからだ、だから今までもこれからも偽り続けるつもりだった。

偽りがいつれ本当へと変わっていくその日まで……

「そう思ってたのになあ……」

この数年間は一体何だったんだろうか？いとモアッサリとした崩壊、一時の気の迷いのおかげで全てがペアだ。

合わせる顔が無いというのはこの事か……

一番ショックが大きかったのは冴子だろう、今まで見せられてきたものは表面だけで深い所は見せられていなかったと言われたのに等しいのだから。

思わず窓の外にある空を見上げて嘆息する。これからまたあの「道化」の仮面を被るわけにもいかない、

かと言っていきなり素をだせるか？と言われてもそうでもない。もしソレが出来ていたらもうずっと前に出している。

「どつするかねえ……」

答えなぞとつに出ているのだが心がそれを拒否してしまっている、しかし何かしら答えを出さない以上この先ずっとついてくる問題だ。それにこんな鬱屈した空気を纏っていては皆にも迷惑だろう。

そう思いつついい加減乾いてきた喉を潤そうと誰でも手の届く場所に吊るされた飲み物を入れた袋に手を伸ばした。

「なあ高城」

「名前で呼びなさい、で何よ？」

「何で先輩酔ってるんだ？」

「知らないわよ……」

どちらも共にどこか疲れたような顔を見合わせてタメ息を吐く、昼過ぎに川の対岸に着くと言われ目を覚ましたら何故か先輩が酔っ払って軽く暴走していたのだ、そんな先輩は今屋根の上でジークと平野が名づけた子犬と戯れている。

目が覚めたらすぐ隣で砂糖を吐きそうなほどのラブな空間を展開されていたらそりゃ誰だって疲れる、起きてすぐに見るようなものではないことは確かだ。

毒島先輩の方もソレに少なからず乗り気であったというのが怖い所だった、止めなかつたらいく所まで行っていた可能性もなきにしもあらずというのが性質が悪い。

交代で見張りに付いていた高城達は気がついたらすでに酔っ払った後だったと言っている。車を運転していた鞠川先生が最後の楽しみを飲まれたと嘆いてたっけ……

そう思ってチラリと隣に視線をやればかなり苛立った様子の麗が忌

々しそつに先輩がいるであろう天井を睨みつけている。

何気に一番疲れさせてくれているのはコレだった、隣に座っているが故に嫌でもピリピリとした空気が漂ってきているのがわかるのだ、まあ先輩に相手すらされていないが……

ここで何か言つて手を出せば矛先が自分に向くだけなので放置しているが、その事がさらに彼女を不機嫌にしているという事実はどちらかという鈍感な小室にとってわかるはずもなかった。

「それにしてもビックリしたよな、先輩がお前等着替えるのをマジで見にいったのは」

「余りに堂々としてて気付かなかったわよ、つてか気付いてたならさつさと止めなさいよ」

「いや、あそこまで堂々と車に登つて行つたから何か忘れ物でもしたのかな？つて思つて」

アレは覗きの次元を超えていた、毒島先輩が「何で君がそこにいるんだ？」と発言するまで男子以外全員ハンヴィーの上に仁王立ちする秀治に気付いてなかったのだから。

それに対する返しも「あれ？お前等着替えねえの？」だから恐れ入る、やろつと思つても決して真似できないようなことを酒に酔つているとはいえやつたのだ

……あれ？もしかして酒に酔つてたからやつたのか？

普段の先輩でも同じような行動をしかねないので判断がつかない、寧ろ嬉々として覗こうとに行きそつな姿しか思いつかないのが困

りものである。

「奴等だー！！」

そしてそんな平和な考えは当の本人の叫び声で粉々に砕かれていった。

「さっきまで平和だったのに、「アオン！！」「むぶっ！？」

「ぶっ！！」

天井から投げ込まれたジークが顔にポフリと降ってきて目の前がジークの真っ白な腹で染まる、何だか出鼻を思い切りハンマーで砕かれた気がした。投げ込まれたジークは顔に器用にへばり付き尻尾をブンブンと振っている。

それを間近で見っていた高城も笑いを必死になつて堪えているが、努力むなく笑い零れ出てきている、緊急事態なのに緊迫感が全部吹き飛んでしまった。

「ちょっと先輩！！いきなり何をっおわ！？」

「「きゃあ！？」」

「黙ってないと舌嚙むわよ！！秀治君達も振り落とされないように何かに確り掴まって！！」

普段のポヤンとした雰囲気消逝し去り、運転席でそう大声で叫びアクセルを踏み込み急激に加速し奴等をなぎ倒していく。

急な加速に体がシートに押し付けられる。流石の先輩達も立ってられないのかうつ伏せになり全力でそれぞれ何処か掴みやすいところを掴んでいるようだ。

「曲がるわよお!!」

アクセルから足を離しブレーキを踏み込んでハンドルを一気に回し再度アクセルを踏み込むことによりハンヴィーをドリフトさせ90度の角を見事に失速せずに曲がりきる。

最初は右に次に左に曲がり奴等が多数存在する比較的狭い道を避けていく。そして広い道に出たところでまた再加速し奴等をなぎ倒していくしかし……

「やっべえ!! 冴子跳べ!!」

「嘘っ!! ワイヤー!? 皆何かに掴まってー!!」

鞠川先生が信じられないといった声を上げて慌ててハンドルを切りブレーキをべた踏みして止まろうとするが加速のついたハンヴィーは止まることなく……

何故か張られていたワイヤーをぶち切り血に濡れていたタイヤはそ

の役目を果たせず、車をスピンのせていった。

この時頭をぶつけて気を失った僕が最後に見たのは、スピンした際に振り落とされたのか、ゴロゴロと外の道路を転がる二人の先輩達の姿だった。

「痛い……こういう時って体鍛えててよかったって思うねほんと……」

「全くだ、しかし不味い事になったぞ……」

ワイヤーにぶつかる直前に飛んだおかげか、上手く受身をとることができ、無傷とはいかないが無事だった二人、しかし他の仲間はずうでは無かったらしく、スピンのて止まった今も全く動き出す様子はない。

エンジンも何かトラブルでもあったのか止まっているようだ。止まらなければ免許は無いが、運転してここから逃げることもできたのにと舌打つ。

「これは……今度はオレ達が小室の真似しなきゃならねってことかな？」

「見捨てるという選択もあるがどうする？」

「分かってて聞くなつての、今から行く場所にはアイツの親いるんだぞ娘を生贄にして逃げてきたなんて言っちゃったら殺されかねえよ、おつとジーク静かにしてるよ、これから何があっても吠えちゃ駄目だぞ」

「きゅん……」

意見を交換しつつ動きを止めたハンヴィーに乗り込み必要だと思えるものだけを手早に持ち出す。どうやらジーク以外全員気を失っているようだ。

小室の金属バットにオレの木刀、役に立つと思つて他の部屋から集めた日用品を詰め込んだシオルダーバッグ、そして最後に昨夜使っていた血のこびり付いたバール

「何としてでもここから奴らを引き剥がさなけりゃならねえ、手伝つてくれ」

「前のように危険だから置いていくとは言わないんだな」

木刀を冴子に投げ渡す、それを受け取った彼女は嬉しそうな顔で笑いそう言った。

「もう絶対置いてかねえし手放さねえ、逃げようと思つても逃がし

「てやんねえから覚悟しやがれ」

バッグの口を開け中から目覚まし時計を取り出し数分後にセットする、これから始まるのは命を賭けた鬼ごっこだ。

噛みついたら（タッチしたら）鬼（奴等）の勝ち、噛みつかれなかった（タッチされなかったら）オレ達の勝ち。

とても簡単で分かりやすいゲームだ、景品は仲間の命とこの先に居るであろう人々達の安全。

決して割が合わないというものでもない、前向きに考えれば仲間の命を助けるついでに恩すら売れるのだ。

「まずは突破しなけりやならん、タイムリミットは1分、遅れたら死ぬぞ……オレが」

「クッ……それは怖いな、ならピッタリついていくとするよ」

そう言つてひとしきり笑いあつた後、二人一丸となつてバラけながらもじわじわとこちらに近づいて来ている奴等の中を突破する、

今まで何十と互いの動きを見て体験してきた彼等に行動を合わせるのに言葉は要らず、ただどちらもが相手にとって最良の働きをし互いの背を庇い合つて進む。

突破に30秒とはかからなかった、そのままさらに前進し角に差しかけた所で懐に入れた目覚ましはその役目を果たす。

明らかに奴等の動きが変わつた、先程まで最後に音が聞こえた場所にふらふらと突き進むだけだったのが、完全に此方を捕捉して向かってきている。

今や後ろにいる奴等も全てこちらに向かってきてきているようだ、矢張り電子音は余程耳に届きやすいのだろう。

頭に響く音と例えられるだけはあるということだ。すぐさまソレを道路の上に置き、そこから離れ今度はケータイの準備をする。

小室に渡した分を含めて5個あったので後3個だ、それに奴等となつた他の住人から頂いたケータイが6台、オレのを合わせて7台にもなる圏にするには十分すぎるほど大量だ。

それに手持ちが無くなつたり勿体無い時はそこらへんに停めてある車の窓を叩き割れば勝手に防犯ブザーを鳴らしてくれるのだから十分なほどオレ達の代わりを勤めてくれることだろう。

後ろで鳴っていた目覚ましの音が途絶えた、恐らく破壊されたのだろう。それが握りつぶされたか噛み砕かれたかは知らないが、

「さあ、今度はこつちだ……頼むからちゃんと釣られてくれよ!!」

事前に音量をMAXにしてあるケータイを手に取りどの番号かをさつと確認する、

「冴子お!!肩をかせえ!!」

彼女の肩を踏み台にして飛びあがりストラップを電柱の足場に引っ掛ける、奴等の手も届かないお手軽かつ極上の圏の完成だ。

そしてそのまま着地し足場を作るために奮戦している彼女に加勢しま共にソコから離れる。

ともかく数が多くて力が強い

個体により移動速度にバラつきがあるようなのが唯一の救いか？元々鈍足なのが足の肉を喰われて超鈍足になっているというささいな違いしかないが……同じタイミングで、押し寄せてきてきていない分まだマシだ。

少しだけ離れたところでソレに電話をかけ、着信音を鳴らす。また奴等の動きが変わりこちらへの意識が消える。

かといって止まっていいいわけではない、この隙を利用して新しい目覚ましをセットする、まだまだ先は長い……

自らを餌にしデコイをばら撒き、誘導する。しかし体力も無限というわけでもない。

神経をすり減らし、常に全力で移動し続け、手に持ったエモノを振るい必要最低限の奴等を殺す。

デコイも自分の物一個を残して使い尽くしたころにはもはや二人とも息も絶え絶えだった、最後の一個も使わなかったのではない、使う余裕もこれ以上奴等を引っ張っていく体力も残されていなかったのだ。

故に最後のケータイを仕掛けたとき二人は迷わずこれ以上相手をするのを止め遁走した。アレ以上欲を張っていたら奴等の仲間入りしていただろう。

これでも約800〜1000Mは引っ張ってきたからあっちも大丈夫だろう……多分。

丘をグルリと半円を描くように移動してきたので小室がいるのはこの反対側だ、あいつ等本当に無事だろうか？

心配になったが今は現在進行形で自分達の命の危険が近いのでそれ以上の思考を断ち切った、どこか早く休める場所を探さなくては…

…

「秀治、ここはどつだろう？」

「何で神社？」

「ここには御神刀が納められている、使わぬ手ないだろう?」

「決定、行こうか」

奴等に気付かれないように音を殺して石段を登っていく、登った先にあつたのは中々立派と言える神社。ここも奴等の被害はあつたらしくそこかしこに血溜まりが残っている。

しかし奴等の姿は無い、どこかに移動したのだろうか?しかしこれ以上好都合なこともないので神仏の導きというものと解釈して境内へと入っていった。

対岸に着いたのは何だかんだあつて昼の2時、車で事故を起こしてこんな面倒なことになったのが午後3時になるちよつと前。そして色々和小細工を弄して奴等を誘導しここに着いたのが午後3時40分。一度休憩をとつたら外が暗くなつてしまうような微妙な時間帯だ。

「すぐにここを出立して高城の家に向かうかここで一泊か……か」

「何か言つたか?」

「いや、別に……で、どうだ?切れ味は良さそうか?」

「ああ、どちらもいい刀だすぐに鈍らになるようなことはあるまい」

社の中に入りその入り口の門を閉めてポツリと呟く、それが良く聞こえなかったのか奥に供えられていた太刀と脇差の鑑定をしていた冴子が顔だけこちらに向けてそう聞いてきたが
どちらにするかは決まっているのではぐらかしておいた。

「そうか、そりゃあ良かった。ところでオレはここで一泊しようと思っっているんだがどうする？」

「流石に体力の限界だ、これから暗くもなるんだ別にいいんじゃないか？」

「そうか」

壁を背にしてズルズルと崩れ落ちるように座りこむとその隣に冴子が寄り添うように座り頭を預けてきた。
まるで奴等が出てきたあの日の続きのようだ。

「なあ冴子」

「何だ？」

「お前に渡したいモノがあるんだが……受け取ってくれるだろうか？別に要らないなら要らないとハッキリ言ってくれて構わない」

「ほう？何だ急に改まって、指輪でもくれるわけでもないだろうに」
乳酸まみれの体に湯を入れて姿勢を直し冴子と向き合うように座り
なおす。そんなオレをみて冴子は愉快そうに笑みを浮かべオレに合
わせて姿勢を正してくれた。

「良く考えたら皆居なくなつてまだ3日しかたつてないんだよなあ
……」

「……そうだな」

「もうオレにはかなり昔のように思えて仕方ねえよ」

「……」

「まだ3日とはいえ色んなことがあつたなあ、あり過ぎたつて言え
るぐらいに……」

「ああ……」

本当に色々とあり過ぎた、これほどまで濃い3日間も人生で初めて
だろう。

「オレはお前に謝らなきゃなんねえ、その中でお前を一人にしかけ
た……察してやれなくてすまなかつたな、言われて初めて気が付い

たよ、不甲斐ないことにな」

「別に気にしていないさ、もう置いていくことはないんだろう？それより何かくれるんじゃないかなかったのか？」

冴子が苦笑いを浮かべてそう言ってくる、彼女にとってこの展開は予想外すぎるものだろう。だけどオレにとっては必要なことだった。今からいうのは昨夜の事を自分なりに考えて出した答えでもある、こういうのは奴等さえ現れなければもつと後に最低でも社会人になつてから言つつもりだったものだ、
ただどこんな世界になってしまったからにはそんなもの関係が無い、なら言つても構わないはずだ。一寸さきは闇ならぬ一分先は闇の世界なのだから多少早く言つてしまつても問題は無い……と思う

「まあ、前置きつて奴だ最後まで聞いてくれ。それで……だ、多分明日からは高城の家で過ごすことになると思う、別に働かなくてもいいつてわけじゃねえが
少なくともこんな身近に迫つた命の危険つてのはほとんど無くなる安全な場所ですごすことになるわけだ……」

「確かにそうなるだろうな……」

「え……とな、うんそれでなんだが……あ……何て言えばいいか……」

「……………」

余りに此方の様子が可笑しいのにつられてか向こうも段々と緊張してきたらしく真剣な顔をして聞き入っていた。

「お……オレを……貰って……みて、くれ……ない……か？」

「……………」

油が切れた機械の鳴らす音のように途切れ途切れに言われた事の余りの突飛さにか冴子は何も言わず瞠目し固まってしまっていた。

「あゝ、アレだ、そのお前が寂しいっていうんだっただらずと傍にいて支えてやる、ああ、これじゃあパートナーの時と変わらねえか！！

えっとその、ナンだ、つまり……だな、これから先色々あると思う、でも何があってもお前を絶対に一人にしない、傍に居るって誓う」

「……………」

まだ茫然自失から戻ってきていないのか大口を開けてポカンとした顔をしている。何と言うか……これ以上反応が返ってこなかったらこっちも辛いものがある。とんでもなく気恥ずかしい。

顔から炎上してしまいそうなほど熱い、多分真っ赤になっている。

「お前と出会ってからもう4、5年も経つか……その中でオレはお前に掛替えの無いモノを数え切れないほど貰ったし教えてもらった、

ほんとに感謝……してる。」

「だから……恩返しついたら可笑しいけど……こんな屍人が目え覚まして襲ってくるような糞みてえな世界になっちまったけど……頑張って幸せにしてみせるから……さ」

なけなしの勇気を振り絞ってようやくこれだけの言葉を吐き出した、それでもまだ返答は無い。

「愛してる、今も、昔も、そしてこれからも……だから」

結婚してください

そう言って頭を下げた、もうこれ以上は限界、

「君が私に本心を語ってくれたことが一度あったな、その時はとても嬉しかった今でも鮮明に思い出せる程だ……しかしそれでも君はまだ私に隠し事をしていた、昨日までアレが演技だとは気が付かなかったよ」

「冴子……それは」

「今は頭を上げないでくれ頼む、……はっきり言って怖かったよ、良く知っているはずなのに知らないように思えて……君が私から離れた場所にいつてしまったように感じてな……」

返ってきたのは返事ではなく彼女の独白であった、何か弁論を返そうにも頭を下げた状態でいつても聞いてくれはしないだろう。前で何か動く気配を感じた、恐らく彼女がこっちに近づいてきているのだと思う。

「それなのに君は私に愛していると言ってくれた、一緒にいてくれると誓ってくれた、嬉しいよ、本当に……、嬉しい、だからこそ……」

「なんだ？」

「君は……君だ、そうだな？」

「ああ、オレはオレだそれだけは今も昔も変わらん」

「わかった……それだけ聞ければもう十分だ、顔を上げてくれ」

顔を上げるといきなり唇を奪われた、顔を離そうにも両手を頭の後ろにまわされて力強く掴まれて出来ない。ただただ、混乱した頭で何でこうなったのかと考えるが全く答えは出てこなかった。そして長いのか短いのかよく分からなかったキスが終わり送り込まれた彼女の唾液が呆然としたオレの口の端から垂れていく。

「これが返事ということ構わないかな？」

涙を拭いして遣ったりと言いたげな笑みを浮かべてそう言うてくる、
ああなるほどあの時のことをまだ覚えていたのか……

「悔しいが似合ってるな冴子、気障な台詞も言動もお前には良く似合っている」

「ふふふ、そうだろうそうだろう」

エヘンと胸を張りそう笑って答える彼女見て今更ながらにああ承諾されたんだ……と気付く。

「あれ？ん……可笑しいな？あれ？やっぱ人って嬉しいときにも泣けるもんなんだな……うん」

「肩でも貸そうか？」

「うん、少しかりる……ありがとう」

「こういう時は私が泣く場面だというのにな……ほんとうに可愛い奴だよ君は」

180を超える大の男が女の子になきついているのは傍からみればシニール以外の何でもない光景であったが、そんな事など全く気にせず秀治は声を殺して泣きつづけ冴子はそれを苦笑いを浮かべて慰め続けた。

14話(後書き)

う……うわあああああああああ……もげるおおお
おおお おおっ おおっ おおっ おおっ おおっ……

へ……信じられるか？コレ……最初書いた時一行目が主人公の「う
ごあああああ！」っていう叫び声だったんだぜ……

ギャグ調を書きなおしてたらいつの間にか婚約してた、何を言っ
るかわからねえと思うが本当に私も何を言ってるのかわからねえ……
…な、なんでこうなったんだ？

気がついたら僕達は高城の家に救助されていた。誰かは知らないけどバリケードの見回りをしていた人が気絶した僕等を見つけて知らせてくれたらしい。

発見した時僕等の乗っていたハンヴィーは何匹かの奴等に集られていたらしい、ただ不思議なことにバリケードが破られていたのにしては入ってきた奴等の数が少なすぎると言っていた。

理由は何となくわかった、発見されたときにいなかった先輩達、そして車から無くなっていた彼等の荷物。

そして今この場所にいないということはきっと先輩達が囷になって奴等を引きつけてくれたのだと思う、

もう外も暗くなっているのにまだ先輩達はここに来ていない、あの先輩のことだから生きているとは思う、と言うより死んでいる姿が思いつかない。

それに先輩達は強い、例え僕が何人束になってかかっても片手で捻れるぐらいには……だからきっと生きてる……だから僕もここを生きて帰らないとな

ちよつとした現実逃避から帰ってきてても目の前の光景が変わるわけではない、できれば変わって欲しかった、無論いい方に……

そんな引き攣った笑いを浮かべた小室の目の前に座っているのは今心配していた先輩の兄、紫藤浩一先生

優雅にコーヒーを飲みこんな逃げ出したくなる空気の中でも悠然としている、そんな肝の太さのほんの一部でもいいから今は分けて欲しかった。

そしてそんな空気をたつた一人で作り出しているのが隣に座っている僕の幼馴染である宮本麗、この部屋に全員が呼ばれて応接間のような場所に着いた時からずっと顔を般若のように歪めて紫藤先生のことを睨んでいる。

敵意で人が傷つくならきつと今頃先生は血の海に沈んでいるだろう。それほどキツイ視線を送り続けている。

「そうですか、あの子達がないのに得心がいきました。ありがとうございます」

ティーカップをコトリと皿の上に戻しニコリと人好きのする笑みを浮かべて頭を下げる。……ああ、また威圧感が上がった、そろそろ反応してやってください紫藤先生、貴方絶対気付いて放置してるでしょう？

「ええ、でもこれはただの推測だから本当にそうとはわからないんだけどね」

「それでもですよ、情報が全く無い状態で判断するより遙かにマシです。少なくとも知らなければそれこそ電話の一つでも弟にかけてしまっていましたよ」

高城がそう言ったのに対して肩を竦めてそう返してくる、そうもし先輩達が今外にいるなら隠れているはずだ、そんな中もし電話でもして繋がってしまったら音で彼等が隠れている場所が奴等に特定されかねない。

それだけは避けねばならないことだった。

「それで？そこのお嬢さんは誰でしょうか？」

今度は視線を美味しそうにケーキを食べているアリスに移してそう尋ねてくる、完全に意図的に無視している。麗が仕掛けてくるまで何もしないつもりだろうか？

そろそろ胃がキリキリと痛み出しそうなので早く相手をしてやって欲しい。本当にキツイ、宮本を挟んで向こう側にいる平野も何やら居心地が悪そうにしているのでこの事に気がついているのだろう。

「この子はね、小室くんが命を賭けて頑張って助けた子よ、ほら自己紹介して」

同じくその隣でケーキをほうばっていた鞠川先生がアリスの背中を軽く叩いて注意を紫藤先生に向かせる。

「えっと、初めまして稀里アリス10歳です」

「おや？年のわりにしつかりとした子じゃないですか、こちらこそ初めまして私は紫藤秀治の兄の浩一と言います。いつまでかは分かりませんがよろしくお願いしますね」

「は、はいこちらこそ」

あまりに格好からして学校の先生という感じのオーラ（先生なのが）を振りまいているせいも少し緊張しながらアリスはハキハキとした挨拶をすませる。

それを見て紫藤先生は柔和な笑みを浮かべながら手を差し出して握手を求める、先輩と違って怯えて握手すらされないと言う事は無く、少しだけ動きを硬くしてその手を握る。

「アリスちゃんこれから私達は少し難しいお話をするんですよ、多分暇になるでしょうからお部屋で遊んできてくれませんか？」

「え？これ食べてからじゃ駄目なの？」

「食べてからで構いません、きっと後々食べれなくなっていくでしょうから今のうちにたくさん食べておきなさい、ああ私の分もいかがです？実は私甘いものが苦手です……」

「え？こんなにおいしいのに？本当に食べていいの？」

「ええ勿論、ああそうだ、食べるときは半分隣の人に分けてあげれ

ばきつと言ぶと思えますよ」

「そつなの鞠川先生？」

「こ、子ども扱いしないでください！！気にしなくてもいいのよアリスちゃん私はこれでお腹いっぱいだから」

何気にサラリとアリスと同等の扱いをされ純粹な瞳で見上げられた鞠川先生が顔を赤らめてそう返す、ソレを見て紫藤先生はクツクツと静かに笑いを零した。

何というか傍から見た様子はまさに好きな子からかって遊んでいる悪ガキ以外の何者でもない、もしかしたら先輩が言っていた通り何かもしれない本当にそうかは分からないけど。

しばらく歓談を交わしながらアリスが食べ終わるのを待つ、僕もケーキは食べたけど何故か味を感じなかった、ナンデダロウ？

「ごちそうさまでした！！ありすお話が終わるまで外でジークと遊んでくる、バイバイ浩一おじちゃん」

「お…おじちゃんですか、これは手厳しい、できればお兄さんと呼んで頂けませんか？先生でも構いませんから」

「えっと、浩一先生？」

「ええ、それで結構ですよ」

ズルリとずれた眼鏡の位置を直しながら苦笑いを浮かべる、どうもおじちゃんと呼ばれるのは少し嫌なようだ、それを察したのかアリスは幼いなりに空気を呼んで呼びなおした。

「さやちゃん後でなにを話してたのかおしえてねー」 「わおん！」

「お姉さまと呼びなさいお姉さまと！！……こほん」

ジークを抱えて部屋から出て行く直前に大きな声でそう言ってドアを閉める、高城がありすにちゃん付けされたのが嫌だったのか立ち上がってそう叫び……

全員の視線を一身に受けている事を自覚して顔を赤らめて椅子に座りなおした。

「さて……それでは本題にはいりましょうか待たせてすみませんね宮本さん、あんな小さな子の前で話すには少し重たい話になりますから無視させて頂きました、申し訳ありません」

「なら何であの子も一緒に呼んだのかしら？」

「貴方達と一緒に気絶していたんです、誰なのか気にもなりませんよ、あとあの子の親御さんはやはり……」

噛みつくように突っかかる麗を受け流すようにそう返し、やはりその事を聞いてきた。恐らく答えは分かっているがもしかしたらと思

って聞いているのだろう。

「はい、彼女を守って死んでいます」

「そうですか……こんな時代だから仕方ないことなのでしょうが、
そう思うようにはなりたくありませんね」

紫藤先生は目に哀れみを浮かべて先ほどアリスが元気良く出て行ったドアを見つめた後、目を閉じて息を吐きながら自分を戒めるようにそう言った。

「話が逸れましたね、それで？聞きたい事があるのではないですか？宮本さん」

「……本当にアンタが私を留年させたのよね？」

苦虫を噛み潰したような表情で麗がそう言った、内心は昨夜先輩から言われたことが渦巻いているのだろう。認めたくない、そんな声が聞こえてきそうだった。

「そうですね、確かに私が貴方を留年させることを決定しましたよ」

「……言い方を間違えたわ、無理やり従わせられてたって本当の話？」

全く気負った様子すら見せずにサラリと言い切る、麗は当たり前のこと聞きすぎたと頭を振って気を取り直してからそう聞きなおした。

「……………そうですね、強制はされていませんよ」

「アンタの弟と毒島先輩が人質にされてた話は本当だったってわけね……………」

聞いた事は言うが聞かれなかったら言わないつもりだと理解した麗は昨夜先輩が言っていた推測をあたかも最初から知っていたかのように話して相手の出方を窺う。

「なるほど……………そこまで知っているということは貴方の父親から全て聞いているということですか、内密にしておくように頼んでいたのですがね……………」

「ちょっと待ちなさい！！パパはこの事を知ってたの!？」

カマをかけたが釣れたエモノは予期しないものだった、一体何故ここで自分の父親の話が出てくるのか？

そう思っただけで問詰めるが先生はカマをかけられたことに気がついたのか顔を歪めて黙ってしまった。

「何とか言いなさいよ！何で私のパパが知ってるのよ！？知ってたとしたら何で私に何も教えられてないのよ！！」

「貴方こそ何故知っているのです？この事は私と貴方の父親以外知っているはずの無いことのはず……」

「アンタの弟が言ったのよ！！こんな事があつたかもしれないって、そんなことより早く教えなさい！！」

「秀治が？……やってくれましたね、いえこの場合簡単に引つかかった私の責任か……少し悔りすぎていたということですか……」

先生は天井を見上げ片手で頭を抱え脱力した声で呟きを漏らす、しばらく無言でただ呆然と上を見上げつつづけていた。

「私は……一時貴方の父親と協力関係にありました、目的は一つ私達の父である紫藤一朗の罪を暴くこと」

何か考えが纏まったのか天井から目を戻し少しだけ迷うように瞳を揺らしてから口を開いた。

「私がそれに協力したのはもう父の手伝いをするのに嫌気がさしてきていたからです、校内も彼の派閥とソレに反発する校長の派閥との争いで息を吐く場所も少なくなってきましたから……」

「私はどちらの派閥からも疎まれていました、父のコネで入ってきた

たくせに従わない私、そして元凶の息子である私、蝙蝠にすらなることが許されなかった……
そんな中どちらの派閥にも入っていない、もとい派閥の存在に気が付いてすらいなかった貴方の存在は本当に私にとって救いになってましたよ鞠川先生」

「……………」

まさかそんなドロドロしたものが自分の職場の裏にあったのかと驚愕の表情を浮かべた鞠川先生はただコクコクと首を縦に振って反応を返したが……
多分名前を呼ばれたから反応しただけで頭はまだ追いついていないだろう。僕を含めた全員も同じような表情を浮かべている。余りに信じられないような内容だった。

そんな彼女にまた笑いを零してから先生は話を続けますと言った。

「それにここ数年の間、父の手伝いが段々ときな臭いものを感じさせる部類のものが増えてきていました、
それに巻き込まれない為にも宮本さんのお父様にその情報を流したのです。私は父から回ってきた手伝いの記録を渡し彼がソレを調査する」

「あと一步、そんな所まで来た時に私は父親に呼ばれて東京へと出向きました。……ええ皆さんが想像している通り、私が協力していることが父に知られてしまったのですよ」

「私としたことが迂闊でした、回ってくる仕事の一部に細工を施さ

れていたと気が付いていなかったのですから、そしてそれは昔のモノも同じ……初めから私のことなど信用すらしていなかったのでしょうか」

まあその懸念は確かに当たっていたのですが……と肩を竦めて自嘲するような笑みを浮かべ両手の平を上に向ける、

「呼ばれた場所で私に父が言ったのはやはり悪事に手を染めていたこと、そしてその伝手を使って弟の目の前で冴子さんを弟と同じような目に合わせてやることも出来るという脅迫その二つですよ」

「それが嫌なのならば以後私に逆らおうとせず唯言う事を聞いていればいいと父は私に言いました、だから私は父の派閥の先生を初めて父の命令だと言って動かして貴方を留年させたのですよ」

「父が脅迫通りの内容を本当に実行するかどうかは分かりませんが、その可能性があるとただけでもそれは力を持つのです、冴子さんを失えば弟は自分から後を追いかねませんからね、私は学校の教師という誇りより弟にとって本当の意味での家族としての立場を優先させて貰いました」

「すまないことをしたとは思っています、私から巻き込んでおいて裏切ったのですから。それでも貴方の父親は凄いい方でしたよ、そんな私に『別に君が気に病む必要は無い悪いのは全て君の父親だとサラリと言ったのけたのですから』」

その後納得がいかない私が貴方にはこのことを黙っておくように頼

んだのですが、どうやら約束を守ってくれていたようですね……と最後にそう語って先生は話を締めくくった。

啞然

まさにそんな言葉が一番この場に似合っているだろう。言われたことは全て突拍子もないことばかりだ、しかしソレを本当だと思わせるような何かがあった。

「この事は弟と冴子さんには秘密にしておいて下さい、特に弟には……知らぬ間に父親に全て奪われかけていたなんて知る必要はないんですよ、ただ代わりに留年させられかけていたと言っておいて下さい」

誰も言葉を発しようとしないうちに、まだカップに残っていたコーヒを飲んで彼は疲れたような笑いを見せてそう言った。

「……ずっと前飲みに行った時に言っていたことってそういうことだったのねえ」

「やはりあの時何か言ってしまったか……、母と言いつつ私と言いつつ、酒に弱いのは血筋なのかもしれないね」

「別に大したことは言っていなかったわ、ただ何時もは全く飲まないのになあ、日だけは潰れるほど飲んでたから印象深く覚えてただけ

だし……」

「それで？私は何を言っていたのですか？あの日のことは前言った通りほとんど記憶に残ってないのですよ」

「ただ何か嫌な事でもあったの？って聞いたら『藪を突いたら蛇に噛まれただけです……全ては私の責任、笑える話です』って言うたきり潰れて寝ちゃったからそれ以上聞けなかつたけど……」

「そうですか、それにしてもあの時は迷惑をかけましたね」

「ん〜そうね〜結局私達二人とも酔い潰れちゃったから車で帰れなくなつてリカにヘルプコールかけなきゃいけなかつたし〜」

「フフフ……、彼女の家のソファで目が覚めた時は本当に驚きましたよまさ「なんでよ？」……他に何か聞きたいことでもあるのですか？宮本さん」

大人二人で思い出話に浸りかけていたのを正気に戻つた宮本が止める、

「そういう事があつたつていうのは一応パパに本当にあつたのか聞くまで納得しといてあげる……でも何でアンタの父親はそんな事できるのよ？」

「関係の無い弟への仕打ちのことですか？」

「それ以外ないじゃない……」

色々な感情が混じりあった複雑な表情を浮かべてそう言う、確かに今の話ではあまりに先輩の扱いが酷い、本当に家族なのかと思える程に

「同属嫌悪かもしれませんね……弟は父を毛嫌いしていますがその有り方は誰よりも父に似ています。自分に敵対する人間への対処は特に……」

それが女性であろうが男性であろうが一切の容赦をすることがありません、やるなら徹底的にあの子はします」

「それが中学時代のアイツってこと？」

「そうですね……あれはまだ遊びが半分入っていましたが、遊びが入る前はその通りでしたよ、女性の顔を踏み潰したことを平然と報告できるぐらいには」

「それって私が止めに入った時のことかしら？」

「知りませんよ、あの子にとってそんなことは日常茶飯事だったのですから」

宮本の頭を横切ったのは当時の彼に喧嘩を売った、いや昨夜の自分のように無視されたうえに挑発されて喧嘩を売らされた先輩のことだ。

柄が悪いと学校でも有名な人で腕っ節もそこいらの男子よりは強かったので自分のグループを作って傍若無人に振舞っていた人だった、

頭も顔も良くスタイルも良かったのでアツチの噂も絶えない人でもあつたと思ひ出す。

確か一年でも特に気弱に見えていたアイツをカモにしようとして文字通り鼻っ柱を折られたうえ泣き叫んでも許しを請うても無表情で頭を踏みつけられ床に顔を擦りつけられていたのを今でも思ひ出せる、

途中から見ていられなくてソレを止めたのは自分だからだ。アイツを毛嫌いしはじめたのもソレが始まりだったとはつきりと思ひ出す。

「そんな弟が怖かったのでしよう、いずれ育てば自分に敵対して遺憾なくその能力を振り下ろしてくる。しかし自分の陣営に引き込むのも怖い、

自分に似ているとわかっていいるからこそいつか腹を食い破られるのが見えていた……父にとって色々目障りな存在だったので弟は……」

さて暗い話はこちらまでにしましょうか……と言ひ浩一は手をパンと打ち鳴らして呆けていた全員の意識を呼び戻す。

まだ全てを語つたわけでは無い、しかし別にこれ以上自分の家の深い事情を教える義理も無いのだ。

「私はこの後高城会長に呼ばれているので失礼いたします。一緒に行きませんか鞠川先生、こんな世界になった以上とっておいても仕方無い秘蔵の日本酒がでるそうなのですが……」

ピクリと鞠川先生がその言葉に反応を見せるが呼ばれてもいないのに行くのは流石に気が進まないようだ、顔を見ていればその内面で起こっている葛藤が全てわかるというのも面白いものだろう。

「別に一人増えたところで気にするほど狭量な人ではありませんよ、それにここまで高城さん達を保護してきたのは名目上貴方なのでそれからそれくらいの見返りがあってもいいんじゃないかと思いますがねああ、これは独り言ですが多分私達が普段お眼にかかれないようなものが出てくることは確かでしょうね、問題は私が同席しても余り飲めないということでしょうか？」

「そ……そこまで言うんだったらついてってあげてもいいわよ？」

「そうですね、それでは行きましょうか、それと高城さんいえさやちゃんと呼んだ方がよろしいでしょうか？」

「普通に呼びなさいよ！！怖気が奔ったわよ今！！」

「では高城さん、明日は私についてきて下さい人の扇動の仕方というのを教えてさしあげます、借りはそれで返したということにしておいてください」

最後にそういい残したあと鞠川先生を連れて部屋から出て行ってしまった、残されたのは僕等だけだ。

「ねえ孝、あの話本当だと思う？」

誰もが今話されたことについて考えて黙っていると麗が僕に話しかけてきた、別に正しい答えを求めているわけじゃないっていうのはわかる。

ただ僕の意見を聞いて一つの参考程度にはしたいのだろう。

「そうだな……、先輩が自分の親を毛嫌いしてるってのは少なくとも本当だと思う」

「どうして？」

「ずっと前だけど先輩に家族のこと聞かれてさ、答えたときがあったんだけどその時に『大事にせえよ、それは望んでも手にいれられへんもんやからな』って真剣な顔で言われたからかな？」

「そう……」

そう言ったきりまた黙り込んでしまふ、何というか空気が重い。聞いてはいけないことを聞いてしまったような気がする。ただ気がひたすらに重い。

「僕が面倒臭がってたときにそんなことがあったんだな……」

たかだか自分ごときが動いてどうにかなったものでも無かっただろうけど、もしあの時動いていたらどうなっていただろうか？と当ても無い考えに浸る。

そしてその誰も何も話さない重苦しい空間は気になって見にきたア
リスが来るまで崩されることは無かった。

翌日の早朝やはり生きていた弟と冴子さんが裏門からここに尋ねてきた、冴子さんがデパートで迷った子供の如く泣いている弟の手を引いているのがふと二階の窓から外を見た時に見えたのだ、

しかし何故あの子が泣いているのでしょうか？

自分でも弟が泣く姿なんて過去にも数度しか見たことがないので内心驚きながら足早に玄関を出て裏門へと向かう。

向こうも玄関に向かっていたのか途中でバツタリと出くわす形となったがやはり泣いている、これはもう号泣の類だ。ここまできたら珍しいを通り越して面妖ですらある。

「無事でなによりです、ところで冴子さん何故家の弟が泣いているのですか？あまり泣くような子ではないはずなんです……」

「本人の口から聞いたらどうですか？浩一お義兄さん」

「たしかにそれも……ちょっと待ちなさい、今何と呼びましたか？」

聞き捨てならない単語が聞こえたような気がして弟に移しかけていた視線を冴子さんに戻す、何か可笑しなものが付いていた気がしてならない。

「別に可笑しな呼び方をしてはいませんが……ほら秀治も何か言うことがあるそうですよ?」

「ひぐつ……ぐずつ……兄さん」

「えっと、どうしたんですか秀治、そんなに泣いて」

目が血走りすぎて真っ赤に染まってるようにしか見えなくなっている、本当に何時から泣いていたのでしょうか?

「うん……、そのな、ずずつ……オレ婿入りすることにしたんだ」

「は?」

「そういつことですよ義兄さん」

「はあ?」

弟の口からあまりにぶっ飛んだ内容の言葉が出てきて思考が止まる、えっとこれは一体どういうことなのでしょう?婿入り?弟が?誰に?」

いやそれは分かっている冴子さんにだ、これは絶対に間違っていない。何時の間にそれほど話が進んでいたのか全くわからない。

「えっと……ご結婚おめでとう御座います？ でしょうか……」

「まだ婚約の状態ですがいずれはそうなるかと」

また号泣し始めた弟をよそに冴子さんと話を続けていく、どうやら昨日隠れた場所で弟からプロポーズされたらしい、我が弟とは信じられないほど大胆な行動に出たものだと思嘆の息を漏らす。

「いや……驚きました、なるほど泣いているのはそれですか……。勿論私は反対いたしませんよ、愚弟ではありますが末永くよろしくしてやって下さい」

「元よりそのつもりです、それより何でここまで泣いてしまうのか分かるのですか？」

「長年の夢が叶うからでしょうねきっと……」

「夢……ですか」

「ええ、昔聞いた彼の夢は幸せで暖かい平和な家庭を持つことでしたからね、変わっていないければそれのはず、

聞いた時はロマンはありますがもっと高望みしてもいいのではないか？ と思いましたが今ではそれも十分大きな夢になったものです」

未だにエグエグと泣いている弟を暖かい目で見ながらそう答える。
聞いたのはかなり小さい頃だったが新しく夢が出来たというものは
聞いていないので変わってはいないだろう。

「幸せで暖かい平和な家庭ですか……中々素敵なお夢だと思いますが」
「そうですね、夢があります実現させるのは難しいですがね」

「うっせー、ずっ……幸せにするって、すんっ、誓ってんだよ、意
地でも叶えてみせるっつーの」

「おや？よくやく話せるようになりましたか、良かったですね兄と
して素直に喜んでおきますよおめでとう」

「うん……そうなんだ……やっと冴子と、ひっく」

涙を拭いながら途切れ途切れの言葉でそういい切った弟に祝辞を述
べるとまたそれを皮切りにして泣き出してしまった。

「ずっとこうなんですか？」

「ええ、昨日からずっと」

「良くここまでくれましたねえ貴方達」

「秀治の機転で何とか……自分達から注意を逸らすだけなのであれ

「ば硬貨でも大丈夫みたいですよ」

秀治の財布からほとんど硬貨の姿が消えることになったがソレを電柱にぶついたり車にぶついたりして自分達から意識を逸らして何とかここまで来れたのだ本当に苦勞の連続だった、

泣いていても何時も通りの動きで奴等の頭を潰していくのには舌を巻いたものだったがいかんせん鼻をすする音等で毎度居場所が奴等に知れるのには辟易したものだ。

「ん……ひくっ、いきなり苦勞かけてすまん」

「ほらもう涙をふけ、これぐらいで泣いていては後々どうなるかわからんぞ」

「うう、ありがと……」

ハンカチのような白い布切れを取り出し彼女は泣いている弟の顔を苦笑いしながら甲斐甲斐しく拭いてやっている、何とかこの子が童貞卒業できるのか？と心配になってしまつような光景だった。

泣きながらヤルのでしょうか？

と少しだけ下衆な考えが浮かんできてしまつたが頭を振って沸いてきたイメージをかき消した。

弟が少しだけ哀れになった、慰められて主導権を握られるなんて酷すぎる。現在進行形でビービー泣いて慰められている弟を見ているとそれが現実に有りそうで怖い。

「今日一日はゆっくりした方がいいですね、このままじゃ役に立ちませんよこの子」

「ええ、お言葉に甘えて休ませてもらうことにします、さ、行こう」

「うん……ぐすっ」

「まるでお母さんに連れられる子供ですねえ……、喜びのあまり幼児退行でも起こしてるのでしょうか？」

普段からの余りの変わりように首を傾げざるおえない、冴子さんは彼女なりにあの状態の秀治を楽しんでいるようだ、余りに子供っぽい様子に母性でもやられたのだろうか？

少し熱の籠った瞳と柔らかな笑顔を浮かべて弟の手を引く姿からはそうとしか捉えられない。

「彼等の前途に幸あれ、ですかねえ？今でも十分幸せそうですか」

少なくとも弟の方は幸せの絶頂だろう。これだけは断言できる、もしかしてそれに対して耐性が低かったからこうなっているのか？もしかしたら幼いころに受けなかった母親の愛に近いものが欲しくてああなったのかもしれない。

「はあ心配ですねほんとに」

自分の知っている全てを教え込んだが保健体育だけは教えたことが無かったなと思出し（教えられるものでもないが）、彼等の初夜が中々に混沌としそうだとか心配と好奇心が混じったような心境でそう思った。

背後で小室くんの驚いた声が聞こえる、彼等も迎えに来たのだろう。夕メ息を吐いて踵を返し自分も館へと戻っていく。

少なくとも弟がここに着いたということは会長に報告しなければなりませんね……

物資を集めるために今朝早くから出て行って明日まで帰る予定が無いらしいが連絡手段の一つぐらいは準備しているはずだ。それを使わせてもらうとしよう。

それに今日は高城さんに扇動の仕方もそうだが統率者たるものの義務と責任について教えなければならぬようになった、しかし会長の親馬鹿加減も大したものだ

まさか娘が完全に理解すること前提で冷たい言葉を吐くとは……

そうした結果娘に泣かれた、上に立つことを経験もしていなければ学びもしていないのだからいきなり理解しろと言っても無茶でしように。

この緊急時で人を率いる者に絶対的に必要なものは行動力と決断力そして決して自分を優先しないという自己犠牲心、この3つが揃っていれば自然と人はついてくる。

何も分かっていない子供ならともかく大人相手であればなおさらソレが重要視される、この状況下自分の娘が心配だからといって遠い学校まで人をやる者についていこうとする馬鹿はいない。

だから心配であろうともソレを口に出すことも行動することも出来なかった。それでも子を思ってしまうのが親だ、一部例外はいるが……
それ故に子を思うことなく今自分達がしなければならぬ最善を尽くすために「諦めた」という嘘を自分のなかの真実にしなければならなかったのだ。

それをただ「生きてるはず無いから諦めた」だけ伝えても伝わるわけがないでしょうに……どれほど自分の娘を買っているのだから……期待をかけるのも結構だがかけすぎるといかにほどのものか、小室くんは明日の出立と言っていたのでそれまでには自分の用事を全て終わらせておかなければ

また弟の泣き声が聞こえる……、問題が重なりすぎて少し頭がいたくなってきた。

「いつまで泣いているつもりですか？あまり泣いていると冴子さんに愛想をつかされてしまいますよ？」

「やだあ、やだあ……うっぐ」

「あまり弄くってやらないでください、本気にしてしまいますから。はいはい大丈夫大丈夫」

「すみませんね、昔でもこんな弟は見た事がないのでつい……弄りたくなるというか」

抱きしめられてあやされている弟を見るとなんと……母と子？それか近所のお姉さんと懐いている小さな子という印象しか受けない。アリスといい勝負である、いや恐らくアリスより幼い。

あの子が実際に幼児だった時よりほど幼児らしいというのは何という皮肉だろうか？

他の子供は何かとんでもなく珍妙なモノを見るような目で弟を見ている、実際に珍妙でありシニールに過ぎる光景ではあるからソレも仕方ないのだろうか。

「さて、面倒ではありませんが私に任せられたことを成すとしましょう、高城さん昨晩言った通り人を操る術を教えて差し上げますからついてきて下さい」

そう声呼びかけ館の中へと入っていく、多少嫌そうな顔こそしたが彼女は素直についてきた、この先これが必要なモノだとわかっているからだろう。

ただ人を操るといのが気に入らないのだ、そういった高潔さは会長によく似ている。会長も会長でその様な真似はしていない。それもそれで理由はあるが……

清濁を併せ呑むとまでは言わないが自分より10は年が下な彼女がソレを理解し成そうとするのは見事としか言い様が無い、本当に先が楽しみな子だ。

「高潔な父親を持ちその背中を幼いころから見て育った彼女がその正反対と言える者の背中を見て育てられた私の教えを受ける、どんな子になるのか本当に楽しみで仕方ありませんよ……」

育つは英傑か？それとも怪物か？どちらにしても才能はある、これからどう育つのかは彼女次第、できれば彼女が道を踏み外してしまわないように導きたいとおもつ。

私は彼女の教師なのだから。

今回は短いからおまけだけだよ　　今回も今回とて自重を忘れた作者が暴走していますので注意　とっても甘いぞ

「ん、もう大丈夫、迷惑かけて……ごめん」

「いやいや偶には良いものだったぞ、君は私にあまり頼ってくれないからなあ」

夜になってようやく秀治が大丈夫だと主張するがまだ名残が残っているのが少し面白くニヤニヤと笑ってそう言い彼の様子を窺う。

とてつもなくしょぼくれている犬耳でも付けたらそのままペタンと垂れ下がりそうなほどしょぼくれている、幼児からは脱却したようだがまだ小学生の低学年層のようだ。

いつになったら普段通りに戻るのやら……多分明日の朝ぐらいには戻っていると思うが、さてどうなるか……

いつもの余裕を感じさせる雰囲気なぞどこにもない、跡形も無く消し飛んでいる。いつものギャップが有りすぎて始めこそ困惑したがもう慣れた、普段では返ってこない反応が返ってくるのがちょっと楽しいという気持ちすらある。

こつ何と言うか……手を繋ぐのをやめたら今度は服のすそを申し訳程度に握って離れていかないようにするのが何か胸にくるものが……

…行動が少々庇護欲を刺激してくるといのが…、もう何とも…。

冴子は自分より背が高く逞しいというのにそのような行動をとるシユールさも相まって怖気と胸キュンが同時に来るといふよく分からない感覚に惑わされていた。

常時ジークのような視線で見つめてくるのだ、そして理由無く離れようとするそれが捨てられた子犬にランクアップする。

離れるなどは言っては来ないが目が本当に口以上にモノを言ってくる始末だ。そして用を足すために離れて戻ってきた時に見せた純粋な笑顔にクラリと来た時もある。

これは元に戻るまで十分に甘やかして楽しんだ方が色々得だと判断するのにあまり時間はかからなかった。

特に夕食時に口元に食べ物を持っていった時に見せた反応は中々良かった、周りの皆は大人以外の全員が砂糖を吐くような仕草をしていたのに米粒ほどの罪悪感が沸いたがこの楽しみの引き換えには出
来ない

これは今しか見れないのだから。

「今の君は本当に可愛いなあ抱きしめたいくらいだ」

「うう〜……」

そう言うと顔を耳まで赤くして布団に潜り込んで隠れてしまふ、それでいて何か動こうとすると気になるのか目だけ出して此方の様子

を窺ってきて出て行く素振りが無いと判断したらまた引つ込むのだ。そろそろ夜もふけてきている、別室を用意されてはいるが今夜も一緒に寝てやるとしよう、きっと今出て行ったらまた某チワワのような目で此方を見てくるに決まっているのだから。

何も言わずベッドに乗るとまたひよっこり顔を出して何かを期待するような目で見てくる、

つい頭をクシャクシャと撫でてやったら照れたのか首を引つ込めて中央からモゾモゾと移動して場所を開けてくれた、多分ここで寝るとでも言いたいのだろう。

布団をめくりスルリとこの身を滑り込ませる、彼の体温ですでに暖められたそこはとても居心地がいいように感じた。

欠片程度の羞恥心が戻って恥ずかしがっているのか背中を向けて此方を見ようとしてこない、手を出すようなこともしてこないだろう……いやそれは元に戻っても同じ事か。

そのことに安心と僅かながらの不満を覚えながら目の前に広がっているそんなへタレな彼の背中を抱きしめ頬を押しつける。

「
」

ちよつとだけ逃げようとしたが抱きしめる力を強くしたら諦めたのかそれ以上動くことはなかった。

今日は良く眠れそうだと思しながら機嫌良さげに頬を背中にすりつけ満面の笑みを浮かべる。

もう少し贅沢を言えば前のように抱きしめて欲しいが今の彼にソレ

を言ったら照れて逃げていってしまっだろう、多分時間をおいたら
また戻ってくるだろうが……

そんなことを思いつつ彼の心音を子守唄代わりに冴子は眠りについ
たのだった。

16話（後書き）

チュウコク〜チュウコク〜

これやってるの大の男です、童顔でも男の娘でもシヨタでもねえから、180クラスの細マツチヨな男だから。

萌えるような文章作ったけど萌えるような場所一つもねえから！

萌えたら負けである、二度目は脳内で映像再生しながら読むといい……きつと後悔するはずだ。

とりあえずわかったことは私が甘い話を書いたら慣れていないせい
か思い切り甘いものしか作れないということですね。

それと今回時間軸で言うとアニメ版の小室と冴子さんが高城邸に到着した日です。アニメ版ではこの日は空白の一日となっております、話も何も無いのです。

だから今回は下手に話を進められなかったのですよ、左翼の人も行動するのは翌日です……この作品の時間軸はアニメ版に沿って構築しておりますゆえ……

ところで一つ教えて欲しいのですが、鞠川先生が大学病院から臨時で来た校医っていう設定どこに書いてましたっけ？
Wikiで乗っていましたがどうにもその情報の出所が見つけれなくて……公式ではただの校医だったのでこの作品では昔からいる設定になっておりますが、余りお気になさらず。

17話 前編

「……………え？」

目が覚めた時一番に吐いた台詞はソレだった。何故こんなことになつているのかと昨日のことを思い出し、直後羞恥心で顔が真っ赤になつた、昨日のオレは一体どうしたというのだろうか？

これは恥かしい恥かしすぎる、酔つて本音を喋りまくつたなんて目じゃないレベルで恥かしい。よ………よりにもよつてこのオレがあゝんされた挙句自分からもつと頂戴などとオネダリしただと！？

その他多々と思い出されるほどある種の幼児プレイとも言えなくともない行動と言動の数々、殺せえ、誰かオレを殺せえ！！と叫びたくなるほど恥かしい。

お………オレはノーマルだ断じてそんな趣味はねえ！！

と声高に叫びたい衝動に駆られたが今腕の中でスヤスヤと寝ている冴子を起こしてしまうわけにもいかない。

寝る直前まで確かに背中を向けていたはずなんだが………、これは寝ぼけて抱き枕と勘違いして寝返りうつたとき抱き寄せたのかもしれない。

どっちにしる最高に恥かしい状態であることに変わりはない、風呂に入った後だったので格好もまずい、オレパンイチ冴子前開いたジャ

ージ中はタンクトップ下着は洗濯中、密着状態、ベッドの上布団の中、そしてオレ起きたばかり……後はわかるな？

わあい 蛇のなまごろしってこういう意味だったんだあ でもオレのは蛇ってほどのサイズじゃないぞお ミ

パニック寸前の頭でそんなことを思いつく、まさに極限状態であった、このごろドツボに自分から嵌っていつている気がしてならない。そう言えば昨日の夕食時に兄がケータイで録画していたような気がする、後でパクって消しておかないと……

「秀治く起きてますか？入りますよ」

「ちよっ！？来んな！！」

そう思っていたら何故かタイミング良く兄がノックし返事を聞く前にドアを開けて入ってきた。

何故だ！？何故今日に限って！！そう思ったがもう遅いバツチリと見られた、今の冴子は見せたくないという独占欲に従い上体だけ少し起こして布団を被せて出ているところがないようにする。

案の定固まった、顔引き攣ってる、流石にこの状況は予想外だったのか……しかし兄さんよもし想定外だと言うのであれば……

その右手に構えられたビデオカメラは何なんだ？ケータイからやたらとグレードアップしたなオイ

演技が白々しいんだよ、知ってて突撃しに来ましたって言えば、その右手のブツが何よりもの証拠なんだよ！！

「いや、まだ結婚していないというのにお盛んですねえ……」

「オレは撮ってもかまわねえけど冴子映ってたらマジブツコロすよ？」

「これはまだ貴方が昨日のままだったら良いなと思って借りてきたものですよ、まさか知り合いの家でヤルなんて思いもしてませんでしたよ」

「ヤツテねえよ、ただ一緒に寝てもらっただけだったので、それはそうと今コイツ見たら例え兄さんでも本気で怒るからな」

ガルルと獣のように唸って威嚇する。対して兄はわかってますよとでもいうようにカメラを下ろし後ろを向いて部屋から出て行った。どうやら本当にそのつもりは無かったようだ、まあ確かに知り合いの家で事に及ぶと本気で思っただけでノコノコとカメラ持ってやってくる奴もいないだろう。いたらそいつあ変態だ
しかし結局なにしに来たのだろうか？オレに構ってられるほど暇な身分でもないだろうに。

「朝食の時間ですので呼びに来ただけですよ、起こしてあげたらどうですか？」

「なるほど、わかった。先に行ってくれ、後に行く」

「ところで仮面はどうしました？」

「外した、完全にバレたから被ってる意味も無くなったしまた被ったらコイツが怒る、兄さんも外せばいいんじゃないやねえ？前々から思ってたんだがソレ生きづらいだろ？」

「……私は貴方と違って隠すためではなく、自身を戒めるためにこの生き方を選んでいるので気にする必要はありません」

「ふう〜、我が兄ながら不器用だねえ……」

「ふ……貴方に言われたくありませんよ、貴方こそ、その道は重いですよ？」

「自ら望んで選んだ道、躊躇いもない」

「私もそういうことです」

扉の前にあつた気配が遠ざかっていく、言っていた朝食でも食べる行くのだろう。もしかしたらすでに喰った後で何かをしにいくのかもしれない。

まあ、今はそんなことより……

「で？どこから聞いてたんだ？」

「ほぼ始めからか……お義兄さんも又君のように何か隠しているのか？」

「まあ、そんな所だ、今はそれにしがみついてなけりゃ怖いっての

もあるだろうが……な」

兄が出て行ったドアを見つめて目を細める、

善人への固執、それは自己にとって悪と言える父と同じに成らないがために生まれた念であり兄の行動理念となっている。

それに対して別に否定もしなければ肯定もしない、兄の人生だ好きにすれば良い。そう思っているのは向こうも同じだろう。

オレの他人を蹴落としても生き延びようとするこのスタイルに対して何も言ってはこないのだから……似ていない兄弟に育ったもんだ、

まあオレの生き方はアイツに酷似しているからそうなるのが当然か

……

細めていた目をドアから外して伸びをして体をほくしているいる冴子を見つめる。

うん、やる気だ。今日も一日頑張ろう

「しかしつまらんな、子犬が一夜明けたら成犬になってしまった……まだ味わい足りないからもう少しの間だけでもいいからあぁしていてくれないか？」

「勘弁してくれ……そして人を犬扱いするんじゃないやありません」

おふうと息を吐いて顔に手を当て天井を見上げる、昨日のは本当にイタイ、心がなますに刻まれているぐらいイタイ。

同時にやっぱりコイツSだわ〜と実感する、オレが嫌がるのわかってて言ってるからどうしようもない。

「お手」

「……………わおん」

どう反応するべきかとかなり悩んだうえで手を引いてくれそうもないので鳴きまねと共に差し出された手の平に右手を重ねる。

こんなのにつき合うオレもオレだよなあ……………と思わないでもないが長らくボケを演じてきたせいかこんな反応が少し体に染み付いている部分がある、

早めに治療しないと物理的な意味で将来物理的な意味で首輪付きにされてしまうかもしれない……………オレはリンクスでも何でも無いのだから何とかせねば。

現に目の前のサドは「ほら犬ではないか」とケトケト笑っている、

「ハッハッハー、あんまり犬、犬言ったら狼になって食っちゃまうぞ？」

「何時でも来いと返しておくよ」

「ほづ？言っただな？」

「きゃあー!？」

ベッドの上ということをお願いことに押し倒し彼女の体の上を跨いで座り上体を動かさせないようにしてから彼女の足の付け根へとズボンに手をしのばせていく。

「本気じゃないとでも思ったか？」

残虐な笑いを意識して浮かべ残った手で彼女の顎をクイと上げて強引に視線を合わせる、ここらへんで主導権を握っておかないと後が……ってあれ？全然動じてないよこの人？え？何これ？どうなってるの？

全く想定外の反応にこちらが面食らって動きをストップさせると彼女はニイと笑って

「本気では無いとでも思ったか？」

と至極落ち着いた声で返してきた。

「それで？勿論続きはあるのだろうか？」

「負けた、降参、すいません勘弁してください」

ズボンから手を抜き去って彼女の体の上から退きベッドに寝転んで先ほどと同じノリで腹を見せて服従の姿勢をとると爆笑されて腹を

撫で回された。悔しいけど気持ちよかった。

「よっと、そろそろ飯食いに行くかね」

「ああ、笑った笑った……いつか犬耳でもつけてくれないか？きつと似合うぞ？」

「お前が兎耳でもつけてくれたら考えるよ」

「それぐらいで良いんだつたらやっても構わないが？」

昨日渡された和服（何と会長のもの、180を越える服は今のところ彼のものしか無いらしい）を着付けようとした格好そのまままで固まって冴子を見る………もしかしてまた墓穴を掘ったか？

犬耳つけてる自分を想像して背中に氷柱を入られたような怖気が奔った、絶対にやるわけにはいかない。

「はいはい、冗談はともかく着替えて飯食いに行きましょうね」

「チツ……………」

至極残念そうな舌打ちが聞こえた、マジでやらせる気だったのか？………油断ならねえ、これは美雲さんと会話してる時並みに油断できねえ………

いつの間にか墓穴を掘らされた拳句墓石と棺おけまで用意させられ

てた今となつては良い思い出が甦^トつてくる。
コイツの場合そこら辺の調節をまだ弁えていないから今度は葬式代
までオレ持ちになるかもしれないのが怖い。

彼女の成長を内心喜びつつも被害が全て自分に降り注いできそうな
予感に嫌な汗をかかざるおえない、

そんなこんなとしているうちに着付けが終わり最後に陣羽織を羽織
る。あつらえたようにピッタリだ、しかし多少動き回るのに難があ
るといのが欠点だが、出て行く予定も無いから別にいいだろう。

「ん、そつちも似合ってるねえやっぱり。流石学園一の大和撫子、
評判に偽り無しだな」

「褒めても何も出せないぞ？君こそ似合っているな馬子にも衣装と
はこのことか」

「それ褒めてねえだろ？」

袖を引っ張りつつ自分の体を見回して何処も可笑しな所が無いか確
認する、つむちゃんと着付けは出来ているようだ。

「んじゃ行きますか、皆も待ってるかもしれないねえしな」

「そつだな、行くところか」

先ほどのアレは傑作だったとかもつやらねえよとか笑い合いながら部屋を出てドアを閉める。この時はまさかあんなことになるなんて想像もしていなかった。

朝食が終わり高城から話があると言われて高城の私室へと小室パーティー全員が集められた。何を話すのやらと思いつながらバナナをパクついて食べていく。

あっ、鞠川先生がもってきた房から一本千切っていった、別にオレのモノではないが一言ぐらいあってもいいのではなからうか？

「それで〜？どついうお話〜？」

「私達がこれから先、仲間にいるかどうかよ」

「ぐぶうつふ！！」

千切ったバナナの皮をむき食べた直後に言われた言葉が意外すぎたのか鞠川先生は口に入っているものを何とも色気のない音を出して吹き出しかける、オレは別に何ともなつた、想像していなかった話題でもないからだ。

何も無かったかのように平然とバナナをパクついていたら高城から睨まれた、えつと何々？『空気ぐらい読みなさいよ』か、

少しだけ考えたあと片目を瞑って『すまん』とだけ返して食べるのを中断し真面目に話を聞く姿勢を見せる。確かに真剣な話をしていく横で平然とバナナパクついている奴が居たら話の腰も何もかもぶち壊しになるわ。

「仲間って……」

「当然だな、我々は今より大きくより結束の強い集団に合流した形になっている、つまり……」

宮本が驚いたような顔でそう呟くのに対し冴子が平然とした態度で話を続けていく。

「そう、選択肢は二つきり、呑み込まれるか……」

「別れるか……でも別れる必要なんてあるのか？」

その続きを取り持つように高城と小室が結論を出す、しかし小室は別れるという選択に納得がいかなかったのか、その必要が無いと言いつつ今の状況を生み出した高城の父親の手腕を褒めあげる。

「ええ、そうね確かにすごいわ。組織を束ねる者としての資質もア

ンタより上だし今の状況に対する対処も完璧、でもだからこそ考えないといけないことがある」

「リーダーとしての資質が高いからこそ、会長は人を正面から切り捨てることができる。」

実際にここに残らされる人と連れていく人の二つに今窓から見える人はわかれます、そして当然連れていく人は残らされる人より少ない」

扉の横にもたれかかるようにして立っていた兄がそれ言葉の意味を説明していく。小室は既に知っていたのか少しだけ顔をしかめるだけだが知らなかった人達はかなり驚いた顔をしている。

「当然連れていく人には一心会の人たちは含まれます、つまりここに残されるのは……」

「統率者と庇護者を同時に失った民衆、十中八九暴動が起きるでしょうね」

「そして奴等が集まっていづれ食い殺されます」

この平和は今しかない幻影のようなものですと兄が語り、この事を全く想定していなかった人たちを絶句させる。

今この平和は確かに良くも悪くも憂国一心会が維持しているモノであり、その中には不満を覚える人もただ純粹に感謝する人もいるが、

それを維持する一心会が無くなればどうなるだろうか？

間違いなくパニックに陥る、そしてその中でトップに立とうとしても殆ど命令伝達なんて出来ないはずだ、全員が全員好き勝手動いて最後に破滅する。

勿論ソレが分かっている会長達ではない、重々承知してはいるが自分達が生き延びるためには足手まといは切り捨て前に進んでいかなければならない。

だからココで一番に足を引っ張る連中を切り捨てて自分達の考え方を理解し従う人間だけ連れていく。賢い方法だと言えるだろう、さすがあの父親の仕事仲間をやっていない、清濁併せ呑む気概を感じさせる。

「私はソレを止めるためにここに留まって自衛隊の救助を待つことを選びました。私が彼等が行った後ついていかなかった人たちを纏める人間ということになるでしょうね」

「つまり別れるか呑まれるかっていう選択肢は、このままパパについて行くか、それともこの腹黒教師に従って救助を待つかっていうのに書きかえられるわ」

「腹黒教師とは失敬ですねえ、私は清く正しくをモットーにしていますよ？」

「良く言うわよ、やったことは私のパパよりどす黒いことだったじゃない」

「いえいえ、とんでもない。私はただ逃げ道を用意してあげただけ

でそこに最終的に逃げ込むのかは本人が決めること」

ヤレヤレとでも言いたそうに首を振る兄をジトリとした目で見つめ
ソレでもニコニコと笑っている兄に対して諦めたのか深い夕メ息を
ついて首を振る。

「えつと高城……先生は一体何をしたんだ？」

「サヨが言ってる殺人病つてのは知ってるわよね？」

「あ、ああ……」

「サヨが言ってる事全部認めて、それは素晴らしいと絶賛し、あた
かも自分達の仲間だと思わせた」

「その何処がどす黒いの？」

「問題はここからよ」

高城は昨日、兄に「扇動のやり方をお教えします」と言われてから
連れていかれた後のことを語りはじめた。

「それも一つの手ですしかし貴方が言った答えであるならば良くても40点しかあげられませんか」

「それじゃあアンタはどうするってわけ？」

「今からそれをお見せいたしますよ、私も100点の答えは持っていないのですが」

私の答えは正面から徹底論破して自分が正しいと認めさせるというものだった、別に間違っではない、今もそう思っている。

連れてこられたのは庭に数あるテントの一つ、その中には数多くの大人が集まって何やら議論を交わしていた。

「こんにちわ皆さん、少し興味深いお話を聞きましたので詳しく聞ききたのですが教えて下さいませんかでしょうか？」

そう、全てはその一言から始まった。

「自分達の命が脅かされる危険さえ省みず奴等となつてしまった人
たちを助けるために動くとは……、その意思はとても尊いものだと
思います。」

私は奴等となつてしまった教え子達を殺してやることぐらいしか頭
に浮かびませんでした、助けることなんて考えすらできませんでし
たよ……。」

「それでも貴方はここまで生徒達を連れてこれたのでしょうか？それ
はとても凄いことだと思つわ。」

「そう言つて頂ければ幸いです。」

沈痛な面持ちに自嘲するような笑みを浮かべてそう吐き捨てた浩一
にテントの中に居た恐らく中心人物であろう女性がそう言つて慰め
る、これが全て演技であるということなど考えすらしていないよう
だった。

実際それ程に間に迫つたものではあるのだ、ただの一般人にそれに
気付けということは酷というものだろう。

気付けたらそれこそ最初から知っているかその手の芝居を見
慣れているものだけだ。

「私にも手伝えることは何か有りませんか？」

「えっと……それは、ねえ……」

そう言うと気まずいのか視線を泳がせて真剣な顔をした浩一の顔を直視しないようにし始める、そこにいた他の人たちも一様に同じような反応を示す。

実の所手伝えることなど現時点では殆ど無い、現実が認められないからここを管理している人達を批判して自分達の精神の安定を計っているだけ、

何もしていなければそれこそ不安になって仕方が無い者達の集まりなのだ。

「人も金も権力も武力も無いからな……」

「ええ、そう、そういう事なのよ、今の私達にはこうやって運動を起こして人を集めることぐらいしか出来ないのよ」

「そう……ですか……」

落胆した面持ちを見せて顔を伏せる、それと同時に頭の中でどうすれば彼等を傀儡に出来るかを思索する。

この組織未満の集団を全て纏めるといっものは少しばかり骨だろう、何せただ彼等が求めているのは自己の精神の安定なのだから。

「でもきつと何時か分かってくれる人も増えるわよ！！あんな暴力でしか解決できないような人達になんて任せておけないわ！！」

その言葉が心の琴線に触れたのか高城さんが眉をギチリと寄せ何かを言おうとするがそれを睨みつけ封殺する。

今動かれて自分達の身分を晒されては作り上げた下地が全て台無しになってしまふからだ、彼女には我慢してもらおうしかない。

言っていることは一理はある、中身が伴っているとはお世辞にも言いがたいが……、

今使っている銃にしる生産体制が滅茶苦茶になっている今の日本では弾の生産も出来るかどうか分からない。

もし本当に殺人病ウイルスという馬鹿げたモノが存在するのならばその治療する薬品も作れないこともないだろう、

尤もその薬品にも限りはあるだろうが……

有りもしないものを有るとして希望を見せそれを旗印にするのも一つの手だろう、しかしこの集団にとってこのお題目はまだ嘘に過ぎない、

しかしこれが本当になるというのもまた良いといえるのではないだろうか？

そうすれば平和ボケしている人の多いこの国だからこそ人を集めることは出来るだろう、

それこそ会長のやり方よりよほど効率良く。それも職種や老若男女を問うことすらなく……

「……一理有りますね、しかし今の状況ではこれはまだ夢物語にす

「ぎませんね」

「そんなこと!!」

「話は最後まで聞いてください、だからこそ今は静かにしておいた方が得策です。」

力も権力も物資も全て今は憂国一心会の人達に管理されている状況下でこのようなことをしてもただ他の方々の反感を買うだけでしかありません」

反論を遮り淡々と現実を見せ頼まれた通り彼等がこれ以上動くことのないように釘を刺していく。

「保護された人の中には彼等に恩を感じている人達もいるのです、余り彼等を批判しては我々は孤立してしまいますよ?」

「それじゃあ私達はどうしたらいいのっていうのよ!!」

「……数日後、彼等はここから自力で脱出を図るそうです。我々が動くならばまさにその時、」

なにせその時に連れていくのは一部の人だけらしいですからね」

「なっ!?!嘘でしょう!!?っていうよりなんで貴方がそんなこと知ってるのよ!!」

「私の父がここと浅からぬ縁を持っていましたね、」

それでその息子である私がこの情報を聞くことが出来たというだけですよ別に大した事ではありません」

その言葉のもたらした衝撃は彼等にとってどれほどのものだっただろうか？

テントの中にいる人達は皆不安をあらわにした顔を見合わせて口々に何か言い出している。

「まあ、当たり前ですね。彼等の力にも限界はありますから、ただでさえ危険な外に一般人を連れて脱出するのですから足手まといは連れていくことなどしないでしよう」

「あ、貴方……どうしてそこまで冷静でいられるのよ！！これがどういうことか分かってるの！？」

私達ここに置いていかれるってことじゃない！！こんな殺人患者の蔓延つてると真ん中で！！
もしかして貴方がその一部の人だっというの！？」

「だったらオレ達も連れて行ってくれるように頼んでくれよ！！」

ソレを皮切りにして浩一に多数の声が殺到する、中には罵声まで含まれていた。その様子を冷めた目で見つめて

この情報を出しただけでこの様か……

と思う、しかたないことなのだろうがちょっとした落胆を抱かざるおえなかった、やはり人というものはそのままで綺麗な物では無いと

どうか。

「勘違いをしているようですが私は行きませんよ、ここに残ることになっていきます」

静かにしかしよく通る声でタメ息と共にそう吐き出す、こんな人達でも現状一心会を除いたら最大の集団なのだから使わない手は無い、むしろ使う以外他ない。

「え……？どう、して？」

「貴方達と同じですよ、憂国一心会のやり方が気にいらなからで
す」

これは本心だ、他の誰かを切り捨ててそれ以外を取るというやり方は必要であれやりたくはない、それに自分にはそのような真似は出来ない。

してはいけないということはないだろうがやりすぎればあの子の不審を買うことになる。

一度そうなってしまうたら関係を元に戻すのは難しいだろう、最悪敵対関係にまでなってしまう。それだけは避けなければならぬ。

「だからってここに残るなんて自殺するっていつてるようなものじゃない！！」

「自衛隊がいるではありませんか、自衛隊が来るまでここで待つというのが連いていけない場合の選択肢ですよ」

「あぁ……」

騒いでいた面々に理解の色が広がり段々と静まっていく、頭の良者が一人はいると思っではいたがこれではその期待も出来そうになり、

尤も頭の良い者がこんな現実逃避をしている集団に加わっていると考えること事態甘かったということが

「話は戻りますが、その時が我々の仲間を増やす最高の時となります恐らくあなた方は置いていかれる側に人でしょう。そしてそれはあなた方だけではありません」

「此処に残っても本当に大丈夫なの？」

「確証なんて有りません、ただ言えることは残るにせよついて行くにせよ危険性と言う面ではそう大した違いは無いということぐらいです」

「……そう」

無論の事ついていった方が危険性は少ないに決まっている、会長達も奴等の海の中を突き進むわけではない、しかし車で移動しているということは恐らく何時か車を捨てなければならぬ時が来る可能性もあるはずだ。

さて、どう転がるか……

一石は投じたのだ後々何かしら反応はあるだろう、しかしこの集団から抜けて会長達に靡くことはないはずだ、なぜなら今こうしていることこそが彼等の精神を安定させているものなのだから。

それに彼等は一つ決定的な勘違いをしているのだからこれを利用してやらない手は無い。

もし今から心を入れ替えて会長の言う生き抜く覚悟を決めるのであれば恐らく彼等は迎え入れてくれるだろう、

しかし彼等はもう自分達は置いていかれるものだと思っている。

ならばそのまま勘違いし続けてもらうのが上策、追々会長と話を合わせて彼等を連れていけないようにすれば良い。

今は嘘でも本当にしてしまえば何ら問題は起こらないのだ。

皆が皆協力し支え合う組織を作る為の基盤としてこの人達には存分に働いてもらうとしましょう。

「このことはその時が来るまで他の人達には黙っておいて下さいね、そつでなければ意味が無くなってしまいますから」

「……ええ、わかったわ確かにこんな聞かされたらパニックが起きるかもしれないわ」

「有難う御座います、それでは話を彼等が出て行った後の統治体制に変えましょうか色々と話し合って綿密に決めていきましょう、我々の命に関わっているのですから」

「そうね話し合いましよう、生き残れるかはこれから自分達がどうするかにかかっているんですものね」

どうやらこの中心人物であった女性は思ったよりは使える人材であったようだ。やはり思った通りそこそこではあるが頭の良い者はいたようだ。

完全に0の状態からこの集団を作り上げた人物が必ずいるはずだというのが当たったようだ、そしてその人物は自分の手に負えないほどの才は持っていない。

これは良い拾い物をしました

「これからの話をする前に一つ言っておきます、我々は絶対に死んではいけないと思ってください」

「何よ？そんなの当たり前じゃない」

「この先我々の双肩にその他大勢の命というものを背負わねばなりません。時として殺人病患者を殺すこともしなければならぬでしょう……」

まだ殺人病を患っていない人達を守る為に
そして我々の殺人病患者を救う薬を作り上げるといふ野望を未来叶

える為にも我々はここで死んでしまうことは許されません」

この任を負う以上責任はかなり重大だと言っても過言ではない、自分の命だけではなく他人の命まで背負わねばならないのだ、
実際は奴等を救うなどといったことはほとんど出来ないだろう、だがそれで良い。

「……ええ、解ったわ。今感染して無い人の方が大事なものね」

「英断有難う御座います、何時か我々が力を付けることができれば叶うこともあるでしょう、今はただ我慢して下さい、自分の為にして皆の為にも」

そして話を会長達が行ってしまった後の対応へと変えて彼等と話を詰めていく、

有効な案は全て自分が出し会話の主導権もほとんど握っていたので彼等も今後は自分を頼るようになるだろう。

話を終えた後テントにいる全員に礼を言って高城さんを連れて外に出る、

彼等には彼女のことは自分の自慢の生徒だと言っておいたので会長の娘だと気付くことはないはずだ、一緒に仲良くしている場面を目

撃さえされなければ。

「ところで高城さん先ほど私がやったことについてどう感じましたか？」

「最低ね、あんなのペテンと同じじゃないこの腹黒教師」

家の中に入り階段を上る前に自分の後ろについて来ている高城さんに声をかけるために振り返ってみれば
いつの間にか彼女は歩くのを止めていたのか多少距離が開いていた。

「でも効率を考えたら確かにあの手は使える、それは理解してるけど感情で納得できないわね」

「貴方はそれでいいのですよ」

嬉しそうに笑ってそう返す、この手の類の謀は好かないことが解って安心した。この手を好き好んで使う輩には碌な者がいないというのが相場だ。

「教えるためについてこさせたんじゃないの？何で笑ってるのよ」

「やはり子は親に似るものなのだという良い例を見れましたからね、好ましいですよ真っ直ぐな性質というのは」

「ちょっと、何よ急に笑い出して……」

「いえいえ、貴方が良い女だと思っただけですよクツクツクツク……」

「手を出してきたら頭吹き飛ばすわよ？」

「隣に立つ人なんて私には縁の無いものだと思っていたのですがね……」

昔も好きになった人はちゃんとした、しかし告白することなど出来るわけがなかった、告白されたときも振った……
自分の家の事情に巻き込むことなど出来るはずもないからだ。

父は利用できるものなら何でも利用する、それが何であろうと全てだ。自分の息子とその恋人を人質にしてきたのが良い証拠だ、そんな隙を父に見せるわけにはいかなかった作っただけならそれこそ人質にされ自分は利用されつくしていたらどうだろう。

故に作れない、作ることが出来ない。自分の家庭の都合で不幸にさせるくらいなら作らない方が良い、そう思って今まで生きてきた。

女性には興味が無い、

こんなものは父の目を欺く為のカモフラージュに過ぎない、このように言っておいてそして誰とも付き合わなければ周りの目にそれは真実に映る。

弟を筆頭に全ての人達を騙しとおしてきた、しかしこれからもそれ

をする必要は本当にあるのだろうか？もはや自分を縛っていた鎖は存在しない、認めるのは癩だが昔よりも今の方が遥かに自由だそしてその分怖くもある。

「そうですね、それもいいかもしれません……」

「え？何？ちよつと冗談じゃないわよ、大体アンタと私じゃ年が……」

「恋愛に年の差なんてものは微々たる問題ですよ高城さん、まあ私はロリコンではないので貴方をそういう対象にみるということはありませんよ。というより高校の教師である私がそんな目で生徒を見る事自体ありません」

嫌ですねえ勘違いしてもらってはとでも言うように両手の平を上に向け皮肉気な笑いを浮かべて首を振る。
彼女の米神に何かがビキリと浮かんだ気がしたが気のせいということにした、打てば響くという反応を返してくれるからとてもからかいがいがある。

「真顔で言うの止めなさいよ、アンタは本気が冗談なのか全く区別がつかないんだから」

「お褒めに預かり極悦至極、貴方もいずれは出来るようになりますよ、こつこつというのは経験がモノを言うものですから」

「褒めて無いわよ！！で？アンタはどんな組織を作るつもりなのかしら？」

「私が正直に答えるとは限りませんよ？もしかしたら何か企んでいる可能性もあります」

「企んでる奴がそれをいつちや世話ないわよ、ほらさっさと吐く」

「中には騙す人もいるということですよ、今回は騙す必要もないので正直に言いますがね。

全ての人が自分の成すべきことを成し協力しあえる組織を作ろうかと思っっています老若男女に差が無い組織を」

今の段階ではこれはただの夢物語に過ぎない、

しかしあの集団が掲げている奴等を救うという看板を少しずつ変えて殺人病を治す薬を作ることを目的にすればこれを叶えることも夢ではなくなる。

看板はただの看板でありさえすれば良い、それが人を集めるのに役立てば十分に叶える必要も無い。

時が経てばそのような事を考える余裕も無くなってくるはずだからだ、物資は無限にそして無期限に存在できるものではないのだから。

「呆れた、そんなただの理想じゃないのアンタが思ってるより人は賢く出来てないわよ」

「伊達に貴方より年くってませんよ、それくらい承知の上です。理想でも案外いけるかもしれませんか？今は万人共通の敵がいる、

それも身近に……なら結束せざる終えないでしょう……ところで高城さん貴方は秀治のことをどう思っていますか？」

「何よいきなり？別にどうとも思っただけだよ」

「恋愛ではなくあなた方のチームの仲間としての話ですよ、どうです？あの子は信用出来ますか？」

「出来ないわね」

「……それは何故ですか？」

即答で返された拒絶の言葉、やはりそうなのかと思い深くタメ息を吐いて理由を問いかける。

大体の見当はついていてこれはただそれが正しいかどうかを確かめるだけのものだった。

「こつちのことを信用も信頼もしてない奴をどうやって信用しろっていうのかしら？」

アイツ小室と毒島先輩、そして鞠川先生以外の人には警戒を解いてないわよ？」

「あの子は他人を一切信用しませんからね、そうではないかと思っただけなんです……やはりそうでしたか……」

「一番怖いのはあのアリスにさえ警戒してるって所ね、アイツ偶に虫でも観察するような目で見てるわよ、気付いてるのは私ぐらいだとは思っけど」

あのグループの中でアイツのことを警戒してるのは私ぐらいしかないから、と続け眼鏡を指で押し上げ腕を組む。

「それでも彼を信用してやってくれませんか、あの子は自分から裏切るような真似は絶対にしないでしょから」

「そうすればアイツから信用されるってわけ？どうだか……」

「絶対に信用してくれるようになりますよ、あの子の考え方や思想全て理解した上で信じるのならば必ずそれに答えてくれます」

秀治にとって自分の存在を完全に認められるというのはそれ程重要な要因となっている、事実彼が心を開いているのはソレを成した者達だけなのだ。

「それに今の状態だと貴方はとても危険な場所にいるんですよ、あの子も警戒されているというのには恐らく気付いているでしょう。その上でもし貴方があの子のことを危険視して仲間から外そうとしたり切り捨てようとする素振りをみせれば……恐らくあの子は貴方を殺しにかかってきます」

「ちよっ！？冗談じゃないわよ！！」

彼にとって他人などどうでもいい存在にすぎない、恐らく奴等と同

程度の価値でしかないだろう、そして彼は自分の「幸せ」を手に入れる為には手段を選ばない。

もしその目的の前に邪魔な他人がいたとすれば踏み潰して前に進んでいくだろう、強迫観念にも似た信念を軸に動いているのだから。

「だから信用してやって下さい、あの子は自分の「幸せ」の為に必要だと思った者に対してはどこまでも寛大です。

それこそ一度自分の死を願った者でさえ許す程度には」

昔あの子が攫われた時に感じたのは安堵だった、あの子が自分の意思で母親を殺したと父から聞いた後自分はその子を恐れるようになった。

無事とはいいい難かったが戻ってきた時には思ったものだ「何故そのまま死んでしまわなかったのか……」と

「……意外ね、もしかして昔は兄弟仲が良くなかったとか？」

「そうですね……むしろ家族だとはいいい難い関係ではありませんよ。長くなりますが聞きますか？彼のそして私の昔話を」

「それはアイツを理解するのに必要なことなのかしら？」

「ええ、そうですね。きつとあの時に私達兄弟というのが真の意味で始まり彼があの子かたを選んだ時ですから聞いて損は無いですよ。」

ここで話すのも何ですし移動しましょう」

場所は変わって浩一にあてがわれた部屋、浩一はベッドに座りこみそれに向かい合うように高城が椅子に座っている、そして少し間をおいてから浩一は語り始めた。

「元々私はあの子のことを弟としては見ていませんでした、彼に付き合っただけで遊んでやったのもただの同情から……それもあの子が母を殺すまでのことですがね」

「母が殺されてからはあの子と関わるのをさえ止めましたよ私はあの時あの子のことが怖かった……私も母と同じように殺すのではないかと思っただけです」

「あの子が攫われた時はホツとしたものです、これで身の危険は消えた。」

戻ってきたときはビククリしましたねえまさか生きて帰ってくるとは思っただけです」

「その時の感情が顔に出ていたのでしょね……私もあの頃はまだまだ未熟でしたから。あの子に本心を気付かれました。あの子は私に言いましたよ」

『何故誰も僕を認めようとしません！！何でこんな目にあわなくちゃいけない！！一体僕が何をしました！？』

今まで言われたとこ全て完璧にやってきたじゃないか！！なのに何で認めしてくれない！！』

「初めから僕がいなければよかったのか!? 僕が死ねば良かったのか!? なら僕は何の為に生まれたんだよ!!! ただ利用されるためだけかあ!!!」

「ただ僕は普通の家族として過ごしたいと思ったただけなのにどうしてこんな目にあわなくちゃいけない!!! それがそんなに悪いことなのか!?!」

「幸せになりたくて母さんを殺したのにこれじゃ何の意味も無いじゃないか!!! 兄さん達が僕を認めないならもういい!!!」

自分で作ってやるさ、どれだけ欲しくても手に入らなかった幸せってやつを!!! 邪魔する奴は誰であろうと全員殺してやる!!!」

ただ寂しかったんでしようね……何をしてもどれだけ凄いと云われることをしても誰も褒めてはくれない、

自分を見てくれない。私達から家族として扱われなかったからか彼は認められるということに大きなコンプレックスを抱いています。

そして自分は必要の無い存在だと心の何処かで思っている、だからこそ自分の存在を認めた者にはどこまでも甘いそこにつけこんで引き入れなさい」

「へえ、自分の弟なのに利用しろっていうの話し案外薄情だったのねアンタ……」

「貴方があの子を本心から信用しさえすればあの子も全面的な信頼を貴方に置くでしょう、

いかに無謀な策を貴方がたてようとも信じてくれます、しかしソレをしなければ貴方が消されますからね」

「それと、私は善人ではありませんよ、善人でありたいと思ってい

る悪人です……

だから私のことは完全に信頼してはいけませんよ？必要とあらば貴方達でも利用しますからね」

「アイツについてはもう分かったわ、助言通り信用して見ることにするわ。アンタの手の内で踊るっていうのも面白そうだとは思うけどね、

今回もそれなりに得るものはあったし」

少なくともあの二人との関係は持てたのだから無駄足では無かった、利用されたとしても自分達にとってマイナスにならなければ彼の手の内で踊らされるというのも又一つの選択だ。

「そう言っていただけだと心が軽くなりますよ」

「で？何であの話で今のアンタとアイツの関係が出来ているのかしら？その話だけは全く見えてこないんだけど？」

「おや？私の家庭内事情には興味が無いのでは？」

「話すなら全部話しなさいよ、ってか結局話すのに一々そう言うのは性質悪いわよ」

「ハハハ、すいません。貴方は賢すぎますからねついからかってみたくなるのですよ。今の関係を築けたのは簡単な話です、

私が父の同類であると彼から言われた時に約束したのですよ、絶対に裏切ったりしない、これからは本当の家族として過ごしていくと……」

……」

「その時はあの父と同類とされるのをプライドが許さずに出た言葉でした、

そしてそれが私の人生の転機であったと気付いてからはあの子には感謝していませんアレが無かったら私は父の同類になり下がっていたでしょうから、

それがあの子に伝わっただけの話ですよ」

元々聡明すぎると言える子だった、なら誠意をもって接すれば分からないと言う子では無い。そして何よりあの子は家族という存在に飢えていた、だからこそ自分は許されたのだと思う。

そうでなければ父共々憎まれたままだったろう、もしかしたら奴等が現れた時にどさくさにまぎれて殺されていたかもしれない。

「もう一度言いますが貴方は賢すぎる、だからこそあの子を味方につけなければいけません。

別にあの子は利用しても構いませんよ頼られるのは嫌いではないそうですから」

本当に歪なものだ、何の見返りも無しに信用し信頼してくれるほど人は綺麗な存在ではないと一番分かっているはずの子がそれを求め続けるなどは、

人は醜く汚いそれを知っているくせにそんな綺麗なものを求めるなどは、恐らく本人が一番分かっていただろうに自分がどれだけ滑稽だったのかなどとは……

「ま、何にせよアイツを信じないことには始まらないんでしょ？
なら信じぬいてやるうじゃないのアイツから裏切ることがないんだ
つたら警戒なんてする必要もないんだし」

「あまり頼りすぎると冴子さんが怒ってきますからそこら辺の匙加
減は気を付けてくださいね」

「それは怖いわね、今でさえあれだけ甘やかしてるんだから無理さ
せすぎたら相当怒ってくるでしょうね」

今朝の二人の様子を思い出してどちらともなく笑い始める、今思い
返せばアレは傑作だった。

恐らくまだあの状態が続いているだろうから夕食で一緒になった時
に録画でもして後々からかってみるのもいいかもしれない。

「話はこれで終わりですよ、後は自由にしてください。小室くんの
所に行つて愛を語るもよし家族団欒を過ごすのもよし、今の秀治を
泣かせて遊ぶのもよし」

「最後はアンタぐらいしかやらないわよ、それにそんな事したら保
護者が怒るわよ？」

「私も初めてですからねあの子のあんな姿を見るのは、構いたくな
ってしまつのですよ」

「もしかして弟とられて嫉妬してるとか？男の嫉妬は醜いだけだか
らやめたほうがいいわよ」

「そうかもしれませんね、それでも嬉しいことには変わりないんですよね」

そう言つて浩一は何の裏もない柔和な笑いを浮かべる、ここまで純粹な気持ちで笑えるのは久しぶりかもしれない。少なくともここ数ヶ月ではなかった。

「それじゃ、私は自分の部屋に帰るわ。色々と教えてくれてありがとう」

「私は貴方の教師です、貴方にはあの子と同じく私が学んだ全てを教えていくつもりですのでこれで終わりだと思つたら大間違いですよ」

「ええそうね、これから色々と教えてもらつたわよ紫藤先生。その口ぶりだと私が残つて選択するの分かつてるみたいね」

「なんとなく、でしたけどね」

「パパについていっても足手まといになるだけだしね、私は自分の身を守る力さえないから。平野に頼るのも限界があるし、それに比べてアンタの作るうとしてる組織だつたらその心配もなさそうだしこれからも宜しく願ひするわよ先生」

「こちらこそ宜しく願ひします」

椅子を立ち扉を開けて出て行く直前で此方に目だけをよこして高城はそう言っただけ話して出たのか時はすでに夕方になってる、

テントに行ったのが昼過ぎあたりであつたはずなので数時間は話し続けていたこととなる、なるほどこれは喉が渇くはずだ。

「水でも飲みにいきましょうか、できればコーヒーが飲みたいのですが……流石にそれは贅沢すぎますね、

いやしかしどうせここに置いていくものだと思えば今ぐらいしか飲めないのですし……」

ベッドから勢いをつけて立ち上がり物々とどうしようかと悩みながらドアを開け部屋を出て行く、

何処かから誰かがすすり泣く声が聞こえた気がして一瞬立ち止まりクスリと笑いを零してまた歩き始める。

「今しか飲めないならコーヒーでも淹れて鞠川先生でも誘いましよつか、教え子から後押しもされたことですし」

きつとアリスも一緒にいるだろうからシュガーとミルクそして何か甘くて腐りやすいものでも用意したらいいかもしれない、

自由にして良いと言われたのだ保存のきかない食材なら使っても構わないだろう。

今朝見た冷蔵庫の中身を思い出しながらさて何が良いかと考えながら浩一は泣き声が止むのをききながらキッチンへと去っていった。

誰に対しても誠意と真心持つて接し母性に溢れるが武人としてある
迷いを振り切ることができなかった彼女と

徹底して誰も信じず万人に対し価値は無いと考えているくせに他人
救いを求め愚直に有る筈の無いものを求め続けていた弟、

我欲の塊であつたからこそ彼女の迷いを断ち切れた彼と彼が欲して
いた有りはしないものを最初から与えていた彼女、

惹かれあつたのは必然かそれとも偶然か、それは誰も知ることは無
い。

16 / 5話（後書き）

お待たせいたしました、スランプに陥って禄なものを書けずに作っては消し作っては消しをしていた力二侍です。

ところで皆、エフルートは読みたいかー！！これ書いてる途中で思いついたんだがもし主人公が冴子さんを振ってたらっていうルート勿論理由はアレ。

この本篇と異なる部分は主人公がよりぶっ壊れてるぐらいのもんだけどねー。

あともつと感想をくれー、感想が無いと創作意欲がひもじくて死んじゃうんだー。

17話 後編

「アツハツハ！デクの棒がひのきの棒くらいには役に立つようにはなっただってか？いやいや我が兄ながらえげつない事をするねえ」

「えげつなくともこうでもしなければ足を引つ張るだけ引つ張って死ぬだけですからね、使えるようになるなら詐欺でも何でもしますよ、ほら良く言うでしょう？嘘を吐かねば仏になれぬと」

兄弟がその顔に同質の笑いを浮かべてカラカラと笑い合う、そこに爽やかさや和やかさなど微塵も存在せず似た光景で例えるならば時代劇にある越後屋とお代官様の会話でよくある光景だった。

「ハツハツハツ……さて外から聞こえる音から察するに会長が帰ってきたようですね」

外から聞こえてきた複数台の車のエンジン音を聞いて浩一が窓に向かいベランダに出て下の様子を窺う。

「……なるほど、そうきましたか。死人に鞭を打つようなやり方ですが確かに現実を見せるには効果的か……皆さん、今から会長が何かをするようなので一緒に見ませんか？」

目を鋭く細めて今中庭にある全てのモノをザッと見渡してこれから何をするのかを把握した浩一はその顔にいつもの柔らかな笑みを浮かべて振り返り部屋の中にいる全員に声をかける。

声をかけられた面々はそれぞれ顔を見合わせた後、断る理由もなかったのでその言葉に従いベランダに出てこれから下を見る。

そこには館の前に設置された台の上で声高に何かを演説している高城壮一郎の姿があった。

「この男の名は土井哲太郎！四半世紀もの間共に活動してきた我が同志であり友だ！！」

「救出活動のさなか部下を救おうとし……噛まれた！！まさに自己犠牲！人間として最も高貴な行為だ！！」

「しかし……彼はもはや人間ではないただひたすらに危険な『もの』へ成り果てた！！」

そついうと高城会長は言葉を切り腰に差した自分の愛刀である胴太貫の柄に手をやりそれを一息に抜刀し……

「さて私は誰でしょうか？」

「きゃ！！……むく浩一先生でしょ？わかったから放してよ、これじゃ何にも見えないよ」

会長が次の行動に移る前にベランダの柵にしがみ付いて中庭を見ていたアリスの目を浩一が塞ぐ、子供に見せるには少しばかりシヨッキングに過ぎる光景だと思ったからだ、
尤も彼女が自分の父親が刺されて死ぬ姿を直に見たなどとは浩一は知る由も無い。

「だからこそ私は今……我が友へ最後の友情を示す！！」

その言葉と共に檻に隔離されていた奴等となった土井哲太郎を解放し、そのまま一直線に自分に襲いかかってくる彼に大上段に構えた刀を振り下ろした。

「……中々速いな、冴子アレ避けれるか？」

「父や君よりは遅い、避けることは造作も無いな」

約二名がズレた会話をしていることについては全員がスルーし会長が次に何をするのかを真剣な雰囲気を保ちながら見守る

「さらばだ……友よ！！」

高城会長はそう呟いたあと怒声を上げて首だけになってもまだ活動を停止していない彼の頭を踏み潰した

「……これこそが我々の『いま』なのだ!!」

「素晴らしい友!!愛する家族!!恋人だった『もの』でも躊躇わずに倒さねばならない!!」

「生き残りたくば……戦え!!」

広場にいる人達は何も言わない、いや言えない。今見せられた光景がこれまでの生活から余りにかけ離れておりそして余りに『今』という現実を表しているのかを理解できるからこそ何もいうことが出来ない。

ただ誰も喋らない中庭に誰かの赤ん坊の泣き声だけが虚しく響いていた。

「刀じゃ効率が悪すぎる……」

「決めつけが過ぎるよ平野君」

「ふむ、それは刀使って戦ってるオレ等に対する挑戦かな？」

全てを見終えた後、平野がそう零した言葉に剣術馬鹿二名が過敏に

反応して食いつく。今まで剣術の腕を磨いてきたからこそ此処まで生き延びていこれた彼等にとってその言葉は見逃しがたかったのだ。

「日本刀の刃は骨に当てたら欠けますし3・4人切ったら役立たずに!！」

「言ってることは間違っちゃねえがそれは素人が扱うからこそだ、扱う人間の技量と刀の出来の良し悪しでかなり変わってくる、まあ流石に100人も連続で切って切れ味が落ちないわけじゃねえけどな」

「然り、面白いことに剣の道は乗数でな秀治が言った二つと後は精神の強固さが高いレベルで揃っていればそうそう鈍らになることはないさ」

「それに奴等相手だったら銃よりこっちの方がまだ有利に戦えるんでな、あの人等が刀を差してるのもソレが理由だろ」

顎をしゃくって一心会の面々を示す、まるで標準装備だと言わんが如く刀を帯びている人が多い、そもそもあの会長が自分の党員に不利な武器を装備させるだろうか?そんなはずはないむしろ有利だからこそ装備させているのだ。

「それに……お前でも思うことを最前線で戦ってる人達が考えなかったとも思っているわけか?」

「で……でもやっぱ刀は!！」

「ふう、わかってねえなあ。仕方が無いからオレが説明してやる
う、まあ推測だけだな」

まだ言いつのろうとする平野に肩を竦めて呆れたように首を左右に
振る、銃と刀をどちらも装備していて相手が奴等だと想定すればこ
この防衛の手順は結構見えてくるものがあつた。おそらくそれで間
違いはないだろう。

「疑問点1、何故刀なんて時代遅れの武器使つて銃という最先端で
刀よりとっても便利なものでかためないのか？まずこれから説明す
るぞつと、はいそこ！！真面目に話を聞く！！」

懐から扇子を取り出してまだアリスとじゃれあっていた兄にそれを
ピシリと向ける。アリスの目を塞いだのはいい仕事だったがそれ以
降は不要だろうに、なんでなし崩し的に肩車なんてやってる？

「こわいお兄さんもああ言ってることですし止めに行きましょうか
？」

「ええ」

「また一緒に遊んであげますからね？いい子なら我慢ですよ」

「はい」

何時の間にそこまで仲良くなった？もしかしたら餌付けが功を奏しているのかもしれない。しかし兄がそこまで入れ込む理由がどうしても理解出来ない、まさかあっち系？いやそれこそまさかだ。

「まずこの国の現時点の状況から考えてみようか、他の国もそうだが奴等に好き放題食い散らかされて産業も何もかもがストップしてる状態だと言っても過言じゃない。つまり工場が動いていない、人が居ないから奴等ならいるかもしれないが……ここまでわかるな？」

そこで言葉を切り扇子を周りにいる面々を順に向けてちゃんと理解できているかどうかを確認する。

当たり前的事すぎるがこういうものは手順を踏んだ方が論破することとは容易くなる。少々手間だがやらないよりマシだ。

「うむ結構、わかってるようだな。なら銃弾はここにあるだけで最後と思っておいたほうが良い、いつ手に入るかわからないモノに重度の期待を置くのは危ないからな。だからこの人は刀を帯びてるってことだ」

「疑問点2、何故鈍器ではないのか？」

「これは尤もな疑問だ、刀は確かに鈍器に比べたら耐久力に大きな差がある。しかしこれも一長一短でなこと一対一なら刀より鈍器の方が良い、だが多対一の状況において鈍器は余り役に立つと思わない方がいい、何故かわかる奴いるか？」

再度扇子を向け確認をとる、今回は小室が少し考え込んだ後おらずと手を上げて発言の許可を取ってきた。

「ふむ言ってみたまえ」

「衝撃が殺されるからですか？」

「大当たりだ、そこに気がつくとはやはり天才か……」

「ネタ挟んで茶化さないで下さいよ」

一言スマンと侘びを入れてから話を続ける、元々奴等は人であるからして当然背の高さも年齢それぞれ違う、なら大人と子供合わせて4人が前から半円状に襲ってきた場合どうなるだろうか？

大人に狙いを定めれば子供が下から抜けて襲ってくる、しかし子供を狙えば大人の奴等は絶対に殺せない、振り切れれば飛ばすことも出来るが……数十キロの柔らかい物体を叩いてそれ程遠くに飛ばせるだろうか？

確実に無理だと断言できる、頭や胸などを狙えばまだ無くもないが腹は違う。臓器を潰すことは出来るだろうが奴等にとってそれは効果は無いに等しい。

何せ現時点では奴等に痛覚は無いとされているのだから、腹を叩いたところですぐに復活してくるだろう。

しかしこれが刀ならどうだ？素人には無理だろうが子供の首を飛ばし奴等の胴体を輪切りにすることが出来る、つまり一対多の戦闘において相手が奴等であるならば刀とはとても有効な武器になるということに他ならない。

「そしてここは避難所と言っている場所、ここで銃なんて使えない音で奴等が寄ってくるからな。それでもあの人達が銃を持つてるのは……」

何かのトラブル、例えば二日前のオレ等みたいなことがあってワイヤーが破られて奴等が大量に入ってきた時のためだ」

ワイヤーが破られたのなら奴等は一直線にこの館を目指して歩いてくるだろう、銃はその時の連絡手段でもあるはずなのだ。目の前で奴等が入ってきている時にのん気に電話して連絡を取れるか？

いや取れないそんな余裕があるはずがない、銃とは奴等と応戦しつつも本拠地に破られたと連絡を取る為の手段なのだ、銃声を聞きつけて本拠地の人は破られた事を知り、奴等が来るまでの間に防戦の準備を整えられる。

「つまりはそう言うことだ。銃も刀もどちらも必要、欲を言えば鈍器も欲しい。刀はアレこれだ銃はアレコレだと言って騒いでる場合じゃないのさ、使えるものは全て使う生き残るためにはえり好みしている余裕なんて無いんだよ。話はこれで終わりだがわかったかね諸君」

話は終わりだと言わんが如く扇子をバツと広げ扇ぐ、先ほどから仄

かに漂う鉄の臭いが不快で仕方が無い。
そう思っていたら先ほどから俯いて何も言わなくなっていた平野が
何も言わずにこの場から去っていった、小室が呼びとめたが全く反
応する素振りすらみせずに……だ。

悪いように聞けば現時点では銃に全く価値は無いからそれしか扱え
ないお前は役立たずだと言っているように聞こえるだろう、いや寧
ろそう聞こえる様に言っていたのだから。

何でこんな事したんだろうかと思ひ扇子に染みこんでいる何かの香
の香りを堪能しながら深々と息を吸い込み吐く。

「少々言い過ぎだったのではないか？君らしくもなく随分と熱くな
っていたようだが」

「あゝ、そうだな、もしかしたら嫉妬してたのかもしれないねえ」

「嫉妬？」

「オレもまだまだガキってことだ、このチーム内で最強の戦力がオ
レじゃなく普段パツとしないデブだったことに嫉妬してたわけだ、
つたくくだらねえ」

刀と銃では距離によつては刀でも勝てるが自分でさえ5〜6M以上
離れられたら勝てる自信は無い、平野相手だったら確実に負けるだ
ろう。

この場合の勝ち負けとは殺すか殺されるかというのを指しているのは言うまでも無い。

「オレはお前を守る、だからこそ誰にも負けられない。そのためには常に最強であらねばならない最強であれば誰にも負けはしないからな……」

つと言うのにオレはショットガン装備されちゃ小室にすら勝てんそれで少し不満に感じていたところにオレが今まで磨いてきたものを否定されたら……何が可笑しい？」

「君が他者に嫉妬する姿なんて初めて見たからつい……な」

冴子はそれがさも可笑しいと言うように口を押さえてクスクスと笑っている、そんなに可笑しいことだっただろうか？

「君は自分で何でも出来る天才だと自称していたからな、そんな君が他者に嫉妬する姿を見れるなどとは思ってもしなかったよ」

「実際何でも出来たからな」

「その天才がただ一つ他者より劣っていることに対して嫉妬する、可笑しい話だとは思わないか？」

「確かにそうかもしれんな、そう自称するならそれも習得すれば良い話ってことか」

「そういうことだ」

長い溜息を吐きながら苦笑を零し扇子をたたんで懐に戻す、あそこまで凹ませたのは自分の責任だから何とかせねばなるまい、頼りなさそうに見えてもあれでいてやはりこのチーム最強なのだから。

「んじゃ、謝ってくるわ」

「私も行こう私にも責任の一端はあるからな」

「ありすも行く」

秀治と冴子が行った後を追いかけてアリスも部屋から出て行く、どうやら彼女も平野の様子が気になるようだ。そうして3人は部屋を後にしてどこかへ行ってしまった平野を探し始める。

「うん？何故にオレの服を引っ張る？」

「しゅ〜ちゃん肩車して〜」

「しゅ、しゅ〜ちゃん？」

館内に居ないことを確認し館から出て少しした後アリスが突然面白い始めた、二人は一瞬誰のことかわからなかったが、わかった途端に冴子は腹を抱えて笑い始め秀治はその顔に引き攣った笑みを浮

かべてアリスに尋ねた。

「なあアリス、昨日まで秀治ちゃんだったよな？なんで行き成りそんなあだ名になったんだ？」

「えっとね、浩一先生がそう呼んだら喜ぶって……」

兄はこんな幼い子を使ってオレをカラかって楽しいのだろうか？いや楽しいのだろうかとなりでツボに入ったのか爆笑している冴子は嬉々として呼んでくるだろう。

「……勘弁してくれ全く」

その状況になるように狙ってやったのだろうか？きつと狙ってやったのだろう、本当に勘弁して欲しいあと二人その名で自分のことを呼んできそうな輩が居る分性質が悪い。

「ねえ、しゅ、ちゃん肩車して」

アリスはアリスで相変わらず肩車をねだってくる、もうどうとでもなってしまう。

「はいはいこれで満足ですか」

仕方なく肩車をしてやり疲れた息を吐いてかぶりを振る。アリスはそれなりに喜んでるようだ、兄より背が低いとはいえ自分も身長は180以上はある見晴らしが良いということには変わりないだろう。

「ふつくくっ!! 案外似合ってるぞ、良いお父さんになれるんじゃないかしゅ〜ちゃん?」

「ああ、そう呼んでくると思ったよ畜生め……」

我が兄のことながら本当に厄介なことをしてくれたものだ、このまま定着したらどうするつもりなんだ?

恐らく良い笑顔でこう言うのだろう。「どうしましたか? しゅ〜ちゃん」と……何と言っ意味の無い嫌がらせ、何か兄の機嫌を損ねるような事をしてしまったらどうか?

頭を抱えている秀治は気付かない、自身の兄がバスの一件について表にこそ出さないもののお冠だったことに。

「ぬう……何でこんな目に会うのかサッパリわからん。オレ何かしたっけ?」

「あー!! コータちゃんだ!!」

「おっと見つけたかアリス、お手柄だなんて……あれは?」

アリスが指し示した方向に平野が居たが……どうも何やら揉め事が起こっているようだ、一心会の人に何やら凄まれている、今は一人だけのようだ……何事かとこちらに向かっできてきている人達もいる。何を言い争っているかは不明だが放っておくのは拙い、あの手の人種に凄まれて平気で居られるほど恐らく平野は精神的に強くない

「アリス、降ろすぞ。ちょっと兄さん達呼んできてくれないか？ 冴子お前も行け」

「うん、わかった」

「君はどうするんだ？」

「助けに行つてやるさ、それより早く兄さんが高城を連れて来てくれ」

「無茶はするなよ」

真剣な雰囲気を感じ取ったのかアリスは特に不満を言うことなく降りて館内に走つて行つた。

それに続いて冴子も館内へと入っていく、全員が一所にまだ留まっていたら話は簡単だがバラバラに行動してる可能性も否めない、冴子も行かせたのはそれが理由だった。

そうこうしているうちに強面の人に囲まれて旗の色が見る間に悪く
なっていく平野を助けなければ拙い、
銃器を渡すまいという素振りを見せていることからきつとソレを差
し出せとでも言われているのだろう。その理由はわからないことも
ないが迷惑なだけだ。

「ならなおさら助けないと……うし行くか」

両手で両頬を叩き気合を入れて兄をイメージした仮面を被る、強面
の人と対峙するのは随分と久しぶりだがまあ大丈夫だろう

「困りますねえ、私の仲間いらぬおせっかいをかけないで下さい
ませんか？」

そんなことを思ったあと兄と同じ笑みを顔に張りつけ口調を変えそ
う言いながら一心会の面々と平野の間に割り込んで行った。

17話 後編(後書き)

あとがき

は、やっとかけた、でもやっぱり難産。ああアイデアは浮かぶのにそれを文章に起こせないとは嘆かわしい。

冴子とアリスが全員を探し出し戻ってきたときに見たものは一心会の人達に囲まれながらも全く怯む様子すらなく舌戦を繰り広げている秀治の姿だった。

それを見てすぐに加勢にしようとしてその場に行こうとするのを浩一が止めて言った。

「もう少し様子を見てみましょう」

と

「君はそれだけの武器を持って何をするつもりなのだ？」

「決まっているでしょう、人を守る為。私も平野もその為に武器を持っているのです」

「ならなおさらそれを我々に渡しなさい、我々はここにいる全員を守るために戦っている君達が持っているよりは有効にそれを使うことが出来るはずだ」

「違うんですよねえ、貴方達の言う『人』と私達の言う『人』には決定的な違いがあるんですよ」

「何だと？」

「私達の言う『人』とはある特定個人のこと、だから武器を持って
いかれるのは困るのですよ」

そこまで言うと秀治は口元に浮かべた笑みの種類をガラリと変えど
こまでも冷え切った目で目の前に立つ人々を見つめる。

「ふざけるな！！そんな利己的な考えがこの緊急時にまかり通ると
でも思っているのか！！」

「ふざけてなどいない！！返す気の無い相手に武器を渡す者が何処
に居る！！私はここに残ることを選択した！！ただでさえ貴重であ
る銃器を持ち逃げなどされてたまるものかぁ！！」

「んだとお！？」

浮かべていた笑みを消し去り怒りの表情を浮かべ食って掛かってき
た者と睨み合う、その一触即発の雰囲気当てられたのか一心会の
数名が何か行動を起こそうとした直後

「何を騒いでいる！！」

雷鳴もかくやと言わんばかりの怒声はその場に降り注いだ。

「か、会長！？このガキ共が自分勝手な理由で銃を独り占めにしよう……」

「少年達よ名を聞こう私は高城壮一郎、憂国一心会会長だ」

「平野コータ、藤美学園2年B組出席番号32番です!!」

「覇気のあるいい声だ、ここにたどり着くまでにさぞ苦労したことだろう、君は？」

「紫藤浩一の弟、紫藤秀治と申します。貴方の話は隼人師匠から聞いたことがあります、なんでも私と同じ剛剣の使い手だとか……」

「ほう？君がああ紫藤秀治君か、先生からは面白い逸材だと聞いたことがあるな。それでどうあっても銃は渡さぬつもりか？」

「ええ、私とあなた方では守る人が違う、後ろにいる平野もそれは同じ……だからどうあっても渡すことは出来ません」

背後で銃を渡すまいときつく抱きかかえながら事の推移を見ていた平野がその言葉にブンブンと首を強く縦に振り肯定の意を示す。

「ならば聞こう君達はその力で何を守るつもりだ？」

「私が守ると決めた愛する人を」

厳しい顔付きを少し緩めそう質問してきた高城会長に息を吐くかのごとく当たり前に即断で返す、
現時点彼は目の前の人物に集中していたためすぐ傍に全員が勢ぞろいしてその言葉を聞いていたことなど全く知らない。気がついていたら口からは別の台詞が出ていただろう。

会長はその言葉に満足したのか顔をくしゃりと歪めて苦笑を漏らした後、次は君の番だと言わんが如く視線を平野へと向ける。

この子が今まで誰を守ってきたのか等は彼等の先生達との酒の席で聞いてはいたが実際に彼の口から聞いてその覚悟の強さの程を計ろうと思っただのだ。

「貴方のお嬢さんである高城沙耶さんを……！！」

吹けば消えそうなかほどか細い声ではあった、しかしその中に秘められた力強さと目がか弱い印象を裏切っている、それが彼の決意の程を十分に表していた。

「そうです、平野はこの地獄が始まってからずっと貴方のお嬢さんを守ってきました！！」

「……小室、それに皆」

「うわ……もついたのか」

平野は新しくやってきた自分の仲間にあ堵の表情を浮かべたが秀治はそれに反して思い切り苦い表情を浮かべる、自分で呼んでおいてあんまりな話であった。

「小室……なるほど君の名前には覚えがある沙耶とは長いつきあいだな」

「はい、ですがこの地獄のはじまりから沙耶……お嬢さんを守り続けて来たのは平野です」

「彼の勇敢さは私も目にしております高城会長」

「……これや絶対聞かれてたなあ、うん」

高城会長と言っではいるが顔は柔和な笑いを浮かべ自分の方を見ている、どこから聞いていたのかは知らないがあの部分はバツチり聞かれていたようだ。

そしてようやくこの場のメインヒロインのご登場らしい、真打は遅れて来るとするのは案外的を得た言葉なのかもしれない。

「アタシもよパパ！ちんちくりんのどうしようもない軍オタだけどこいつがいなければアタシは今頃連中の仲間よパパ！！」

人からも奴等からもこいつがアタシを守ってくれたの！パパじゃなくってね！！」

それを聞いて感動したのか平野が体を震わせて顔を伏せてしまった、

彼の中で今までの努力が今の一言で全て報われたのだろう。

「コイツは頼りなさそうな外見をしていますが、銃さえあれば100M先の奴等の頭でも吹き飛ばせる程の腕を持つてる私達のチームでの最高戦力です。」

それもあつて銃は渡せないんですよ、仲間をワザと足手まといにするほど私達も余裕は有りませんから」

良かったなと労わるように平野の肩を叩き会長に言う。そして平野の耳元で「足手まといだ何て言つてすまなかつたな、ちよつと嫉妬しちまつてな」と他の誰にも聞こえないような小声でボソリと言つて謝罪をすませる。

「全く人が悪いのではないですか？会長、彼等のしてきたことは全て酒の席で私達が話したでしょう？」

そう言いながらいつもの笑いを浮かべた浩一がまたもアリスを肩車し鞠川先生と共にやってくる。

「一度自分の目で確かめたくなくなつてな。話を聞くだけでは確かめられない事もある」

「それで？どうでしたか？」

「どちらも思つていたよりも強固な意志の持ち主であつた、なるほ

どこれならば屍人共が現れた時に迅速に動けるだろう」

そう言うと今話を聞いて自分の愛娘がジト目を向けてきているのも構わずに呵々大笑する。どうも自分達は会長の手の平で踊っていただけだったようだ。

「よお、もしかして聞いてたか？」

「君はああいう台詞は滅多に言ってくれないからな」

「こ……告白した時にいったじゃないか」

「そうだな、しかし君から愛しているとされたのはアレを合わせても3度も無いというのは如何なものかと思うのだが？」

「……羞恥心が邪魔をして思っても言葉に出せなんだ」

「君が想像以上にシャイで臆病なのは知っているがソレを全く言わないというのは女性として寂しいものだ」

「えつと善処しますから、許してください。ほら皆も見てるし」

両手を合わせてこれ以上の公開処刑はよしてくださいと懇願する、威厳も何もあつたものではないが今は身を焼きそうなほどの羞恥心を何とかするのが先だ。

「ハツハツハ、尻に敷かれているな秀治君、ところで件の者達の対処はどうなっている？」

「理と利を説いて頭を押さえつけているから大丈夫でしょう、彼等は愚かではありませんが馬鹿ではありませんから」

会長はそんな情けない秀治の姿を見て愉快気に笑った後浩一に視線を向けそう問いかけたのに対し浩一はその心配は無いと返す。

「流石はあの男の息子というべきかな？」

「父の教育の賜物であるということだけは否定しませんかね」

事実その手の教育を自分に施したのは父の一郎であるからして決して間違つてはいない、ただ少しだけそれに反発する感情が存在するのは否定出来ないことでもあった。

「そうか、ふむ……この後君の弟と義妹を借りても良いかね。色々話があつてな」

「それは二人に聞いてもらわないと何とも言えませんね、まあアレに入っていくのは少し憚られるのは十分理解できますが」

同時に二人へと視線を戻すせばそこには石畳の上だというのに正座させられ説教されているしゅんと頭をたらした秀治の姿があった、

その巨体が心なしに小さく見えるのが哀愁を漂わせている。

彼の仲間がソレを遠巻きに見守っている触らぬ神になんとやらだ、それに先ほど小室が止めようとしたがにべも無く断られてしまっている。その二の舞になるつもりは誰も持っていなかった。

小室が断られた時に浮かべていた秀治の希望から絶望への表情の変化を見て冴子が恍惚とした表情を浮かべたことはその時目の前にいた小室以外誰も知らない。

哀れそれを直視してしまつた彼は煤けた表情をして市場に連れて行かれる子牛を見るような目で秀治のことを見ているよく耳を澄ませば微かにドナドナの歌を口ずさんでいる。

「大体君は一人で何でもしよいこんで解決しようとする、そこが私は気に入らないのだ」

「はい、すみません……ほんと、もう勘弁して下さい」

「今回はそこまでにしてやったらどうか？騒ぎを聞きつけた人も少なくは無い。公衆の面前ですることでもないだろう？」

「えっあ……はい失礼しました。ほら秀治早く立って」

「うう、会長有難うございます……」

口で礼を言いつつポフポフと袴を叩いて土ぼこりを払う、瞬時に会長と話していた時の仮面を付けられない程度には受けた精神的ダメージ

ジは深い。

「二人ともこれから時間は空いているかね、少し話があるから付いてきてもらいたいのだが」

「わかりました、さ……行くぞ秀治」

「うん……うん？」

空気の抜けた風船のごとくしよぼくれた秀治の手を軽く引つ張つていこうとするが秀治が急に何かを感じ取ったようにハツと顔を上げキョロキョロと周りを見回して訝しげな顔をして首を傾げる。

「どうした？何かあったのか？」

「いや……何やら懐かしい気配が……」

そう尋ねるととても嫌そうな表情を浮かべて彼は答えた、その間も目は右へ左へと忙しなく何かを探している。

「ふん……まあ気のせいだろ」

「一体何があつたんだ？」

「だから懐かしい気配がただただ、あんまり気にするなオレは気

にしない」

「君がそう言うのであればいいが……」

諦めたのか目を閉じて軽く息を吐き握られていた手を強く握り返して今度は逆に冴子を引っ張って会長が入って行った館の中へと戻る。冴子は懐かしい気配と言った割りには全く嬉しそうな様子も無くむしろ何やら苛立っているような彼の様子を心配しながら手を引かれるままについて行った。

会長が案内した場所は和室だった、会長と向かい合って座り談笑を交わし合う。

「敬天愛人ですか……良い言葉ですね私には余り理解できませんが。確か……」

道というのはこの天地のおのずからなるものであり、人はこれにのっとって行うべきものであるから何よりもまず、天を敬うことを目的とすべきである。天は他人も自分も平等に愛したもつから、自分を愛する心をもって人を愛することが肝要である。という意味でしたか？」

「この言葉を知っているのか？」

掛け軸に書かれている言葉の意味を行って見せると会長は意外そうに眉根を上げ秀治を見た。

「一時本ばかり読んでいた時がありましたその時に……それで話とは？」

「ふむそうだな、これをどう見る？」

そう言つて会長は後ろにかけてあつた一本の刀を手に取り差し出す。そんな会長に秀治は目を瞑り首を振ることで自分に目利きをするとは出来ないと伝えた。

偶に師匠のコレクションを見せられることはあつたがその程度だ、事実御神刀の鑑定は全て冴子に任せていた。

「そうか、なら毒島先生の御息女はどうか？あなたはかの千葉佐那子に勝るとも劣らぬ剣士だと側聞する、

ならば……いやたとえ女であろうと剣の道に照らし恥ずべき所が無

い者ならば直に触れようと刀の穢れにはならん！」

「……………それならば私が触るわけにはいきません。私は恥ずべき所が無いとは口が裂けても言えない程穢れた者です、無礼とわかつてはいますがコレを受け取ることはできません」

刀を持った腕を動かし今度は冴子の目の前へと持ってゆきそう言う会長に対し冴子は少しばかりの沈黙を置き断った。

「あなたが穢れていると？ご謙遜をあなたが穢れているとするならば穢れていない者など何処を探しても見つかりませんまい」

苦笑を漏らしてそう言う会長に今度は秀治が口を開き答える

「私が穢した……………と言えはわかりますか？元より我々は自らの武を誇るより力を振るうことに悦びを感じてしまう者です
冴子は自分のその性癖を認められず苦しんでいたのを私が完全に引きずり込みソレを認めさせてしまった。ならばそう言われて刀をとることは出来ないでしょう」

それは剣の道に照らせば恥ずべきことだろう、しかし二人にとって余り重要な事では無かった、

秀治は元々自己防衛の為だけに剣を習い冴子は強くなると感じれるのが楽しいから剣を習い楽しくなくなれば止めようとすら思っていたのだ。

それが形を変えたのは彼等が付き合い出してからであつたがそこにも剣の道を極めるといふものではなく、初めて現れた自分と対等に戦える者に負けたくないというライバル心と一人だけ置いていかれたくないという恋心からである。

なにより「剣の道？なにそれおいしいの？」と素で言いそうな秀治と付き合つていて当時真つ白だった冴子が染められないわけがないのだ。

尤も現在は秀治の方が冴子の好みの色に染められていつている節があるが本人達は全く気付いていない。

「私は剣の道というものに価値を見出してはおりません。尊いモノだとは理解してはいますがソレに固執して弱い者となるならば私がその道を歩むことはないでしょう」

「大切な者を守る為ならば手段を厭わぬ……か、成る程浩一君が心配するわけだ」

「兄が私に関して何か言っていたのですか？」

「君は良くも悪くも真つ直ぐな気質をしている、だからこそ危うい……とな」

それを聞いて秀治は少し苦い顔をする、自覚はあるしかし止めるわけには行かないのだ。

彼は自身の幸せを得るといふただ一つの理由で動いてきた、母親を殺したのもそれが理由だ、ならばこの生き方を止めるわけにはいか

ない止めたら何の為に殺したのかわからないようになる。

「そうですか、自覚はありますので暴走はしませんよ。それより結局その刀をどうするおつもりです？まさか自慢するために我々を呼び出したのではないでしょう」

「元々コレは奴等を命がけでおびき寄せた君達への礼として用意したのだが……こうなったからにはどうするか……」

「下さるのならば有難く頂戴致しますが？それに師匠が言うには剣の道とは目指すものでなく残るものだと言っていましたね、結局の所はどの道を目指そうと剣を振る者次第だということでしょう」

「なるほどあの先生が言いそうな言葉だ、となると私の思想を無理やり押しつけるわけにもいくまい持って行け君達ならばこの剣に対し役者不足ということもないだろう」

「そこまで仰られるとなるとさぞ名のある名刀とお見受けした」

「小銃兼正村田刀が一本だ、出来の悪い後期の作ではないから安心して使うといい」

そう言って苦笑する会長から村田刀を受け取りソレを横に置く、抜き放ってみたいという衝動もあったが後でじっくりと鑑賞することは出来るだろう。

「それで？君達はこれからどうするつもりかな」

「兄の補佐をしようかと思っております。貴方達が居なくなるからには警備をする者が必要でしょう」

「毒島嬢貴女は？」

「私は彼について支えていくと決めておりますので……あとコイツの事ですからきつと御息女の身も守ってくれるはずです彼女が居なくなれば小室君やお義兄さんが悲しみますので」

「アイツがそれで塞ぎこんでしまつたら私もいい気分ではありませんから手の届く範囲ならば万難からお守りすることを誓いましょう、尤も御息女には強いボディーガードがいますから私が本当に必要なのはわかりませんが」

そう言つて冴子が微笑みながらこちらを向いたのに対し秀治は何の含みもない柔らかな笑みを浮かべてやれやれと首を振りそれに同意を示す。

「成る程、此方の言いたい事もすでにお見通しということか、不出来な我が娘だがあれは私ににて頑固でな、恐らく私達と共に脱出せずここに残ることを選ぶだろう」

「高城嬢は気が強いですからねそれにプライドも高い、なら足手纏いにしかなれないうえにお嬢様待遇しかされないであろう場所には行かないでしょう」

対して兄さんは使えるものなら実の弟でも使いますからねえ、と言
つてカラカラと笑う。ここなら特別扱いは絶対にされない、
それに恐らく兄のこと経験を積ませるために能力をフルに使えるよ
うな場を設けるに違いない。

「親子は似るとは言うが性格が百合子より私に似てしまったという
のは親として嬉しくもあり悲しくもある、
もう少し年頃の女子らしく育って欲しかったというのは親の我俣で
しかないのは分かつてはいるが」

「気の強さとプライドが邪魔をして色恋の道で苦勞してるみたいで
すよ？素直になれなくて小室に告白の一つすら出来ていないよう
ですよ」

小室の奴は知る人ぞ知るいい男だからね、とニヤニヤと人の悪い
笑みを浮かべる。

今でさえ微妙に三角関係が出来上がりかけているのだ、下手をすれ
ばこれは四角どころか五角関係にまで発展するだろう。

流星はオレ達のリーダーでありアイドルの小室、常人にはどう足掻
いても出来ないことを無自覚でやってのける、そこに痺れも憧れも
しないのはオレ自身がりあじゅうという奴だからだろう。

「ほう？意外と小室君も罪作りな男だな、彼には宮本君が居るだろ
うに」

「いや、アイツこの事件起きる前日に宮本にフラれてるから付き合
ってるかどうかは分からんぞ、もしかしたら宮本がくっついてるだ

けかもしれん。本人は満更でもないようだがな」

そう言つて眉根を上げた冴子に詳しい説明をする、本当にこれからが楽しみな奴等である。修羅場は降りかかると厄介だが傍からみている分には面白いのだ。

「幼き頃より見知っているが君達からそれほど慕われているということは小室君は思つた以上に良い少年に育つたようだな」

「ええ、数少ない私の親しい友人です」

「そして我々のリーダーでもあります」

「リーダーか……しかしあの子は未だ迷いを抱いているように見える」

そこはどう思っているのかな？と会長は穏やかな表情を引き締めてそう言つた、それに応えて秀治はニコリと笑つてこつ答えた。

「アイツはあのままでもいいんですよ、急な成長は精神を壊すだけです。ゆっくりと成長していけば良いんです」

そうして会長との話し合いは終わり冴子と共に与えられた自室へと帰り仰向けにベッドへと倒れこむ、冴子はそんな彼のダラリと投げ出された手に自分の手を重ね隣にゆっくりと座る。しばらく二人無言で過ごした後秀治に冴子は口を開いた。

「何で本当の事を言わなかったんだ？」

「何の事だ？」

「惚けるな高城会長の最後の質問の答えだ、嘘は言っていないだろうが本当のことも言っていないだろう？」

「非常時に人を率いる者は常に冷徹な判断を下せる人間でないと勤まらない、それこそ親しい者が死んだとしても眉根一つ動かさず即座に対応出来る程度の能力は欲しい」

「どうした？急に」

「これがオレの本当の最後の答えさ」

気になるなら黙って聞いてろ、と言って語り続ける

自分が言っている条件を完全に満たしている人間はとても少ない、自分の知っている人の中でもコレを満たせるのは僅か3人、父に兄そして目の前の会長ぐらいだ。

昔のオレならば余裕で条件をクリア出来ていただろうが今は無理だ、冴子が死ねば正気を保っていられる自信が無い。

「小室はコレを持っていない、そして何より甘い。元々アイツはリーダーには向いていない人間なんだろうな、アイツの母親に似て優し過ぎる

でもアイツは良いリーダーであろうと成長しようとしてる、でもその成長を一番阻んでいるのはオレだ何で分かるか？」

「いや……」

「小室が成長するのが怖いんだ、頭の何処かでは大丈夫だとわかってるんだが。アイツが他人を見捨てるようになれるのが怖い」

そして自分を切り捨てれるようになるのが怖い、だから小室をリーダーに選んだ時に押し付けるようにして嫌々でも逆らえないような場を作った。自分からでなく嫌々ならば成長もしないからだ。

選んだ理由は小室が信用出来るから、何故あの形で決定させたのかは無理やりやらされているという心理を作り出すため。

小室はこのままで良い、変わって欲しくない。変わってしまうのが

怖い。また近しい者に裏切られるのが怖い。そして裏切られた時アイツを手にかけるのが怖い。

信用したい、信用できない、信じたい、信じられない

「オレはどこまでいっても自分の為にしか行動出来ないような卑しい奴だ、そんな奴を自分の組織に何時までもいらせるか？オレなら即座に切り捨ててる」

タメ息混じりにそう吐き捨てる、秀治は自分は父と同じ汚い人間であり他人から蔑まれるような者だと思いついでいる。そして自分に余り価値が無いとも思っている。だからこそ自分の歪さに気が付けない。

「人は汚い、自分の為なら平気で人を騙せるし殺すこともある。信用しても裏切られることもある。

人ってのはそんなもんだ、だから信用出来たもんじゃない。そしてオレはそっち側の人間元々仲間として迎えられる筈がないんだよ」

父や昔の兄そして母親から人の汚さを知った、親でさえ裏切るような世界なのだそれが他人であるのなら裏切るのに何の躊躇いがあるだろうか？

「君が芝居を止めてから薄々と思っていたが歪だな君は」

「何？」

腹に力を入れて起きようとしたが胸に手を置かれそつと押し返されてまたベッドへと寝転ぶ。そして冴子は訝しげな表情をして自分の顔をみている秀治の上に跨った。

それはまるで逃がさないとも言おうかのごとく

「行き成り何だ？そんな雰囲気でも無いだろまだ昼間だぜ？で？オレの何処が歪だっていうんだ？」

「気がついていてそう言っているのかそれとも本当に気付いていないのか……どちらにせよ私がこれからすることは変わらないか」

そう言つて全く表情を動かさず石仮面の様に冷めた顔をしている秀治の顔に自身の顔を近づけ互いの吐息を感じ鼻先が触れるか触れないかというところで止まり優しく彼の頬に手を添えて確りと彼と目を合わせる。

どこまでも冷え切った琥珀色の瞳に自分の顔が映っているのが堪らなく腹立たしかった。

「君が自分を隠している時には気が付けなかったが、この4日でそれも剥がれ君という存在を直視できるようになって本当に薄々とだが違和感を感じていた

そして今確信した、君は歪だ。君は自分の為にしか行動できないと言ったな、それが既に矛盾していると何故気がつかない？」

「矛盾など無い」

「いやある、君は滅多に嘘を吐かない、それも人を傷つける類の嘘は決してな、そして裏切ることもしない。それは過去自分の親からされたからその痛みを知っているからだ、違うか？」

「違う……敵対しなければ別にそうする必要も無いからしないだけだ」

「それは裏返せば敵対するようなことをしなければ自分からは嘘も裏切りもしないということだろう？現に私は君と出会ってから今まで裏切られたことは無いぞ、それは恐らく小室くんも同じ筈だ」

「それは……あれだお前達が特別だから……」

「嘘も無く誠意を持って接する相手であれば恐らく君は誰でも受け入れる。事実君は部活の後輩達を受け入れていた」

「……………」

そこで初めて秀治の瞳が揺れる、自分の視線から逃げないように顔を背けようとするが両頬に添えられた手がそれを許すことはなく逃げるなどでも言うように顔を固定して放さない。

「それに私と私の両親を舐めてもらっては困る、これでも善人と悪人の区別ぐらいはつけることは出来る。私の父が君を認めたのだぞ」

「?そんな君が腐った人間であるはずがあるまい」

「それに君が自分の為にしか動けないのならどうしてもわからないのがバスの時のことだ、あの時君はいかにもそうするのが当然とでも言つかのごとく自分の身を犠牲にしたなそれは何故だ?」

「そ、それは兄さんの為に……」

「そうそこだ、そこが君が歪んでいる所だ、君は自分の為にしか動けないと言いなながら自分より他者を優先している。これを歪みと言わず何と言つ?」

頬に添えている手から彼の動悸が早くなっていることと暑いというわけでもないのに発汗し始めていることを感じ取る。
彼の目はもはや一所に留まることは無く冴子の目から逃げるように動き回っている。表情も今や歪みに歪みきっていた。

「そう、過去を振り返ってみても君は自分を優先していない、何時だって私やお義兄さんを優先して行動している。恐らく小室君も君が自分より優先している者の一人だろう?」

「　　ッ!?!?」

その通りだった、秀治は自分を度外視した行動を取ることがある。そしてそれは何時も自分が大事だと思つた人が絡んだ時のみだ。他人が必要ないともいうような行動と言動を取っておきながらその実一番他人を必要としている、これが紫藤秀治の歪みであった。

「君が一番君の説を裏切っている存在だというのに君は自分が汚れているとまだ言うつもりか、大体君が汚れていると言っているのは自分を傷つけたくないために作った防護柵だろう？」

便利だな……そう思いこんでさえいれば何をしたとて罪悪感に苛まれることなく手を汚すことが出来る、もし裏切られた時とてそうだ心に傷を負うことなくまず納得できる」

反論の言葉すら出せない、心を読まれているのではないかと思えるほど言葉一つ一つが的確であり真実だ。

見捨てられるのが怖い、裏切られるのが怖い、そんな思いの中出した答えが自分をどうしようもない悪人だと思い込むこと、そうそれこそ自分の知っている一番の悪人の模倣をするかのごとく。

これなら見捨てられても不思議ではない、裏切られるのが当たり前だと思つことが出来る。

同時に苛まれるのは強烈な自己嫌悪、その時とる行動に嫌悪感を抱くことは無い

しかしそれを責められようとも傷つく事の無い自分が救いようがないほどの愚物であると思ひ知らされているような気がしてならない。

そして何より心を凍てつかせる事が昔を思い出させ、悪だと思つことがどこまで行っても自分は父と同類なのだという考えを持たざる終えないようにしている。

冴子が違和感を感じると言うのは当たり前だろう、これは4日前に事が起きてから始まったことなのだから。

しかしその魔法も解かれた、見て見ぬ振りをしてようやくバランスを取っていたものが崩されたからにはもう一度それを再構成しようとしても無駄だ。

仮に再構成出来たとしてもソレは今までのよりさらに破綻したものとなっているだろう。

「見捨てられるのが怖い、必要とされなくなるのが怖い、裏切られるのが怖い」

「君は臆病だからな、でも君が心を開かない限り他者は君に心を開いてくれないぞ?」

「わかってるんだ、そんなことは……でもどうしてもその疑念だけが払えないんだよ……」

「男も女も勇気を出して踏み出さねばならない時はあるものさ、君も殻に閉じこもるのは止めにして出てきたらどうだ?きつと皆受け入れてくれる筈だ」

それに酒を飲んで酔っ払った時にはそれが出来てたではないかなら大丈夫だ。もし挫けそうになっても何時だって私が隣で支えてやる……それでは不服か?」

頬に添えられた手に自分の手を合わせて口が開くままに言葉を紡いでいくのに冴子は優しく安心させるように微笑みながら答えていく。秀治はそれを聞いて一度目を閉じて息を吐いた後、

「お前にそこまで言われちゃオレも腹括るしかない……か、情けない男で苦勞かけるな」

「ん……」

柔らかな苦笑を浮かべてそう言ったあと目の前にあった顔を引き寄せ、
せてそのまま口付けを交わす、

「クーリングオフは効かないから返品はお断りだぜ？」

「一度手中に入れたものを返すつもりは更々無いよ、君こそ扱き使つてやるから覚悟しておけ」

「おっかないねえ鬼嫁にはなつて欲しくないなあ」

クツクツと笑いあつたあと冴子は秀治の上から降りてまだベッドに寝たままの秀治に手を差し伸べ、秀治はソレを掴んで一気に立ち上がった。

「一度皆と合流しよう、これからどうするか聞かなければな」

「小室にオレは不参加ってこと伝えねえとな、アイツもあんまり期待してねえだろうが」

きつと小室はオレ達がついていけないことが分かっている。だからこそ朝から全くその話題を出すことはなかったきつと気を使っているのだろう

アイツは本当に優しすぎる奴だから……

笑いを噛み殺しながらそう言って秀治は窓の外に広がっている空を見た。

18話 (後書き)

ん、今一筆が乗り切らない。

ところで戦場のヴァルキリア3に出てくるアルフォンスって平野に似てるね

どりふたーずおぶざでっや

超番外編 どりふたーずおぶざでっや 本編の時間軸には存在
いたしません 一部キャラがぶっ壊れていますそれでもいいならレ
ッツスクロール

日常が奴らに食い荒らされてからオレ達は生き続けるために見捨て、
殺して、邪魔する者を切り捨てて、迫りくる死から逃げ続けてきた。
そう奴らを切って切って切って潰して潰して潰して切り捨てて！！
とにかく殺し続け逃げ続けて！！床主市灰野主海岸の離れ小島に辿
り着いたのであった。

「懐かしいねーここ、来るのはかなり久しぶりだなあ」

「滅多に来ませんでしたからね、別荘も埃塗れになってるでしょう」

ちなみにこの島は紫藤一郎名義のモノであり、秀治は数年前兄と共にここに泳ぎに来たことがあった。尤もその後父親からあそこには立ち入るなど言われてそれ以来来たことは無い。

「でもアンタ達がこんな島に別荘持つてて助かったわ、ここなら奴らも来られないでしょうし」

「ついに安住の地を手に入れたのねー！」

女性陣の方は大盛り上がりしている、その脇には海岸から海に出る前に有った店がかっぱらゲフツゲフツッ！！拝借した水着や着替え食料等が入った袋が転がっている。

まあ、バカンスを楽しむのもまた良いだろう、ここ最近精神が病んでしまいそうなことばかり起こってしまったのだから。

「でも確かこの島には何か裏が有った気がするんですよえ……」

父親の弱みを探しているときにこの島のことをチラリと見かけた覚えがあり何であったか？と浩一は首を捻って考え込むがどうにも出てこない。

後に浩一はこの時思い出させていればあんなことにはならなかったであろう事を大いに悔むことになる。

「まあ、思い出せないということは別に大した裏は無かったのですよ、別荘に行けば何か情報があるかもしれませんし」

未来のことなど露も知らない浩一はそこで悩むことを止め、館へと先行する秀治を追いかけるように足を進めていった。

「……これは居るな、最低でも2匹以上が」

「可笑しいですねえ……ここは紫藤家の土地なのですが……私たちが以外で非難してきた人が此処で奴らにでもなってしまったのでしょうか？」

全員を海岸に残し一応武器以外の荷物を持って二人だけで辿り着いた館は門が破られ扉が破られと見るも無残な様相を呈していた。確

実にここでも奴らと生きた人間との戦いがあったのだ。

「扉も破られている……か。中に居ると思った方が早いな」

「掃除の前に一仕事ということですか。……しかし妙ですね長年放置していたにしては思った以上に綺麗だ」

「誰かがこの家使ってたってことが、どうせ碌な輩じゃねえだろうなあ」

何せここは我らが父親の土地である、麻薬栽培しています何て言われても全く驚くことはないだろう。となると居るのは父に従っている何処かの犯罪組織かなにかだろう。

「ああ、嫌だねヤダヤダ面倒くさい」

「そうは言っても処理するしかないでしょう。まあ後々皆に知られることではありますが今は遊ばせておきましょう」

「あゝあゝ、あいつ等は全員海で遊んでるといいうのにオレ達だけ奴らの処理かっつての」

「私一人でもかまいませんが？」

「お言葉に甘えてとは言いたいものの、命の危険がある場所に兄さん一人で突っ込ませるわけにもいかんでしょ、それに奴らが居るってことはあいつ等にも危険が迫るってことに他

ならんからなあ」

背負った荷物を置き、ケタケタと笑いながら腰に差した村田刀と名もなき脇差を抜刀する。

「まあ、何だ。荒事はそれ程嫌いではないからな」

「なら行きましようか、それほど数もないとは思いますが油断はしないように後冨子さんの口調が移っていますよ」

「おおっと」

どちらも軽く準備運動をこなしてからそう軽口を叩きながら破られた門を跨いで家の中に入っていった。

「先輩達遅いなあ……荷物置きに行っただけなのに随分とかかっているけど何かあったのかな？」

「あの二人のことだから何かあっても大丈夫だとは思うが……確か

に少し時間が掛かり過ぎているな」

場所は戻って海岸組、今まで溜まった鬱憤を晴らすかの如く全員遊んでいる。高城・宮本はビーチバレー、アリス・ジーク・平野は砂の城造り、毬川先生は砂に埋もれて寝ている。そして今話してあっている小室と冴子はサーフィンをしていた。

「一度見に行ってみた方が……」

「そうした方がいいかもしれないな」

波をかき分けて浜に戻ってタオルで体を拭いていく、濡れた手まじりてや塩水に濡れた手で刀や銃器に触るわけにもいかないからだ。

「んー？どうした？武器なんか持って、奴らでもいたかい？」

「これ以上仕事が増えるのは嫌なんですけどねえ」

二人が残した足跡を辿って彼らの別荘に行こうとした直後、その二人の声が聞こえてきた。

「やけに遅かったから何かあったのかと思って迎えに行こうとしただけさ」

「何、家の設備が使えるかどうか試していただけですよ。尤も全部電磁波でやられていたのですが」

兄弟二人して無駄足だったなあと笑いあう、生活用品から見た結果恐らく家の中で殺した4匹以上居ないと見たので今他の者にこのことを知らせるつもりは二人には全くなかった。

ちなみに返り血を浴びた服は脱ぎ捨ててここに来ている、兄弟そろってブーメランというなかなか目のやり場に困る格好をしていた。

「オレはちよいとこの島を探索して食べる野草がないか探してくるよ、手持ちの食料だけじゃ何時切れるか心配になるからな」

「私は釣りでもしていきましょうか……竿は一本だけ家にありましたからね餌はルアーで何とかかなればいいんですけど」

「僕も何かできることがあるなら……」

そう申し出る小室に軽く笑いかけて別にいいよと断る秀治

そうたいして大きくは無いこの島だがそれでも迷わないというわけではない、ぶつちやけ森で彷徨われたら探すのがキツイのだ。

「火を起こす用意だけしておいて下さい、ガスも水道も使えませんでしたから、ここは自家発電で動いているのですが……どうもあれで何処かの回路が飛んでるみたいで」

修理できるものは修理しなければなりませんねえ、とため息を吐き眼鏡を中指で押し上げながら浩一はそう面倒くさそうに零す。それにわかりましたと快く小室は承諾した。

「冴子はどうする？別に遊んでもいいぞ、ここのところ色々あったからな」

「竿がもう一本あれば私もフィッシングに同行するのだが……」

「ならコレを使って下さい、私は余り釣りは得意ではないので」

こう見えても得意なんだと言って残念そうな顔をする冴子に浩一が自分の持ってきた竿を押し付けるように渡して発電機を修理して来ますと言いつつも来た道に戻っていった。

「平野は……もしこの島に奴らが居た時の為に置いていくか」

アイツ銃使うからもし何かあったとき直ぐにわかるし、と言ってアリスと砂の城……いや砂の軍事基地を作り上げている平野を見る。子どもに何を作らせているんだと思わないこともない、あ、それに気付いた高城にボールぶつけられた。

「あたりが暗くなり始めたらここに集合だなお義兄さんもそれまでには戻ってくるだろう」

「じゃ、僕枯葉集めてきます」

「おう、個々にはバーベキューセットも無いから枯れ木も頼むよ」

「わかりました」

「それでは私もそろそろ行くよ、上陸する前に見たあの崖の上なら良く釣れそうだ」

「頑張れよ、さてオレも野草探しに行くか……群生してりゃ楽なんだが……してないだろうな……」

そう言って3人は別々の方向に別れていった。

「直せませんでした……」

「野草が少ししか見つからねえ………食べるキノコなら結構あった」

数時間後、焚火を囲んで兄弟が仲良く暗い雰囲気を漂わせている中、魚の焼ける匂いがあたりを漂っていく、どうやら冴子の方は中々に成果はあったようだ。

「情けないわねえ、大の男が二人揃って」

「ハハハ………面目ない」

「気持ち悪！！はもんのやめなさい」

高城のジトリとした視線を受け一瞬だけアイコンタクトをした後兄弟二人全く同じ表情・口調・タイミングで同じセリフを吐く、使いだころが全くない役立たずの特技だが、こんな時話題を逸らす時には重宝できる。尤も相手が本気で怒っていたら挑発にしかならないが……

「にしてもこの島アジサイが多かったな、野草探して島中歩き回ったがそこもかしこもアジサイばっかだ栽培してんじやないかってほ

ど多い」

「ほう？それは夏が楽しみだな。さぞかし森も美しくなるだろう」

そうなつたら一度皆で歩き回ってみたいものだなと笑う冴子にそう
なればいいなと笑い返す。

今は森に入つたら不気味な印象を受けたが夏になったらそれも一変
するだろう、それほど多く生えていたのだ。

「……アジサイ？栽培？………ツ！？思い出しましたハイドレン
ジアです！！」

「はいどらんじゃー？」

「簡単に言えば麻薬の一種ですよ、確かこの島ではそれを栽培して
裏に流していたはず！！」

「うわー……マジで麻薬の栽培やってたし、流石は糞親父期待に答
えてくれる」

となると家で殺した奴らはその栽培と採集を担っていた者たちだ
ろう、

話についていけないのか秀治以外は呆けた顔をしているがそれが
自然な反応だろう。

いきなりこの島で麻薬栽培されました等と言われて即座について
いける方が異常だ。

「なあ小室この枯れ葉どこで拾ってきた？」

「何処つて森……ですけど」

「今すぐ火を消してください！！枯れ葉の中に含まれてる可能性……がっ！！」

そう言つて立ち上がった浩一が頭を押さえてグラリと大きく体を傾ぐ。どうやら兄の言うとおりらしい、
安心で個々の処溜まりに溜まった疲れが出たのだと思つていたが先ほどから感じる目眩はソレが原因のようだ。

「毬川先生、ハイドレンジアを吸つた時の症状は？」

「ええつと、幻覚作用と気分の高揚が引き起こされるわ」

「先輩何を暢気に水を飲んでるんです！！早く火を消さないと！！」

「あれ見たらわかると思うが……手遅れだ諦める」

ペットボトルの水を飲みながらどんな事になるのかを聞いていると小室が慌てた顔をして自分のペットボトルの水を焚火にかけていくが今や枯れ木にも燃え移り大きな炎を揺らめかすそれにはまさに焼け石に水、そして何よりもはや手遅れだ。

もう既に十分なほど煙は吸つてしまつているしその症状が出始めた者もいる。それを知らせるためにピシりと指をさした瞬間、平野が

動いた。

「Oh Year……ベトナムに平和を!! We shall
ver come!!」

どこから取り出したのか白い鉢巻を頭に巻きつけ、そう言って可笑しなダンスを踊り始める。

一体どんな幻覚を見ているのか全く想像だに出来ないが、ああは成りたくないなと段々と霧のようなものがかかっていく頭でそう考える。

「急いでここから離れるんだ皆!!」

小室がそう叫んで先導しようとするが、さっきも言った通り手遅れだ、その言葉はもう5分早めに言うべきだった、もう薬は体に回ってきている。

「秀治……体が熱いんだ……」

「薬のせいだ、今はキスだけで我慢してくれ頼むから」

あれから5分も経ってはいないが冴子が絡んできていた、顔は上気し目は潤んでいる。

はつきり言って理性が危うい自分の性欲もキスである程度発散させてはいるが、もうひと押しあつたら決壊して溢れだしてしまいそうだ。

「君は本当に意気地の無い奴だなっ!!」

「っ!?!これは幻覚これは幻覚これは幻覚これは幻覚うううう!」

そう思っていたら何を思ったのか水着を脱ぎ棄て露わとなった胸を押しつけてきた。

不味い、非常に不味いこのままでは勢いに任せて押し倒してしまいかねない、もしくは押し倒されかねない。

理性を保つためにこれは薬のせいだと自分に言い聞かせ、抱いてしまえと囁く邪心を撃退していく……いつまで持つかわかったものではないが。

しかしとても気持ちいいのは事実だ、押しつけられてる腕も生のせいかとても温かく柔らかいもので包まれているような……っと待て

こいつこんなに胸大きかったか?

可笑しい、どう考えても可笑しい、あいつは俺の腕を包めるほど胸は大きくなかったはずだ、しかし現に今はあっさりと包みこまれてしまっている。

いやな予感が頭をよぎった。

無言で掴まれた腕を振りほどき彼女？の胸を持ち上げてみる。くすぐったそうな嬌声を上げたが無視だ、先ほどから頭の中の警鐘が鳴りやまない。

重い……

思ったのはそれだけだった、いやそれだけで十分だった。一瞬の内に悟る、見た目こそ冴子だが中身は別人であると。

そして座っていた位置から考えてこの中の人は……毬川先生の筈だ。

頭から血がザザと降りていく音が聞こえてくる気がした、知られたらそれこそアウトだろう。

そう思っ慌てて周囲を見渡し兄さんと冴子が何処にいるのかを探すと……そこには兄に押し倒されている毬川先生の姿があった。

「スタアアアアアアップ！」

「ぐぐぐあー!?」

毬川先生（仮）をほったらかし一気に加速をつけ兄の背中にドロツプキックを叩き込む、手加減は一切しなかった。車に轢かれたかのように吹き飛び砂浜を兄が見事に受け身をとりながら転がっていく、それを見て少しだけやりすぎたか？とは思うが幾ら幻覚を見ていたとはいえ女を襲っていたのだから自業自得だろう、人のことは全く言えないことはわかっているがそれはまた別の問題だ。

「あ痛たたたた……いきなり何をするんですか秀治」

「何をしてるかはこっちのセリフだ糞あ……き？」

ムクリと起き上った兄？を見て思わず絶句する、あり得ない認めたくないという感情が頭の中に渦巻く余りに衝撃的な映像に頭がエラーを起こしたのか何も考えることができない。

「え……えと兄……さん？」

「何を言ってるんですか秀治？」

起き上った兄の体には……兄の体には……

「私は女でしょう？」

胸があり、股間の膨らみが全く無かった。

「う……うわあああああああああ……！」

精神が自壊を起こしてしまいそんな光景に思わず膝をつき頭を血が出るほど掻き毟る。有り得ない気持ちが悪すぎる。

「ハッ！？もしかやこれも幻覚……！」

「それはそうと駄目じゃないですか秀治、女性の体に乱暴をしては」

「ええい！！喋るな！！この未確認生物め！！きもいんだよ……！」

「これは教育が必要みたいですねえ………」

そう言うと兄？は地面に突き刺してあった小室の金属バットを手に取り……一気に接近するとそれを振りおろしてきた。それを紙一重でかわしバットを持っている手を蹴りつけバットを落とさせてから先ほど絡んできた毬川（仮）の元に投げ飛ばした。

案の定新たな獲物を見つけたとばかりに毬川（仮）に絡まれる兄？

「あぶねっ！！ってか速い！！もしかしてあれが冴子か……！」

となると先ほど押し倒されていたのが本当の兄だとして……そこに

全裸でまたがってたのが冴子？

「これも嫌だけどそっちもいやああああああ！！」

ある意味この幻覚で良かったかもしれない、そんな光景見たら一生忘れられない所かその場で発狂してしまいかねない。

近くにあった丁度いい木まで走り寄りソレを両手でつかみ思い切り頭を振りかぶってからぶつけて想像してしまった映像をかき消す。

頭から血が出たがあんなものを引きずるよりはるかにマシだ

NTR耐性なんて持っていないのである。手を離れた瞬間何か倒れた音が聞こえたがそれを気にすることなく未だに倒れている毬川先生を助け起こす。

やはり胸の感触が無い、そして自分より背が高いのを見るにこれが兄さんで正解なのだろう。

そう思っていたら……何故か思い切り手首を捻り上げられ砂浜に叩きつけられ頭を踏みぬかれた。

「ぐつつおおお……な、なんで？」

「……………」

その言葉に何も言葉を返すことなく、まだ死なないのかと今度は首

を狙って足を振り下ろす兄（仮）

それを紙一重で避けて足払いをかけてバランスを崩し取られた間接を力任せに振りほどこうとするが……

あっさりとその力を利用して再度投げ飛ばされ今度は海に落とされた。もしかすると兄も幻覚で自分を秀治であると認識していないのかもしれない。

「ゲホツゲホツ……ハハ……上等おー！」

とはいえ此処までやられて黙っていられるほど温厚な性格はしていない。

「ボッコボッコにしてやんよおおおおお！！糞兄貴iiiiiiiiiiii
！！！」

そう言って両手で濡れた髪を全て後ろにかきあげ、右手を振り上げゆっくりとこちらに歩いてきていた兄（仮）に向かい走って行った

翌朝

そこには朝日を見てたそがれる5人の男女と地面に倒れ伏す3人の男の姿があった。

右から平野、宮本、高城、毬川、冴子の順でならば「あれは幻覚のせい、あれは幻覚のせい」とブツブツと呟いている。

地面に倒れ伏しているのは秀治とその兄である浩一、そして何故か小室が額から血を流して気絶していた。

「一晩中……暴れてた……から……流石に体力……切れだ」

「なるほど……すみません……手間をかけた……みたい……ですね」

聞けば兄は自分のことを父親が送り込んだ刺客だと認識していたらしい、手加減がないわけだ。

「でも可笑しいわねえ……私最初から毒島さんを相手にしてたかし

ら？」

体育座りでそう呟き始めた毬川先生の言葉を聞いて秀治の顔から血の気が失せ始める。

「毬川校医もですか？実は私も途中で相手がすり替わった記憶が……」

嫌な汗がダラダラと流れ始める、よもや最初に毬川先生を相手にしてたのはオレで冴子が最初に押し倒していたのは兄ですなどと言えるはずもない。

兄さんにもある程度は（間違えて毬川先生にキスしたというのは省いた）説明はしてしまったから兄も兄で顔から少し血の気が失せている。

「そう言えば何でアンタ達殴り合いなんてしてたわけ？」

自己嫌悪から復活してきたのか最初に正気に返った高城がそう息も絶え絶えに倒れ伏している二人に聞く、
兄弟にとってはそれが話題を変える絶好のチャンスだと感じ一瞬だけお互いに目を合わせてから

「何……愚弟（兄さん）に……菊を……散らされ……そうにな……
なった……だけです（だ）」

二人して清水の舞台から飛び降りてその場の空気を一気に凍らせ話題を持っていくことを選んだ。

この事は後に触れてはならない禁断の記憶として扱われる、頭に強い衝撃を受けその夜の事を全く覚えていない小室と先に疲れて寝てしまっていたアリスのことを全員が羨ましく思ったか思っていないとか……

終われ

どりふたーずおぶぞでっど（後書き）

いや遅れて申し訳ない、ちよつとこの番外編のネタを練るのに苦戦
いたしました……初め練った時には18Rになつてしまひまして……
ここまでギャグに持つていくのは結構難しいことでした。ちなみに
DVDの方でもそうですがアリスが空気です。

19話 完全版

「おお？もう行くのか？一言も無しつてのは水臭いんじゃないか？」

荷物と平野から返してもらった散弾銃を背負った小室が宮本や高城達といたのを見てそう声をかけて冴子と一緒に近づいていく。

「ああ先輩、はいそろそろ出発しようと思って、いつまでも此処でゆっくりしてられないし」

「そうか、しっかし荷物が多いな大丈夫か？」

「これはバスに積み込む荷物です」

「バス？運転できるのかお前？」

「いやあ僕じゃないですよ、紫藤先生が警察に救助要請するついで一緒に来てくれるってことになったんですけど……もしかしてまだ聞いてなかったんですか？」

「兄さんが？いや全く聞いてないな」

確かに警察やそれに類する組織への救助要請は必要だ、こればかりはやっておかなければ最悪ここに生きた人間が多数いるということに気付くことなく放置されるだろう。

「最初に一緒に行きましようかって言われたときは僕がやりまస్తుて言っただんですけど……宮本への罪滅ぼしとかあと僕の母さんのことと出されて丸め込まれて……」

何故か小室の母親のことを良く知っていた浩一が「貴方の母親は迎えにいつても一人だけしか連れて行けなかったらついてこないでしよう?」と言っただのが止めだった。

恐らく自分の生徒と一緒にいる母親のことだ、きつと紫藤先生の言うとおり自分一人だけ逃げるような真似はしないだろうと簡単に想像出来たので、

バスという多数の人を運べる手段を提供でき、それを運転できる彼の申し出を断ることができなくなったのだ。

「弁論術でお前が兄さんに敵うとは思えんから仕方ないだろ、まあ頑張れ此処でお前の武勇伝を聞くのを楽しみにしてるよ」

「色々と苦勞も多いだろうが、お義兄さんをよろしく頼む」

「あははは、苦勞するのは紫藤先生な気のような気もするけど僕なりに頑張りますよ」

死線に行くと言っにしては軽い雰囲気、下手をしたら今生の別れとなることはどちらにも分かっている、しかしそれを表に出すようなことは誰もしない。

最初から悲觀的になっていたらこの世界で生きるなんてことは不可

能だ、程々に気楽に生きる、これが一番自分たちの精神に負担を
かけずに生きぬく術だった。

「アンタ達は行かないのね」

「メリットが無い、流石に失うかも知れない物があって得る物は無
い話だからな行く理由が無いさ」

「つまり理由を作れたら一緒に行ってやるってこと？どこのツンデ
レよアンタ」

「……………確かにツン期を越えたらデレデレになるという性質はあ
るから否定はせん、しかしお前にだけは言われたくないな
というよりなんでツンデレって言う言葉知ってやがる？お前確か前
もネトゲのシーフだとか言ってたよなもしかしてお前……………」

小室と一緒にいた高城がそう言ってきたのに対して疑問に思ってい
たことをつい口に出してしまっ、
しかしそれも仕方なきことだろう平野に対してオタオタ言ってる奴
が実はオタだったというのかもしれないのだ食いつかずにいられる
だろうか？いや居られない

「そ……………そんなわけないでしょう！！私は……………ほらアレよ友達とか
……………少なかつたから、その……………ゲームとか……………もちろんそれ以上に
専門書とか読んでたわよ！！」

何ということだろうか、まさに語るに落ちるとはこのことか？しかし彼女は盛大に自爆したということには全く気がついていない、少しだけそつとしておいてやるべきか慰めてやるべきか、それともからかい倒すべきか選択に悩んだ

「大丈夫、オレも冴子も軽度にはオタが入ってるから別に恥じ入ることじゃないんだよ？」

とりあえず慰めることを選ぶ、可哀想だなんて思ったわけではない。こうする方が高城にとって効くだろうと思ったからだ。悪意100%である。

ちなみにここでのオタとは剣術オタというのも含むが秀治に至ってはゲーオタ、冴子に至ってはあれで結構な漫画好きだという一面があるということだ。

学園時代良く漫画を貸したものだ、最初にこれ面白いから読んでみと言ってその道に引き摺りこんだのは自分ではあるが、じよじよに染まっていくのを見るのは中々面白いものであった。

「だから違っつていってんでしょが！！やめなさいよその生暖かい眼でこっちを見るのー！！」

「大丈夫、お前がたとえネラーでもニコ厨でもきつと皆暖かく迎えてくれるぞ」

「私をキモオタ共と一緒にするなー！！！！」

まさに叩けば響く、素晴らしい速度の突っ込みだ。しかしからかう目的で慰めてるのがわかっていられるらしく本気で怒ってきたのでそろそろ止めにしておいた方が身の為だろう。

「……………そう言えば私達が共に風呂に入った際又ルイエロゲがどうこうと言ってなかったか？」

「ぐっ!？」

と思っていたら意外な所から追撃が入る、しかも今までオレがしていたのをボクシングというジャブだとするとこれは右ストレートだ。シヤレになっていない

ああ哀れまだツンデレという言葉程度なら軽症でありまだ小室にも誤魔化しが効いただろうが、これはもはやフォローも効かないレベルだ。

ああまさか慕っている男の目の前で自分がオタク側の人間であると暴露されるとはなんと哀れなことか……………こういう手加減がまだ出来ないから冴子は怖いのだ。

焦った顔で何か言い訳を探している彼女をどうするべきだろうか？弄くる？ダメだもう高城のMPはゼロだ、これ以上掘り下げて弄くったら彼女の心が折れてしまいそうだ。

慰める？これもプライドの高い高城相手では逆効果、頭がプッチンプリンになるはずだ。

話を逸らすか？いやあらかさまな路線変更もダメだろう……………ならどうする？

これ以上墓穴を掘らされた挙句葬式代まで持たせるのは流石に忍びない、人の恋路は弄くるのはともかく邪魔をするものではないのだ………仕方ない一肌脱ぐしかあるまい

「ふむ!!これは面白いな!良し!!皆にも教えてこよう!!」

「ちょ!?!止めなさいよ!!コラ待て!!行かせるわけないでしょうが!!小室コレ借りるわよ!!」

「ははははは!!!!つかまえてごらんさ!!!!」

そう叫びながら追いつけないこともない速度で館に向って走り出す、無論そんなことをするつもりは一切無い、ただ高城のストレス発散とこれ以上精神にダメージを与えない方法はパツと思いつく限りこれぐらいしかなかった。

しかし……般若の顔をして金属バット持って追いかけられるのは流石に許して欲しい

「ハハハ、本当に騒がしいものだな」

「でも静かにしてる先輩ってのも中々想像がつきませんね」

「あれでも昔は寡黙な子だったんですけどねえ」

「どわあ！…！」

「……気配を消して後ろに立つのは余りいい趣味とは言えませんよ？浩一お義兄さん」

いつの間にか真後ろに立っていた浩一にそれぞれ違った反応を返す。

「普通に浩一さんでいいですよ？それにしてもあの子があそこまで明るくなるなんて思ってもいませんでした、あなた達二人には本当に感謝しきれません」

「毒島先輩……秀治先輩ってそれほど暗かったんですか？」

「暗かったとは聞いているが、私が初めて会った時はすでに君がよく知っている奴の姿だったな、尤もあれは演技だったと最近自白したが」

そう言いながら高城に追い回されている自分の弟を温かい目で見守る浩一を尻目に喋ることすら稀だったころの秀治の姿を知らない二人は頭を寄せ合ってひそひそと話し合う。

「えと、僕は別に何もした覚えは無いんですけど……」

「あの子の友人であった、ただそれだけで十分です。気の合う仲間

と一緒に馬鹿やって騒ぐのがどれほど楽しいことかあの子は知りませんでしたから

湿っぽい話はここまでにして、小室君準備は出来ましたか？」

「あゝ、金属バットを高城に持っていていかれました」

「ふむ……仕方ありませんね、あの様子ではしばらく戻ってこないでしょうから私の木刀を使いなさい、どうせバスから降りることなんてほとんどありませんし、

何かあっても私と宮本さんがいるから大丈夫でしょう、さて早くいきますよ宮本さんがバスに乗って待っています」

機嫌が良さそうに笑いながらそう言ってバスを停めているのである場所へと背を向けて浩一が歩きだしていく、どうやら別れの挨拶をするつもりはないらしい。

「それじゃ行つてきます冴子さん」

「ああ武運を祈る私も君の話を楽しみにしているよ」

爽やかな笑いを浮かべて敬礼のような真似をしたのに苦笑を溢しながら軽く手を振って見送る、その直後遠くから秀治の叫び声が聞こえてきたような気がした。

「よぉ〜やく捕まえたわよ」

「……………バット投げるのは無しだと思っただよ天才オタク少女」

「オタクと言うなオタクと！！それよりいいわけ？アンタのお兄さんいっちゃんわよ」

「今まで散々追い回してた癖に何を言うか、別にい〜よ兄さんはオレの言うだろ〜ことぐらいいは分かってるだろ〜し……………それより足をどけてくださいませぬか？」

「絶対対に嫌」

まさか家の中でバットを投げてくるとは思っていなかった秀治は足を狙って投げられたソレに思い切り足を絡めとられ無様に転んでしまい起き上がれないように背中を踏みつけられていた。

実際は起き上がることなど容易いことなのだが、それをしたらさらに油を注ぐことになるであろうことは確かだここは大人しく捕まっていた方がいいだろう。

「いや踏むにしても少しだけずらしてくれんか？ちようどそこに傷口があるから痛いんだよ」

もうそろそろ治りかけているとはいえ数日前に爆発に巻き込まれか

けて負った擦過傷と火傷はそこに依然として残っているのだ。
心配させないために殆ど気にしていないように行動して、ようやく
気にもならない程度にはなったが流石にその部分を押さえつけられ
るのは痛い。

「……………じゃあどこが痛いってのよ？」

「ん〜？もうちよっとな」

「にににらんかしら？」

「そこそこ、いいね気持ちいいよ」

「マッサージさせてんじやないわよ！！」

「げふう！！」

思い切り背中を踏み抜かれて肺から空気が漏れ出てしまう、手加減
しているのか余り痛くは無かったそしてそう言った後グニグニと緩
急つけて踏んでくれるのも彼女の優しさというやつだろう

「ん〜？怒ってないのな」

「アンタが本気でしようとしてたら私も怒ったでしょうけど…………私
の鬱憤を晴らすためにピエロ演じたんだったらそりゃ怒る気も失せ
るわよ」

「あら……気付かれてたか」

「アンタが本気で逃げてたら私がバット投げたところで追いつけるわけないでしょうが」

「まあそりゃそうか……」

つまり本気で逃げていたらバットが足元でなく頭に向かって飛んできた可能性があったということか……くわばらくわばら。

「あゝ……しゅくちゃんにさやちゃん何してるの？」

「しゅくちゃん？」

「げ……」

廊下の騒ぎを聞きつけたのかアリスがててとこちらに向かってきていた、どうやら今はジークと遊んでいたらしくジークがフンフンと鼻を鳴らしながらついて来ていた。

しかし聞かれたくない相手に聞かれてしまったものだ、

「なあ……高城よ」

「あら？なにかしらしゅくちゃん？」

「ちっ……やっぱりか」

知ったらそのあだ名で呼んでくるだろう4人のうちの一人……とい
うよりぶっちゃけ女性陣全員そのあだ名で呼んでくるだろうから嫌
になる。

「ねえ、さやちゃん何してるの？」

「……お姉さまと呼びなさいと言ってるでしょうが」

「いふあいよさやふあんはなひて」

アリスの頬を引っ張るのはいい、引っ張るのはいいが……オレを下
敷きにしてするのはやめて欲しい、
まさかこの状態でアリスにスカートの中が見えるからさっさとドケ
なんて言えようか？言える筈もない変態扱いされるのが目に見えて
いる。

ただ床に顔を押し付けて目を瞑り上を見ないようにするぐらいしか
出来ることはない。

「それで何してるの？」

「そうね……踏んであげたらコイツが喜んだからそのまま踏んであ
げてるってところかしら？」

「そっなのしゅーちゃん？」

何てことを子供に言ってくれるのだろうか？勘違いしたらどうしてくれる、痛めつけられて快感を感じる変態ではないんだぞ。とはいえアリスがそんな事を知っているはずが無いか……

「ん？まあ肩とか凝ってるからねえ、少しぐらい重い程度なら気持ちいいぐらいなんだよねえ」

これは一種のマッサージなんだよと差し障りの無い答えを返して納得させておく、兄が帰ってきたとき変な言葉教えられたとか言われたら本気で怒ってきそうだ。

まあ変な言葉を教えたなら今この場で容赦なくバットが頭に振ってくだるだろうことは容易く想像はつく。

「アリスもやっていい？」

「いいぞ」

そうやってきたのに軽い気持ちで許可を出す、しかしそれが間違이었다……

「ひっ！？お、おい！！ジーク止めっ！！ひっ！？」

地面に寝そべっていた秀治の耳をジークが甘噛みしたりなめ始めた

のだ、それと共に背中にゾクゾクと走る感覚に耐え切れず逃げようとして寝返りをうつ。

自分の性感帯が耳だと初めて知った瞬間である、別に知りたくも無かったことではあったが……。

「あ？」

「ちょっといきなり動かないでよって……ああ!？」

しかしいきなり仰向けになったせいで丸見えだった、何がとは言わない。アリスは気がついてないようだが、タイミングが悪かったと不可抗力だとかしかなえない。

性的興奮を感じていないのが唯一の救いだろうか？まあそんなもの感じていたら自分自身に絶望していたに違いないが。

「目を閉じなさいよこの変態!！」

まあ、何とかやってしまったことはやってしまったことなので振り下ろされようとす踵ぐらひは素直に受けておこうと思う、しかし……

「黒のレースとかティーバックみたいな大人っぽい奴じゃないんだな……あ、しまっ!？」

「はあ？何いつて…… ツ!？死になさい!！」

やっぱり冴子が可笑しいんだな〜と思った秀治が思わず咳いてしまった言葉を聞いた高城は一瞬頭に？マークを浮かべた後
顔を恥辱で真っ赤にして秀治の顔を思い切り踏みつけようと足を振り下ろそうとした時

空が光った……

「……………今の何だと思う？」

「情報が全くないからわからないけど……………碌なものじゃなさそうね」

「さやちゃんさやちゃん今のなあに？」

空は数秒間光り続けそれが収まった後、秀治と高城は厳しい目で窓の外に広がる何事も無かったかのような青空を見上げる。

アリスも幼いながら何か嫌なことが起こった事を理解しているのか不安気な顔をして高城の服の裾をクイクイと引っ張っている。

「アリス良い子だから鞠川先生の所に行ってくれ、ちょっとお兄さん達は急用が出来た」

「う、うんわかった……」

「良い子だ、遊んでやれなかった俺びに今度何でも一つだけ言う事を聞いてやるからな」

うまく出来ているかどうかわからないが安心させられるように柔らかい笑顔を浮かべてクシャクシャとアリスの頭を撫でる。

冴子相手にこの約束をするのはただの自殺志願だが……多分この子相手だったら大丈夫だろう、無茶苦茶なことを言い出したりはしないはずだ。

自分でもらしくないことをしているとわかってはいるが不安がつているままに放り出してしまっわけにもいかない。

何故かは知らないがやたらと懐かれている今となってはそうするのは憚られた。

「へえ、意外に優しい所あるんじゃない、一体どういふ風の吹きまわしかしら？」

絶対だよ」と言いながら走り去るアリスを見送ると笑いを噛み殺しながらそう言う高城

「茶化すな、オレも柄じゃないのは自覚してる。で？ 何かわかったのか」

「そうね、あの光のあと電気が消えたってことぐらいかしら。あと詳しくはわからないけど中庭でもちよっと騒ぎになってるみたい」

それに対し苦い顔をして秀治が話を変えるべくそう切り出すと高城は顔を引き締め淡々と現状で確認出来ている事実を述べていく。

「そこらの切り替えは流石だな伊達に兄さんに気に入られてないってことか」

「私を誰だと思ってるわけ？ これぐらい出来なくて何が天才よ。アンタも何時までも転がってないでさっさといくわよ」

床に転がっているバットを手に取りそれを杖のように扱いスクリと立ち上がる。

そしてその軽口に対してフフンとでも言うようにメガネをクイと上げて軽く胸を張ったあと、

そう言ったきり先に行ってしまった高城を追いかけるように、自身も速足で玄関へと急いで行った。

「なるほど、あの光があつてから彼方此方で電子機器が故障してるらしいな」

「一応聞いとくけど、アンタあれが何だったかわかる？」

「やってて良かったCOD。えっと、確か……高高度核爆発だった？ 英語の名称は忘れた」

「High altitude nuclear explosion、略してHANE。アンタも天才名乗るならこれくらい覚えておきなさい」

流暢な発音で言われたその言葉に、あゝ確かそんな名称だったな、と相槌をうつたあと、ふと何で高城がコレのことを知ってたのかを聞きたくなつたがその好奇心を押し殺す。

今はそれをしていない場合ではないし、別に不都合があるわけでもない。ただ天才がどうだとかそういうのとは全く関係がないだけだ。

「しかし、そうだとすると拙いな……。車使えなくなるはずだから……く……る、ま？」

厄介な事が起きたと思って、そう呟いた自身の言葉に先ほど見送った小室を思いだす。

最後にアイツは何を言っていた？

母親を助けに行くと……

何を使って？

学校のバスを……

誰の運転で？

「ちょっと！？ いきなり何処行くのよ！？」

突然走りだしたオレに高城が驚いた声をあげたが、それに答えている余裕は無かった。

バスの姿を求めて視線を彼方此方と彷徨わせ昨日まで停めてあった場所まで走る。

まだそこに有ってほしいと願いながら走った、玄関から見た中庭には見慣れたあの遠征用のバスは無かった。

つまりその意味するのは、まだそこに有るか、すでにこの館から出発して少なくとも窓から見えない場所にまで行ってしまったという事他ならないからだ。

しかし昨日まで停めてあった場所に……バスは無かった。

舌打ちをした後、全力で正門へと駆ける。まだ時間も余り経っていないのだから、まだそう遠くには行ける筈もないので大丈夫だろうという思いは有った……

しかしなぜか胸騒ぎがおさまらない。それどころか最悪の予感ばかり

りが浮かんで、それ程走つてもいないというのに心臓が暴れる、息が乱れる。

正門に辿り着いた時、曲がり角から小室と宮本が息を切らして走り出てくるのが見えた。

しかしそこには兄の姿は無い。

「小室！ー！ 兄さんは！？」

「ぜっ……はあ……し、紫藤先生は……。んぐ、紫藤先生が囿に！」

「囿！？ 何があつた！？ 言え！ー！」

「グア！？ 先輩ツ！？ 苦し ツ！？？」

「孝！？ ちょっと、やめな……さいよ！ー！」

全力で走ってきたのか、息も絶え絶えな小室の胸倉を掴んで吊り上げて揺さぶる。それを見た宮本が肩で息をしながら止めるように叫んだ。

「少しは落ち着け、それでは小室君もまともに話せないだろう」

「冴子？ どうしてお前が？」

「どうしたもこうしたも……君が血相を変えて走っていたから、気

になっただけさ。それで？ 小室君、一体君たちが出た後何があった？ 罔とは一体どういうことだ？」

走ってきたのか少しだけ呼吸のあがった冴子が小室を揺さぶっていた腕を握り締めて手を離させる。

吊り上げられていた小室は道路に四つん這いになって、咳き込みながら酸素を取り込もうと息を荒げていた。

「ゲホッ！ 高城…会長も呼んで下さい、バリケードが壊れて奴らが……」

そこまで聞いて即座に小室達が現れた曲がり角に躍り出て、バリケードが張られていた坂の下を見る。

確かにバリケードが内側から破られていた。恐らく、ブレーキの利かなくなったバスがバリケードに衝突したのだろう。

しかし破られているというのに、奴らは坂の下で群れているばかりで登ろうとしてきてはいない。

それは何故か？ 簡単な話だ。

まだそこに獲物がいるからに他ならない。そしてその獲物は、奴らに群がられ囲まれたバスの天井に座り込んでいる兄だった。

叫びそうになった自分の口を咄嗟に手で塞いだ。目はどうしてこんなことになったのかという理由を捜し求めるように泳ぐ。頭の中はぐちゃぐちゃで何も思考が纏まらない。

「なんで……なんでだ。何でこんなことになった？」

ぶつぶつと殆ど聞き取れないほどの小さな声で言っても意味もないことを呟きながら、フラリと今にも倒れこみそうなほど覚束ない足取りで次第に人が集まってきた正門へと戻る。

そんな秀治を見るに見かねたのか歩いてついてきていた冴子が痛ましいものを見るような顔で何も言わずただ肩をかした。

「助けないと……でもどうやって？」

「秀治。シヨックなのは痛いほどわかる。だがしつかりしてくれ、そうでないと……秀治？」

「正面から行ったら？ いや駄目だ、喰われるだけで終わる。車も今は使えない……ならどうする？」

「秀治？ 聞こえてないのか？」

「そうだ………いつそのこと巻き込んでしまえば。うん？ ああ、冴子か………すまんが今は相手をしてる暇が無い。少しやることが出来たからな」

「　　ッ！？　　ちよつと来い！」

やっと自分に気づいて顔を上げた秀治の目に不穏な色が灯っているのを見た冴子は肩をかしたまま人気の少ない場所に無理やり引っ張

っていく。

「なあ、冴子離してくれないか？ オレは兄さんを助けないと……」

「聞くが、それはどんな策を弄するつもりだ？」

「決まってるだろ？ 奴らは音に反応する。ここにある車の一台や二台、爆破してやればそれで十分……それで奴らはあそこから離れる。違うか？」

余りにも馬鹿げたことを言い出したため、性質の悪い冗談かと思いき秀治の眼をジッと見つめるが……その眼には何時もの悪戯めいた光は無い。

ただ目に危険な光……そう、例えるならあのガソリンスタンドで出会った男と同じ光があるだけだ。

「違う……が、そんな真似が許されるはずがないだろう？ 正気に戻れ秀治。仮に実行したとしても、奴らが全てバスから離れるわけではない。」

それに、浩一さんが身を張って私たちを守ったというのにそれを無駄にするつもりか？」

「ハ……ハ……ハハハ。知らねえよ……兄さんが望んだ事を台無しにする方が、失うよりましだ」

「頼むから正気に戻ってくれ！ 君がそれをした所で、失うものはあっても何も得るものはないと何故わからない！」

泣きそうな顔でそう言ってくる冴子を見て胸が痛んだ。しかしここで退くつもりは無い。ここにいる人は皆、兄さんを助けるはずが無いからだ。

十中八九、会長達は奴らの足止めのために兄さんをあそこに留めておく。その他の人たちもそれに倣うだろう、誰だって命は惜しい。だから助けないといけないんだ、オレが。何を犠牲に払おうとも……助けなければいけないんだ……。

「わかつてる！　これで助けられる確立なんて低いことぐらいわかつてる！　でもそれ以外の手でどうやって助けられる？　今じゃ車も使えない！　真正面から奴らに飛び込めとでも！？」

「それで君が正気に戻ってくれるのならば！　私はそれでも構わない。たとえその先に死しかなくとも君とともに……往こう」

「ああそうかい！　勝手に決死の覚悟でも何でも決めてやがれ！　どちらにせよオレがやることは変わらない！」

最後は当り散らすように口から唾を飛ばしながらそう怒鳴り、掴まれていた腕を振り払って正門へと歩いていく。この時どうやって実行するか、算段を考えていた秀治は冴子に全く気を割いていなかった。

「許せッ！」

「ガッ!? ……く…そ……に、い…わ……」

故に背後からの奇襲に反応すら出来ず、冴子の手刀により容易く意識を刈り取られた。

19話 完全版(後書き)

うちの主人公はフィジカルはメンバー最強でもメンタルの打たれ弱
さなら最弱だぜ！

「っ……っぐ、こ…こは？」

重い瞼を開き、寝すぎたのか微かに痛む頭に顔をしかめて起き上って周りと確認すると、そこは自分に宛がわれた一室のベッドの上だった。

夕暮れ時なのか窓からは赤みがかかった陽光がさし、明りの点いていない薄暗い部屋を照らしている。

眠っていたベッドには何故かアリスがオレに寄り添うように背中を向けて静かな寝息を立てて眠っており、

巻き込まれたのかジークも抱きしめられた状態で時折ピスピスと鼻を鳴らして眠っていた。

そんな昔の平和な日常というものを思い出させてくれる暖かな光景に頬が緩むのを止めることができなかった。

起こさないようにゆっくりとベッドから降りてオレが起きた時に捲れてしまった布団を被せ直してやる。

何故ここにいるのか？ という疑問はあったがそれを思い出すのが憚られた。

小室とバスで別れた以降の記憶がどうしても思い出せないし、思い出したくもなかった。それがどうしてなのかわからない、あえて言えば何となくだ。

窓から見える中庭では一心会の人たちも避難民も皆忙しく動き回っている。しかし、その中庭からは全く音は聞こえてこない。

今朝でも少しぐらいは外のざわめきというものが聞こえてきたのに、今はそれもない。ただ静かだ。でも別に全員奴らになっているというわけでもない。

皆、忙しく動いてはいるが音を立てることに細心の注意を払っているというだけのようだ。

微かな違和感。何故それほど気を使っている？ 一心会ならまだしも避難民達まで。安全が確保されたと安堵しきっていた能天気な人たちが何故？

改めて部屋を見回せば、ベッド脇のチェストの上に無造作に置かれた丁寧に折りたたまれた紙があった。今朝には無かったはずのものだ。恐らく手紙か何かだろう。

それに手を伸ばしたとき頭の何処かが『読むな！』と叫び、その紙を掴もうとしていた手が止まる。

好奇心に従い読むか、それとも直感に従って読まないかのどちらにするか少しばかり恭順したあと……何か知らない情報があるかもしれないと思い直し折りたたまれていたソレを手に取りめくっていく。

本人の性格が出たような見覚えのある堅い字、どうやらこの手紙は冴子が書いたものようだ。

頭がチクリと痛んだ……がそれを気にすることなく書かれた内容を読み進めていく。

これを読んでいる時、恐らく私は高城君の家には居ないだろう。ああ、勘違いしてくれるなよ？ 別に死んだとか喰らわれて奴らになっっているという意味ではないからな。

御義兄さんのやろうとしていたことを私が代わりにするだけの話さ。こここの避難を担当しているだろう警察と自衛隊に連絡をつけに行く。自衛隊と連絡さえつけることが出来れば、空から御義兄さんを助けることもできるだろう。

そこまで読んでようやく飛んでいた記憶が甦ってくる。

そう……確か、車を爆破しに行こうとして冴子に後ろから殴られたか何かして気を失ったのだ。

動揺を抑えてさらにその先を読み進めていく、嘆くより先に今がどんな状況に置かれているのかを把握したかった。

その先に書かれていたのは、何故かEMPコーティングをされていたハンヴィーを使うために鞠川先生が名乗り出たこと。まあ、元々あれは先生の友人のものだったのもあるだろう。

メカニックの松戸さんという人が調べたところによると何処にも不具合はないそうだ。

こここの代表として高城が選ばれたこと。そしてその護衛に平野もついでに行くことになったこと。

高城が選ばれたのは……一心会の人手は手が空いていないし、リーダーが小室という点もあるだろう。

元々行動を共にしていた鞠川先生ならともかく、それ以外の大人……

…それも面識の無い人物を共にするのは指揮系統に関わる。
高校生に指図されるのは屈辱だろうし、それが出来る人を今の状況で外に出すのは厳しい。そんな優秀な大人の人材は今手放すことはできないだろう。
そして最後の行にはアリスを任せること、そして……これからどう行動するかは君の自由だ、と書かれてあった。

読み終わったその紙を元通り丁寧に折りたたんでチェストの上に置くと……思い切り壁の石の部分を殴りつけた。部屋が微かに震え、鈍い音と共に拳の骨がミシリと軋みを上げる。
爪が皮膚を喰い破ったのか握りしめた拳からドロリと紅い血がポタポタと垂れ落ちてチェストの上に置いてあったスタンドに紅い斑点をつけていく。

情けなかった。今ここでノウノウとしている自分が情けなくて仕方がなかった。

オレは一体こんなところで何をしているのか？

兄は奴らに囲まれて今なお危険。そしてそれを救うために錯乱したオレの代わりに、冴子が兄の代わりに護衛として奴らのうろつく危険地帯に飛び込んで行った。

結局……オレがやったことは自分にとって一番大事な人を危険地帯に放り込んだだけ。

「クク……ハハハ……アハハハハハハハ」

ズキズキと鈍く痛む拳を開いて目から溢れて流れる液体を隠すように顔を覆う。此処までどうしようもないと笑うほかなかった。

「ハハハ……ハハ。くそ……クソ！！　くっそおおおおおお！！」

「へうっ！？」

遣る瀬無い感情を何とかしたくて天井に吠えた。その声にアリスとジークが驚いて飛び起きる。

「ああ……くそっ！　なんでだよ……畜生……」

「しゅ〜ちゃん……どうしたの？」

「起こしちゃったか……すまん。何でも無い、何でも無いよ……」

「ヒッ！？　キャアー！！」

目じりをサツと覆っていた手の平で拭い安心させるように笑いかける。

するとアリスは怯えたようにジークを抱えたままズリズリとベッドの上を這って下がり……そのままベッドから転げ落ちた。

「何やってんだよ……お前は」

「しゅ〜ちゃんは……奴らになってないよね？」

「はあ？ たりめえだろ、オレが噛まれるようなへマするかっての。なんでそんな事聞くんだけ？」

「だって、しゅ〜ちゃん……顔、血だらけ」

「あ？ 血？ ああ、これは手の奴だから心配はいらん」

そう言っただけで血は止まったものの真つ赤に染まった手の平を見せる。そこでようやく安心したのかアリスはホッとした顔を見せて安堵の息を吐いた。

とは言え顔が血まみれのまま外に出たりなどすればその直後、阿鼻叫喚の地獄絵図のようになってしまおう。

そしてその直後、一心会の皆様に蜂の巣にされることは想像するのに難くない。

「しかし冴子からの手紙を読んだけど……オレ達、置いてかれちゃまったらしいなあ」

ティッシュで出来るだけ顔に付いた血を拭いながら、ベッドに這い

上がっているアリスに話しかける。

「アリスも行きたかったんだけど、お外は危ないからついてきちゃ駄目なんだって」

ぶく、と膨れた顔をしてそう愚痴を漏らす姿に苦笑を漏らして血まみれになっていない方の手でなだめる様にポンポンと頭を撫でるように叩いてやる。

「まあ、遊びに行くわけじゃねえからなあ。外は奴らでござった返してるのもあるし、仕方ねえっちゃ仕方ねえんだろっよ」

「でも……皆がいないと寂しいよ……」

「そうだな……あいつ等がいないと寂しいな。オレも車の一台でも使えりゃ、追いかけるんだが、残念だよ」

車で出発したあいつ等を徒歩で追いかけるのは流石に無理がある。奴らのせいで徒歩での移動が困難というのもあるし、第一移動速度が違いすぎる。

追っても追いつけるとは思えない。

もうここを如何にかして兄を助けるといふ気は起きない。ここは、あいつ等が帰ってくる場所なのだ。そこに奴らを招いてあいつ等をやっていることを無駄にするなんて真似が……出来る筈も無い。

オレが出来ることなんて、もう何も無いのだ。
ただ冴子達が帰ってくるのをアリスと共に待つことだけ。あと他に出来ることと言えば、中庭であくせく働いている人たちの手伝いぐらいだろうか？

なんとも泣ける話だ

「動く車なら……まだ一台あるよ？」

だがそう思っていたのもアリスのなんとなしに呟かれた一言で全てが変わった。

「何だって？」

「まだ動く車ならあるっていったの一台だけだけど。小室お兄ちゃん達が出て行っちゃう時にね、アリス達が乗ってきたおっきな車とどっちにするかって松戸おじさんに言われてたのアリス聞いてたよ！」

何たる僥倖、それを使えばあいつ等を追うことが出来るってことじゃないか。

「アリス、それが止められてる場所……知ってるか？」

「うんー！」

「案内、出来るか？」

「できるけど……その前にアリスのお願い聞いてほしいな」

「そう言えば一つだけ言うことを聞かなくて約束してたな。今となつてはやってやれることは少ないが……何をして欲しいんだ？」

「うん、えつとね……アリスも連れて行って欲しいの！」

絶句した。連れて行ってと言った彼女は何を考えているのかニコニコと陽気に笑っている。

「お……おいおい、まだ会長達が貸してくれるって決まったわけじゃないんだぞ？」

「?? 勝手に使っんでしょ？」

再度絶句。何でわかったのかというのもあったが、何よりアリスがそれを当り前のことをいったかのような顔をしていたのが予想外にもほどがあった。

「いやいや、流石にオレもそこまではしねえって」

とりあえず誤魔化そうと思い、多少引き攣った笑いを浮かべながら嘘を吐く。

嘘とは言えここで言ってしまった以上伺いの一つはしないといけなくなつたが……まあ断られたとしても、その時は力尽くになるだけだ。

「え〜！ でも、冴子お姉ちゃん言つてたよ？ しゅ〜ちゃん起きたらきつとそうするって」

「ああ、吃驚した。アイツの入れ知恵か」

驚きのあまり凍りついていた心臓がバクバクと勢いよく鼓動を刻み始めた。思わず胸を手で押さえてほ〜、と安堵の息を吐く。

純真に見える幼い女の子が一枚皮剥いたら兄レベルの化け物でした
なんてどんな悪夢だろうか？ 少なくともオレはそんな悪夢は見たいとは思わない。

「それで？ どうするの〜」

「とりあえず会長に聞きに行くしかないだろ。まあ、どうせ持て余してるだろうし文句は出ないと思うけどな」

この状況下で唯一使える車となると、避難民の中でも目の色を変える輩は結構な数いるだろう。

それに既に会長は自分の娘をハンヴィーを使って連絡役として送り出した身。いつ奴等が攻めてくるかわからない中、それを見た連中

はどう思うだろうか？

無論、疑心暗鬼に陥りやすい今ならば容易くうまれるはずだ。自分の子が可愛いから逃がしたと考える輩が。

そついう意図も多少は含んでいるのはあるだろう。車さえあれば行って、帰ってくる奴等だけしかいないという地獄になっていたとしても……どうにか逃げることは出来る。

どちらにせよ、残った片方の車は邪魔でしかないだろう。存在を公表していかないのならともかく、冴子達が出て行く時にそれを見た人は居たはずだ。

なら確実に広まっている。こついつときの人の口は恐ろしいほど軽い。

力尽くで行っても問題はないと断じた理由がソレだ。あつて揉め事が起きるならば勝手に持ち出されたということにしてしまえば何も揉め事は起きない。

あつたとしても勝手に奪っていった者、つまりオレへの恨みごとだろう。

もちろんこの状況下で正常に起動するエンジンを有効利用する方法も無いわけでは無いが……どうするにせよ反感を感じる者は居る。残りの一台に手を付けるのは問題があり、またそのままにしておくのも問題となる。ならオレが持つていくのに問題はない。

「よし、じゃあ案内してくれ」

「連れてつてくれる？」

「あ……それは、なあ……」

「アリス……一人ぼっちは嫌だよ……」

泣きそうな顔でそう言われて返答に窮する。

確かにアリスは両親が死んだために身よりが無い、高城の両親に任せるといふのも有りと言えは有りだが、当のアリスがまだ懐ききっていないし、

今は忙しいのもあって相手してやれる暇は余りないだろう。とは言え、連れていくのは流石に危ない……まあ子供一人程度なら、奴らの海に飛び込まない限り守りきれぬぐらいの自信はあるが。

「ふむん……どうするか……」

「連れてつてくれないんだったら、大声でしゅーちゃんのやろつとしてることを言っちゃうよ？」

「それもまた入れ知恵か？」

顎に手を当てて連れていくか連れて行かないかを迷っていると、アリスが首を傾げてそう言ってきたのに苦笑を零しながら尋ねる。

「入れ知恵ってな〜に？」

「誰かにごうしろって言われることだ、で？ 誰にそう言えって言われた？」

「えつとね、沙耶ちゃん！」

「あいつ等……、こんな事するぐらいなら車に積むなりなんなりして一緒に連れてけよな」

とは言え、何とも信頼されたものだ。少なくとも錯乱して気絶させられた奴に対して残す言葉じゃない。これは暴走に対する予防策と考えるより、期待されていると取るべきか？

そう思いつつ脇に置いてあった村田刀と脇差を腰に差す、どうやら太刀の方は冴子が持つて行ってしまっただけらしい。

「は…ハハハ、ハツハツハツハ！ 本当にお人よしだよ、あいつは」

「？ どうしたのしゅ〜ちゃん」

御神刀の方を態々持つて行った理由が何となく察せたので思わず笑ってしまい、それを見て不思議そうな顔を浮かべたアリスの頭をクシャクシャとなでつける。

「いや、何でもない。それじゃ行くところか、お望みなら肩車でもしてやるっか？」

「うん！」

そう言うと、アリスは抱えていたジークを手放して背中を向けてしやがみ込んだオレの首に跨って頭をペシペシと叩く。
アリスの軽い体重を両肩と頭に感じながらバランスを崩して落ちてしまわないように彼女の両足をしっかりと掴んで安定させる。
降ろされたジークもついてくるつもりなのか足元でオレを見上げてフンフンと目を輝かせながら鼻を鳴らしている。

まあ、何だ。あいつ等の手の内で踊らされているみたいだが……これは中々悪くはない。
同時にあいつ等の為にも兄の為にも働ける話なのだ、乗らない手は無い。ここまでやってるんだお膳立てもすんでると見た方が良かったろう。

なら今やるべきは置かれた状況を詳しく知ること。知った上で力づくで奪われたように見せかけるのか、それとも許可を得たうえで堂々と此処から出るのかが決まる。

『これからどう行動するかはオレの自由』……そうなんだろ？ なあ冴子。

一度部屋を振り返り、いつの間にやら逢魔ヶ時になったのか夜の黒と夕日の赤の入り混じった空を窓越しに見上げ、ニヤリと不敵な笑みを浮かべた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6059n/>

屍人が目覚める世界で（転生オリ主）学園黙示録

2011年7月7日21時53分発行